嗤う魔性のデュアルフェイス

是音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また 引用の範

嗤う魔性のデュアルフェイス【小説タイトル】

ソコード

【作者名】

是音

(あらすじ]

ころりころりと迷い込んだ実が始まりだった。

劇的な悲劇が欲しい」

地図に載らぬ街、並折。

魔都に潜む土着の伝奇。 魔都を裁く首輪無き猟犬。 魔都に跋扈す

ある初夏の朝。少女、天宮柘榴達は、並垢る異形の数々。魔都を導く・死使十三魔。

ある初夏の朝。 少女、 並折の街を訪れようとして

い た

逢魔 おはようございます

「ご機嫌如何ですか? お久しぶりです」

ですけど!」 「私達の事、 覚えておいでですよね? 実に八万七千六百時間ぶり

いれた。 確固たる自信を持ちまして、 初めまして」

【逢魔 おはようございます】

それでも床に敷かれた絨毯の模様すらはっきりとしない明るさで、 やはり暗い部屋という表現の域を出ない。 部屋の壁に掛けられた幾つもの蝋燭が暗い部屋を仄かに照らす。

に部屋の内装を説明するなら、 絨毯の中心にはクロスで覆われた正方形の机と、椅子が三つ。 それ以外の物が無いといったところ

脚色付けは施されているでしょうね」 れないけれど、その土地その土地の歩んだ歴史に伴って改変ないし 「土着の伝奇なんてものは千差万別なの。 似通った点はあるかもし

外界の音も届かないようなこの部屋には、 三人の女が居た。

長く伸ばした、 かりに怪しく照らし出されている。 つの椅子に座っているのは、 肌の白い成人女性である。 髪が床に着いてしまいそうな程に その髪は青く、 蝋燭の明

彼女は、 決して喋り慣れているとは思えない小声で話を続けた。

弟の話では 子供とて噂話をする時は『友達の友達から 奇怪に遭遇した者の証言でなければ嘘の作り話なのは解りきった事。 でしょう。 ところが 怪談というものは昔の人の目撃談として記録されるもの。 なにせ登場するのは妖怪だけというもの」 ۴ 知恵を絞って信憑性を高める前置きを加える 今から話すのは、そういったものが一切無 <u>_</u> 『知り合いの従兄

一人。彼女の正面に座っている。 そんな青髪の女性を、 純白の、 飾りっ気の一 切ないドレスが揺れ、 期待感溢れる真ん丸な眼で見つめる少女が 彼女は一つ息を吐く。

場では無いのだから、おかしな話だ。 プロンドレスを着ていた。 しかしながらこの二人は使用人という立 は、質素な青髪女性のドレス姿と違い、使用人が着用するようなエ 二つの少女達だった。解り易い程に いを見るに、彼女らが見た目ほど若くないのも明白。 更にこの双子 背丈も顔のつくりも、 挙動すら、どこからどんな角度で見ても瓜 双子。しかし立ち居振る舞

る彼女らは興味津々だった。 衣装趣味は多種多様なので置いておき、 青髪女性の話に夢中であ

へえ、登場するのは妖怪だけですか」

という意思の表れでしょうか? それはつまり、 信憑性の有無はさほど重要ではない怪談である。

最初 た怪談話とは。 から作り話として、信用させようともしない事を前提に作ら 珍しいものだ。

を演じて人を驚かしたという のっぺらぼう。 題目は確か..... 私、聞いた事があります。 『百奇夜行と、 のっぺらぼう』 化け狸が顔のない人間 だったかしら」

すよね、番様?」 「違うよ みそら。 。 正確には貉。 stube 狸ではなくアナグマよ。そうで

呼ぶ事も、 の話では、 「それも正しい。 番はこくりと頷き、真ん中から二つに分けた長い青髪が揺れ 狸の事をムジナと呼ぶ事もあるの。 ムジナとしましょう」 でもね しずね、 日本ではアナグマの事を狸と 地域毎にね。 では私

しずねとみそらは互いに互いの顔を見合い、 と首を傾けて二人を見る。 にっこり頷く。

名になった為に題目も変わったのでしょう」 という話が有名ね。 っぺらぼうというのはムジナが化けて顔の無い人間になり、驚かす に初めは ていいのか迷うけれど......ちょうど今、みそらが言った通り 「なにも『むかしむかし』から始まるわけではないから、どう話し カオナシと呼ばれていた。 のっぺらぼうの呼び名が有 しかしこの話にはムジナは出てこないの。それ

なら、 みそらは丸い瞳をぱちぱちと瞬かせて問う。 本来のタイトルは『百奇夜行と、カオナシ』?」

う形なの。 何も無い。 ええ。話の主人公は、そのカオナシ。カオナシ自身の体験談とい カオナシはその名の通り、顔が無い。 何も無い故に、 見る事も聞く事も嗅ぐ事も話す事もでき 目も耳も鼻も口も

これにしずねが小さく笑った。

体験談も何も、 それには番も可笑しく思い、 それじゃあどうにもならないですよ 口元に手を当てて小さく笑った。

ぼうが話の中で当然のように喋っ いいところに気が付いたわね、 しずね。 ているのも、 そうね、 妙な話ね 有名なのっ

のをしずねは思い出した。 言われ、そういえば『こんな顔?』と言うお決まりの文句がある

ったらしいわ」 ったのでしょう。 らない。そう考えると何者かが化けたのではなく、そういう妖怪だ この話が妙に現実味を帯びているのはその点。 カオナシは器用な妖怪で、 化粧をするのが上手だ カオナシは一切喋

「化粧.....」

だろう。 魔力を宿らせる儀式として使われたものなのよ姉さん」と囁いてい けば彼女のように大抵は可愛らしい印象をカオナシに抱いてしまう ほう、と虚空に視線を浮かべたみそらが頬に手を当てる。 そんなみそらを見て、しずねが姉の耳元へ「化粧は元来、

うかしら?」 現代でも女性は魅惑の粧を塗って外出するけれど 貴女達はど

みには.....」と小さく頷いた。 訊かれた双子はどちらも眉を吊り上げて目を大きく開き、

だしカオナシは六つしか部位を描くことができなかっ 右対称にくっついている目と耳と鼻だけを描いた」 それで カオナシも自分で自分の顔を描いていたの。 た。 だから左

左右対称。

その単語を聞いて双子は若干、顔をしかめた。

にあっ 語が苦手というわけではない。 自分達が並んで立ち、「左右対称だね」なんて言われる事は頻繁 たし、 自覚もしている。 だから別にそういった理由でその単

彼女達が、 あまり好ましく思わない奴。 そいつが、 よく「左右対

称なんて嫌いだ」と口にするからだ。 にそいつを連想してしまい、彼女達は不快に思うのである。 左右対称という単語を聞く度

つの醜い顔のイメージを追い出し、 し直すことにした。 ともかく、今の話とは関係の無い事なので彼女達も思考からそい 番の話を聞く至高の時間に集中

出する為だった。百奇夜行を見に行きたかったのよ」 どうしてカオナシが化粧をしていたのかというと、 やはり外

「人間味のある妖怪ですね」

なんだかその百奇夜行も祭囃子に囲まれていそうです」

が胸に抱き締めるようにして持っていたのだ。 ばそうとした。が、ペンが見当たらない。いつ 語る番は笑い、先程から机の上に置いてあった紙とペンへ手を伸 の間にか

番は「ありがとう」と礼を言って受け取った。

ಠ್ಠ 彼女は話を中断し、 地図だろうか。 時折何かを思い出しながら紙に図を描い てい

た。 大きな丸 更に丸の中に『きのえと』という名称を書く。 0 彼女は「駅よ」と言い、紙の左上の隅に一つ書い

その右下に、少し小さめな丸。「これも」と言った。 丸の中には

丸を書いて『かのえと』。 『ひのえと』。 またその右下に、 同じく丸。 『つちのえと』。 その右下にもまた

見事に四つの駅は左上から右下へ一直線に並んでい

ţ 計四つの駅を描き、最後 「川が一本」と言いながら『蝉乃川』と書いた。 紙の右から左へペンを一直線に走ら

塗りつぶす。 あとは下方にぐにゃぐにゃと境界線のようなものを書き、 これはおそらく海だろう。 上方には山の範囲を書いて

と海を含んだ高低差のある広い場所らしい。 どうやらこの地図の街は、 怪談の伝わる地元の地図のようだ。

と、すいすいペンを走らせた。 ながら「ここからだったかな」 番は出来上がった簡単な地図の一番左上 と言い、そこから山や他の駅や川へ 『きのえと』 を指し

は拍子抜けしたのだった。 双子は頷くも、番が口元に手を当てながら「えっと……たぶんこん な感じ」と呟いた為、出鱈目にペンを走らせていた事が判明し二人 成程、夜を行く百奇はそのルートで、列を連ねて歩いたの

番は最後に、 百奇夜行の到達点を指し、 妖怪カオナシの結末を述

ければ、 とした。 「カオナシは目と耳と鼻を手に入れ、百奇の仲間に入れてもらおう しかしカオナシには口が無く、自分を名乗ることもできな 入れてほしいと訴えることもできなかったの」

カオナシは、ただ百奇夜行を見守るだけだったという。

かった。 はカオナシだけだった。 しかし口が無いから注意を促す事ができな まま海へ入り溺れてしまうことに誰も気付いていない。 山を下り、 結局 海へと向かう列。百奇は夢中で行進する。 百奇夜行は海へと入り、 みんな溺れ死んでしまっ 気付いたの 故に、

間髪入れずにみそらが質問を投げ掛けてくる。 語り終えた番は、 疲れたのか胸に手を添えて大きく息を吐い

はその後どこへ行ったのです? それが並折という例の街に伝わる怪談ですか。 それで、 カオナシ

変わっていたかもしれない。そして、 を経て多少なりとも変わってしまっているかもしれない。 わからない。 もしも誰かがカオナシに気付いてあげたら、 今話したこの怪談自体も時代 ちなみに、 結末は

この物語を綴ったのがそのカオナシだというのだからおかしな話ね」 妖怪が綴った話?」

`文末には『俺、顔、無し』とあったそうよ」

さに感情移入してしまったからなのだろうか。 らが文章として残すに及んだ、どうしようもない孤独感とやるせな 双子はなんだか不気味な心持ちだった。妖怪カオナシ。 そいつ自

なかった為に迎えてしまった悲劇的な結末だ。 そう。 この怪談からは、悪意は感じられない。 誰もどうしようも

再び静けさを取り戻した部屋。

たのか口を開いた。 そんな中、しずねが少し迷うような素振りを見せた後、 意を決し

しかし言葉がなかなか出てこない。番様が、その、つまり ええと」

オナシはどこかに居るんじゃないかしら」 そうね、きっと、 番はしずねの言いたい事を悟ったのか、 作り話じゃないかもしれない。今もまだ 問われる前に答えていた。 力

何度も頷いていた。 しずねは申し訳なさそうに肩をすくめ、 みそらは納得したように

ですもの 妖怪は決して幻想じゃないわ。 事実、 貴女達の目の前に居るわけ

す。 番はインクの凍ってしまったペンを人差し指で撫でるように転が

雪女が。ね?」

?

PUNICA【六月の果実】1

【六月の果実】

乗り換えた始発電車はまだ人が少なかった。

びた色を帯びて流れている。 ものだと.....思う。 窓の外を眺めると、少し寂しさを覚えるような古びた建物が、 この寂寥感は 私個人の感覚に因る

タンド、 私には うな感想である。 気溢れる場所だっただけに、この景色は一層私を寂しく思わせる。 たとえ古くとも、 っと、どの時間も、このままなのだろうなと思う。狭い車道を挟む ないのはわかっている。しかし私の視界内を流れるその場所は、き のは雑草の生い茂る歩道や、何年も前に潰れてしまったガソリンス まあ、 私は活気 看板の剥がれたビル。私はこんな場所を歩きたくは無い。 この電車という箱に包まれている以上、それは他人事のよ 関係ない。 のある場所が好きだ。この時間で活気を求めるべきでは 人の気配が欲しい。この電車に乗り換えた駅が活 あの場所はこの先何年もあのままだろう。

らしない姿勢だ。 窓から目を逸らし、 腰を更に前へずらす。 我ながら、 なんともだ

眠れなかった。 モーターを積んだ車両であるらしく、 何度も往復しやがる。 それに しても 更には車両一番前の座席で、 煩い夜行列車だった。 どうやら私が乗ったのは 夜行列車だというのに一向に トイレへと立つ乗客が

ド ッ 車両 タンバッタン の扉を開けたり閉めたり開けたり閉めたりドッタンバッタン もっ と静かに動かせや夜行って事は寝たい人

こいつも無遠慮にドッタンバッタンドッタンバッタン。 自然だろう、大前提、常識、想定の範囲内ですよ。 も居るんだぞ、 いやむしろ睡眠中の乗客が多数居る事が当然だろう、 それをどいつも

たって意味は無い。あの指定席券を買った私の運が悪かったのだ。 ら六時間。六時間! よく耐えたものだ。 とにかく窮屈な座席に縛り付けられて一睡もできないまま関東か 百回死んで九十九回だけ生き返ってろ と、今更愚痴をこぼ

せる事もできる。 り心地だった。 余裕のある空間というのは大切だと改めて思っ スを独り占めにし、はしたなくも足を大きく伸ばしていた。 二人掛けの座席。 そして苦痛の夜行列車を降りて乗り換えた電車は、 乗客は少なかったので私は贅沢にも四人分のスペ 背もたれは大きく稼働し、二人ずつ向かい合わ 素晴らし

そんな時間をぶち壊し、私の気分が滅入ってしまう原因となっ これが、 目の前で声高に得意げに満足げに舌を回す つい二十分前までの貴重なリラックスタイム。 この女だ。

ぎた。有能が作った環境で、 間は増えすぎた! そう思うだろう弱肉?」 れて生きている! 在って当然と思うなよ。人間はな、その自覚すら無いカスが増えす は、それを最初に作り出した能有る者のおかげであるという事だ。 達弱肉が普段から至極当然のように使用しているありとあらゆる物 「便利なのは結構。だが勘違いするなよ、この電車も、車も、 臆病な、 老衰だあ? 自然界の害が、 無能が生かして貰っている。 老衰を許されるのは有能 群れて群れて有能に隠 だから人

出会って二十分で、 うるさいから永劫黙っていて欲しい女、 彼女の紹介も、 端を折ってしまえばこの一言に尽きる。 私にここまで嫌悪される存在ということだ。 だ。

うるさいから黙れ」

ಠ್ಠ 通学とみられる利用者が乗っていた。 勢を整えた。 始発に乗ったとはいえ、 まだまだ満席とはいかないが、 隣には若いサラリーマンらしき男性も座った。 しばらく駅を経由すれば乗客も増えて 端であるこの一号車両も通勤、 私も席を独占することなく姿

うに研ぎ澄まされていた。 車両の中間で立ち止まり、 そこへ 女は長い黒髪を揺らし、 二号車両の方から移ってきた女が、こいつだった。 軽快なステップで歩いて来たと思いきや 周囲を見回す。 その眼は獲物を求めるよ ただ席を探すだけだというのに。

そうして不幸にも 私の正面に座ったのだ。

さなかったから後々面倒な事になるなんて、 に生きている。 向かい合わせにしていたのが失敗だった。 後悔先に立たず。当然だ、向かい合わせの座席を直 誰が予想できる。 いつも私は、 後悔と共

えるような大きさで「弱肉だらけで涎が出るね! れてやがれ!」と叫ぶなんて、誰が予想できる。 正面に座った女が、直後首の関節を鳴らしながら、 餌は餌らしく隠 車両中に 聞こ

から気分を害する乗客に鉢合ってしまい、さぞ不愉快だろう。 隣に座ったサラリーマンも萎縮してしまい、 顔を伏せている。 朝

睨んだ。 を伏せている理由だろう。 そのボディラインを前にして目のやり場に困っているのも、 質感をした黒 ように陣取っていやがる。 してしまいそうな脚線美を際立たせるカプリパンツ。ゴムのような 私は、 彼の膝の上に堂々と組んだ片足を乗せる女を舐めるように 編上げのブーツの底が彼の太ももに食い込んでいる。 いタンクトップの上に、ジャケットを羽織っている。 そもそもこの女、 二人分の座席を当然の 彼が顔 嫉妬

「おはよう弱肉系男子」

新商品『悪女まん』 濃厚且つ醜悪な汚泥を爽やかさと美貌で包み込んだような笑顔。 ンク と名付けよう。 その笑顔で女はサラリー マンに

若いサラリーマンは困ったように下を向いたまま会釈するだけだ。 彼の膝に乗せたブーツが、 撫でるようにもう片方の膝へ移動する。

そんな時 彼の携帯電話が鳴った。

液晶画面を見た彼の顔が青くなる。 彼は慌てて携帯電話を取り出し、電源を切ろうとした 私は持っていないが、電車の中では電源を切っておくのが常識だ。 のだが。

5 どうやら、電話を掛けてきた相手が、まずかったらし サラリーマンは私と女に「す、すみません!」と小声で謝りなが 肩をすくめて携帯電話を耳に当てた。 ιÌ

そんな様子を女は特に興味もなさそうに眺めている 何かしでかすつもりなのか腰を上げやがった。 と思いき

はい、もしもし」

· ゆうーだあーくうーん!」

私にも伝わるほどの大音量が端末の向こうから聞こえた。

「なに、君、今どこに居るのー?」

えと. ... 電車の中です。 企画の関係で遅れてしまいましたが」

「ああ、ドミノ倒しのやつ?」

「はい。言われた通り企画の修正もしました」

うんうん。あっ、じゃあ娘も一緒?」

は、はぐれてしまって」 「そ、それが、その 先程まで僕の傍に居たのですが、 駅で...

· はああああ?」

「えっと、 はぐれたというかちょっとした喧嘩を。 ちゃ んと同じ電

車に乗っていますので」

あ、そう。ああ驚いた」

そういえばこのサラリーマンは機材のような荷物を足元に置い どこかへ取材に行く途中なのだろうか。 て

っ 近づけていた。 から女には何の興味も示さず、ただ鬱陶しがって喋りながら席を立 と思っている間に、肉食系女は身を乗り出し、 ただの変質者だ。 サラリーマンも仕事の話中だろう 電話中の彼に顔を

え? 「はい、 はい、並折です」 はい。 大丈夫です。 到着したらまた連絡入れますけど

車の方へ行ってしまった。 追うべきか? をかけていた女も、表情を強張らせてぴたりと身を凍らせている。 並折という街へ向かおうというのなら、 しかしサラリーマンはそんな私達を気にするわけでもなく、 私は身体を硬直させていた。 楽しそうに男へちょっ 追うべきかもしれない。 彼は止めるべきだ。

やめときな、弱肉娘」

そう言いながら二本の指で挟んだ紙を一枚、 あの男は本当に弱肉だ。 この女もだ。並折と聞いて反応した。 つまり私の隣に上げた腰を下ろした。 制したのは目の前の女。 喰われて終わりね」 彼女はサラリー マンの座っていた場所 私に見せてきた。

『湯田 直哉』

ち入って良い場所じゃない。 かの映像スタジオなのだろう、名刺のデザインが凝っている。 彼はきっと、 サラリーマンの持っていた名刺だ。 命を落とす。 並折という街は一般人が興味本位で立 きっと、 手癖の悪い女め。 会社もどこ

表側

の都市を取材するつもりが、

手違いで並折を知ってし

まった。 女は私と同じ考えを口にしていた。 ってところかね」

ても、 所は別の土地名が用いられる。 ている都市と重なった場所。だから並折という呼び方はされても住 並折は知られざる街だ。 見つける事は出来ない。並折は裏の都市。 この国の地図を隅から隅まで探したとし 隠語のようなものだろうか。 表の、 地図に載っ

であり、 故に並折の住人は、普通ではない。 並折は普通ではない場所だ。 普通ではない世界に生きる者

貴様もこっち側だったのね、 弱肉

......貴様とか弱肉とか、随分と見下すわね」

いか!(それなのに貴様のようにああだこうだと文句を垂れるから 人間は自然にとって害なんだよ。 お、 私様よりも劣った奴らを私様が見下すのは自然じゃ あたしにも天宮柘榴という名前がある。 たよ。お、わ、か、り?」

口に出すなら弱肉とかじゃなく名前で呼んで頂戴」 「そう思うのは貴女の勝手。

ふうん、と。 彼女は片目を閉じて私を観察する。

それから

ろう? めてでね。 私様の名前は、じゃなくて柘榴、 訳が無ければ行ってはいけないからね、 もっと言えば、 1、守野三桜。いやあ私塔片手を差し出してきた。 日本へ帰ってきたのも久しぶりなんだ。 貴様も訳ありで並折へ向かっているんだ いやあ私様も実は並折を訪れるのは初 あそこは

詮索は嫌いだ」

おっとそうかい、 お互い気が合いそうだね。 弱 : :

略すな」

るブーツを蹴った。 差し出された手を私は甲で弾き、 さっきから私の足を踏みつけて

好

後ろ暗い連中ばかりだ。三桜にも何か理由があるに違いないけれど、 れ合うさ。 それは私も同じ。 きにはなれないが。 馴れ合って我が身が守れるのなら、 まあ構わない、 どうせ並折 へ向かう者なんて、 いくらでも馴

違い、 聞けば、 あの窮屈で退屈で拷問じみた苦痛を味わうことなく、 一時間でこの中部圏へ来たそうだ。 三桜も関東からやって来たのだと言う。だが彼女は私と 実に羨ましい。 新幹線

そして 少し引っかかったのは、 彼女の苗字だ。

守野.....。

なにもそう珍しい苗字ではな この国には存在する。 ſΪ けれど、 気にならざるを得ない

純血一族 そう呼ばれる日本の裏組織。

ているからこそ、 だからこそ、その知っている家系の中に守野家という単語が含まれ 者は少ない。 と口を揃え、世界中が関わりを避けたがる。 この組織は、 裏組織は世界中に大な 私のような者が知っているのはせいぜい二、三家系。 全部で十三の家系から成っており、その全容を知る 気になった。 り小なり存在するが、 それが純血一族だ。 その世界中が危険だ

血一族十三家系は、 せている。 から自分の血を呪わせているのだ。 からである。 血が濃ければ濃い程に、 連中の何がそれ程に危険なのか。 そして呪詛は人では到底持ち得ない力を、与えるのだ。 とはいえ当然、 身内で種を増やし続けているのだという。 呪詛は見返りを与えてくれる。 ただの純血ではない。 呪われているのではない。 それは、 その名の通り、 連中は、 故に 遥か昔 純血だ 呪わ

知 摩訶不思議 のも事実。 な話だが、 連中の超常たる力の前に消滅した機関は 数

超えし人』を生み出すに至ったという狂気。 るという惨劇。 その十三家系が統一され、 付いた家系が、十三もあったという恐怖。挙句、 詛 というものを操る術を手に入れ、 一つの殺人集団として猛威を振るってい そしてそんな事を考え 試行錯誤の末に 現代に於いて..... 人を

純血一族が、世界危険勢力の一角と目されているのも当然だ。

族特有の殺人衝動に因るのではないか? 殺人衝動を抑えるために、 電車内でも、わざわざ人の少ない一号車を選び、移動し、 言うようなではない.....彼女は他者を弱肉と言い捨てている。この 下し、まるで己が人を超えているとでも言うような態度。 その女が て座席を探し、人を寄せ付けない言動を吐き散らしたのは、純血一 のは、今、 わざと人を寄せ付けないようにしているのだとしたら。 そう。 考え始めると一層勢いが増してしまう。三桜の言動 私が気になり、 肩が触れんばかりの至近距離で、欠伸なんかをしている 純血一族守野家の人間なのではないかという件なのだ。 同時に表に出さずとも恐怖すら抱いて 気を張っ 他人を見 振る舞い

きる者。 るわけがない。 魔都 とどめは守野三桜が、 純血一族でない者が、 並折へ向かっているという事実。 純血一族でもなかなか正確な所在を掴めな 純血一族と同じ名字で生きていられ 魔都を知るのは裏で生

確定だ。辻褄が合い過ぎる。私は心の中で深い溜息を吐いた

守野三桜は、純血一族の人間だ。

「そろそろ着くんじゃない?」

名前は違うが並折の駅は次だった。 していたらしい。 三桜の声で我に返り、車内の電光掲示板へ目を送った。 いつの間にか幾つもの駅を経由 確かに、

れた?」 「あれ? でも三桜、さっきの駅を出てから車内アナウンスって流

「そういえば......聞いてないかも。 問い掛けると三桜は視線を斜め上に向けて首を傾げる。 忘れてんじゃないの」

両内を見回してみた。 どうにも落ち着かない私は席を立ち、隣に座る三桜の頭越しに車

最前の一号車両。 外の景色も、 運転士の後ろ姿を眺める。 変わりなく流れている。 特に変わった様子はな

しに見える二号車も、乗客の様子に変わりはない。 そわそわしすぎかな。 今度は反対側 二号車両へと繋がる扉の方へ顔を向けた。 やっぱり気のせい 窓越

「どうした柘榴?」

三桜の声を無視して目を細める。

二号車の乗客が突然、一斉に頭を上げた。

ほぼ全員が、私に後頭部を向けている。

と、次の瞬間 三号車両とを繋ぐ扉が乱暴に開かれた。

男性か? 学生服姿の少年が何か大声で叫んでいる。

目を細めて見ていた私でも、 彼は二号車の乗客には目もくれず、今度はこちらへ駆けてくる。 彼の表情がだんだんとわかってきた。

泣いている。汗だくだ。恐怖を顔に張り付けている。

け方に、 も絶え絶えに何かを伝えようとしている。 ついに学生は一号車両へと飛び込んでくる。 やはり一号車の乗客も一斉にそちらを振り返った。 その荒々しい扉の開 彼は息

|番後ろ.....車両.....」

彼は、運転士を含む一号車両全員に聞こえるよう、大声で叫んだ。

「最後尾の乗客がみんな死んでる!」

N I C A 【六月の果実】 2

人間が生きている』

これは三桜の言葉だ。

号車両は静まり返り、直後 て来た者達は同じ言葉を口にした。 最後尾車両で乗客が全員死んでいる、 その後ろから二人三人と続いてやっ という男子学生の咆哮で一

寂に包まれた一号車両も、混乱の声が次々に上がり始めた。 後部車両から駆けてきた数人は勿論、赤の他人である。 時は静

は懸命に窓の外へ視線を向け、生唾を何度も飲み込んでいた。 黙ってその様子を眺めていた私が三桜の様子を窺った時 彼女

酔ったのか? だらしないなぁ肉食系女が。

そう冷やかそうと彼女の肩に手を乗せる って痛、 痛い。

待って、痛い痛い。 なに、 え?

ちょっと三桜、 なにしてんの痛い痛いってば。

腕に爪が食い込んでる。そんなに長い爪付けてたっけ?

え? え?

三桜? おい、 肉食系って本当にそういう意味じゃないよ?

み 三桜! なんであたしの腕、 かじるの? 痛いって!」

でいた私の中指を解放した。 三桜はびくんと痙攣した後に我に返り、 吸った上に口腔内で弄ん

頭おかしいんじゃねー のこの女。

のか血が滲んでいた。 涎に塗れた中指を自分のスカートで拭くと、 歯でも立てやがっ た

手を顔に当てて汗を拭う。そして耐えきれずに言ったのだ。 彼女は完全に引いてしまっている私の存在など気にも留めず、 片

「人間が生きている.....」

たですよ。 頭おかしい んじゃねーのこの女。 と思ったら案の定頭おか

顔が高揚して興奮状態だぞ。変態ここに極まれり、

だの変態妖怪『指舐め女』で済んだのだが。 こいつが最初から普通の女だと知っていれば、最後までた

じゃあない。 で指を口に含んだのは、指を舐めたいという欲求に因るものなんか めるだけの変態ならまだ可愛いものさ。こいつが私の腕を引っ掴ん 守野三桜は血に呪詛を宿した変態一族の末裔なのだ。 ただ指を舐

人を殺したいという欲求に因るものだ。

下手をしたら私は指を噛み切られていたかもしれない。

を変態再生し始めた。 一層頬をひくつかせて一歩下がる私に向かって、 三桜は変態音声

は 奴も多いこの時間。 心ならずも決まった時間に起床し、 くっそ不味そうなジャンクフードに見えた。 誰もが恒久的に、うんざりだとすら思いながら過ごすだろうこ 現代に於いては、うんざりだと思う事すら放棄してしまう どいつもこいつも生きちゃいない。 機械的に食事を摂り、何気な ところがどうだい 私様の目に

そう言いながら三桜は異様に長い舌で唇を舐めたのだった。 空っぽの人形に魂が宿り、 人間として生きているじゃないか。

次の駅で電車は停車し、乗客は全て降ろされた。

野次馬は集まってくるばかり。 を起こした乗客がそこらじゅうで喚き、駅員は縦横無尽に走り回り、 口へ向かえば良いのだが、電車を降りた私達の目の前ではパニック 私と三桜はこの駅で下車するつもりだったのでそのまま改札の出

全八両編成の電車の最後尾で事件が起きたのだ。

これだけの死者が出たのなら確実だ。 事件・事故が一つ起きると、その情報は日本中へと配信される。

しかし並折がそれを許さない。

死体を見てしまった。 幸い、乗客の大半は此処で事件を知り、 見てしまった者は此処で

並折という結界の中で。

常を共にする街。 う結界を知る者だけが並折の結界を活用し、 並折は別に異次元のファンタジックワールドではない。 何も知らぬ一般人と日 並折とい

Ļ 常と捉える事はできないのだ。 何の感想も抱かず死体を踏み付けて 歩行を継続し、何の反応も示さず恋人の死体を置いて着替えに帰る。 まるで街に意思があるようじゃないか。 何も知らない此処の一般人達は、たとえ目の前で人が殺され たとえ抱き締め合う途中で相手の首が吹き飛ぼうと、それを異 よう

ああ、 これは外界に漏れてはいけない。 という現象は、 日常から

隔離してしまう。

しまう。 た警察機関も、 だから、 興味も失せてしまう。 今この場で悲鳴を上げている連中も、 少し経てば八号車両で何が起きたのかなんて忘れて 事件だと動き出し

犠牲者達はどうなるのか。遺族は心配しないのか。

しない。

理矢理に無へと改竄する。 街はまるで運命の糸を握っているように全てを手繰り、 全てを無

この街の恐ろしいところは、そこだ。

消されてしまうのだ。 この街で死んでしまうと、 並折の住人の記憶以外から、 存在は抹

付け、 消されてしまった事になる。 が灰にしてくれる。 だから八号車両で死んだという者達は まるで神様。 住民票を始めとする個人情報は、 無意識に積極的に一個人を消しに動いてくれる。 親族は無意識に遺物を捨て、部屋を片 弄る事のできる立場の人間 もう外界では存在すら

にしていない。すぐに解放されるのだから。 一生物のトラウマを刻み込まれた目撃者の悲鳴も、 私はさほど気

しながら平常運転に戻る。 電車は八号車両だけを切り離し、 『 現 在 分遅れで云々』 と通知

うにサッパリスッパリ彼らから消え去るのだ。 溢れ返らんばかりの恐怖や、 混沌と入り乱れる感情は、 魔法のよ

葉を失った。

車両の窓が血で染まっている。

る係員も集まっておらず、 した体液は様々な色。停車直後に見に行ったのでまだ場を取り仕切 助けを求めた被害者の手形がいくつも残っており、 私達は車内の様子も見る事が出来た。 ガラスに付着

子を見に行ってしまう。 入口の前で立ち止まり、 顔をしかめる私を置いて、三桜は中の様

体が座席の上で横になっていた。 や歯が肉を付けたまま転がり、肋骨を剥き出して内臓を吐き出す胴 現場は最悪。 吊り革から手首がぶら下がり、 床には飛び散っ た骨

ごろごろと。これ何人分あるの.....? 生々しい。 まだ瑞々しさを保った塊が、 まるで河原の石のように

れている。 無く、下へ引き千切ったような痕跡があった。 三桜が摘まみ上げて観察しているのは 下顎だ。 首の皮が一緒に剥が 顔 の上半分が

原形を留めている死体は一つもなかった。

りる。 老若男女区別なく、この車両に乗っていた全員がジャムにされて ああ嫌な想像した。 しばらく朝食にパンは控えよう。

こいつの歯、見てみろ」

三桜が見せてきた下顎。何を見ろと言うのか。

奥歯が割れている。歯を食い縛った為に割れたんだ」

`なに.....どういうこと?」

三桜は私の問いを無視して幾つかの胴体を蹴って転がす。

元を引っ掴み、 肢を失い、柔らかくも長い腸が巻き付いていた。 サッ カーボー 滑りを帯びた断面に指を突っ ルのような扱いで集められた胴体はどれも頭部や四 込んだり広げたりして 彼女はそれらの首

こんな場所で鑑定士を気取るのはよせ。うむ.....やっぱり上手に取り除かれてる」

「 何 が」

「声帯」

微塵も抱いていない、嬉々としたものだった。 ないシートで手を拭う。その表情は、 あっさりとそう言った三桜は近くの座席の、 体液に手を汚した不快感など かろうじて汚れ てい

に調べて 「だから、 やってくれるね。ここまでやられちゃうと悔しくなっちゃうね どういう事なのよ。こんな、形を失った肉片を楽しそう 一体何がわかるっていうの?」

若干の苛立ちを含めて、もう一度問う。

今度は三桜も答えてくれた。

体も、 れてる間も この犠牲者達、手足もがれてもまだ生きてたって事だよ。 この死体も、腹を裂かれて皮も爪も剥がされて骨を磨り潰さ 意識はあったんじゃない?」 あ

なにそれ この人達、すぐに死ねなかったの?

にしたという事? 声帯が取り除かれていたという事は......悲鳴を上げられないよう

奥歯が擦り減り、 割れていたのは、 苦痛に悶え、 耐えようとした

が悪すぎる。 それって、 最悪よ。 もう 拷問じゃないの。 無差別拷問殺人なんて、 質

ない。 短時間じゃあ意味が無い筈。 な機械を持ち込んで作り上げるってんだ」 これだけの所業を、 少なくともこれをやった奴は、 短時間でやってのける事が可能な奴なんて居 それにこれだけの弱肉ミンチを、 痛みに苦しむ様を愉しむ類だ。 どん

凹凸の たような痕跡ばかりだ。 肉片も、 ある器具で擦切られたり、捻じ切られたり、 鋭利な刃物で切られたような断面じゃない。 皮を剥がされ、 大きな針孔を空けられたモ 千切られたりし しろ

まである。

されたのだろう。 そうな三桜だって頬を引き攣らせているくらいだ。 男女の区別なく、 こんな死体、私でさえも目を背けたくなる。 上半身から 下半身まで、徹底的に弄繰り回 楽し

残虐非道を極めた地獄絵図が、この車両の中に描かれていた。

なのに

が見当たらない。 なのに.....どこにも、 一つもだ。 そんなあらゆる鬼畜行為に用いられた器具

三桜.....あたし にはよくわからない.....

か らあ

ではなくなった それは一瞬。 みしみしと骨格が音を立て、女性なのに筋肉が隆起した。 三桜の口が、耳まで裂ける。 しかし彼女の身体は一瞬だけとはいえ、 次の瞬間には元に戻っていた。 のだ。 比喩ではなく、 確かに私の目の前で

私様達のような、超常の力によって行われた殺戮って事」

貴女達.....純血一族のような?」

そ。なんだ私様達の事、 知ってんじゃん

のだ。 私の予想は正しかった。 やはり彼女は世界危険勢力の人間だった

ね バッとこの謎を解決しにやってくるのだろうけど、 「ここで、 よくある弱肉の話としては、 優秀な頭脳を持った奴がズ まあ無理だろう

「超常の起こした事件だから?

「イエスイエース。 の駅で車掌のアナウンスはまだ流れていたから、 この事件は弱肉のトリックでもなんでもない。 これは駅と駅の

人

てるね」 間を電車が走る十数分程度の時間で行われた。 車の乗客に気付かれる頃には全部終わってたなら、 ンチにできる奴 両内の乗客全員を解体して苦痛に苦しむ様を存分に愉しんだ後にミ が、 やった事。そういう事。 そんだけ つまり なかなか手馴れ が事。 十数分で車 七号

だ ! あろうと、これは、この状況は、異常だろう! この現場を作った者といい 超常とか強者とかそんなものはどうだっていい。 ? これの何が超常だ。 たとえ人を超えた力を行使する者で 下顎を投げ捨てる三桜とい そうだ、異常なん それ以前に

「異常だ!」

を含んだ、静かな視線を送るだけだった。 思わず叫んでしまった。そんな私へ三桜は 侮蔑のような感情

がる眼球を、ブーツの底で一つ一つ踏み潰している。 それどころか。 私の反応を楽しむかのように、 視神経を伴っ

ちゃ 周囲を潰し終えると くちゃと音を立ててリズムを刻む。 今度は飛散した脳漿の上に足を置き、

なんだ.....なんなんだ、 こいつ。

と私へ向けて音を出した。 解っていないねえ、 彼女はルー ジュのひかれた潤いのある唇を少しすぼめて 柘榴」 虚仮にされていると理解した。 ちゅ、

きたのだ。それでも、私はお前を それでも私の反応は間違っている。 嘗めるな。 私だって死体は見慣れている。そういう世界で生きて きっと、 お前のようなモノを嫌悪する。 そうなのだ。

の場に於いては。

る結界都市だよ、 そう。 勘違い 뫼 きのえと駅』 しちゃあいけないぜ。 まさしくもれなくその通り。 ಕ್ಕ 並折は貴様の思っている通り特殊極ま 此処はもう、 でもこの街 並折 なんだ。 へ来たな 並

5 解ってる?」 それは別段重要じゃ あない。 貴 樣、 解っ てる? 本当に本当に

がる。 びき Ļ 三桜の首元からこめかみへ大きな筋が浮き上

۲ ۱ 「この って事だよバァカ! て抜かすパーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑は尻尾巻いて帰れ 人思考の奴なんて居やしないってんだよ! 『やだーこんな事する人が居るなんて、 化 け物じみた結界都市 解ったか柘榴!」 へ訪れる者の中に、 信じられなーい』 『いやーん死体こわー 貴様のような なん

私は眉間に皺を寄せて三桜の襟首を引っ掴んだ。 誰がパー フェクト間抜け自殺志願脳内お花畑だ、

タイミングであたしに『異常』と言われて感覚の変化に畏れるとい 前は通常と異常の区別が次第につかなくなっていくのさ! 体が落ちておりますわねホホホ』『私の殺害記録は云十人ですのよ 顔無恥のファッキンビッチ共なんかと一緒になって『あら今日も死 に結構よ ホホホ』なんて会話に参加してやるものか! け面を晒し のよ! ようは、 でもあたしは異常だと言い張るね! これも通常で平常で日常って事でしょう! 『いやこれは貴様の感覚でも普通だと思った』 ながらね あたしはこの思考で此処に居座ってやる! ! お前こそ解ったか三桜!」 お前らのような変態雑食厚 一般的思考? 並折では そしてお なんて間 思わぬ 大い

hなに叫んだ 一気に肺から息を吐き出して声を乗せた為、 のは久しぶりだ、 畜生。 大きく肩が動

. やはり貴様は馬鹿だ」

うな、 三桜 の喉から音が鳴る。 のそれと変わりない唸り声だった。 まるで彼女の気管に入った球が震えるよ

戮を並折以外の街で行えば、貴様の言う異常は異常として誰もが認 此処で叫 識するだろう。 この並折を知って此処まで来た」 無いからな。日常では有り得ない光景として認識されている。 し貴様は別だろう、 並折は隔離された街だ。 この街自体が一つの世界だ。 並折を非難したところで、 何故ならばそこに生きる者の大多数が殺人とは縁が 殺戮も行われかねない日常で生きてきたから、 日常からも、 たとえ貴様が外界の正常を掲げ、 意味は無い。 外界からも。 確かにこの殺 言ってしまえ

次に片目だけ開き 襟首を掴まれていた三桜は私の手を弾き、 私の額へ指を突きつける。 一度両目を閉じた。

貴様は一般人じゃあない」

冷ややかで、嘲笑を含んだ声だった。

はなく、 きだ。 並んだシスターの一人が突然般若心経を唱えだすくらいの違和 長らえたいのなら、パーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑 すところなく、そういう奴なんだよ。 般人とは違うんだよ。 並折に足を踏み入れる者は総じてもれなく余 ファッキンビッチのくせに『私は違う』 ファッキンビッチそのもので、 てきた環境も見てきた光景も描くべき未来も訪れるべき最期も、 んと変わらない違和感を纏っていたぞ。あたしは、 しか生きられない。 お前が言うな。 自分は私様達とは違う、 人が日常に居座る世界で生きてきた。 というか、貴様が歩んできた人生は既に変態雑食厚顔無恥の 貴様の言う変態雑食厚顔無恥のファッキンビッチであるべ 車両に現れた時のお前の姿はハレルヤと叫ぶ そういう奴しか居ない筈なんだよ。 だなんて思ってい 貴様は明らかに変態雑食厚顔無恥 だからこの街は、 と声を荒げている。 でも、 ない か? それが当然だなん お前 そういう奴 もしも生き の言うよう 教会に 坊さ

て思った事はない」

ゃないかとね が弱肉と同じような反応を示し、弱肉の感性に従って行動するんじ るとは私様も思っていないさ。 私様は忠告をしているだけだ。 此処を知り此処へ来る立場の人間が、 皆同じ感性を持つ 貴樣 てい

きてきたわけじゃない」 「余計な心配だ。こう見えてお前の思っているほど生温い世界で生

ちとら生肉ぶら下げてサバンナを歩くような真似はしたくねえのよ」 「私様と行動を共にするなら面倒は掛けるなと言いたいんだよ。

解ってる。そんな事、解ってる。

う片手を背に回し、 三桜だって初めて訪れたというのに、 私へ顔を上げたまま会釈して言った。 彼女は片手を胸に当て、 も

、ようこそ、クレイジーな街 並折へ」

組もまた、並折の住人なのだろう。 の三人組もまた、私達とは別の乗車口から中を観察していたのだ。 はどうやら私達だけではなかった。 ムで吐瀉物を撒き散らす人達とは、 たった今、三桜が言ったように、 私は気付くのが遅れたが、 惨劇の八号車両を観察しに来ていたの 此処はもう並折なのだ。 一人の男性と、二人の女性。 住む世界が異なる。 あの三人 駅のホ そ

そこまで考えないと動かない私は さほど多くない荷物。 ここに到ってやっと思い出したのだから。 その中の、 私にとって最も大切な物の存在 実に愚かだった。

れたのは、その物の存在があるからに他ならない。 三桜のような超常の力を持っていない私が、 武器だ。 単身この並折へ来ら 自分の身を守る

着のポケットに移動させておくべきだ。 ナイフではない。これがあれば大抵の危機は乗り越えられる代物だ。 肌身離さず持っておくべきだ。手さげのバッグなどではなく、 危険地帯に足を踏み入れた今。その存在こそが、私の命綱である。 それは小さな折り畳みナイフにすぎない。しかし、勿論、ただの 上

液体窒素を吹き付けられたように、思考が硬直した。 そう慌ててバッグの中に手を突っ込んだ私は、 同時に視界も真っ白になる。 直後 脳に直接、

「ない.....

私の命綱が、消えていた。

PUNICA【六月の果実】3

三桜が誰かと話している.....。

ない。 男性は ああ、 深く被ったニット帽からはみ出た黒い髪が覗いている。 さっき見た三人組だ。 学生か? 若い。 もしかしたら成人しているかもしれ その中の男性と話している のか。

「ほほう、 貴女達はこの電車に乗っていたんですか

住人だな? 初めてこの有様を見せつけられたのよ。 「まあね。 とはいえコレをやった奴は見てないどころか、 弱肉」 貴様、その様子だと並折の 到着して

寮の住人です 弱肉って.....ええ、 並折の住人です。もっと細かく言えば、

ここで三桜の眉がピクリと動いたのを私は確認した。

見える。 青年の後ろでは、 その女性の片方を見て 残りの女性二人がなにやら話し合っているのが 私はぎょっとした。

ともすれば.....彼女の化粧が問題だった。 でで特に変わった点は無い。 あれはシャギー ボブというのだろうか。 女性にしては背が高く、細身のスーツに包まれている。 目つきは鋭く男勝りな印象を受けるが、 だが問題は顔だ。 前髪は斜め左分け。ここま 十分美人と言えよう。 いや、綺麗な人では 髪は短め、

ペイントと言っても過言ではないように。 える効果など無視したように。 それはもう化粧というよりフェイス くて私は驚いた。 両目の周囲に青いアイシャドウを塗っているのだ。その範囲が広 瞼の陰影を際立たせる効果や顔の立体的印象を与

そう表現しようと試みたが、 何故かパンダのよう

羨ましく思った。 こういう女性に蔑むように見下されて喜ぶ者も居そうだ。 考えているのか。 てしまっているのだ。 には見えない。 自分でも訳が分からないが、 私は女なので確信は持てないけれど、 奇抜な化粧でも似合う彼女の顔立ちを、 とにかく彼女に似合っ なんかこう、 私は何を 畜生、

えー、対象は変わりましてもう一人の女性。

アイシャドウの女性とは全く異なる。 こちらは派手な化粧など施しておらず、 質素な美しさがあっ

愛らしい笑顔を零している。 表情は穏やかで、若干垂れ目気味だ。 を纏っている。 長い髪を三つ編みで一つに纏め、クラシックなロングワンピース そして......その上に家庭用のエプロンを掛けていた。 なんだか母性溢れる印象を受けた。 相方と話してはころころと可

待て。人間観察をしている場合じゃない。

ていかれた。 つい観察させられる容姿を目の当たりにした所為で、 思考を持つ

れる。 までも中を探してたって見つかりっこないんだ。 といえど、さすがにこれだけ手探れば 私は誰にも悟られぬよう、 どこを撫でてもあるべき感触が無い。 もう一度、 自分のバッグの中へ手を入 結論を出す段階だ。 小さな折り畳みナイフ いつ

武器を無くした。

は貴重な物だ。 分の座っていた場所を確認する癖が付いている。 たから、 うっかり落としたか? それこそ有り得ない。 車両の中に置き忘れ 落ちる事はまずない。 バッグの中に備わっている内ポケッ たのか? と思ったが、 私は席を立つ際は 私の武器 それはないだろう。 トの中に入れて 自

電車に乗り、 一息ついた際に鎖黒があるのを一度確認してい

たさ.....。 に内ポケッ さっさと結論を出すべきだな。 トのボタンが外されているのだから、 ようは..... 盗まれたんだ。 最初からそう思っ

手を伸ばせた奴は居ない。 ン含む私の近くに座っていた奴らには警戒していたので、 ならば盗ん だのは行動を共にした三桜 ではない。 サラリーマ バッグに

盗まれたのは一号車両を降りてからに違い な ίÌ

ずかしい話だが、自信を持って言える。 バッグの中に手を突っ込んで漁る事が可能だ。 から。 怪しげな気配を身に纏っているのはむしろ私や三桜の方だったのだ 時などバッグを抱えている感覚すら失せていたと思う。 三桜が私の 目の前で肉塊を弄っていた時もだ。 から私の周囲に対する注意力は散漫になっていた。 最後尾で事件が起きたという情報に意識が集中してしまい、 ホームに溢れかえる乗客達を避け、八号車の光景を目にした あのタイミングなら十分、 我ながら間抜けで恥 何故なら殺気や 私の そこ

れならまだ良い。 な奴なら、 ぐうう、犯人を捜そうにも..... 容疑者はホー とっくに逃げてしまっているということだ! あれから時間が経ってしまった。 ム内の奴ら全員。 つまり頭が正常 そ

鎖黒が無ければ私は無力だ。

61 るだろうけど。 三桜に言わせれば、 ただの弱肉だ。 いや、 三桜は今もそう思って

き返すか? 本当の弱肉になってしまった私は、 もう並折に居る。 危険だ。 引

冗談じゃない!

゚゚までは からそのつもりだったけど。 なんとか鎖黒を取り戻さないと。 極力、 目立たないように立ち回ろう。 手掛かりなんて無いけれど。 うん、 それは最 そ

- 「おい柘榴」
- 「弱肉で良いわよ.....
- 「はあ?」
- 気味の悪い ものでも見るように眉をひそめた三桜は続ける。
- 「あの連中、結界寮だ」
- 「なにそれ」
- き、貴様は、 そんな事も知らずに此処へ来たのか」

三桜は簡単に結界寮と呼ばれる連中について教えてくれた。 悪かったね。 私は純血一族という大きな組織に属す三桜とは違う。

界寮は、 こらへんの宿と一緒さ。そこらへんの宿と違うのは、 結界寮ってのは数年前から並折にできた、 表で言うところの警察みたいなもんだな」 文字通りの寮だよ。 その性質。 結 そ

ば無法地帯だ。だから結界寮が並折の監視、 え警察とじゃ全く仕組みが違うがね」 「そう。 警察? 異常超常、 ああ、普通の警察機関じゃ並折は仕切れない 裏稼業、そんな連中の集まる並折は放っておけ 管理を始めた。 もんね とはい

て?」 超常ってのを抑えられるから成り立っているんでしょ? 「だってその、普通じゃ警察でも抑えられない連中 三桜も含む どうやっ

管理人は以前 もある」 結界寮の住人達が力を振るうのさ。 傀儡屋。 なんて希少な裏稼業も結界寮には居るらしい。 世界危険勢力の一員として名を馳せていたという噂 私様の知る限りでは『結界屋』 おまけに

うな裏稼業だぞ。 61 くら並折といえども、 結界屋も傀儡屋も世界危険勢力同士の抗争に駆り出され 警察に例えるより軍隊に例えた方が適切じゃない そんな奴らが目を光らせては無法とは

縁遠くなる。

そして、世界危険勢力の元構成員の存在。

でも迂闊に目立つ行動はできまい。 した。並折の街は既に一勢力として完成しているのだ。 成程.....純血一族ほどの組織が大々的に手を出さない事実に納得 これは三桜

うだ。 どうやら結界屋の感知結界は並折全体を覆っているらしいな。 に結界寮の目があるようなもんだ」 あいつらもこの駅を調べに来て、八号車両惨殺事件に遭遇したそ 三桜は先程まで話をしていたニット帽の青年を親指で示す。 電車が停止してそれほど時間が経っていないうちにだぞ? 今あそこの結界寮ボーイに話を聞いてきたんだけど」 街中

両の事件を感知して此処へ来たわけではないのか? そのまま疑問を彼女にぶつけてみると、 三桜は当たり前のように話しているけど、結界寮の連中は八号車 ... うん? 今の話、ちょっと引っかかる。 あっさり頷かれた。

の場合、 と判断したから来たそうな」 「結界屋が感知するのは刃物や銃火器等の危険物なんだとよ。 屋外 しかも駅で反応があった。 んで異常の可能性あり 今回

まさか。

結界屋が感知したのって、 私の折り畳みナイファ

しれない! もしそうだとしたら、 結界屋なら私のナイフの在処がわかるかも

はできないものかと彼らの方を見やる。 暗闇の中に光明が差し込み、 なんとか結界寮の連中と関わること

結界寮の三人は、この場を去ろうとしていた。

一人の女性と青年が何かを話している。

追う 小僧 ! 車両の中身はもういい。 私と林檎は、 これをやっ た奴を

アイシャドウの女は、見た目通り気の強い人物だった。

梵さん、いい加減その小僧って呼び方やめてくださいよ」やよき

林檎か。 どうやらアイシャドウの女は、梵という名前らしい。 もう一人は

だ小僧」 「うるさい。 私は気に入った奴しか名前で呼ばん。 お前なんか小僧

温厚そうな女性 悪戯っぽくしかめっ面で舌を出す梵という女の横で、 林檎が青年を宥めている。 もう一人の

「ごめんね伊佐乃君、 むう 梵ちゃんってこういう子だから.....許してね

もあの林檎という女に見つめられて頼み事でもされたら聞き入れて 林檎に言われるとすぐに顔が緩んだ。 しまうかもしれない。 明朗と呼ばれた青年は、ふてくされたように口をすぼめていたが、 わかりやすい男だ。 いや、 私

んはこのまま追跡を続けるんですね。 「まあ.....いつもの事なので気にしてないですよ。 じゃあ僕は?」 梵さんと林檎さ

「要らん」

筋を立てた。 梵が吐き捨てるように言うと、 明朗はにこやかに笑いながらも青

「ああ、そうっすか!」

るで恋人のようだ。 隣で二人のやり取りを見ていた林檎は明朗にもう一度「ごめんね」 梵は明朗を無視してそのまま改札出口へ足を踏み出す。 梵に追従した。 この女性同士は仲が良いらしい。 林檎が両手で梵の腕にしがみつく様は、

やら彼女達は仲が良いどころではなさそうだと思った。 そのまま後ろ姿を目で追い、二人が改札を出たところで

女同士のキスなんて初めて見たよ私。

ので呆然とその場に突っ立ったままだ。 あの二人は行ってしまい、残された明朗は目的を失ってしまった

によって徒労に終わるのだろうが。 もホームへと駆け込んで来るようになった。 どうせ全ては結界都市 ようやく駅の前に数台のパトカーや救急車が停まり、 御苦労様だ。 警官が何人

たものではないので早々に立ち去った方が良さそうだ。 ったので聴取を受けても問題は無い。が、三桜がどう動くかわかっ ではないが、私は持っていた唯一の武器を盗まれてし

「三桜、行こう」

まだ明朗の方を見ながら、 しかし返事は無い。 隣に居る筈の三桜へ声を掛けた。

「三桜?」

視線を隣へ向けると、彼女の姿は無かった。

チョロこっちヘチョロチョロと、忙しない女だ。 横で同じく背を丸めている女性に絡んでいるのか。 視していた。ポケットに両手を突っ込んで誰かに話しかけている。 それにしても二人合わせて実に奇妙な光景だった。 見回すと、 三桜は少し離れた場所で背を丸めてホームの地面を凝 あっちヘチョロ

- なに? 何か美味いもんでも落ちてんの?
- いえ。 指輪.....指輪を無くしてしまって」
- 「どんな?」
- 「 玩具の指輪なんですけど.....
- オモチャだあ? そんなもん必死に探してんの?
- 大切な物なんです!」
- あ、そう。そんでこの辺に落としたの?」

- 多分.....この辺りじゃないかと」
- 「この辺?」
- にい
- 「 どの電車から降りたの?」
- え。あっちの.....路面電車です」

きのえと駅含む四つの駅を繋ぐ路線かな。 路面電車? ああ、 たしか並折を走るのは路面電車だったっけ。

- 「どこ行ってたの?」
- 「お墓参りです」
- 「誰のお墓?」
- 「 妹のです.....」
- あ、そ。墓地ってどこにあるの?」
- つちのえと駅を降りてすぐですよ」

それにしてもしつけえ女だ......指輪を探す女性もさぞ迷惑だろう。

誰のお墓?ってお前全く関係ないじゃん。

- た物なんです』とか言うなよ? ふん。 あっ、 もしかして。 言うなよ? 『その落とした指輪は妹から貰 絶対だぞ?」
- 妹から貰った物ですよ」
- 言っちゃった!言っちゃったー!」

お前誰だよ本当に鬱陶しいな。

実にどうでも良いものばかり。 いきなり話し掛けてきたかと思えば質問の嵐。 そんなに暇なら他を当たれ。 しかもその内容は

だろう。 付いているんじゃこの雌狐が。 お前が背中を丸めているのはどうせ指輪探しを手伝う為じゃ 寄せた胸を通行人に見せて反応を楽しんでいる事くらい気

- そっか」 ええ。 掃除? どこの」 倉庫?」 あ。そういえばまだ倉庫に写真を残してあるかも.....」 ええ、とても」 妹可愛かった?」 宿です宿。 はぁ..... これからまだ掃除があるというのに.....」 使っていないんですけどね、 定期的に手入れしな
- えつ、マジ? 宿 ? 貴様の?」

そう。 三桜の目の色が変わった。 私達はまだ住む場所を決めていない。 私の目の色も変わっている筈だ。 三桜の頑張りどころ

だ。

はあ。そうなんですか、ようこそ」 私様達、まだこの街に来たばかりでさぁ」

こう見えて体力には自信がある!」

ふふ、そう見えます。素敵な身体つきです」

だから、私様が一緒に指輪を探してあげるよ」

本当ですか? 有難うございます!」

うん、それでさ、 貴様の空き宿を借りたいんだけど」

宿をですか?」

うん、 拒否したら殺す」

後が極端に駄目。 宿を借りるまでの流れを上手く形成していったにも関わらず、 最後が駄目。 最後だけが駄目。 大変残念です。 最

- 「 あら、それでは拒否できませんね.....」
- 「だろう?」
- 構いませんよ、 宿の掃除もして頂けると助かります」
- 「任せておけ」
- . では、指輪探しを続けましょう」
- 「任せておけ」
- ああ、申し遅れました。 私 矢神聖歌と申します」
- ・私様は守野三桜」

交渉成立だ。 よくやった三桜、 宿を確保できたぞ。

あとは指輪探しを頑張れ。

さて.....私は

宿が決まったようで良かったね」

振り向くと顔の前に明朗青年の姿があった。 私と同様、 三桜と聖

歌のやりとりを見ていたらしい。

き止めるのだ。 おけば結界屋へと辿り着けるかもしれない。 たしか結界寮の住人だったな。 好都合だ。 そして鎖黒の在処を突 この男と親交を深めて

- 「うん、ひとまず落ち着く場所が決まった」
- まあ、 僕が結界寮を紹介してあげても良かったんだけど....
- 何? 馬鹿三桜め、余計な交渉をしやがって。
- 「結界寮って、あたし達でも住めるのか?」
- あはは、冗談だよ。 君達が平穏を望むのなら、 結界寮は避けた方

が良いからね。 特に此処へやってくる人ってのは、 逃亡者が多い。

だから無闇に誘ったりしないよ」

の街に蔓延る危険と向き合わなければいけない。 それもそうか。 結界寮の住人になるって事は、 鎖黒の無い私には その特性上こ

荷が重い。

いや待て。ならこの青年も・・?

って事だろ」 もって、君の言いたい事はわかる。 明朗でいいよ。 明朗君だったよね、君も結界寮の仕事を手伝う身なんでしょ?」 うん、そうそう、 結界寮の仕事を手伝ってる。 僕も相応の力を有するのか?

その通り。

ょ 「僕は梵さん達のパシリだからねぇ......危険に見舞われたら、 **人達の影に隠れてるような奴さ。 結界寮でもそんな奴、** 僕くらいだ あの

だ。 れるものだ。 明朗は苦々しく笑った。 いやむしる、 よくそれで結界寮に住もうと思えたもの つまり無能って事か? よく生きてい 5

η 宿を見つけられたのだから、そっちに住むべきだよ」 結界寮には関わらない方が良い。 だろうね。 まあ、 鎖黒はなるべく自力で見つけるようにしよう。 つまりそういう事だから。 僕みたいなのは例外。 君は

は ぁ ちょっと待て。 改めて自己紹介するよ。 自己紹介? 僕の名前は、 いやいや、 だって私はもう結界寮に 明朗

「君の名前は?」

......天宮柘榴」

いやほんと無駄でしょこの自己紹介。

要らないでしょこのやりとり。

「あまみや.....ざくろ?」

「うん」

「ざくろって、あの柘榴?」

「そう、あの柘榴」

学名プニカグラナタム、 開花時期は六月上旬から七月下旬という

ザクロ科ザクロ属の、あの柘榴?」

「そうだよ」

さ。 名前が果実と同じというだけだ。 とりあえず相槌を打っておいたが、 どこかの資料から一文を引き抜いてきたような確認方法は何? いちいち確認する事でもないけど 私は人間であり果実ではない。

が咲いたように明るくなっていた。 しかし明朗の感性のどこかに引っ掛かったのだろう。 私の名前のどこに惹かれる部分があるのか皆目見当がつかない。 彼の表情は花

という結論を出したのに。 いつ自身が言っていたではないか。 明朗はいきなり無邪気にとんでもない提案を持ち掛けてきた。 ねえねえ、僕も君たちの宿へ遊びに行ってもいい?」 いやお前だからね、 というか平穏を望むなら云々 たった今、結界寮に関わらない方が良い

でも流れているのだろう。やたら上機嫌だ。 そう言って三桜を指差す。 いいでしょ? ちゃんと、 あっちのお姉さんにも了承を貰うから」 彼の頭の中では、 きっと愉快なBGM

脳内ライブ会場こと明朗。

りで近付いてゆき、私の時と同様に上機嫌のまま交渉を始め、 彼は、 レートを一発貰い、 聖歌と共にホームの床を睨み続ける三桜の方へ軽快な足取 愚鈍な足取りで私の元へ帰ってきた。 右ス

パンチをね。

拳に了承の意を乗せて僕に渡したんだよ」

「おめでたい解釈だな」

語)、 「万に一つ、 今のがただのパンチだったとしても。 百歩譲って、十中一二 (十中八九を元にした明朗の造 これで彼女はパンチー

発分の借りが僕にできてしまったことになる」

「質の悪い解釈だな」

最早付いてくる気満々である。

結局見つからなかった。 そしてこの後、一時間近く聖歌と三桜は指輪を探していたが

PUNICA【六月の果実】4

という。 ところを、 ていたという事なのだろう。その点については詳しく触れなかった。 とにかく外界ではどうにも逃げられなくなり追い詰められていた その丁寧な物腰からは想像もできないが、 矢神聖歌という女も、 並折という結界都市を紹介され、 やはり並折の住人だった。 外界では相応の事をし 命からがら逃げ込んだ

彼女はきのえと駅を出て宿へと向かう道で、 私達に自ら話してく

と思っています」 だから、 私は並折へ訪れる方にはできる限りの協力はしたい

先頭を歩きながら嬉々として語る聖歌。 私はそんな彼女の背中が、 少々危なっかしく見えた。

それはそれで危険な気もするけど.....」

私達のように危害を加える可能性の無い者ならまだしも、 すれば殺されてしまうぞ。 に危険な奴へ協力など申し出てみろ。 散々利用された挙句、 それなり 下手を

だよ」 「柘榴ちや hį そういった事にならないように僕達結界寮があるん

もなかったわけで。 まあ、 彼女の心遣いが無ければ、 私に彼女の意思を否定する権利は無い。 こうして宿を提供してもらう事

- ねえ柘榴ちゃん、聞いてる?」

「黙れ弱肉」

痛し!」

三桜が明朗の内腿へローキックを放った。

そんな光景はどうでもいい。

私は二人よりも歩みを進めて聖歌の隣を歩くことにした。

前だけを見て肩を揺らす矢神聖歌。

きのえと駅で会った時も、不思議な笑顔をする女だと思った。

上品。という表現が適切なのかもしれないが、その単語一つでく

くってはいけない気がした。

私よりも背の高い聖歌の顔は、 空を背景に煌めいて見えた。

(デュアルフェイス.....)

その一言が頭を過ぎる。

その一言が私の安心を許してくれない。

その一言が聖歌への好意を妨げる。

表情も言葉も一つの顔で、決してそれだけを信じてはいけないの この聖歌も顔は一つではない。と、 卑しき思考回路に導かれる。

だ。

人間には顔が二つあるのだから。

矢神聖歌は並折の住人で、 過去に並折の結界を求めてやってきた

逃亡者。

だから彼女の煌めいて見える顔も偽物だ。並折に来なければならなかった逃亡者。

り物なんだ。 丁寧な物腰も言動も、 柔らかい笑顔も、 親切な行動も。 全部、 作

人間なんて大嫌いだ!

心なんて大嫌いだ!

惑わすくらいなら、 そして私のように疑う。 こんな物があるから偽る。 顔などなければ良いのに。 怪しむ。 隠す。 装う。 嫌悪する。

さっき駅前を通った時に私の目を引いた物のように。

それは駅前広場の中心に設置されていた像だ。 なにやら空を見上げて両手を伸ばす子供の像の

まあ、 駅前に像が設置してある事は珍しくないのだが、 気になっ

たのはその子供の像には顔が無かったからだ。

だからその子供に表情は無くて、 ともすれば一体どんな表情で空

へ手を伸ばしているのかもわからない。

雲を掴もうと必死になっているのか、空の綺麗さに顔を綻ばせて

61 像は半被を着ていたので体型がわからなかった。、るのか、はたまた助けを求めているのか。

彼か彼女かも区

別できない。

ああいう場所に飾られる像って、 とにかく、 一体あの像が何を表現しているのかさっぱりだった。 何か象徴するものやテー マがあ

て然るべきじゃないのか?

左右が対象ってところは好感が持てたし、 なんだかもやもやするだけのオブジェクトだった。 顔が無い 存在は羨まし

か った。

象徴....。

伝承を象徴しているのだ。 顔の無い像が象徴するのは一 だって顔が無いし。 つしかない。 あの像は、 見たまんまだ。 カオナシの

用は無い。 ということは、 カオナシの伝奇は並折へ来る前に番の姉さんから聞いた。 あの像の子供がカオナシ? どうでもいい。 像に

用があるのは、本物の方だ。

あの妖怪雪女。 ちなみに番姉さんは正真正銘、 生粋純粋、 実在顕在の、 雪女様だ。

妖怪として記録された例もあるという事を私は知っている。 あの人がどこで誰から生まれて育ったのかは不詳だ。 なら妖怪カオナシだって、実在する筈だ。 とにかく番姉さんみたいな、とんでもない能力を持った人間が、 ただし日本で目撃されたから日本でそう呼ばれているだけであり、

そいつを見つける事。 カオナシ。

た。 なのだけれど……並折に来て早々、 肝心の武器を無くしてしまっ

先が思いやられる.....。 カオナシ捜索より先に鎖黒の捜索だ。 あれがなきゃ本末転倒。

(今は、流れに従うしかない)

つ 強い日差しに晒されながらも隣を歩く聖歌の顔はとても涼しげだ まだ陽が昇り切っていないからでもあるだろう。

私もあまり汗をかいていなかった。

れていた。 彼女の手元では、 線香の束や鋏、 マッチの入ったビニー ル袋が揺

「妹の墓参りだっけ」

話し掛けると彼女は顔を崩さずそのまま頷いた。

ええ。 六月の二十四日は、 妹の命日なのです」

「聖歌は朝一番に行ってたの?」

「ええ。 並折を走る電車は、 始発便が早く出ますから」

そうみたいね。 あたし達の乗ってきた始発が到着した時には墓参

りを終えていたんだから」

普段はあんなに人が混雑しないから、 きのえとに降りた時は驚き

ました。 ホームで大混乱が起きているんですもの」

「 八号車両惨殺事件..... 聖歌はどう思う?」

私が問うと、 聖歌は口元を結んで小さく唸った。

折で降りるつもりだった」 電車に乗っていたって事ですよね。 当然ですけど、 あれをやった犯人は、 そして柘榴さん達と同じく、 柘榴さん達と同じ 亚

車両には犯人が乗っていたというのは、 改めて考えると、 私が気を緩めて一号車両に乗っていた時も八号 気持ちが悪い。

聖歌は続ける。

機が不明です。 の情報でも、そんな無茶苦茶な事件は滅多に聞きません。 どうして八号車両なのか。 無差別殺人に間違いないのでしょうけど、 どうして車両内全員を殺したのか。 そもそも 外界から

聖歌は顔を横へ 私の方へ向け、 視線を合わせた。

者。しかし今回の事件は、下手をすればきのえと駅へ到着する前に ざるを得ない事情がある者ばかりなのです。 と判断したから、 電車が急停車し、 いかねなかった。 そもそも、 並折という結界都市へ訪れるのは、 その場で この件は結界によって外界に漏れずに済んだので 運転士が駅に近い位置だから駅まで電車を運ぼう 並折の結界外で事件が拡散してしま つまりその殆どが逃亡 並折の結界に頼ら

確かに.....聖歌の言う通りだ。

だろうか。 犯人は事件が外界に漏れることなど気にしていなかったという事

くは『逃亡者ではなく、 いう事ですね」 「考えられるのは、 犯人が『頭を盛大に御壊しになられた方』 別の目的で並折にやって来た方』であると

どちらも有り得る。

三桜もその点の異常は認めるだろう。 いちいち動揺するのをやめろと言っただけだ。 あんな虐殺を行う奴は、 正直頭のいかれている奴としか思えない。 彼女はそういう奴が居る事に

は後者よりも前者の方がしっくりくる。 である可能性は十分にある。 だから聖歌の言う前者 むしろあの虐殺を行う者を思い描くに 犯人が頭を盛大に御壊しになられた方

それはそれで厄介だが、 もっと厄介なのは後者だろう。

それを、 折で処理されず日本全国へ知れ渡ってしまったかもしれないのだ。 事になる。今、 後者は あの虐殺が必要だったという事だ。 目的を果たす前に行ったという事は、 並折で何かを行うという目的を持って現れた、 聖歌が言ったように八号車両の件は下手をすれば並 己が目的を果たす為 という

その考え ねえ聖歌。 貴女は二通りの考えを出したわけだけど。 とても甘ったれて聞こえる」 あたしには

らかの目的を持って並折に来た』と考えるもの」 あたしなら、 そうですね.....私の考えは、もっと悪い方へ考える事が出来ます」 『頭を盛大に御壊しになられた方が、 逃亡以外の何

「考えたくもない最悪っぷりですよ、それ」

同感」

手前で犯行に及んでしまっただけ』といったところですけど」 「おそらく有り得ないであろう希望的考察は、 『犯人は偶然、

「そこまであたし達もお気楽な頭をしてないわよね」

「ええ」

達は自然と身体の距離が密になっていた。 う通り私達は四人連なって歩いていたが、 聖歌の宿はきのえと駅から歩いた方が早いと言うので、 駅から離れるにつれて私 彼女の言

緑豊かな植木に挟まれた歩道が続くだけだ。 広い車道や歩道は駅の周囲だけで、 車道から離れた今となっては

ひたすら長い階段が続くが、 しかし疲れを感じさせない穏やかな

傾斜。

階段道を上りつつ振り返ると、 眼下の景色に心奪われた。

家屋が一定の間隔で立ち並び、 街の様子が一望できる。

海岸沿いに走る車道の向こう側には そう、 海だ。

に 燦々と注ぐ陽光に磨き立てられたように、 輝く海がそこにはあった。 硝子の粉を撒いたよう

高い位置なのだと実感した。 目下に広がる一面の海と、 緑と、 家屋。 私の立つ場所は、 随分と

蝉時雨に包まれて、一層夏を感じる。

ゃ かな自然に囲まれていた。 結界都市、 魔都などと呼ばれる並折の街は、 こんなにも綺麗で穏

事もなかっ のだろう。 しかし たようにこうして感傷に浸る私は、 八号車両惨殺事件の現場を目撃した直後に、 おそらく異常の類な まるで何

それが少し哀しかった。

ひっそりと佇んでおり、門に大きな看板が飾ってあった。 更に細い歩道を進んだ先に聖歌の管理する宿はあっ た。 林の中に

羽田立荘と書かれていた。

読み方は、はだたち だそうな。

師でも居るのだろうか。 の植木も手入れが行き届いていて、随分立派な庭である。 正門をくぐると、うねる石畳が続き植木の奥に母屋が見えた。 専属の庭 تلے

た石の床で棒立ちになっていた。 興味本位で付いてきた明朗もこれには驚いたようで、緑に挟まれ

三桜が聖歌に訊いてみたところ、やはり此処は元料亭だったとの

此処が私と三桜の並折に於ける住まいとなるわけだ。

た。 た気持ちは急降下。 へれも私達がしなければならないという事に気付く。 少し気持ちが高ぶった。が、よくよく考えるとこの立派な庭の手 母屋までの石畳の長さに比例して気も重くなっ すると高ぶっ

うな明朗。 屋内清掃を頑張るよ。 体力には自信があると豪語した三桜と、とりあえず多少は使えそ 二人には頑張ってもらうとしよう。 私は.....そうだな、

思います。 二人だけではこの宿も広すぎますので、 お食事の支度は任せて下さいね」 私も此処に居を移そうと

歓喜のあまり抱き着いたのは言うまでもない。 小さく拳を握りながらそう言ってくれた矢神聖歌に、 私と三桜が

どさくさに紛れようとした明朗は三桜が阻止した。

家賃や生活費の心配は、 実は要らなかった。

羽田立荘の庭を見ても驚かなかった彼女は、 れていそうだ。 た心配はしたことが無いらしい。見た目に似合わずお嬢様だった。 三桜は純血一族という異常ながらも名家の人間なので、 もっと立派な庭を見慣 そういっ

私もその辺の心配はない。

十分な量の現金と、鎖黒しか入っていなかったからだ。 私の手荷物といえばこの手提げバッグ一つなのだが、 その中には

だからこそ、鎖黒だけを盗まれた事が甚だ疑問なのだけど。 羽田立荘は立地も好印象で、此処ならば腰を落ち着けられそうだ。

そうにないと悟った。 少なくともこの六月は、 落ち着いて鎖黒の捜索ができ

だけ手入れしてあるんだよ..... 屋に到っては障子の張り替えと壁の補修が必要な有様だったのだ。 聖歌は随分長い間、屋内を放置していたと思われる。 母屋へ入った私達を待っていたのは、埃だらけの廊下や置物。 どうして庭

逃げようとした明朗は三桜が取り押さえた。

魔都と呼ばれる結界都市での最初の作業は、 天宮柘榴が並折を訪れた二〇〇六年六月二十四日。 掃除であった。

【六月の果実】 5

あっちい」

台が設置されており、座椅子に腰を落ち着かせられる。 でなく六畳程の畳が敷かれたスペースがある。 羽田立荘の玄関を抜けた先 ロビーには、 その上に小さな卓袱 テーブルと椅子だけ

ィを咥えていた。 守野三桜はそのスペー スに寝転がり、ソーダ味のアイスキャンデ

て彼女を一瞥。 私はロビーの隅にあった雑誌棚から新聞を引き抜き、 椅子に座っ

そして頬に汗を伝わらせる彼女の格好に深い溜息がもれた。

上はタンクトップー枚。下は.....下着一枚。

はしたない。はしたないにも程がある。

玄関を上がってすぐの場所だ。弁えてほしいものだ。 自室でその醜態を晒すならまだ許せる。 が、 ここは先述した通り

繰り返している。 庭の掃除をしていたので少し陽に焼けている部分がくっきりと解る。 三桜は構わず畳の上で仰向けになったり、うつ伏せになったりを 引き締まった体型をしているが、色は意外と白い。

ああ、 暑い暑い......」

口からアイスキャンディを引き抜き、長い舌を出して喘いでい る。

冷房も扇風機も無いからね。 私だって暑い。

れた皿、 三桜が寝転がる場所の周囲には、木彫りの熊や綺麗な模様の描か 将棋盤などの置物がごろごろと転がっている。

全て此処のロビーに飾ってあった物だ。 どれも埃を払って布で拭 見栄え良く並べたというのに。 こいつは「ひんやり した物を..

挙句放置しやがるのだ。 ...」とか言って掻き集め、 枕にしたり腕に抱いたりと、 散々弄んだ

ちゃんと片付けとけよな。

「おーい、クロちゃん」

三桜はにやにやと顔を歪めながら視線をこちらへ送ってきた。

やめて」

「私様に言うなよ、付けたのは明朗の奴だぜ」

名を付けられていた。 そう 私は、 明朗の馬鹿野郎に『クロちゃ hという奇怪な綽

センスの欠片もない。 私の、ザクロという名前から取ったらしい。 迷惑極まりない上に

面白がって聖歌までクロちゃんと呼ぶ始末だ。

「で、何よ」

「何読んでるのかなーって」

見りゃわかるでしょ、新聞よ」

「じゃあさ、新しいアイス取って来てよ」

う。 何が「じゃあ」なんだ。 私は新聞を読んでいると言っているだろ

わりー」ってか。 三桜はアイスキャンディの棒を振って白い歯を覗かせる。 ふざけんじゃねえよ。 おか

「お断り」

えー。 だって私様、 動きたくない。 柘榴が行けよー」

「何よ、あたしをパシリだと思ってるわけ?」

を御所望だ。 強者の為に弱者が働くのは当然だろうが。 機嫌を損ねる前に可及的速やかな行動を勧める」 私様はアイスキャンデ

「勝手に損ねてろゴミ」

「ゴ川って.....」

新聞を読む。 悲愴な表情で手からポロリと棒を落とした三桜は無視して、

ふむ.....やっぱり八号車両の件は載っていない。

案の定、並折の結界が効果を発揮したんだな。

しかし気になる記事を見つけた。

う。並折からなら電車を三、 私が並折へ来る前日に駅のホームのトイレで死体が見つかったとい 大きな字で『駅構内でバラバラ殺人』と載せられている記事だ。 四回乗り継げば着ける駅だ。

用する普通の会社員だってさ。 る百坂さん宅の長男ではないかと予想しているらしい。 による身元の確認を急いでいるが、数日前から行方不明となってい 被害者の名前は 無い。 遺体の損傷が激しく、現在DNA鑑定 よく駅を利

違いない。 車両惨殺事件と似ている。 遺体は見出し通り四肢を切り取られた状態だったのだろう。 いせ、 犯行場所からして同一犯の仕業に

て並折の結界など求めてもいない。 思った通り。 あれをやった奴は、 逃亡者なんかじゃあない。 そし

を行った奴は、 いう報告を聞いていないと言っていた。 結界寮の追跡を回避した事に明朗も驚いていた。 明朗は、あの後犯人を追った女達 まだこの並折に居るかもしれないっ つまり八号車両で大量殺戮 梵と林檎からは確保し て事だ。

おいこら、柘榴。私様のアイス

「わ、びっくりした」

三桜がいつの間にか私 の隣まで来ていて、 顔を近づけていた。

「気が散るからやめて」

何をそんなに熱心に....」

新聞を覗き込んだ。 アイスの棒を唇で挟み、 ぴこぴこと上下に動かしながら、 彼女は

りに行けば良いだろうに。 畳のスペースから此処まで歩いてきたなら、 そのままアイスを取

- 鼻で笑われ、新聞を取り上げられてしまう。 ああん? 六月二十五日の朝刊? なんでこんなの読んでるのさ」
- ・ 雑誌棚にあったからよ。 いいから返して」
- まあ聖歌の奴が持ってきたんだろうな。 それより早く! アイス
- 暑さで私様が死んじまう」

新聞を取り返そうと腕を振る私を面白がって、三桜は飄々と逃げ

る

「わかった、わかった……」

諦めた私は椅子から立ち上がる。

納得できないけれど、これ以上付き合うのも面倒だ。

ロビーを離れ、台所へと向かう。

56

その途中で矢神聖歌と鉢合った。

あらクロちゃん」

゙.....洗濯物、干し終わったの?」

もう聖歌は私の呼び名をクロちゃんで定着させてしまってい

終わりましたよ。そうだ、 良いお茶が届いてるの。 三桜ちゃ

交えて一緒に飲まない?」

「うん、 構わないけど。 ぁੑ なら台所へ向かうの?」

「ええ」

「三桜がアイスキャンディを欲しがっているから取って来てくれな

いかな」

アイス? お茶と一緒に食べるのかしら」

て思ってないよね。 いや、 三桜はエスパーじゃないからこれからお茶を出されるなん

ゃうだろうから」 やっぱりあたしが持っていくよ。 聖歌がお茶を入れる間に食べち

そう、じゃあ行きましょう」

ほら持ってきたぞ」

ソーダ味のアイスキャンディを三桜に渡す。

おお! ありが.....うむ、 御苦労だったな柘榴」

こいつ滅茶苦茶腹立つわ。

いた。 それにしても冷凍庫の中に大量のアイスが敷き詰められていて驚 いつの間に。

くのさ」 私様は暑いの苦手だからねえ。 夏場は必ずアイスを買い込んでお

言う。 アイスキャンディの角をいきなりかじりながら、 何故か自慢げに

「その代わり、寒さには滅法強い」

冬は平気なんだ」

平気なんてものじゃないね。 全裸でも過ごす自信がある」

冗談だと信じたい。

の地での任務といえば、守野三桜様。 特に日本の冬なんて私様にとっては寒いうちに入らないさ。 これ常識ね」 極寒

いや、 純血一族、 そこまで言われるとあながち冗談とも思えない。 守野家の能力に関係しているのか。

「極寒の地での任務.....雪山とか?」

問うと、三桜は片目を閉じて微笑んだ。

ら十一年前か。 「そうそう。 最近はあまり引き受けないけどね。 外国の山岳部隊に雇われてた事もあるんだよ」 十二の時 だか

イスを夢中で頬張る。 若かったねえ。 بح 年寄りくさい事を言いながら子供のようにア

純血一族、守野家の女。

守野三桜か。

な、なんだよ、そんなに見つめて」

ん I ? なんかさ、三桜って変だなあと思って」

さっきから失礼だな貴様」

「だって変だもん」

どこが。 美しいと言われる事はあっても変と言われる筋合いはな

, ۱ -

「あたしがイメージしてた純血一族の人間とは、 違うもん

る範囲な気もする。 三桜は確かに普通とはズレているかもしれないけれど、 許容でき

よ。そうじゃなけりゃあ、 んあ、 私様が? そりや 先遣として並折に送られたりしないさ」 あねえ.....多少の営業スマイルはできる

「営業職みたい」

族は殺し屋さんの老舗だから」 「営業なんかしなくても殺しの依頼は後を絶たないけどね。 純血

ても好き放題殺しまくってるじゃない」 「お金貰って殺す。それが殺し屋でしょ。 あんた達はお金貰わなく

でしょ」 理由なき殺人ってのは一族的には御法度なのさ。一応、 すけどね。でもそういう奴には当然ペナルティが課される。 請け負うだけだ。ただ、殺人衝動に負けた奴は無意識の殺戮を起こ 「でも、 「おいおい勘違いするなよ。私様達にも理性がある。 なんだかんだで殺人が大好きな奴がごろごろ居るのも事実 依頼で殺し だから、

殺したいから殺す、 立派な理由じゃないか」

結局、 殺したくなったら殺すんじゃな い ゕ゚

くとそれをゴミ箱の中へ放った。 二本目のアイスを食べ終えた三桜は、 ぺろんと口から棒を引き抜

「お茶の準備ができましたよー」

聖歌の声だ。

三桜は畳の上に座り直し、 卓袱台に頬杖をついた。

「お茶? こんな暑い日に」

「まあ! 三桜ちゃん、その格好は何ですか!」

「え?」

「女の子がはしたないですよ!」

「だ、だって暑いから.....」

聖歌は湯呑を三つとポットを乗せた盆を卓袱台に置き、 ちょっとは我慢 しなさい ほらクロちゃ んも座って」 にこやか

「なんじゃこりゃ」

歌は実に嬉しそうだ。 キーマンという紅茶だそうですよ。 見慣れないお茶を出された三桜が困惑の声を上げるが、 良かっ た 間に合って」 対して聖

お茶一つで.....。

私も三桜もその点に関しては同じ考えだった。

「どうしてまた.....」

「だって今日飲みたいじゃないですか」

「よくわからん」

うん。三桜の言う通りよくわからない。

別にお茶に関して詳しくないから、 聖歌の嬉々とした声にもどう

反応して良いのやら。

同じ一つのポットから注がれたお茶を三桜が口にしてから、 私も

湯呑に手を出していた。

これは羽田立荘に来てから常習化させている事だ。

頻繁に台所に置いてある調味料の中身や、 棚の中もチェックして

い る。

聖歌が料理をする際はさりげなく様子を窺うし、 買い物から帰っ

てきたら袋の中を見る。

られるよりはマシだ。 悟られないようにこれらを実施するのは骨が折れるけど、 毒を盛

(嫌な女だなあ.....私は)

その自覚はあった。

「じゃ、私は買い物に行ってきますね」

お茶を一杯だけ飲み終えた聖歌が立ち上がる。 一杯で満足したら

l l

ついでにこれ、出しといて」

三桜が封筒を渡した。

ではい。他に御用はありますか?」

ないよ。いってらっしゃい」

クロちゃんは?」

。 あたしもないよ」

私も三桜に合わせて首を横へ振った。

なんだかんだ言って三桜はお茶を三回もおかわりしていた。

玄関を出た聖歌の、 誰かに挨拶する声が聞こえた。

あら、いらっしゃい」

こんにちは聖歌さん! クロちゃん居ますか?」

この声は明朗だ。

. ロビーに居ますよ」

ありがとう! あといってらっしゃい!」

はいはーい」

私はあぐらをかいて座る三桜を蹴っ飛ばした。

「痛! なんだ急に!」

「服を着てこい服を!」

「ええ....」

「下着も脱がすぞ!」

「わかった、わかったから……」

さすがに全裸を明朗に晒すのは抵抗があるのか、 三桜はそそくさ

と自室へ向かった。

やって来た。 三桜の醜態を目にすることなく、 少しして伊佐乃明朗がロビー ^

に大きなヘッドホンを付けていた。 ていない。 明るく染まった髪はワッ 初めて会った時はニット帽を深く被っていた彼だが、 そしてなぜか片目に眼帯。 クスで固められている。 今日は被っ その上

「こんにちはクロちゃん!」

「目、怪我したのか?」

え? ああ、これファッションだよ」

ぺろん、と眼帯をめくってウインクしてくる。

結界寮の住人は奇抜な格好を好むようだ。

肩までくっつきそうになる距離だ。 明朗はスニーカーを脱いで畳に上がると、 私の隣に座った。

調子はどう? クロちゃ hį もう並折には慣れた?」

た私のあだ名だ。 もう一度言うが、 П クロちゃ hというのはこいつが勝手につけ

全然。街の地理も把握できてないよ」

私の返事に、明朗は「そっか」と相槌を打つ。この羽田立荘の掃除で手一杯だったからね。

ない方がいいよ」 「僕がすぐにでも案内してあげたいんだけど..... まだあまり出歩か

ああ、 どうして? えっとね。 聖歌はいつも通り買い物に出かけたじゃ 今は大丈夫だけど、 結界寮が最近妙に神経質に

できないんだ」 なっててさ..... 僕でも梵さんと林檎さんから許可を貰わないと外出

「何か、起きているのか?」

界寮でも把握に時間がかかってる」わかんない。起きているのか、 起きようとしているのか、 結

「六月の事件関連?」

「うーん....」

同じく転がっていた将棋の駒を幾つか手に取る。 明朗は唸り、 近くに転がっていた将棋盤を卓袱台の上に乗せた。

ぱちん。

広い盤の中心に、駒が一つだけ。彼は将棋盤の中心に『歩兵』の駒を置いた。

にして絶対の裁定機関が置かれている」 これが並折の保つ秩序。 並折という盤の中心に、 結界寮という唯

力有る駒は一つだけ。

言い方は悪いが結界寮という脅威が、 街を支配しているようなも

のか。

この構図だからこそ、 並折の秩序は保たれているのだろう。

「でも……」

ぱち、ぱちん。

ようだ。 明朗は更に『歩兵』 を二つ、 隅に置いた。 置く場所に意味は無い

者が、 「世界危険勢力の一角。 並折へ侵入した可能性がある」 7 純血一族 と『死使十三魔』 その関係

胸が、大きく鼓動した。

明朗はどちらの素性も知らない。守野三桜と私の事か?

純血一族と死使十三魔.....」 うちの優秀な結界屋さんが、 把握できない件が増えているんだ」

ンダロスの猟犬』。 国境なき少数異鋭『死使十三魔』、 「そう。 て呼ばれているのは、現在三つだけ。 クロちゃんは知らないかもしれないけど、世界危険勢力っ この三勢力だ」 最多戦力を誇る暗殺集団『ティ 日本の呪詛家系『純血一族』

勿論知っている。 が、ここは黙って相槌だけ打っておく。

明朗は私の耳元に顔を近づける。 あまり声を大きくして言えないけどさ。 ここだけの話

の構成員なんだよ」 結界寮の管理人、 梵さんと林檎さんは、 元『ティンダロスの猟犬』

「冗談でしょ?」

んだってさ」 さあ、 僕も詳しくは知らない。 なんでも前線突撃要員だかに居た

.....

自慢してた」 『無音』と『 瞬撃。 の異名で知られた超A級のプレイヤーだって

· · · · · · · ·

世界的に有名な恐怖神話だろうそれは。有名な話じゃないか。

世界危険勢力『ティンダロスの猟犬』

最上級戦闘員で構成される前線突撃チー

構成員は七人。その全てが異名持ち。

だぞ。 鬼人』 今は解散したこの七人一組は、 蜘蛛』 死神』 『旋律』 暗殺美という言葉まで生んだ連中 『無音』 瞬撃』 『 覇道』

ない。 そのうち二人が、 こんな街に潜んでいたなんて。 冗談としか思え

よね?」 「待って、 明朗、 あんた結界寮はその二人が管理してるって言った

「そうだよ」

地 てしまえば、並折は『ティンダロスの猟犬』 「結界寮は『ティンダロスの猟犬』傘下の組織って事。 「つ、つまりそれって.....」 専用猟地」 の領地。 支配地。 もっと言っ

明朗は将棋盤の中心にあった『歩兵』 の駒を摘まみ上げ、

ぱちん。

裏返して『と金』の駒にした。

るのは、 「だから、 かなりまずい」 純血一族 ゃ 『死使十三魔』 の関係者が並折に侵入す

ぱち、ぱちん。

他の二枚も『と金』 ار

盤の上では三枚の『歩』 が三枚の『と金』になった。

本拠地とする純血一族にとって、 「どの勢力にとっても、 この結界都市は重要な拠点なんだ。 結界寮に占領されている現状はか 日本を

拠点としてこの街はかなり魅力的だろう。 なり不安で不愉快だろう。 死使十三魔にとって、 でも実際は 日本に作る大きな

既にティンダロスの拠点になっている。 ح

そう。 その事実に純血一族が気付いたら、どうなるか」

...... 自国の、 |相を変えるに決まっている。 懐の、 結界都市に敵が陣取っているんだ。

るからね」 だから結界寮は大慌てなのさ。 下手をすれば三つ巴の戦争が始ま

み、三桜が居なくてよかった.....。

結界寮の正体については伏せておくべきだ。 今後も。

「あまり口外するべきじゃないよ、それ.....」

「うん」

というか、あたしに漏らした意味もわかんない」

いやあ、 だってクロちゃんなら大丈夫かなって思ったんだ」

見当がつかない上に、 何を根拠に明朗がそう思ったのかは見当がつかない。 明朗は大きな過ちを犯してしまった。

50 私の素性をよく知りもしないうちに、 あまりにも馴れ馴れ しいか

こいつは大失敗をしでかしたことに気付いていない。

という点だろう。 不幸中の幸いと言えるのは、 私がこの並折を離れるつもりがない

ねえ明朗、死使十三魔の事って知ってる?」

「 うーん。 序列一位から十三位までの少数精鋭ってことくらいしか

「そっか」

私が死使十三魔の関係者だと知ったら。彼はきっと驚くだろう。

にしたら。 天宮柘榴が 序列四位『魔氷の番』直属の部下という事実を耳

血鎖 其の一族、複雑につき

あはははは! 本当に守野三桜は並折へ行ったのかい?」

「御上からの命令だからな......仕方ない」

うっははははは! 君 恥ずかしくないの? ねえ八汰祁

君! 守野八汰祁君!」

黙れ....

世界危険勢力『純血一族』。 その家系の くして 守野家。

守野家の本家は、日本の東北部にある。

今はこの八汰祁がそこで守野家の一切を握り、 管理を任されてい

た。

顔の彫りが深く、 皺と傷の混じっ た初老の男性だ。

彼は、 突如やってきた若者の軽口に苛立っていた。

ねえ! 「うっひ、 恥も知らないとは! うっひいいいい! 守野の老兵はツラの皮が分厚いんだ いやあ守野は所詮、 守野ってことか」

席に座る八汰祁の机越しに、 黒衣の若者はひょうひょうと奇怪な

動きで煽る。

彼が着ているのは真っ黒に染まった白衣。

にはペンが挿され、 黒衣を纏った医者の風貌であった。 よく医者が羽織る白衣の、 彼の首には聴診器が下がっている。 色が黒くなった物だ。その胸ポケット

恥知らずはどちらだ。 八汰祁が汚物を見る目で男を睨んだ。 薄汚い昏黒坂の精神異常者が」

まい?」 貴樣達、 昏黒坂家がしでかした失態。 よもや忘れたわけではある

た件?」 「失態? 失態い? もしかして僕らが死使十三魔と喧嘩しちゃっ

「それ以外に何がある」

ッソジジイ超卑屈!」 んつはあ! おいおいそれってもう十年くらい前の事じゃ ク

「ふざけるな。貴様達が

ボコにぶちのめしたから、 わりましたね」 ハイ僕たちが死使十三魔ちゃんトコの序列五位ちゃ あの戦争が始まりましたね。 んをボォ でももう終

八汰祁は呆れるように息を吐いた。

「よくもまあ、 そんな、 己らにとって都合の良い解釈ができたもの

は返り討ちにされた。 『純血一族』昏黒坂家が序列五位に奇襲をかけ、 一度

やっとのことで五位に手傷を負わせることができたのだ。 その後人数を増やし、裏稼業を掻き集め、 罠を張り、 不意を打ち、

死使十三魔も黙っておらず、報復に出た。

純血一族も昏黒坂家の要請を受け、 他家系が合流 じた。

こうしてティンダロスの猟犬や裏稼業をも巻き込む大規模な抗争

へと発展していったのだ。

真実を隠し続けおった」 五位が先に手を出し、犠牲者が出たと報告しおっ あの時、 貴様らは御上に真実を伝えなかった。 た。 死使十三魔の序列 抗争終盤まで

「だから?」

か知っているのか!」 その所為で、 どれだけの家系が、 どれだけの人員が犠牲になった

「だから、なんなのさ?」

その脚力で、 **昏黒坂の男は片脚を上げると** 木製の机に大きな亀裂が走る。 八汰祁の目の前に振り下ろした。

るところをさ」 者だけ。 ねーなクソジジイ。犠牲だのなんだの言ってるのは生き残った臆病 「 結局、 君だって見ただろ、 僕達や殺さなけりゃあ存在する意味は無いんだよわかって 同じ守野の人間が恍惚の笑みで戦争す

::::

望に忠実で、欲望に正直なんだよ」 君は僕らを恥知らずと言いたいのだろうけど、違うね。 僕らは欲

「 ただの暴走だ」

君の家系の方が問題だ。 なんでもいいよ。それよか、 話を戻そうぜ」 今年の五月に大失態を晒した

<

男は脚を机から下ろし、黒衣を整える。

おっと自己紹介が遅れた。 僕は昏黒坂霧馬。 昏黒坂家の使い

「ああ、既に聞いている」

前に立ったままなの嫌だから椅子が欲しいな」 そう。じゃあ早速本題に入らせてもらいたい んだけど、 その

霧馬は八汰祁の部屋の中を見回す。

しかし 八汰祁が座っている物の他に椅子は見当たらない。

霧馬は机に尻を乗せた。

れなかった。 もはやなにも言う気が起きない八汰祁は、 その態度についても触

「本題とは?」

守野三桜さ。 並折に行ったのは本当なんだよね?」

として送られた」 「本当だ。三桜様は御上の命令で日本へ呼び戻され、 並折への斥候

その責任をとらされて、 五月、関東で守野家の不完全能力者が暴れてしまった事件。 だよね?」

「うむ.....」

坂家の方がもっとクレイジーに暴れている」 ざ海外から守野三桜を 分された。それで終わりじゃないか。 までする程大きな事件だったか? - スに出されただけでしょ。その不完全能力者『守野一郎』も殺処 たけど、たかだか一人の能力者が暴れて『連続殺人鬼』としてニュ 疑問だ。そこがすっごく疑問。 守野家の『当主』を呼び戻した? いやあ僕もさっきは過剰に表現し いやそんな事は無い。 なのにどうして御上はわざわ 僕ら昏黒 そこ

霧馬の指摘に、八汰祁は唸るしかない。

老兵は驚いていた。

まさか昏黒坂の人間だとは予想もしていなかったからだ。 今回の、三桜派遣。 この情報を掴んですぐに噛み付いてきたのが、

· 教えろ守野の翁」

霧馬は低い声色で囁き、 八汰祁の不安を黄昏の舌で舐めてくる。

今 回、 斥候として守野三桜が与えられた仕事は何だい

-::::__

関東で、 同時期にもう一つ大きな出来事が起きたよね。 こちらは

闇に包まれ それも掴んでいたか。 ているが。 それに関連しているんじゃないの?」 そうだ、 一郎の件と同時期に関東で純血ー

族の者が負傷 んっふ、んっふふふふのふー。 している」 やっぱりね。 それで、 守野三桜と

どう関連する?」

られていてな.....」 「負傷した者は、 関西圏の本家へと撤退中だ。 しかし追っ手を付け

霧馬はパチンと指を鳴らした。

の仲介役に、 ナルホド。 三桜が抜擢されたと」 中部圏の結界都市、 並折で一旦匿おうってことか。 そ

八汰祁が首肯する。

馬だったが、昏黒坂の思考はこれらに納得できなかった。 うんうんと頷いて頭の中で一連の繋がりを納得させようとした霧

· それだけじゃねえだろ」

いいや、私が知っているのはそれだけだ」

坂病院へと招待してあげてもいい んつふ、 嘘ついても無駄だよジジイ。 んだ。 脳漿ぶちまけるまで情報を なんなら君をこれから昏黒

引き出してあげるよ」

「やってみろ。知らんものは知らん」

....

舌を打つ霧馬。

指を鳴らし、また舌を打つ。

それを幾度も繰り返す。

(このジジイは本当に知らないな.. . 知らない方がもっと面白い)

当主を並折へ送り込むとは。 うせ御上くらいだろう。 連れ帰るのが第一の任務ってことは、 まだ始まったばかりだ。 (当主の三桜本人にしか伝えていない任務があるのか? んふぅ、まだ焦らなくてよかったみたいだ。 いや待て。 ああ良かった) 並折の場所なんて、掴んでいるのはど 負傷した奴を休ませ、 一度は並折を離れなきゃなら 楽しいニオイは 最終的に わざわざ

前髪をかき上げた霧馬は机から下り、 大きく伸びをした。

「八汰祁サン、君に一つお願いがありまーす」

'なんだ」

くださるようお伝えください」 守野三桜様が、 お戻りになられましたら、 我ら昏黒坂病院へ 報

「断る。と言ったら?」

君らの家系の誰かを拉致して脊髄だけ送り返してやるよ」

口には気を付けた方が良い。 五体満足で帰れなくなるぞ」

八汰祁の鋭い目が、より一層鋭敏さを増す。

老兵の眼光を浴びた若者は肩をすくめた。

そのまま俯き、

背を向け、

一気に勢いよく振り返ると八汰祁の面前へ自分の顔を近づけた。

ははははははは!」 あはははははははははは! んははははははははははははは

守野八汰祁の視線は昏黒坂霧馬の目に吸い込まれてしまった。

霧馬の口が開き、唾液が犬歯から滴る。「この僕がぁ」

ているのかい?」 身体の一部を失った程度でどうにかなるとでも思っているのかい この昏黒の狂人を、 君ごとき老兵がどうこうできるとでも思っ

やってみるか?若造」

歓喜はひとまず飲み込む。 裂けた口から「イヒ」と嬉しそうな声を漏らした霧馬だが、 その

この空間でやり合ったら僕に勝ち目はないだろうね) (白兵戦・肉弾戦なら純血一族最強と言われる『獣人』 の守野家。

さい。 に ませたいんだよなぁ。 になられましたら、 と釘を刺されているからねぇ。 だから僕としても穏便に事を済 ... 望むところ。 オッケェ?」 と言いたいけどさぁ。 我ら昏黒坂病院へ一報くださるようお伝えくだ もう一度言いますよ。 うちの当主からは『 守野三桜様が、 お戻り 穏便

「考えておこう」

僕らの助けが欲しくなる。 けぇ、 別に三桜サマに不利益になるような事はしねぇよ。 そんな気がするのなぁ きっと

「貴様らの助けなど.....」

じゃあ御礼代わりに、 僕らの掴んだ情報を一つあげるよ」

口を閉じ、 八汰祁は首を傾げた。 にこやかな笑みを作っ た霧馬が人差し指を立てる。

昏黒坂家は、 死使十三魔の奇妙な動きを察知している」

「死使十三魔の?」

霧馬の閉じていた口がまた崩れ、顔がゆがむ。

「序列五位が、日本へ入国した」

っ?」

きひ、 きひひひ。 そして、 見失った。 中部圏でねえ!」

お、おいまさか」

並折へ隠れた可能性があると、 僕らは見ている」

「御上に報告したのか?」

するわけねぇだろ、こんな楽し い事。 序列五位だぜ? 昏黒坂の

オモチャは誰にも渡さねえよ」

「..... 私は報告するぞ」

もしそうだとしたらさぁ、 勝手にどうぞ。並折に居るのかはまだ確定していない。 んぶふふ。 やっぱり三桜様は昏黒坂病院 でもさぁ、

に来るべきだよねぇ?」

<....!

5 かな? なんかして!」 想像してごらん、 偶然バッタリ会っちゃったりなんかして。 五位の顔も見た事ないんでしょ? 君らの大事な三桜ちゃ hį 大変だぁ、 隣同士で歩いてたり 今頃どうしているの もしかした

八汰祁の顔が蒼ざめる。

で暮らしちゃっ どうするよっ ? てたりしたらさぁ あんな結界都市の中。 借りた宿。 一つ屋根の下

「三桜様に限って、 男と一つ屋根の下で過ごすことなど有り得ん」

· · · · · · ·

霧馬はつまらなそうに、

そう言ってせせら笑った。 人間、持ってる顔は一つだけじゃないんだよ」

PUNICA【六月の果実】了

PUNICA【あったかい雨の降る夜】1

寒いなあ。

寒いなあ。

う唯一の布生地を両腕で抱いた。 冷たい床の上で丸くなっていた私は、 身に纏ったセーラー服とい

納屋の中。壊れた屋根の隙間からは、 星も月も見えない。

そうか、全部隠れてしまったのか.....。

少しの明かりでもあればと望んだ私の顔に、 隙間から滴った水が

当たる。

ああ、冷たいなあ。

眠る事さえ、できないや。

鼻水が垂れそうになり、すする。

夏の夜とはいえ、やっぱり冷えるなあ。

足が指の先から凍え、両足をすり合わせる。 裸足は辛い。

両手は、股の間に挟んだ。

すん、 ځ すすった鼻に、 私の身体のにおいが紛れ込む。

身体、洗いたいなあ。

でも寒いから、 ちょうど雨が降っているし、 嫌だなあ。 こんな場所で裸になるのも恥ずかしい シャワーの代わりになるかなあ。

Į

こんな場所、

誰も来ないのにね。

ここはどこだろう。

頑張って走って、こんなところに来て、 私は何がしたいのだろう。

か割れている。 足の裏は皮がむけて血が滲んでいる。 たくさん躓いて、 爪はいく

ても居られなくなった。 吹き込む雨が、 やたらと顔に当たるようになったので、 横になっ

前と後ろ。交互に身体を揺らして、 大丈夫。大丈夫。 膝を抱えて、太ももに顔をうずめて、 即席のゆりかご。 静かに目を閉じる。

゙だいじょうぶ、だいじょうぶ.....」

?佐々奈、 ^{ささな} お母さんがいつも味方だからね。 大丈夫、大丈夫

! ?

3体。やっぱり洗おうかなあ。

佐々奈、お風呂が沸いたから早く入りなさい。

はあい。

佐々奈、今度の大会でアンカー走るんだって? お母さん応援に

行くからね。頑張ってね。

うん、絶対に勝つよ。

佐々奈?

なあに、お母さん。

なあに、 お母さん? いいえ佐々奈、 なんでもないのよ」

..... お母さん?

私は瞼を開き、顔を上げた。「佐々奈は、だいじょうぶ」

雨の滴が屋根に反射する小さな小さな音だけが耳に入る。

真っ暗な納屋の中で立ち上がると、 足の裏がコンクリー

擦れて痛かった。

お腹すいたなあ。

空腹を訴えるように、胃がぐうと音を鳴らす。

片手でお腹をさすり、生唾を飲み込んだ。

髪を結んでいたゴムを二つ外し、足元に置く。

私は歯を食い縛り、 意を決してセーラー服とスカー トを脱いだ。

身体が凍える。

土に汚れたそれらも畳んで足元に置く。

同じように下着も。

ついでに洗ってしまおうかとも思ったけど、 他に着る物がないの

で仕方ない。

納屋の戸に手を掛け、横へ引く。

雨によって浮き上がった土埃のにおいが、 私の鼻を通り抜けた。

ひどい降り様だ。 水滴のカーテンで、 遠くが見えない。

そんなシャワーの中へ、私は進む。

緩くなった土に足が若干沈む感覚は、 気持ち悪い。

あの.....こんな姿で、本当にごめんなさい」

私は周囲の墓石へ、 何故か会釈なんかをしていた。

墓場という場所の中に、 裸体で居るのだ。 なんだか墓石に目があ

るようで落ち着かない。

でも、 身体に付いた砂や汚れは一気に流されていく。

はあ.....思い切ってみて良かった。

でも、この後どうしよう。

身体を拭くタオルも無い。

火だって起こしていない。

とはできない。 このままずぶ濡れで納屋の中へ戻っても セー ラー服を着るこ

像できた。 畳んだ衣類を前にして途方に暮れる自分の姿が、 いとも容易く想

くまで小さく丸まっているしかないのだろう。 体が冷えて、さっきよりずっと凍える思いをしながら、 全身が乾

もよく思える。 それでも雨に打たれている今は、 わかっていたことだ。 そんなすぐ先の事でさえどうで

なんだか、もう、本当に。あーあ。

`どうでも.....いいや.....」

雨空を見上げるが、映るのは水滴ばかり。

そんな中。

私の心臓が ドクン、と大きく鼓動した。

界の中で確かに捉えたのだ。 張り付いた前髪が片方の目を覆ってはいたが、 しかし私は狭い視

そこに潜み、 墓地を囲む木々の中 こちらを窺う白い見慣れない衣装を。 よりによって私の近くの木の上だ。

え....

呆然とするしかない。 その白い影は暗闇の中ではひときわ目立ち、 そして私に視認され

「何をしている?」

言われて当たり前の言葉が飛んできた。 男性の声だった。

威圧感のある声。だけど若さ溢れる声色。

何をしている。

そうだ、その言葉は意外でもなんでもない。 こんな場所で雨の中、

素っ裸で立つ私の方がおかしいのだ。 おかしい筈なのだ。

白い影は木から飛び降り、私の正面に立った。

私といえば自分の身体を手なり腕なりで隠すこともせず、未だに

呆然と男の姿を目で追うことしかできずにいた。

おかしいのは、自分。

身を見られた事よりも、 だけど私にとっては裸で雨を浴びる事よりも、 彼の姿に驚きと意識を持っていかれたのだ。 女として男性に全

真つ白な忍者みたいな格好。

ニンジャ。あの忍者である。

頭部を覆面で隠した、忍装束というやつだ。

勿論、彼もずぶ濡れである。

そしてなにより私の驚きと意識を圧倒的に上回った感覚は 恐

怖

ą 暗闇と降雨の中で爛々と輝き、今すぐにでも私を殺そうとしてい 彼の目だ。

此処は墓場。 女 こんな処で、 何をしている?」

彼は再び問うてきた。

何をしていると訊かれても.....。

み、水を.....浴びています」

墓場で水浴び。それで? どこから来た」

完全に怪しまれている。

いや怪しいのは彼も同じだ。

れば繰り返し訊いてくるだろう。 それにどこから来たと言われても答えに困る。 それでも答えなけ

「そこの.....納屋からです.....」

おそるおそる腕を上げ、先程まで雨風をしのいでいた場所を指差

した

彼は納屋を一瞥し、強く息を吐く。

ここで私は恐怖心から解放された。それは、 彼の目から殺気が失

せるどころか生気まで失せそうになったからだ。

ふわりと浮いた足取りでふらつく白い忍者。

彼の身体。その一部分に視線が集中する。

左手に巻かれた包帯が血で滲んでいる。

彼には左手が無かった。

· 女 _

「さ、佐々奈....」

「 何 ?」

「佐々奈といいます」

なんでもいい。 とにかく......其処を貸してもらうぞ..

そう呟くと引きずるような足運びで歩き出した。

私は彼より先に納屋へと駆け、戸を開けた。

この人は怪我をしている。消耗もひどい。

というか、手を失うような重傷は初めて見たからなのか私は少し

混乱していた。

どうしよう。 どうしたらいいのか。

その怪我、病院へ行くべきですよ」

「構うな.....」

しちゃいますし。 でもこのままだと危険です。 消毒しなくちゃ」 なんか感染症とか、 そういうの起こ

「消毒....? ははつ」

ってる場合じゃないでしょうに。この人、 かわかっているのかな。 間違ったことは言ってないと思うんだけど。 自分の身体がどんな状態 小さく笑われた。

しまう。 納屋に入り、彼はずぶ濡れの衣装を着たまま、 身体を貸そうとしても身をよじられ、手を差し出しても弾かれた。 床に腰を下ろして

とにかく私は服を着よう。

濡れた身体は..... スカートをタオル代わりに使う事にした。 背に

腹は代えられない。

ろとしだす。 下着を身に付けた上に、セーラー服だけを着た私は、 再びおろお

この人、放っておいたら死んでしまう。

病院へ行きたくないのかな。 何か理由があるのかな。

それなら私が行くしかない。

た。 を通したところで 眉間に皺をよせ、 気持ち悪さに耐えながら濡れたスカー 納屋の棚にもたれかかった怪我人が声を出し

「女よ」

「だから、さっき名乗ったじゃないですか」

「ああ.....なんだったか」

「佐々奈です! 江本佐々奈!」

彼は一度だけ固まった。

でもそれはほんの一瞬。すぐにまた声を出す。

・ 江本佐々奈。 某の事は構わなくていい」

遣いまで時代が違うらしい。 それがし? ああ、 自分を指し示す言葉か。 格好だけでなく言葉

自信があったわけじゃないけど。 それにしても無愛想極まりない人だ。 私の裸を見たって反応も無かった。 ちょっとへこんだ。 私を見る目は明らかに冷た させ、

な状況ではあんな目はしないと思う。 疲れているからとか、怪我をしているからとか、そういう一時的

こんな目で生きているのかな。そう思うと、彼の機械的な言動に対 うよりもむしろ してこちらは人間的な応答を貫きたくもなる。 今もその視線は私に向けられているけど、 監視カメラのある部屋に居る気分だ。 人に見られていると 普段から

こと言わないでください」 構わざるを得ないですよ。 そんな怪我を見せつけておいて勝手な

うだろう」 「死になどせぬ。 むしろ此処を貸してもらえたおかげで回復へ向か

「な、 娘にしか見えんからな」 墓地の納屋なぞに居るのかも興味は無い。 l I いから構うな。 なにを.....言っているんですか 余計な事だ。貴様がどこから来て、 ! 見たところ、 そんな重傷で!」 ただの家出 何故こん な

言われ、私は言葉を返せなかった。

家出娘.....か。

図星か。ならば、問題なかろう」

そう言って、 彼は座っ たまま目を閉じてしまった。

偉そうに。怪我して疲れて困っていたくせに。

だ。 るな。 別にこんな納屋なんて私の家じゃないもん。 勝手に使えばいいんだ。 忍者みたいな変な格好で紳士気取りす なにが貸してもらう、

「私にだけ名乗らせて.....」

膝を抱えて彼の前に座り、 覆面で隠れた顔の中で見える数少ない

範囲 目元をじっと睨む。

隈ができてる。

何日も寝ていなかったのかな。

結局、この人は何者なんだろう。

片手を無くしてるし、 普通なわけがない。 危険な人だろう。

でも。

目を閉じて肩をゆっくりと上下させる姿は、 この人がとても身近

な存在に思えてしまう。

お母さんも、こんなふうに眠っていたなあ。

響」

「え?」

突然、彼は片目を開き、何かを呟いた。

「織神楽響。某の名だ」

それだけ言うと、彼はまた目を閉ざす。

ふん、と顔を横へ向けてしまった。

やけに冷たい雨の降る、八月の夜。

墓石に囲まれたこの場所で、 私と織神楽響は出会った。

LUNICA【あったかい雨の降る夜】2

日を過ごしている。 囲まれた場所に建てたおかげで蝉しぐれの大合唱に苦しめられる毎 はあり、羽田立荘の庭も緑一色。元の料亭が雰囲気を意識し、 夏の暑さもいよいよ本格化してきた。 陰暦で葉月と呼ばれるだけ

だからといって私が女である事を主張したり利用したりする場面は、 これが驚くほど少ない。 って自分で自分の神経が図太いと表現するほど女を捨ててはいない。 耳栓を買うほど、私は繊細な神経の持ち主じゃない。 ほっとけ。 だからと

ではある。 まあしかし困っているのは精々そのくらいだというのがまだ救い

先月、この羽田立荘にも冷房が設置されたのだ。

ていた。 三本ずつ消費したとして、 所の冷凍庫いっぱいに詰め込まれていたのだ。その数は一人が一日 に溜め込んでおいたアイスキャンディを全て消費してしまった程だ。 そう簡単に無くなる量ではなかった。 料亭を切り盛りしていた台 この宿には人一倍暑さを苦手とする女が住んでおり、 少なくとも三か月は保てそうだと目算し 先月のうち

る ともあれ、 まさか彼女が一時間単位で冷凍庫に足を運ぶとは思わなかっ そんな彼女にしてこの設備。 当然のごとく大絶賛であ

である矢神聖歌。 その守野三桜、 そして真偽は定かでないがこの宿の持ち主

設置された。 それぞれの個室に冷房は設置され、 更に大型の冷房がロビー にも

彼女のお気に入りは、ロビーの大型冷房機

寝転がっては幸せそうに寝息を立てている。家猫かお前は。 畳敷きスペースが定位置となってしまったようで、 つもそこに

なくなり、 私としても下着一枚でごねながら宿の備品を散らかされることが 冷房様万々歳といったところだ。

くなっていた。 そんな三桜だが、 ここ数日は妙に緊張した面持ちをすることが多

時折、ある方向の空を眺めては唸ったりする。

も留めていなかったのは事実。 歓迎するような顔をしなくなった。 していないだろうが、それでも「勝手にしろ」といった具合に気に そして定期的にここへ遊びにやってくる明朗に対し いや歓迎する顔はきっと一度も で も、 あま 1)

すがに「嫌われちゃったかな」と、悲しげに肩を落としていた。 それが、最近はあからさまに表情に出す場面も見られ、 明朗も さ

ある明朗に周囲をうろつかれてはなにかと面倒だからだ。 純血一族という勢力の人間である三桜にとって、 結界寮の住人で 明朗は三桜 の正体を知らないが、こうなるのも必然だろうと思う。

かといって無理矢理突き放せば、怪しまれる。

ないように生きる用心も必要だ。 純血一族なら尚更ね。 韜晦はこの並折に於いて常識なのかもしれないが、それを悟られ

焼いているのかもしれない。 常に傲岸不遜かつ余裕綽々を気取る三桜は、 意外にも明朗に手を

ず各所で厄介 ので頻度は減 明朗も明朗で、 へらへらとしているような奴だから。 な存在となっているだろう事も容易に想像できる。 りつつも彼はやはり、 初対面の際に右ストレー トをぶちこまれ ここへ遊びにやってくるの 三桜だけに留まら

ラス戸と網戸を開けてぼんやりと空を眺めていた。 そして三桜の方はというと 今日も定例に違わず、 ロビーのガ

は曇っている。 今日はさほど暑くもなく、 むしろ少々冷えるぐらいの気温で、

彼女にとって眺める空の模様に拘りはないということか。

えるぞ」 「まったく。 昼間と夜の気温差はなんだ.....この分だと、 今夜も冷

立ったまま呟き、彼女は一つ息を吐いた。

確かに、夏真っ盛りだというのにやけに夜が冷える。

方は少々気になった。 しく知るわけでもないが、それでも土地の気候を考えてもこの冷え 世界を股にかける死使十三魔に属していた私が、日本の四季を詳

気が向いたら並折の気象情報を調べてみるか。

落ち着け、 そんなことを思いつつ私はいつものように大きめの網椅子に腰を 新聞を開いたまま三桜の様子をひそかに窺っていた。

ر ر ا

19 すると三桜の目の前に、 一匹の野良猫が現れた。 迷い込んだらし

野良猫は、三桜の方へ頭を上げて懸命に鳴き声を出している。 うん。 ああ、暑いなあ」

それに対して三桜が相槌を打っている。

なんだ貴様、 つちのえとから来たのか? 随分な遠出だな」

あの三桜が足を折り曲げ、縁側に腰を据えた。

猫は夢中で三桜に声を向ける。

に見えた。 とする猫は見た事がなかった。 まるで世間話が成り立っているよう 私はこんなに人間に対して積極的にコミュニケーションをとろう

言葉を待ってから大きな鳴き声を繰り返す。 三桜は鳴き声に対して表情を変えて応答しているし、 猫は三桜の

だ。 不思議に思う私がおかしいのではないかと錯覚するくらい、 自然

「成程、 後で行ってみなよ。 林の奥にさあ、小さいけど滝があるじゃん。見つけた? ったのかねえ。何、 いやいや別に私様の事を気にする必要はないよ。それはそうと 家族を連れてなぁ。 怪我すんなよ。また顔見せに来いよ」 挨拶? 貴様達、この林に居を移すの? 貴様も大変だな。 つちのえとで何かあ そっか、 ふう

小動物へ一方的に言語を放った後、 ひらひらと軽やかに手を振る

猫は最後に一度大きく鳴き、 庭から出て行った。

......少しだけ三桜が心配になった。

「さて、 ずっと開けてると冷気が逃げるからな って、 どわああ

随分機嫌が良いじゃないの」

息交じりに囁いてやった。 私は伸びをする三桜を立ち上がらせず、 彼女の肩に顎を乗せ、 吐

を相手に会話じみたままごとをし、 常に大胆不敵で意気揚々と偉そうな態度を振りまく女が、 挙句満足そうにしている。

からかうなら、この好機を逃す手は無い。

「ざ、柘榴っ? 居たのか? いつから?」

「いつからって、ずっとよ」

「そうか、私様に何か用か?」

あたしは用が無いとあんたに声を掛けちゃいけないわけ」 「 何よ。 いつもは用なんか無い癖にあたしに絡んでくるあんたが。

「いや別に、そういうわけじゃ.....」

「それとも、あたしが猫の鳴き声を出さないと、 駄目?」

「き、貴様という奴は.....」

野良猫相手に、随分とメルヘンチックなやりとりをしてたわね」

す、数百年と生きた人間は猫語を理解するようになるのだ」

「あんた何歳よ」

「二十三くらい……」

いろいろとおかしいじゃない。 いつもの事だけど」

「最後のは余計だ」

私の顎を肩に乗せたまま、三桜は溜息を吐いた。

..... なんだ? やけにおとなしいじゃないの。

本格的に心配になってきた。

「どうしたのよ三桜らしくない。最近のあんた、 一層変よ」

「一層って言うな」

「猫とじゃれていた事を差し引いても、 变。 毎日外ばつ かり眺めて

さ。毒入りの食べ物でも拾って食べたんじゃないの?」

- 毒.....

やっぱりおかしい。

また遠い目をしている。

· 貴様のその毒を吐く口はなんとかならんのか」

た。 三桜が人差し指で私の唇を撫でてきたので、 おもわず肩が痙攣し

学習せずにまた接触した私が悪いのか。 彼女は飛び退くように離れた私を、これまた色っぽ 過去に一度、指を舐められるという体験をしていたというのに。 迂闊だった。 いきなり何をするんだ気持ち悪い。 こいつが変態だって事をすっかり忘れていた。 まさに猫撫で声じゃないか。 い目で見てくる。

いや、変態が悪い。

であり、 果たして彼女の言う毒とはなんなのか。それは三桜の抱える事情 怯えて警戒する猫のように、 はっきり言って私が首を突っ込むべきではない。 私は三桜と一定の距離を保つ。

学習しろ。私はいつも後悔ばかりしていた筈だ。

問題であって彼女自身が解決するものだ。 私には関係ない。 三桜が誰を待とうが、任務に行き詰まろうが、それは彼女自身の 自問に対する自答は、否だ。 私にも探し物があり、探し人がいる。 そもそも私は他人の事を気にしていられるほど余裕のある立場か?

あない。 羽田立荘に居付いてからひと月が経ってしまった。 のんびりと並折の自然に囲まれた生活を満喫している場合じゃ 私も進展がな

あら? 三桜ちゃんとクロちゃん、 相変わらず仲がいい

ロビーの中に耳触りの良い声色。

が現れた。 聖歌は羽田立荘の中にいるときは、 三桜を警戒し、 彼女の声は気に入っている。 自分の怠惰さを反省していたところに、 常にエプロンを着ている。 なんだか安心する。 矢神聖歌 だ

が今は着ていないという事は、 外出でもするのだろう。

任せきりだったと気付き、自己嫌悪の感が加速した。 そういえばこの一ヶ月.....炊事も洗濯も、 掃除でさえ彼女一人に

言葉を投げ掛けてから、開けっ放しだったガラス戸を閉めた。 お嬢様気質の三桜は気にもしていないようで、 聖歌へ軽い挨拶の

「ん、聖歌。出掛けるのか?」

違和感から彼女が外出するのだと悟って言う。 聖歌のエプロン姿を見慣れていたのは三桜も同じだったらしく、

りのぐうたら生活を送っていた証拠だ。猛省の必要あり。 私と三桜が同じ思考をするということは、どちらも似たり寄った

こんな怠惰な女を二人も抱えて、 名前に劣らぬ女神様か。 それでも文句ひとつ漏らさない

買い物に行ってきますけど、 三桜ちゃ んは何か要る物や用事ある

?

「私様はないなあ」

「クロちゃんは?」

「あたしもない」

守番、 そう、 お願いしますね」 じゃあ夕飯の支度に間に合うよう帰ってきますから。

私もつられて敬礼。何故だ。三桜は右手を挙げてビシリと敬礼。

審な人が訪ねてきても中へ招いちゃ つ明朗君が来るかわからない ので、 駄目ですよ。 鍵は掛けずに行きます。 危ないと感じたら、

すぐに逃げる事」

三桜は左手も挙げて両手で敬礼....ってアホか。

そもそも、この三桜より危なくて不審な奴を探せという方が難題

だ。

たとする。正面からでも、 したとする。 考えてもみろ。 自称凶悪強盗殺人犯が、 裏口からでも、 屋根からでもいい。 この羽田立荘へやっ 侵入 てき

どんな成りゆきを思い描いても結末は一つしか思い浮かばない。 だから聖歌は安心して外出するといい。 両手で敬礼するこのアホな警備員は、 純血一族の末裔 守野三桜が、返り血を浴びて笑っている姿だ。 最強の変態なのだ。

「じゃあ行ってきますね」

いく 三桜のダブル敬礼には微々とも反応せずに聖歌は玄関へと歩いて 彼女は彼女でなかなかの強者だった。

そんな聖歌の後ろ姿に「待った」と言う警備員。

「傘?」のか?」

「ほら」

ラス戸。 三桜が後ろ指でくいくいっと指した先は、 先程閉めたロビー のガ

すごいわ三桜ちゃん! どうしてわかっ たの?」

驚いて手を合わせ、目を丸くする聖歌。

私もさすがに驚いた。

預言者じみた芸を披露した三桜は、 得意気に自分の鼻先を指で叩

「ニオイでわかる」

犬かお前は。

背を見送った私は、 聖歌は傘を持って出掛けて行った。 そのまま隣へ視線を移す。 玄関の戸が閉まるまで彼女の

だ。 そこには当たり前のように両手を挙げて敬礼もどきをし続ける女 なんで私が、 背の高いこいつの醜態を見上げなきゃいかんの

もういいよ警備員さん」

諸手を挙げて、 不審者を歓迎するであります!

歓迎するなよ」

両手を挙げて歓迎するのは、 少なくともそんな物騒なものではな

ſΪ

コホン」 ボキ、 ゴキ。 と、咳払いした三桜は腕を下ろし、 首を左右に倒す。

これが関節の音かと問いたくなるくらい豪快な音だ。

さて柘榴。 貴様にお使いを頼もうじゃないか」

ふざけるな。

もう一度言う。 ふざけるな。

ただろうが。 お前はつい今しがた聖歌に用事はあるかと尋ねられて首を横に振

お前は生粋の馬鹿かよ! 聖歌に頼めばよかったじゃ

私様は私様だ! 馬でも鹿でも犬でも猫でもない!」

なら豚か! 雌豚か!」

それは興奮する!」

やめろやめろやめろ! その返しはやめろ!」

されるかわかったもんじゃない。 目を固く閉じて腕をがむしゃらに振る。 なにこいつ怖い。 誰か私を助ける。 もうこの際、 こんな女と一緒に居たら何を 明朗でもいいから!

柘榴、 貴女に頼みたい事があるんだよ」

おいよせ! さりげなくあたしを貴様呼ばわりから格上げするな

「わかった、 落ち着け。 落ち着くんだ。 ちゃんと理由も説明するか

足音だ。

三桜がこちらに歩いてきている!

ちょっと待って近寄らないで うわあ!」

薄々感付いていたが、これで確信した。 何故だ、 何故私はこんな変態と一つ屋根の下で生活しているんだ。

たらと色目を使っている。逆に明朗にはとことん冷たい。 三桜は 同性を好む女だ。聖歌に対しても、 私に対しても、 ゃ

なった。 そういう冗談だと今まで思っていたが、 もう冗談だとは思い

まさかこんなに耐性がないとは思わなかったよ」

私の顔は、 抜け出そうにも三桜は私の頭を抱えてしまっている。 弾力のある丘に埋まり、 両側から包まれていた。

ほー 5 こうすれば落ち着くだろ」

「もご……もご」

視界は三桜の胸によって覆われてしまい、 呼吸もしづらい。

あ、足.....片足を触られている。

えた。 いこの歯がゆい感覚よ。 るというのは慣れていないからなのか、己の意識とは別に身体が震 三桜の手が、 抵抗しようにもいざという時に思考と身体が連携できていな 私の太腿部に触れている。 他人に自分の肌を触られ

が滑り込み、そのまま手がゆっくりと臀部へ移動し始める。 更に膝の上まであるニーハイソックス。その生地と肌の隙間に指

臀部? 臀部というのは、 つまりお尻って事だ。

る 私の 天宮柘榴のお尻。 ぉੑ お尻.....が、 なななな撫でられて

(ふ、ふざけ.....やがって.....)

荒い吐息はそこでくぐもり、息苦しさに頭がぼんやりしてきた.....。 ので精一杯なのが悔しい。 肩が強張ってされるがままだ。 彼女のタンクトップを握り締める 顔に熱を持っているのがわかる。 なのに三桜の胸はもっと熱

る事に気付く。 少し甘い香りだ。 なかったのに雨が戸を叩く音が聞こえ、 視界を奪われると妙に他の感覚が研ぎ澄まされる。 懸命に取り込む空気には三桜の香りが混じっている。 外の雨が激しさを増して 気にもして

柘榴はあまりこういう事に慣れていないんだな」

. や、め.....」

。 スカートの中に手を入れられ、最後の布を侵略

おっと」 されそうになったところで、三桜の手は止まった。

箱入り娘ってところかい? 可愛いね」

屈辱だ。

もはや呻き声しか出ない。

じゃあ改めて言うからな。 頼みたいこととは、 聖歌の件だ」

もご.....?」

苦しさが増し、 発した言葉すら、 私は助けを求めるように彼女の背に腕を回す。 でかい胸に埋まった。

矢神聖歌を 尾行して欲しい」

なんだって?

ぷはっ」 ここで三桜は私の頭を抱えていた腕の力を緩めた。

顔を上げると当然ながら至近距離に三桜の顔があった。

尾行? Ļ ここで三桜の片手がまだ私のお尻に触れている事に気付き、 あたしが? どうして

それを引きはがす。 「どうして聖歌を?」

と三桜は抱き合ったままの状態だ。疑問と興味が先行しているために質問を優先しているが、 私

まあいい。それよりも三桜の発言が問題だ。

「 柘榴。 と言っていたか、覚えているか?」 貴様と私様は六月、 聖歌に出会ったな。 そこで彼女はなん

「と、言われても.....」

妹の墓参りに行っていた。 と、そう言っていたよな」

ああ。言っていた。

これ腹立つわ。 私は素直に首肯する。 Ļ ぷよん、 と顔が弾力に跳ね返される。

どうしてあの日に行ったのかも、聖歌は言っ ていたよな」

「うん。あの日はちょうど、妹の命日だって」

命日だから墓参りに行った。 命日ってのは、 一年に一度だよな」

「そうよ」

自分の額を私の額に当てて、囁いた。すん、と一度鼻に空気を通した彼女は、

......聖歌から、墓土の臭いがした」

はかつちの.....におい?

私は聖歌の近くでそんなにおいを感じた事はない。

た清潔な香りを纏っている。 むしろ香水も化粧もほとんど使わない彼女自身は、 石鹸が混じっ

そんな彼女と、 墓の土など、 どうやっても結び付かないだろう。

いつ嗅いだの?」

「ずっとだ」

「.....ずっと?」

の墓参りへ行っていたと説明されたから納得していた。 いを連れている」 くら日を経ても、 そう、ずっと。 まるで染み付いているかのように聖歌は墓土の臭 出会った日から、 今 日 さっきまで。 だけど、

感じたの?」 「さっきの雨を予知したように、 あんたの異常に敏感な嗅覚がそう

やつが居るかわからない。 「まあね。私様はこれでも純血一族の人間。 だからあまり尾行には向かないんだ」 どこに私様の顔を知る

そうか。なるほど。

この三桜も、一応は矢神聖歌を疑って過ごしていたんだ。

私よりも確信性に富んだ理由と、彼女なりのアプローチで、

の怪しい部分を明確にしたのだ。

疑いつつも怪しい部分など見つけられなかった私とは大違いだな。

るよ」 わかった。三桜、 あんたの言う通りちょっと聖歌の後を尾けてみ

「うん、 の《ひのえと》 頼む。 駅で降りて買い物をする筈だ。 聖歌はいつも《きのえと》 駅で路面電車に乗り、 商店街があるからね」

つちのえと》だ。 商店街があるとかいう《ひのえと》で、 此処が《きのえと》だから、路面電車が次に停車するのは、 ええと。 並折の地理は、 たしか明朗に教えてもらったぞ。 その次が 墓地のある《 その

よし。予習は大丈夫だ。

初めてだ。 約一ヶ月間、 ほとんど引きこもっていたから路面電車に乗るのも

ちなみに引きこもっていたのは、 明朗の忠告があったからだ。 き

掛かりとなる場所はあの駅しかない。 のえと駅へは定期的に通っている。 あそこで鎖黒を失ったのだ。 手

「早速、聖歌の後を追うわ」

- ん.... む

だ。 私が頼みごとを承諾したというのに、 何故だか三桜は浮かない顔

私様としては、 そう言いながら、 この続きをしたいところだけど」 私のお尻を再び触り出した。

「続きがあるの?」

うわー初々しいなあ可愛いなあ。 変態の言動にだんだん慣れてきた自分が嫌だ。 私様は恋心を抱きそうだ」

じゃあ柘榴、私様の部屋へうごぉ!」

ボディブローを打ち込んだ。

「早く聖歌を追いかけないといけないんだから。 あんたが言い出し

たことでしょうに」

「そ、そうだったね.....

「いってきまーす」

`いってらっしゃい。傘を持っていくんだぞ」

私は愛想笑いとわかる愛想笑いを顔に張り付け、 三桜に手を振っ

た。

掛けて行った天宮柘榴。 羽田立荘に常備されている番傘を開き、 勢いを増す雨のなかを出

を見送った守野三桜は、玄関からロビーへと戻った。 ウェーブがかったセミロングの髪とスカートを揺らすその後ろ姿

三桜の目に先程まで読まれていた新聞が映る。

歯の隙間に走らせる。 た愛想笑いを剥がした彼女は、 ここで柘榴と違って愛想笑いだとわからぬよう顔に張り付けてい それを手に取ると、おもむろに天気図なんかを目の前に広げた。 「シィ」と鋭い吐息を噛み合わせた

......この雨天。ただの雨じゃないな」

彼女は渋い顔で、定位置である畳敷きのスペースにあぐらをかく。

紙が寄越されそうだ) は依然として上がらない。 (響との合流予定日から、 そろそろ織神楽家と、 かなり経ってしまって いる。 御上から催促の手 合図の狼煙

三桜は与えられた情報の一部を思い出していた。

織神楽響。

務を遂行すべく関西から関東へ出向いていた。 く多くの部下を引き連れてだ。 彼は純血一族織神楽家の当主として、 今年の五月、 無論 彼一人ではな 家系最重要任

毒爪の織神楽。

その そう呼ばれる彼らが必死で追い求めた人間がそこに居たからだ。 人間は、 《解毒》 の爪を持つ者だった。

人で織神楽を抜けたとか) (解毒爪の能力者。 幼い子だったと聞いている。 なんでも母親と二

在する。 純血一族では身内同士で結婚し、 子孫を増やすという鉄の掟が存

ていた。 その掟を破った母親は、 一般人の男性と結婚し、 娘と共に暮らし

害された。 結果的に涼子という名の母親は、無論、それは御法度である。 夫ともども織神楽家によって殺

残ったのは解毒爪を持つ、 目的の娘だけ。

しかし

(ふふ)

あろうことか織神楽家は少女の回収に失敗したのだ。

ったらないね。 (同じ当主として 挙 句、 この私様がズタボロにされた響の撤退援助と 御上の式神として、 響の無様さは恥ずかしい

は

織神楽家は十分な戦力を準備して任務に赴いた筈だ。

家へと帰還してしまった。 追っ手まで付けられて命からがら逃げ帰る途中。 それが結果を見てみれば 当主の響は重傷を負わされ、 部下達はすでに本 しかも

よな。 だろう) 何があった? あの馬鹿、 どうせ慢心に苛まれ予期しない事態に遭遇したん 傷を負ってから部下を先に帰還させるわけがない

された事由。 失敗した原因。 それは本人に問うしかない。 織神楽響という純血一族屈指の猛者が重傷を負わ

帰還した部下からの情報では、 死使十三魔の名が挙がっていた。

黒坂か九条か、 喰われるのも時間の問題だな。果たして腹を満たすのは、 の式神という雑魚の分際でいきがるからだ。この分だと織神楽家が (序列入りした奴と交戦した、と考えるのが妥当だろうねえ。 はたまた私様達 守野か) 日向か昏

つ たのか、そちらへ顔を向けて目を細めた。 舌なめずりをした彼女だったが、ガラス戸を叩く雨の音が気にな

に (それにしても まるで抑圧された感情に、 圧迫された涙のよう

三桜の鼻は、そう感じ取る。まだまだこの雨は勢いを増すだろう。

ない。 っ手を付けられているとは聞いているがニオイが違う。 (こんな降りかたをするこの天気は一体。 殺意や執念もない。 見たまんまだ) 確かに水を操る厄介な追 呪詛を感じ

グルル、と三桜の喉が鳴った。

いな) (響の奴 もう一つ、 厄介なもんを引き連れてきたんじゃあるま

PUNICA【あったかい雨の降る夜】3

改めて主張するが私は他人を完全には信用しない。

番姉さんであろうと、だ。

ひとつひとつに疑いを持っている。 だから当然ながら三桜を信じきっ ているわけでもなく、 その言動

行する必要はないのだ。 れが真実かどうかはこれから確かめればよいことなのだが、 聖歌が墓土の臭いを纏っているから尾行しろと三桜は言っ 私が尾 た。 そ

だという理由で私に行かせた。 そりゃ あ三桜の顔を知る者に遭遇し たら面倒になるだろうとは思う。 三桜は、自分が純血一族の人間だからあまり出歩かない方が得策

しかし三桜はそこまで迂闊な女だろうか?

できないとは思えない。 の目で純血一族たる姿を見ていないわけだが、それは置いておくと して。純血一族のような裏世界を跋扈する人間が、尾行もまともに 実のところ彼女が純血一族であるという事を理解しつつも実際こ

ほどの実力を備えているかは知らない。 いはできそうなものだ。 守野三桜という女が守野家の中でどんな地位に就いており、 それを踏まえても尾行くら

る。 ようするに三桜は私に行かせたい理由があると、 私は推察して

彼女は羽田立荘の中で何かをしようとしている。 いに有り得るのだ。 私が外出したことで羽田立荘には三桜が一人だけ残ることになる。 そんな予想も、

矢神聖歌と守野三桜。

だ。 どちらも何かを腹に秘めている。 その間で私が浮遊している状態

なぜなら私は今のところ二人の事情に興味がないからだ。

聖歌 及ぼしかねない奇妙な綻びを出した聖歌の方が気になる。 純血一族としての目的があるのに対し、 各々なにかを企んでいたとして、 いうことしかわからないのだ。 しかしながら三桜の方は純血一族の事情だろうと予測できるが、 の方は全く以て予測できない。 私に何か影響があるとは思えない。 どちらかというと、 聖歌は並折の住人であると 私に影響を 三桜には

並折に居るか? いとも容易く羽田立荘を私達に提供した彼女。 そう疑いを持っていた時に現れた一つの綻び。 そんな親切な人が、

だから私は素直に三桜の言葉に従った。

その後ろで気付かれぬよう距離を置いて歩いていた。 そして今 矢神聖歌はきのえと駅へ向かって歩いており、 私は

らわせられるが、 赤い番傘は大きく、若干目立つ。 用心するべきだろう。 激し い雨で音と視界と気配は紛

歩行速度が遅い)

後ろと隣を歩いた。 私は六月に聖歌に先導されて初めて羽田立へ向かっ 彼女の歩行速度は記憶している。 た際、 彼女の

(尾行し辛い。 いつでも後方を振り返られる速度だ)

後方だけではない。 案の定、 聖歌は道を曲がる際に高確率で後方に視線を送ってきた。 度々周囲を見回している。

へ行くだけの 意識的にではなく不安感に因る無意識の挙動だろう。 人間がする挙動ではない。 ただ買い

これは、 口かな)

きのえと駅に着くと、 彼女は慣れた足取りできっぷ売場へ赴き、

きっぷを購入。

ここで問題が発生した。

聖歌は電車を待つ間、改札口へ入らずにそのすぐ近くに位置取って もない。だから路面電車用の発券機は二台しか設置されていない。 しまったのだ。 きのえと駅は多くの路線が停車する駅だが、 それほど大きな駅で

これでは私がきっぷを買えない。

にある。 あるが、 こういう時は改札口に顔でも出して駅員から直接購入する方法も 残念ながらきっぷ売り場は改札口のすぐ隣。 聖歌の視界内

きっぷを買っての乗車は無理か。

ことなく聖歌と同乗できるわけがない。 いや待て。 そもそも並折を走る路面電車は一両だ。 そこにばれる

私はタクシー乗り場へ向かった。

ひのえと駅に先回りすればよいだけの話じゃないか。

箪笥と化粧台、 羽田立荘の玄関に鍵を掛けた守野三桜は、 押し入れの中には畳んだ布団があるだけ。 矢神聖歌の部屋に居た。 移り住

んで一ヶ月とはいえ、 飾らない質素な部屋だった。

その中へ足を踏み入れ、 まずは部屋の中心に立つ。 三桜は衣服の散らばった自分の部屋と比べて苦笑する。

きるほどのものだ。 周囲を見回す彼女の視力は繊維と繊維の隙間ですら確実に認識で

そう。 守野三桜は、 天宮柘榴に教えた墓土の臭いとは別

に もう一つ矢神聖歌を怪しむ点を見つけていた。

はない。 通常生活を送る上で繊維を認識したところで特に気にするもので 小さな奇異を容易に見つけてしまう。 しかし日常的にそういったものをも視認できてしまう三桜

それは その奇異もまた、 やはり矢神聖歌の身体に見られたものだっ た。

たか」 あっ た。 バイオレット.....モノフィラメント。 やっぱり医療用だ

れたパッケージだった。 化粧台の引き出しから三桜が手に取ったものは、 医療用の密封さ

である。 われるものだ。 モノフィラメント。それは手術の際に縫合用として用いられる糸 織物や衣類、テニスラケットのガットまで様々な用途に使

療用縫合糸だと気付いた。 しても怪しむ類の糸ではない。 三桜はこれの切れた一本を、 しかし 聖歌の衣服に見つけた。 三桜は、 それがすぐに医 見つけたと

大抵は色の付いた縫合糸を用いる。 バイオレット。 糸の色である。縫合の際に視認しやすくするため、

用いられている事まで、感触と視覚だけで気付いた。 そして糸を構成する芯糸と側糸。 その中に非吸収系のナイロンが

結節の緩みを防ぐ為に三重で結ぶのだ。 外科ではそういった合成糸、 ちぎれ落ちたもので、 モノフィラメントは拡張力はあるが、結節保持力に不安がある。 決め手となったのは、拾った糸の部分。 ただしそれだけではまだ疑うまでに至らない。 いわゆる三重結びという結び目があったのだ。 特にナイロン糸を縫合糸に用いる際は 三桜が拾った糸は単純に

そこで三桜は注意深く聖歌を観察し続けた。 するとやは り聖歌が度々モノフィラメントの欠片を衣服のどこか

に付け、 しかも日を追う毎にその頻度が増していることに気付いた。

か」と尋ねてみたことがある。 三桜は少し前に、 一度さりげなく聖歌に「 外科のある病院はどこ

は医者にかかったことがありませんので」などという言葉も引き出 した。 病院の場所を教える返答はあったものの、 \neg 私も並折に来てから

更には一緒に風呂に入ろうと誘ってみたこともある。

風呂なのだからいいじゃないか」と、 これは拒否され、天宮柘榴から冷たい視線を向けられた。 ごねたのを三桜はよく覚えて 「 広 い

べてみようなどと思い立ったわけである。 そういった不可解な事情が重なり、 ついに今日、 聖歌の部屋を調

(縫合が必要なほどの怪我をしたとは思っていなかったが.....これ

引き出しを開けたまま、三桜は固まっていた。

とは、さすがに思わなかったからだ。 一つの引き出しいっぱいに医療用縫合糸のパッケージが入っ いる

合糸なんていずれ不要になるものじゃないか」 聖 歌。 お前は一体なんなんだ ? 傷を負っていたとしても縫

立てに目を向けた。 首を傾げて引き出しを閉じた三桜は、 台の上に置いてあった写真

三桜は手に取ってみた。 いてはあるが、 それは伏せられていて写真が見えない。

旅行の写真かねえ。 ふむ。 も随分古いな」 だいぶ前に撮ったものだな。 父親と、 母親と。 これが聖歌だね。 持っている荷物からして家族 それにして

る 写真は駅前で撮られたものだった。三人とも笑顔で身を寄せてい

たく同じものだ。 立っている。 駅名は これはきのえと駅前でも見た顔の無い子供の像とまっ 『ひのえと駅』とあった。三人の背景には一体の像も

だろう。 きのえと駅だけでなく他の駅前にも同じものが建てられているの

どうやら聖歌は昔、並折を訪れたことがあるようだ。

かね あいつの家庭に興味はないや。さて次は倉庫でも漁ってみる

て少し舌で唇を舐め、 写真を置き、部屋から去ろうとしたところで 「うん?」と声を漏らした。 三桜は足を止め

聖歌。たしか妹が居たはずだよな?」

ひのえと駅に路面電車が到着しても、 聖歌は降りてこなかった。

ひのえとは駅の正面にすぐ商店街の入り口があり、 私は駅から出

てくる乗客が見える場所で傘をさして立っ ていた。

えとで降りなかったのだ。 出てくる人は一人残らず確認したから、 間違いない。 聖歌は ひ

歌がきっぷを買う時点ではどこへ行くのかわからなかったし。 という事だろうか。乗車賃はどこまで行こうと一律同額なので、 ここで降りなかったのなら、やはりつちのえとまで乗っていっ

しかもこういう時に限っ てタクシー が無い !

う事実を確かめられたわけで十分なのだが。 てこなければ、それはそれで彼女がひのえと駅に降りなかったとい っさと清算して私を降ろして行っちまいやがった。 万死に値する。 の運転手はひどく無愛想で、少し待っていてくれと言う間もなくさ を捕まえれば間に合うと思う。私を乗せてここまで来たタクシー このままひのえと駅に張り付いて、 並折の路面電車は速度が思ったよりゆっくりなので急いでタクシ すぐにつちのえと駅へ先回りしなければならないというのに 次の電車も待って聖歌が降り

できれば彼女がどこへ向かったのかも確かめたい。

雨天の中じっと待ち続けたからなのか、 身体が冷える。

特に脚。 スカートは風通しが良すぎる.....。

駅の前に気になるものを見つけた。 肩を抱きながらタクシーを捕まえられそうな場所を探していると、

(カオナシの像 ! ひのえと駅にもあったんだ)

た。 しくならなけ それでもきのえと駅で見た顔の無い子供の像が、ここでも見られ 確かに此処は初めてくる場所だし、 しかしきのえと駅の物とは様子が違い、 嬉しくなってもっと近くで見ようと移動しながら、どうして嬉 人すら見当たらない れば いけない Ų のかと自分の感情に野次を飛ばした。 雨は容赦なく降って気温をさがらせ 知人も居ないし、それどこ 少し首を傾げる。 3

無理はないだろう。 ている。 見覚えがあるだけの像に嬉しくなるくらい陰鬱になるのも

孤独には慣れている。 こんな孤独はむしろ楽しい。

けた。 りだったのだ。 あの孤独に比べたら他の孤独など些細なものだ。 くらいの寂しさで動揺するような私ではない。 薄暗い部屋で、眠り続ける番姉さんと鎖黒を守り続 十年も私は独

もしなくていい。 も私の意思のまま。 私はこの並折に来て、やっと自由を得られたのだ。 食事だって楽しい。何もしたくないと思えば何 寝起きするの

私は天宮柘榴だ。もうグレナデンではない。

状況を満喫したい。 長く続くとは思えないけれど、今はこの、 私の意思で私が動ける

だから私の意思で招いた孤独は、 喜んで受け入れよう。

あれ? クロちゃんじゃないか!」

そこには透明のビニー 像を眺めていた私は、 ル傘を高々と掲げて手を振る明朗の姿があ 掛けられた声に驚いて振り向いた。

「明朗つ?」

奇遇だねクロちゃん! まさかひのえとで会うなんて!」

手で覆う。 おもわず顔が綻んでしまい、 近付いてくる明朗に悟られまいと片

うん、ちょっと用事があって。明朗は?」

て得意げな笑みを見せた。 ト帽を深く被っている。 目を泳がせながら問うと、 今日の彼は缶バッ 彼は「ふふん」 ヂがいくつ

も付いた

二 と口の片端を持ち上げ

僕は結界寮の仕事中。 つまり任務。 ミッション!」

ヘーそう。 どんな?」

寮が勧告を出しているくらいなんだ」 な任務でね、危ないからひのえとの住人は屋外へ出ないように結界 「僕に任されたのは人探しなんだけどね.....。 でもこれがまた大き

「それは大掛かりね」

族の当主なんて大物が潜んでいるんだ。 されちゃうよ 「だからクロちゃんも、 早いとこ帰った方が良いよ。 鉢合ったりしたら一瞬で殺 なにせ純血ー

純血一族 0 当主?

当主?

それは、 つまり、 あの《式神十二式》と呼ばれる奴らのことか?

純血一族の当主だなんて..... 一大事じゃない

そう! だから処理しないといけないんだ」

つまり、 殺すって事?

そうなるね。 戦闘狂の梵さんは大張り切りさ」

大張り切りって、 そんな馬鹿な。

以前明朗から聞いた話では、 あの梵という女性はティンダロスの

兀戦闘員。 無音の異名持ちだそうだが。

それでも無謀の域を出ない。

ティンダロスの猟犬は、 純血一族と死使十三魔とでは質が異なる

組織だ。

たとえティ ンダロスの猟犬という暗殺組織で名を馳せていたとし

ても あの組織に呪詛能力者は居ない。 奴らは道具と技術を駆使

する 人間なのだ。

化け物。 対する純血一族は、 血に呪詛を宿し超常の力に磨きをかけた

呪詛能力者を相手に..... 大丈夫なの?」

れた純血一族の間者を、彼女と林檎さんは何人も葬っている」にするのはこれが初めてじゃない。今までだって並折の調査に 梵さんは強いからね、 きっと大丈夫だよ。それに純血一族を相手 , 今までだって並折の調査に送ら

対呪詛能力者戦闘には慣れている、 ということか。

いやしかし今回はそう簡単にいかないだろう。 式神十二式 つ

まり当主が標的なんだろう?

式神の力を他の純血一族と一緒にするべきではない。

純血一族は、十三の家系が集まって成り立つ組織の

そして純血一族は、《統一家系》と呼ばれる一つの家系によって

十二の家系が位置しているということだ。 束ねられている。つまり構成としては頂点に君臨する家系の下に、

各家系には当主という長が存在する。

実力主義の純血一族だ。長は年功序列で決まるわけがなく、 やは

り実力。

各家系の、十二人の当主。

統一家系を守護する十二の鬼神として、 彼らは《式神十二式》 ع

呼ばれている。

そこからなぞったとも言われているほどだ。 その実力は計り知れず、 新進気鋭の死使十三魔が、 その組織名を

うな、 大物も大物。 遥か高みの存在だ。 本拠地であるこの国でなければほとんど縁のない ょ

死使十三魔の序列入りした者でさえ……太刀打ちできるかどうか

:

ある。 それに死使十三魔は式神によって甚大な被害を被った過去だって

例を挙げるなら

り序列四位、魔氷の直下部隊に在籍していた頃だ。 私がグレナデンというコードネームで死使十三魔に居た頃。 つま

ような気分屋まで。とにかく異色の性格が揃っている。 あまり活発に動けない人や、動きたがらない人、行方すら掴めない 々な者が居る。 魔氷こと番姉さんのように膨大な力を備えながらも 死使十三魔は少数精鋭の組織とはいえ、序列入りした人間には様

だから、 手駒となる部隊を抱えている者もちらほら居るというわ

もうかれこれ七、八年前になるか。

での面倒くさがりで、個人の部隊作って任務をさせていた。 序列十二位に《魔盾》の異名を持つ者が居た。そいつは異常なま

いる。 も魔盾まで殺されてしまった。十二位の席には今は違う者が就いて その直下部隊が、式神に壊滅させられた事件があったのだ。 しか

ている。 たしかその時の相手は.....純血一族、 九条家の当主だったと聞 61

のだから。 死使十三魔の序列入りはヤワではない。 魔盾も一騎当千の実力者だったのだ。 少数精鋭と呼ばれてい る

三魔とて重要警戒対象。 それを駆逐してしまっ た九条家の当主 式神一人の力は死使十

けど。 のか。 ねえ明朗、 そのくらいあたしだって知ってる」 もっと慎重になるべきよ。 あたしなんかが口を出すことじゃないかもし 純血一族の当主がどれほど危険

明朗は私の言葉に素直にうなずいた。油断すると、梵は命を落とすことになる。

険性は熟知している。 言える」 わかっているさ。 梵さん含め結界寮は、 だからこそ、 手負いの今を逃す手はないとも 式神と呼ばれる彼らの危

「手負い.....? 手負いなの?」

状態で並折に入り込んだらしい」 態ならこちらも手出しを躊躇するけど、どうやらひどい傷を負った 神楽響! 「そう。 - 白毒雷なんて仇名で呼ばれる猛毒使いの男だ。万全の状毒爪家系、織神楽。その当主にして式神十二式の一角、織

から」 世界危険勢力の重要戦力だよ彼は。以前の話と今回の件は別物だよ。 なにせ織神楽響は 折や結界寮を探ろうとしているわけじゃないのよね? 「何を言ってるのさクロちゃん。並折を探ろうがそうでなかろうが いるだけでしょ。 どうして躍起になって殺そうと 「ひどい傷って。それじゃあその、織神楽響という式神は、 うちの結界屋さんが並折に招いてあげたのだ ただ逃げて 別に 並

「じゃあ式神をわざと並折に?」

も並折 る前に結界屋さんが隔離したんだ。 「そういうこと。 の堅固さを世界に知らしめる良い 追っ手を付けられていたらしいから、 追っ手の人には悪いけど、 、機会ってわけ」 先を越され これ

その事実は絶大な効果をもたらす宣伝となるだろう。 死使十三魔も一層手を出し辛くなる。 血一族とて報復に出ようにも、 血一族の当主を並折が仕留めた。 未だ並折は謎に包まれた領域。

み止まるようになる。

かも式神まで仕留められたとあっては報復どころか調査派遣すら

固たる地盤を築いてしまうわけだ。 並折は結界寮の ティンダロスの領地としてこれまで以上に確

いうことか。 織神楽響は、 勢力同士の間合いを左右する、 重要な立場にあると

と逃走の報せは、 そして結界屋が細かく情報を掴めていたように、 既に出回っていると考えるのが妥当。 織神楽響の負傷

ならば各勢力は、 もうなんらかの行動に出ている筈

動き方は、わかりやすい。

盤強化。 してでも生還させたいだろう。 死使十三魔はいちはやく仕留めたいだろうし、 ティンダロスは先述の通り並折の地 純血一族はなんと

読めてきたぞ。

結界 追っ手を付けたのは死使十三魔で間違いないだろう。 結界屋によって隔離されて失敗に終わりそうだが。 今は並折の

そして純血一族が打った手は そう。

守野三桜だ。

あいつは、この為に並折へ送られたのだ。

ようやく三桜の目的が読めた。

やってきたのだ。 守野三桜は、 織神楽響を回収し 生還させる為に、 この並折へ

合流できないからだったのか。 三桜のやつ、ここ最近落ち着かない様子だったのは響となかなか 共有する合図でもあったのだろう。

これは面白い。

実に面白い。

この重大局面が揺らぎかねないわけだ。 三桜にこの非常事態を教えてやるか、 それとも黙っているかで、

う。 失敗。 このまま黙っておいて織神楽響が仕留められたなら、三桜は任務 こんな重要な任務なんだ。彼女はただでは済まされないだろ

変えて飛び出すだろうし、もしかしたら並折を血の海に変える大暴 れを見せてくれるかもしれない。 結界寮の正体ごと教えてやればすぐに彼女は羽田立荘から血相を

けれど。 勢力のいざこざなんか興味はない。 知ったこっちゃない。

これは、面白いね。

クロちゃん?」

おっと、少し顔に出てたかな。

きだよ。羽田立荘まで送っていこうか?」 ま、そういうことだから。 用事が急ぎじゃないなら日を改めるべ

入り込ませたのは結界寮なのに、見失ったの?」 御忠告ありがとう、大丈夫よ一人で帰れる。 それにしても並折に

えとで感知したのを最後に行方が掴めなくなったらしい」 まあ。 あちらも一筋縄じゃいかないから。 結界屋さんもひの

「だからひのえとに明朗が居たってことね」

僕だけじゃ ŕ 結界屋さんと管理人二人以外はみんな出動し

によ じゃ 結界寮の住人だって危険な人が居るんだ」 ぁ 僕はもう行くよ。 くれぐれも寄り道なんてしてはいけな

「だろうね。気を付けるよ」

「.....やっぱり、送っていこうか?」

言い、明朗の肩を叩く。思ったよりがっしりとした体格だった。 私を見つめて話をし続けていた。 私はもう一度「大丈夫だから」 心から気を配ってくれているのだろう。 明朗はじっと澄んだ目で ع

のを思い出して「あ、ちょっと待って」と呼び止めた。 渋々この場を去ろうと背を向けた彼に、 私は聞きたい事があった

ナシの像を叩いて見せる。 首を傾げてこちらを振り返る明朗に、 私はすぐ近くにあったカオ

子供を正面から抱こうとしている女性の像」 この像、 きのえと駅の物と違うよね。 顔の無い子供と この、

居る。子供が両手を挙げて女性に抱きつこうとしている構図だ。 かも子供とは違い、女性には微笑む顔がちゃんとある。 そう。 明朗は「ああ」と片手を腰に当てて傘を回した。 きのえと駅は子供の像だけだったのだが、 此処の像は二体

加えられたそうだよ」 寂しそうだという意見が多く出たみたいでね。 元々は一体の子供だけだったんだよ。 「そういえばそうだね、 此処 ひのえと駅の像も他の駅の像も、 でも街の住人から、 随分前に女性の像が なんだか

随分前って、どのくらい?」

かれこれ四十年くらい前になるんじゃない かなあ」

由来について知らなかったということだろう。 不要だろうに..... まあ、 カオナシの伝奇になぞって建てられたものだとしたらこの女性は 女性の像もやたら古いと思ったが、 役所の人間も街の人間も、 そんなに昔からあったのか。 この像が建った

寂しそう ねえ。

だ。 て勝手に蛇足を加えるとは。 の無い子供の像がどんな感情を抱いているのか、 四十年前の人間も随分と身勝手なもん 勝手に想像し

クロちゃ 「色々とありがとう明朗。 ^ ^ ` 構わないよ! んに並折を案内してあげたいし」 また何か訊きたい事があったら訊いてよ。 いつも気に掛けてくれて、 感謝してるよ」

「うん。お願いする」

じや、 ばいばーい、また羽田立荘に顔を出すよー

手を振りながら見つめ続けた。 手を振り、 雨などものともせず駆けてゆく彼の背中を、 私もまた

持たないと言っていたけれど。 傍に居てくれると 彼は本当によくしてくれる。結界寮の住人の中では、 って。 でもなんとなくわかる気がする。

何を考えているのか私は。

冷静になってみるとまた顔が綻んでいるじゃ ない か

(ああもう! どういうことだこれは!)

そのままカオナシと女性の像に触れてみた。ぱんぱん、と片手で頬を叩き、深呼吸。

髪がとても長い。 この女性の像、 体誰なんだろう。 若干屈んでいて、 髪が地面に付い てしまいそう

だ。

これではまるで ゆったりとして、 しかも左右に分けられた前髪。 飾り気のないドレス。 線のように細い目。

(番姉さんみたいだ....)

よく似ている。

そう考えるとこの女性像が番姉さんにしか思えなくなった。

でもこの像は……後から付けられた物なのよね」

カオナシの伝奇には 余計な物。

綺麗な人だけど、あってはならない像なのよね」 ならば破壊すれば良い」

(つ?)

私の独り言は、独り言ではなくなった。突如として聞こえた、予期せぬ応答。

ſΪ と話す間も人が皆無ということはなかった。 さすがに動揺を隠しきれず周囲を見回すが、 人通りは少なかったが、それでもまばらに確認できた筈だ。 それどころか私の視界内には人が完全に消えてしまっていた。 なに?」 私の近くに人影はな 明朗

続いていた。 それなのに、 私の耳には至近距離で放っているであろう男の声が

ただし に反して生み出した物。 不要な物、 余計な物、 そういった物は排除されてしかるべきだ。 邪魔な物、 それらは総じて少数が多数の意

7

コツン。と、私の番傘が何かに当たった。

傘をどけてみると、頭の上に足があった。

白い脚。

白い着物。

白い覆面。

その男は雨に打たれながら女性像の上に座っていた。

ただし 少数が多数に勝る場合は、 その限りではない」

「誰だ!」

私は咄嗟に像から離れ、 傘を投げ捨てて身構えた。

気配がなかった!

私は弱いが、 気配を感じ取ることには自信がある!

これだけ人の居ない場所だ、 微々たる気配でも容易に感じ取るこ

とができた筈だ!

それなのにこいつには.....気付かなかった。

只者じゃない。 纏っている衣服は忍装束というやつか?

な

ふむ。

純血

一族の者

と言って、

貴様は理解できるか?」

最悪だ。

者 できるようだな。 名を 良し。 某は純血一族の織神楽家で当主を務める

最悪だ。

最悪だ最悪だ最悪だ。

「織神楽響という」

(し、式神.....! 本物.....!)

娘。貴様に選択肢を与えてやろう」

' せ、選択肢?」

膝が震え、男を見上げる首の筋肉が痙攣した。

織神楽響。 彼の両手は呪文の書かれた布で巻かれ、 その片方は形

が違う。おそらく片手を失っているのだろう。

その呪文布の隙間から何かが漏れ出ているのが視認できる。

緑色

の湯気のような
呪詛によるものか。

たしか織神楽家の能力は 毒爪。

ならばあの漏れ出ているモノは、呪詛毒か。

性新生物。 室息死。 失血死。 老衰以外のありとあらゆる死因で殺してやろう。 溶解死。 感染症及び寄生虫症。 呼吸器結核。 さあ、

選択肢は多い。選べ」

容赦がない。 鉢合ったら希望なんて抱く間もない のは本当だ。

さっさと私を殺してどこかへ去るつもりか。

いや違う。

純血一族なら声も掛けずに殺す筈だ。

それなのに、私に声を掛けた上に名乗った。

つまり彼は、 少なくとも私に何かを期待しているということだ。

「も、守野

なに?」

「守野三桜という女性を.....知っています」

を逃れようとする。 私は弱い存在だ。 強い存在に狙われた時、 媚びへつらうことで難

なるものがあったのなら迷うことなくその陰に隠れただろう。 女である事を利用できるものなら利用しただろうし、 身代わりに

今回だって同じことだ。

織神楽響がこの並折に於いて協力者を得なければならない状況だと いうことも知っている。 守野三桜が織神楽響を探していることを知っている私は、 同時に

しとしないことも、わかっている。 よくしてくれる明朗の 結界寮の面々が、 この二人の合流を良

は だけど弱者が強者の前に餌食として晒された時、弱者が助かるに 強者の期待に応えるしかないのだ。

کے 三桜は並折へ来た当初、 私に言った。 『私様の足手纏いになるな』

から、ああ言ったのだと思う。 つまり三桜もまた強者として弱者のこういった特性を知って l I る

私は誰かの足手纏いになることでしか自分の身を守れない。

持っています。だから殺さないでください。 私は貴方を助けに来た同じ純血一族の女を知っています。 情報を

響の脅威から逃れようとしているのだ。 そうやって三桜をダシに使い、結界寮側の足を引っ 張り、

なんだと貴様」

思った通り、織神楽響は動揺を見せた。

しか その動揺の仕方は、 私の予想していたものとは大きく

違った。

彼は片手で額をおさえ、 呻きながら怒りに肩を震わせたのだ。

「ふざけおって……守野三桜だと……?」

に引きずり込む。 ぎらぎらとした鋭い眼光は近付けば近付くほど、 彼は女性像から飛び降り、 私にずいと近寄ってきた。 私を束縛の呪い

手で私の肩を掴んでくる。 そのまま恐ろしい怒りを含んだ視線で私を見下ろし、 毒の溢れる

ジャッ。

肩には掴まれた感覚ではなく、 むしろ布が擦れるような感触があ

っ た。

せるものだ。 れたわけではない。 次に訪れたのは、 この感覚は、 ひやっと強く冷えた感覚。 これから訪れる最悪の未来を知ら もちろん氷を当て

ないだろう。 私の表情を作る筋肉は、 きっとこの溢れだす恐怖に追い付けてい

ひ

そんなもの待ってはくれなかった。 けれどそれらは全て中途半端で、 擦るように空気を吸い込み、身体が強張り耐える準備を行う。 心の準備とか身体の準備とか、

いい、つ!」

目を見開いた私に襲いかかったのは、

わかる。 の肩が一 瞬で焼け消え、 私の皮膚が異臭と共に溶けていくのが

恐怖に理性を削がれ、痛みに悲鳴を上げた。

い゛やああああああああああああり」

甲高く荒んだ私の悲鳴。 肺を一気に潰し、 圧しだされた空気を全て叫び声に変えた。

曲げ、 とにかく意識を散らしたくて腕を抱いたまま身体をくの字に折り 地に頭や顔を擦りつけて叫ぶ。

「痛い痛い痛いいいいいいいいいいいいい!」

「答えろ。守野三桜が、並折に居るのだな?」

「ひぃ、ひぃい゛ぎゃあああああああああ!」

「答えろ!」

います..... います..... います.

チィ。神経毒の調節を誤ったか?」

舌を打ちながら響はすぐに手を放した。

ヒュー、 私は患部を手で押さえ、 ヒュー」と自分の掠れた呼吸が雨水の溜まった地面を何 その場にうずくまって嗚咽を漏らした。

度も這う。

じゅ に襲われた。 触られたのは肩だけだというのに全身の皮を剥がれるような痛さ くと体液が滲んでい 見れば肩は赤黒い肉が剥き出しになっており、 . る。 じゅ

て目を背けた。 よく見ると骨まで確認できてしまいそうで、 それを見るのは怖く

S.....

痛い。 ずっと痛いのが続いておさまらない。 痛いよう。

痛い、痛い、痛い。涙が止まらない。

垂れ流した上に膀胱まで空っぽにしている。 てる。毛穴は開き脂汗が滝のように流れ雨に流され、 座り込んだ私の下腹部と脚が暖かい。ちくしょう、 粘つく唾液を 漏らしちゃっ

最悪だ。 聖歌を追いかけてこんな目に遭うなんて。

「っく、うう……ひっ、く……」

恥ずかしくて消えてしまいたい。 下着が気持ち悪い。 というかもはや全身水浸しだ。 もういやだ。

「 お い 」

「おい貴様」

彼は呪文布をきつく巻き直しているところだった。 怒鳴り声に怯えて肩を震わせながら、 男を見上げる。

立て 「ただの溶解液だ。 浸食、 感染する類の毒は出しておらぬ。

「うっ……腕が……痛いよう」

そう酷う無いわ」 馬鹿者が。 皮膚が少し焼けた程度だ。 痛みは神経毒に因るもの。

で抱いた。 響が私の怪我した腕を乱暴に掴み、 しかし彼は緩めもせず力づくで立たせ、 「ぎゃっ」 内股でふらつく私を片腕 と声が漏れた。

此処ではあの連中に見つかる。 場所を変えねばならん」

゚み、三桜に会わないの.....?」

「場所も知っているのか?」

なんだか納得がいかなかった。 っ端元雑魚戦闘員の頭を撫でたという事に感動している自分が居て、 すると彼は私の頭を撫でてきた。 私は感覚が麻痺 こんなに酷 い目に遭わされたというのに、 してきた腕を撫で、 信じられなかった。 涙を拭いながら頷 あの式神が私の

い人は、 だって番姉さんは、 そんなことしないと思っていたんだ。 一度もそんなことしてく れ なかっ たから。

ふん。奴に頼るのは.....癪だが.....案内しろ」

ものだろう。 個体を兵器として認識せざるを得ない。 凄まじい身体能力。 そのまま彼はぐん、 響は私を肩に担いたので、 と脚を曲げて踏ん張り その筋力はもはや人間のものとは思い難く、 慌てて片手でスカートをおさえる。 これも呪詛で強化された 跳躍した。

けの都合の良いものなのだろうか。 しかし呪詛 ...果たしてそれは人間を超常の存在に昇華させるだ そうは思えない。

伴うに違いない。 んどが憎悪や怨恨に塗れている忌まわしいもの。 呪詛とはこの世に未練を抱きながら死んだ者の残滓だ。 なんらかの代償を そのほと

ない。 るのは序列入りした者くらいだ。 同じ呪詛能力者の集まりである死使十三魔でも、 私がその効果と影響を知ることは 呪詛を宿し て

番姉さんを見れば、 るの どれだけ時を経ようとも全く変化を見せず美しい姿であり続ける かくらいわかる。 呪詛を宿すという行為がどれほど常軌を逸して

彼女もまた、 相応の代償に苦しんで生きているのだから。

織神楽響は女性像の頭に片足を乗せてもう一段跳躍

ひのえと駅の屋根に乗り、 また跳躍。

跳躍して進む。 まるで身軽な猫のように、 猫よりも軽々と、 様々な建物の屋根を

もう痛みは失せたろう」 まだ、 痛い

彼は呆れるように舌を打ち、溜息を吐いた。

嬢が貴様のような一般人を傍に置くとは、 「軟弱な。 まあい ١١ 貴樣、 天宮柘榴といったな。 いささか信じられぬが。 あの守野の三桜

同時に興味深くもある」

「三桜は.....」 ん?

ただの、 変態よ..

響は一 瞬だけ言葉を失い、 直後 ふっ と覆面の下で息をこ

ぼした。

変態、 か。 相違なし。 某も同意だ」

ろうて」 「彼奴のことだ、」。**っ?」 貴様もあの野生の獣じみた言動に困惑させられた

矢神聖歌を尾行しろと頼まれて出掛けた雨の日。

N C Α 【あっ たかい雨の降る夜】 4

三桜は片眉を上げた。 食べ終わった五本目のアイスキャンディの棒を床に落とし、

江本正志』

紐で括られた紙束の一枚目にはボールペンで名前だけが書かれて

た。 掃除を担当していたので古びた倉庫の中はあまり埃っぽさがなかっ 羽田立荘を使う事になった際、 裏庭の倉庫は矢神聖歌が片付けと

達したついでにまだ見たことのなかった倉庫へ足を運び、そこでこ の紙束を見つけたのだった。 聖歌の自室を後にした三桜は、 冷凍庫からアイスキャンディを調

のだろうか閉じられたダンボールの上に無造作に置かれていたのだ。 紙束はいくつもあり、段ボールの中にまとめて詰め込まれていた。 しかしこの 江本正志と記された紙束だけは、最近閲覧された

(江本正志。 えもと..... まさし。 えもと?)

掛かる。

記憶を呼び覚ますきっかけを期待してめくり始めた。 引っ 三桜の記憶は、 どうにも名前を見ただけでは思い出せず、彼女は束になった紙に その名前が初見ではないと彼女に告げている。

既婚者であり娘が居たということ。 の五月に死亡したということ。 記載されているのは、この男が企業経営者であったということ。 別の女性とその連れ子と同居していたこと。 それだけだった。 二年前から出張で家に戻ってお そして

報だった。他にもどこで調べたのか自宅住所やら携帯電話の番号や が、企業経営者が浮気していましたよ、という心底どうでも良い情 らの個人情報が書かれているだけで、三桜の満足する内容ではなか 特に変わった経歴ではない。彼の死因が不明という点は気になる

そこで三桜は眉をひそめた。 ひどくつまらなそうにもう一枚紙をめくり この紙束は個人情報が記されているだけのものなのか。

そんな題を付けた、奇妙な表。

った金額だと思われる。 金額が付けられている。 どうやらこの紙の記載者が江本正志に支払 そこには謎の文字が綺麗にずらりと書かれており、 それぞれ隣に

いったい何を売買していたというのか。

S c a (d) 、B なんだこりゃ? Ste(m) B Sku(Ed), В Cla(d),

取引材料はすべて隠語で記されており三桜にはとても知り得ない。 (何かの頭文字か?)

紙束のほとんどを埋め尽くしている。 われる数値に 《B 》というジャンルだけでもかなりの量だ。この表が分厚 さすがの三桜も目が回りそうになった。 それらすべてを合計したと思

こんな額の金が動いたのか? 江本正志とかいう男の為に?」

それは赤い文字で書かれていた。紙束はまだ終わっておらず数枚を残している。

 \neg 当方の検査により提供材料と希望材料の不一致を確認』

 \Box 取引は一応成立とする。 しかし違反により提供報酬を大幅に削減』

 \Box 見本として送った矢神聖歌を至急返却するように』

 \Box 二〇〇六年四月、 返却を確認。送金完了。 提供者控えを送付る

うサインが施されている。 小さく『買取側控え』と書かれ、 買取側の名前だろう。 紙の端には 9 p y g m a とり

反を犯したらしい。 記載内容からすると、どうやら何かの提供者である江本正志は違

しかし減額されながらも取引は成立していた。

(最後に閉じてある数枚は手記か?)

これだけは手書きで、 まるで日記のように綴られている。

ので、 界寮の結界屋がうるさかったが、管理人の錫杖梵に話をつけてあっ け取り手がいないだろうから必然だ。 たので特に揉めることもなかった』 뫼 五月、 契約通り直接提供材料を回収してきた。 提供者の死亡により提供者控えが返送されてきた。 とにかくこちらは送金済みな モノがモノだけに結

も えていた試みに手を出すことを決めた。 定内だ。 は今までと変わらない。 材料の状態は のになる。 やはり一番欲しかった物ではないのが悔やまれる。 非常に楽しみだ』 まあ次第点といったところか。 そこで私は、 かねてより実現させようと考 今回の作品は実験も兼ねた 多少の損傷は これで 想

料の腐敗が進行してしまう。 料の腐敗が進行してしまう。今回は豊房を使うことにした。鎖黒は回収できる目途が立っていない上にあまり時間が経つとさすがに材 つか手に入れたいので機会を待とう。 の情報もあったので、 できればそちらを使い たかったの

かなり散らかってしまった。 てきた。 豊房をどこに仕舞った 随分長い間放置していたから苦労した。 のかは覚えていたの そのうち片付けにでも行こうと思う。 で、 羽田立荘の倉庫が さっそく 取り出し

ら必要な \Box 製作に いようだ。 あたりあらゆる解毒方法を準備しておい どちらも死因は毒ではなかった』 た のだが、

遣って欲 豊房の実験もあるという理由で無理な使用を避ける。 交通事故死だろう。 珪素を用 体作っても良 しかった。 いたくない。 く私と似た材料なので普段ならできない方法を試みる。 l1 のだが、 娘の方も各所に骨折や内臓の破裂が見られ それにしても江本正志にはもっと品質に気を 母親の方は使用不能な部分が多く、今回は なるべくなら

持っ た。 でもここまで速くはなかった。 の製作速度は神業の域に達していると言っても過言ではない。 뫼 作品は大方仕上がった。 少し気になる点はあるが問題はないだろう。 この時点でやはり人格が形成され自我を 最後の仕上げとして点睛に豊房を用 相変わらず私 先代

使われ があり錫杖梵に断られた。 も自分の傍で愛で続けたいという思いが強く、 7 ものだ。 とても笑える結果だ。 てい 梵に断られた。次からは藍澤林檎に交渉を持ちかけよう。結界寮に置いておくかと思ったが、既に置いてある作品 羽田立荘に置くか? それはさておき、 ゃ 私は完成 それでは作品が可哀想 いつもこ した作品をどれ の時が苦し

だ。 また狭くなってしまうが工房に置こう。 それがい

の名前は、 ベースとなった娘のものを使用する』

|今回も素晴らしい作品が出来上がった』

六月二十日。 お誕生日おめでとう、 江本佐々奈』

..... 手記はここで終わっている。

》はこの羽田立荘を所有している、もしくはそういった権利を持っ をしていたのかが、手記によって理解できた。そして《 pygma 知っている。 ているということも明らかだ。 ф р y g m a》という者もしくは業者が、江本正志と取引して何 さらに矢神聖歌はこのことについて

どという奇妙な呼称で。 知っているどころか紙束に彼女の名前が載っていた。 《 見 本》 な

《pygma》が《製作》している《作品》。

その《見本》として挙げられた矢神聖歌。

作品というのは。

三桜は顔をしかめて想像を中断。

(待てよ....)

紙束を置いた三桜は、 その場で顎に手を当てた。

(思い出したぞ。江本.....)

織神楽涼子と、 その娘 解毒爪を持つ織神楽音々子。 その二人

二年前。 が織神楽家から抜けてしばらく名乗っていた苗字だ。 によって抹殺された! 子と音々子のことか! 本妻と娘の 時期も一致する。 死体か?」 そしてこの そして江本正志は今年の五月に、 江本正志と同居していた女と娘は « pygma» と取引していた 脱走した 織神楽家 涼 のは

まずいまずい。これはまずいぞ。

り交じりに漏らした。 三桜の脳内はその言葉をひたすら反芻し、 やられた」 と歯ぎし

ことにも興味なぞ無い。 この《 pygma》 ことだ! (響の馬鹿野郎め..... って奴が個人か団体かは知らんし、 殺害対象の身辺調査を怠りやがっ だが、 問題なのはこいつが並折の人間って やっている たなぁ

まとめて毒殺される可能性があると考えた。 で並折に居ながら把握していたんだ。それで本妻と娘も織神楽家に 扱うと知っていて、 の準備をしていたってわけかよ。 こいつは手記に解毒の準備をしていたと書いた。 しかも江本正志を織神楽家が狙っていることま だからあらかじめ解 織神楽家が毒

為的に並折へ誘 ことも知っているはずだ。 こまで把握しているなら、 の情報で並折に入った私様と響は から情報が漏れ もしこいつが織神楽家の任務事情をも把握していたなら、 か居な 7 い込まれた可能性が高いぞ! の か!) いる可能性がある。 そんな機密性を欠き穴が開いた駄々漏れ 当然ながら響が傷を負って逃走している それは後で考える。 罠にかかった事に 九条家の諜報部は なる つまりそ どこ

そして・・

矢神聖歌 あのアマもグルだ畜生がああああああああああああ

は織神楽家の逃亡者を観測していた。 並折から外界の江本正志と取引していた《 pygm a * そいつ

音々子の正体も調べ上げているとみていいだろう。 あそこまで個人の情報を調べ上げているような買い手だ。 涼子と

織神楽家が江本正志を殺害したことも把握している。

殺害したのかを。 無論、そいつは知ってしまった筈だ。 織神楽家がどうして正志を

それが織神楽音々子こと、江本音々子の回収任務の過程だという

更には回収に失敗し、 響が撤退中だという事まで。

予想と危惧は的確。 たとえ情報の漏洩でなかったとしても、 この現状に対する三桜の

そして響は 並折に逃げ込んだ。

守野三桜に宿を提供した矢神聖歌は \sim

その援助に守野三桜も並折へ入った。

р у g m a と関わり

のある者だった。

これが偶然というにはあまりにもできすぎている。

なアめやがってえええええええええ!」

怒りは彼女を昂らせ、

肥大硬質化した大腿筋で倉庫の床を踏み抜い てしまう。

感情のままに振った裏拳は壁に大穴を開け、

物ならざる咆哮は天窓に罅を入れた。

純血一族 守野家が当主。

浩 人 守野三桜。

彼女の猟刻が、 始まる。

彼は人間が通るような道ではなく林の木々を縫うように駆けたの 織神楽響と私は、 私の案内で羽田立荘に到着した。

で、頭には木の葉や枝がくっついていて取り払うのに苦労した。

彼に抱えられてわかったことが一つある。

みていた。 ったが、よくよく彼を至近距離で見てみると 先程までは動揺して観察眼がまったくと言っていいほど働かなか 彼の覆面は赤く染

きなかった。 こんな怪物が片手を失い、 吐血によるものだろう。 雨でも流されないくらい染み付いている。 吐血するほど追い込まれた事情が想像で

玄関の戸に手を掛けた私は とにかく屋内へ入ろう。 このままでは身体が冷え切ってしまう。 それが開かない事に困惑した。

ぁ あれ?」

ているのだ。 がたがたと乱暴に横へ動かそうとしても開かない。 鍵をかけられ

私は激しく戸を叩いた。

三桜ってば!」 三桜! ねえ三桜! 鍵なんてかけないでよ! 聞いてるの?

待っても返事はない。

ロビーの明かりも消されている。 戸のスモークガラス越しに中の様子を窺うも、暗くてわからない。

三桜の奴、外出したのか?

いや鍵は聖歌しか持っていないから、外側から鍵をかけることは

三桜にはできない。

それを私よりもはっきりと感じ取ったのは、 なんだ? 様子が 羽田立荘を包む気配がおかしい。 織神楽響だった。

こればこの建物が原形を保っていられるわけもなし。 して三桜嬢は消えたのか?」 ...殺気だな。だが三桜嬢が本当に此処に居たとして、 殺気だけを残 争いが起

いとしたら、この殺気は三桜のものか。 殺気。宿に残っていたのは三桜だけだ。 誰かと争ったわけではな

果、 殺気を撒き散らして外へ出るに至ったということか? やはり三桜は宿に残ってなにかを調べていたのか? その結

それは屋内に入ってから考えよう。

私は響を連れてどこかから入れないものかと建物の周囲を巡り 裏庭で入口の大破した倉庫を目にした時は言葉を失った。

「なによこれ」

「......ふむ。あそこの勝手口が開いているな」

倉庫の件は一旦置いておこう。 今は見なかったことにしよう。

入った私は、まずは織神楽響を浴室へ案内した。 三桜が開けっ放しにしたと思われる勝手口から羽田立荘の中へと

いただろうこともわかる。 私も彼もずぶ濡れの状態だし、彼は何日も汚れた状態で過ごして

た。 と戦々恐々としていたが、 う身分である彼が、私なりの気遣いに対してどんな反応を見せるか 冷静冷酷、無情無表情、 意外にも彼はあっさりと私の言葉に従っ 致死毒の塊。そして純血一族 の当主とい

男性浴場を使うのは彼が初めてになるか。 たことはないし。 そういえば一応いつでも使えるようにはしてあるが、 明朗もまだ泊まっていっ 羽田立荘の

るこの光景は、 男性浴場の入り口と女性浴場の入り口の前で、 なんというか.....非常にシュールな図だ。 響と私が立っ てい

ので に入れたままにしておいてください。 からそれを。 「えっと、これ 脱いだ衣服は......問題が無ければあたしが洗うので籠 タオル。 着替えは此処の浴衣が用意されて あ あと洗剤は浴場内にある いる

た。 彼は無言でタオルを受け取ると、 さっさと中へ入っていってし ま

んだ。 し痛い目にも遭わされたけど、三桜との仲介役として殺されずに済 ようやく。 ここでようやくあの怪物から解放された

脱衣場へ向かう。 安堵の深い溜息が自然にこぼれ、 タオルを抱えた私も女性浴場の

計になっている。 脱衣場は広く、 ただの料亭だったにしては多人数が利用できる設

う。 う。 おそらく宿として開業するにあたり浴場部分も改築されたのだろ 使い慣れてしまった感は否めないが、 宿にしては良い物だと思

前に掲げて眺める。 たのに……。ニーハイソックスも膝の部分が破れてる。 わないといけないなあ。 塗れて身体に張り付いた衣服を四苦八苦もがいて脱いだ後、 肩部分を失って台無しだった。お気に入りだっ 新しい服買

洗うのは下着とスカートだけか。あとで靴も乾かさないと。 しまった替えの下着を持ってくるのを忘れた。

まあ、いいか。自室に戻ったら着替え直そう。

の下着はよくわかんないけど。此処に予備があればいいが。 えっと.....多分、響も替えの下着に困るかな。 い機会だから今度明朗に見せて もらえるかっつーの させ、 その、

(アホか私は)

ずかしくなってきた。 局は人間だ。 んだよね。人外だ超常だ化け物だ怪物だと表現しても、 そう思ってしまうと、 まったく別の生き物というわけじゃあない。一人の、男性だ。 よくよく考えてみれば、 体力は常人を凌駕するだろうけど疲労もするだろう。 しかもそんな状態で抱えられて 彼の前で粗相をやらかした自分が余計に恥 織神楽響だって食事は摂るし入浴もする 彼だって結

(うわああああ)

仕方ないじゃないか.....痛かったんだから。もうやめよう。これ以上は自分を追い詰める。

てみた。 裸体になっ た私は脱衣所に備え付けられた姿見に自分の全身を映

経毒が、私にあんな痛みをもたらしたのか。 ことはなく、せいぜい皮膚の表面を焼かれた程度。 も気持ちの悪い赤黒さだ。 両脚の膝小僧がすりむけて赤くなっている。 響の言った通り骨まで溶かされるような 皮膚を溶かされた肩 擦り込まれた神

下まで溶かし、擦れる度に痛んだ。 患部が彼の手形状に肩を覆っている。 親指と思われる部分が脇 0

頬に付いた砂を腕で拭い、浴場に入る。

れないのでよく洗い流し、それから頭と身体を洗った。 設置されたシャワーは五つ。 肩の神経毒がまだ残って いるかも

ずに済む。 だが、 いつもなら大体このタイミングで浴場へ三桜が飛び込んでく 私の胸の大きさにいちゃもんを付けてくる迷惑な行為にも遭わ 今回はそんなことがなく安心だ。 わざわざ隣のシャワー を使

思い返せば改めて奴は変態で最低だと再認識した。

貼り付けたような立ち居振る舞いをしていた彼のことだ、 の当主様。 かと違って礼儀作法を重んじて生きていたに違い や守野家にだってマシな奴は居る筈だ。それに響の方は純血一族 響と三桜。 殺人集団ではあるが連中は名家でもある。 同じ純血一族でも違いが大きすぎる。家系の差か? ない。 厳格を全身に 三桜なん

(三桜は何を調べていたんだろう)

桶にためた湯を頭から被り、 備え付けのシャンプー で髪を洗う。

に出て行ったとか? (倉庫で何かを見つけ たのかな。 気付くきっ かけがな 結界寮の動きに気付い 11 からそれは 有り得ない。 て響を探

越しの自分と目があった。 石鹸を泡立てたタオルで身体を磨きつつ、真正面に設置された鏡

どう思う?どうだろうね。

なんて、首を傾げたりしながらの自問に自分で応ずる。

なんだろうこの突発的な騒がしさは。

- 延々と止まない並折の雨。
- 矢神聖歌の奇妙な行動。
- 織神楽響の逃避行。
- 結界寮の響討伐。
- 守野三桜の残した殺気

各々が慌ただしく動いている。

私は無関係の筈なのに、 こうして各々の行動を把握できてしまう

ような 渦中に居る。

胸騒ぎがする。

は一日で起きた出来事なわけで。 つまりタイミングが揃っているように思えたわけで。 は私くらいだ。そんな私が一連の動きを突発的だと思った。それは 各々自分の目的に集中している現状、ここまで把握できているの 実際にこれら

(結論を出すには早いけれど)

全部が繋がっているように思えてならない。

「ふう」

頭の上にタオルを乗せたまま湯船に浸かると身体の疲れが一気に

ためてしまったのか。 たからなのか、 抜けてゆく感じがした。 はたまた出来事が出来事なだけに必要以上に疲れを ここ最近ぐうたらしていて身体が鈍ってい

いうのだ。 とはいえ全部が繋がっていると仮定するにしても、 どう繋げると

住人である聖歌と純血一族なんて接点などありはしないだろう。 えと駅で降りなかったことが織神楽響とどう関係する? 響と結界寮の繋がりは明朗に聞いたから良いとして、 聖歌がひ 並折の の

るものがあったというのか? いうんだ。 三桜の行動も気になる。 殺気を残して倉庫を破壊して。 羽田立荘の倉庫なんかで何を見つけたと そこまで彼女を激昂させ

自体、 考えると疑わしいものはいくらでもあるわけだが。 この羽田立荘。 裏世界の人間で溢れかえる場所だしなあ。 ただの宿か? 矢神聖歌は何者だ? そもそもこの街 遡って

れて自室に持ち帰って読むからなんだけど.....。 新聞が保管してあるからね。 くうちに溜まってしまった。 長い雨天についても調べるか。 いつもロビーで三桜に読むのを邪魔さ 私の部屋には六月から昨日まで 捨てずに置いてお

う.....眠くなってきた.....

ええと、お風呂を上がったら、

とりあえず洗い物を回収して^^

響の様子を窺って

倉庫の状態を確認して、

新聞の気象欄を抜き出して

あれ、 今って何時だっけ ゆうはん したく

聖歌 帰って くるよ ね 。

結局、織神楽響の所在は掴めないまま。 ひのえとの商店街を巡回し、 再び駅前まで戻ってきた伊佐乃明朗

情は、織神楽響を見つけられなかった不満によるものではない。 の像に背中を預けていた。 しかしながら皺の寄った眉間と曇った表 彼の足もとには羽田立荘の番傘が転がっていた。 彼は眉間に皺を寄せながら、天宮柘榴とばったり会った駅前広場

クロちゃんの身に.....何かあったのか?」

天宮柘榴が持っていたものだ。

天宮柘榴に偶然会った嬉しさに、気持ちが浮いていた。 るからと、 駅前だからと油断していた。 明朗は番傘を拾い上げると、 こんな雨の日に自ら傘を放り出すなんておかしい。 彼女を一人にした。 と明朗の食いしばった奥歯が軋む。 取っ手を強く握った。 結界寮の住人でありながら情けない。 路面電車ですぐにきのえとまで戻れ

したか確認をとらないと。 (まさか織神楽響と遭遇したのか? 聖歌さんは出払っているだろうし、 すぐに羽田立荘に行って帰宅 残っ

協力してくれるかな) ているとすれば三桜さん....か。 彼女が何者かはわからないけど、

おうとした。 れる。明朗はそう自分に言い聞かせ、 天宮柘榴と仲の良さそうな彼女のことだから、 路面電車に乗るべく駅へ向か きっと協力してく

があり、 路面電車は一時間に二本。 彼は慌てて足を急がせる。 目の前にはちょうど駅に到着した電車

その先で揺れたのは 赤い番傘だった。ひのえと駅の改札口へ急ぐ透明のビニール傘。

.....あら、明朗君?」

「せ、聖歌さん!」

矢神聖歌が、明朗を見つけて声を掛けた。

そちらの状況はどうですか? 織神楽響は見つかったの?」

と行きの路面電車を見送ることになってしまった。 は彼女の言葉を聞きながら、扉を閉じて動き出してしまったきのえ 普段と変わらぬおだやかな表情で彼女は問い、 立ち止まった明朗

を振って見せた。 諦めて溜息を吐いた明朗はあらためて聖歌の前に立つと、 かぶり

に行ったんですよね」 まったかと。 いいえ、こちらは駄目です。 聖歌さんの方はどうですか? おそらくもう別の地域へ移動してし つちのえとにある工房

「ええ。 気にしないでください。 捜索を手伝えなくてごめんなさい」 いつも思うんですが、 どうして工房を墓

の近くに建てたんです」

火葬ではなく、埋葬だから。 ですね」

て唸った。 にこやかにそんな事を言う聖歌に、 「うへえ」 と明朗は目を背け

「佐々奈よ。江本佐々奈。私の方も収穫なしですね」本.....なんでしたっけ」 そうですか。それで見つかったんですか、逃走したという江

まずくないですか? 梵さんの耳に入ったらどやされますよ」

手を振った。 苦々しく眉をひそませる彼に対し、 聖歌はやはり変わらぬ笑顔で

「はあ。 いいですけど。 「これは私だけの問題なので、梵さんは何も言ってこないですよ」 まあ《pygma》は直接結界寮とは関係ないですし別に ひのえとで降りたってことは、これから買い物です

ら、早く帰らないと いですけど。どうしたの」 「ええ。 クロちゃんと三桜ちゃんがお腹を空かせているでしょうか それよりも明朗君、とても慌てていたみた

べる聖歌へさらに接近した。 ここで明朗はハッと目を見開き、首を傾げて頭上に疑問符を浮か

そうですよ! クロちゃんが危ないかもしれないんです!」

クロちゃんが? どういうこと?」

で戻ってきたらそこにクロちゃんの傘だけが落ちていて.....」 実はひのえと巡回中に駅前でクロちゃんに会ったんですけど、 後

る ていた。 慌てて事態を説明し、 しかし彼女の表情はおだやかさを崩して少しだけ曇ってい 聖歌はとても落ち着いた様子でそれを聞い

えていた。 を取らなければ。 織神楽響に遭遇した可能性があるので早く羽田立荘に行っ そう言う明朗の顔を見ながら、 聖歌は別の事を考 て確認

(クロちゃんが、ひのえと駅に?)

小首を傾げる。

えと駅に行くのならわかる。 ても見つからないとは思うけど。 そもそも えと駅に行くのならわかる。鎖黒を探しているでしょうから。行っ(どうしてクロちゃんがひのえと駅に居たのかしら。あの子がきの 盗んだのは私ですも あの子がきの

ないからどうしようもない。 それは置いておくとして。 盗んだはいいが、 直後に盗まれてしまって聖歌にも在処がわから

(私に何か用事でもあったのかしら。 まさか...

聖歌の目と眉間に力がこもる。

に伝えてこいとか、 有り得る。 (また、 三桜ちゃんに使い走りをさせられたの... 有り得すぎるわ。 そんな感じだわきっと) 夕飯のメニュー に希望ができたから私 : ? 可哀想に。

聖歌から見ると三桜と柘榴はとても仲の良い姉妹のようで、 頬に片手を添え、 嘆きの息を吐く。

走りにする姿も見受けられるので、 も微笑ましく過ごしている。 したのだ。 時折、 三桜が柘榴をからか 今回もすぐにそうだろうと予想 ったり使い

るに至った理由である。 また何者かに鎖黒と指輪を盗まれてしまい、そして柘榴の同行人ら を貰ってもいなかったし興味もなかった。 入れるべく天宮柘榴に接近はしたが、 しき守野三桜に指輪探しを手伝ってもらったのが羽田立荘を提供す 三桜と柘榴が姉妹のようであれば、 実のところ聖歌は彼女達の素性を知らない。 柘榴個人に関 聖歌は母親のようであっ ただ鎖黒を盗んだ直後に たしかに鎖黒を手に しては特に情報

でその時に羽田立荘を提供したのだった。 で思い立ったことである。 たその在処が掴めるかもしれないという思惑はあったが、それは後 きっかけは鎖黒だったわけだし、天宮柘榴を傍に置い つまるところ聖歌は本当に御礼のつも ておけ 1)

がちょうど妹の命日だったこともあり、 普段なら並折の住人である彼女はそんな真似はしな その気になってしまっ いが、 そ たの の日

帰っているか確認しましょう」 話はわかったわ明朗君。 すぐに羽田立荘へ向かってクロちゃ が

っ は い。 先に僕が行って確認しますけど」 あの、 買い 物はい いんですか? 鍵さえ渡してもらえれば

「クロちゃんの一大事に、 買い物なんてしていられな わ

遇したと判断 と林檎さん、 「まだ決まったわけじゃないですよ。 結界屋さんも駆り出させます」 して結界寮が総出でクロちゃ もし居なければ織神楽響に んを捜索 心ます。 梵さん 遭

同時に、 「ほんと 貴方 の結界寮に於ける意見力が少々怖い 貴方は頼もしいですね。 クロちゃ んが羨まし です」 Ł

大袈裟ですよ。 р у g m 聖歌さんだってその点、 a のことや、 聖歌さんが結界寮の住人でもある 僕よりも自由じゃ で

こと、クロちゃん達に話してないんですよね」

ろうとは思いませんし」 分と警戒されていたじゃないですか。 あの子たちを不安がらせるだけですから。 それに私は彼女達の素性を知 明朗君だって初めは随

暮ですね。じゃ を送りますよ」 「ふうん.....ま、 あ、 それで上手くいってるなら僕が口出しするのは野 僕は先に行っています。 事態が悪ければ伝言役

「ええ。 はい、これ宿の鍵。 クロちゃんのこと、 お願いします」

きを変えた。 鍵を受け取っ た明朗は「お任せ」と言い、 発券機の方へ身体の向

あ。伝言で思い出した。聖歌さん」

持した。 急に彼の声のトーンが下がったので動揺したが、 聖歌は平静を維

「どうしたの」

貰ってくるよう言われています」 梵さんから伝言を預かっているのを忘れていました。 返事も

「私に? なにかしら?」

明朗は傘を閉じ、 先で床を叩いて雨露を払った。

んじゃ 「この雨のことですよ。 ないだろうな?』 だそうです」 聖歌。 お前もしかしてトヨフサを使った

つ ている一本の筆に意識を向けた。 さすがに鋭 い女ねえ。 Ļ 聖歌は心中心底感心し、 肌身離さず持

その存在を知っているのは、 せいぜい結界寮管理人の梵と林檎

だ。 ほど明朗が言ったとおり結界寮は《pygma》 あとは住人がちらほら程度だが知られたところで問題はない。 豊房は《 pygma》 関連の件。 どう扱おうが聖歌の自由。 に関与しないから 先

一御名答。と伝えておいて」

だったんですね。 弁してください」わかりました。 まったく、どういうつもりかは訊かないですが勘 それにしてもこの長い雨天は聖歌さんの仕業

ょ 「あら。 私はきっかけを与えただけで、 私だけの仕業ではないです

「意味が解りません」

続く雨天にうんざりしているであろう彼の肩を叩き、 あっけらかんとした聖歌の態度に、 明朗は肩をすくめる。 聖歌は「ま

たすぐに晴れますから」となだめた。

調子に戻り、 とにかく今は柘榴を心配する気持ちが大きいのか彼はすぐに元の 聖歌はその姿に笑みを見せて二人は別れたのだった。

しとしと。雨粒は像の曲線を伝い、さらさら。雨粒は傘の表面を撫で、

くすくす。 聖歌は傘で表情を隠し ` 笑っていた。

涙はどうしても無理でした。 たので豊房の力で点睛してみたわけですが。 ああ可笑しい。 でも素敵。 けれどあまりにも流したいと懇願され 喜怒哀楽は私の力で与えられますが、 まさかまさか雨だとは。

ري اي ふふふふう

いか。 これなら同じ怪遺産である鎖黒にも期待感が増してしまうではないやはや未知なる道具は実に興味深い。

い作品に仕上がりました。 「蘇り顕現した妖怪は雨女ですね。 流石は私、 雨女、江本佐々奈。 上出来です」 これは面白

矢神聖歌。 その通称は《 p ピグマ y マ g m a 。

そして結界寮に属し裏世界に轟くまたの名は

傀儡屋。

させる女。 神の領域を犯し、 芸術の至高を求め、 生物の歪曲した模倣を実現

あった。 人しか存在しない禁忌執行者。 矢神聖歌はその弟子にして師は禁術を解き禁忌を嘲笑い禁断を掻き集めた傀儡屋。 矢神聖歌はその弟子にして二代目で 世界に七

すよ。 あまり涙を流し過ぎると、 まあいずれ え?」 眼球そのものが洗い流されてしまいま

曇った空に呟き掛けた聖歌。

傘から何気なく覗かせたその目だったが、

直後まばたきする事も忘れて見開くことになった。

聖歌の目には、 空を横切る影が映ったのだ。

見間違いっ

違う。 見間違いではない。

何度も。 何度も影が自分の頭上を猛烈な速さで通り過ぎていく。 何度も。 右から左。 左から右。 縦。 横。 斜め。

跳ねている。 影は 完全にはっきりと明確に、 矢神聖歌だけを意識して飛び

そう。 跳んでいるのだ。

ない。 縦横無尽に、 あらゆるオブジェクトを踏み台にして跳躍を絶やさ

きない。 の悪さと影そのものの速さが相俟っていまだに影を影としか認識で そこまでわかるくらい目が慣れてきたというのに、 雨による視界

に疲れてきたのか、 しきりに首を振り身体を動かしその姿を追っていた聖歌もさすが 傘を投げ捨てた。

何者ですか?」

どこかへ移動して見当たらない。 向けた声の先 ひのえと駅の屋根には影があった筈だが、 もう

じような番傘が転がっていることに気付いた。 榴の傘だろう。 駅前の像に背を付けた聖歌は、 自分の投げ捨てた番傘の近くに同 明朗が言っていた柘

像があるのは駅前広場の中心。

まで届く。 影の跳躍は駅の屋根から像を対称とした商店街の入り口にある門

つまり 駅前広場という檻に、 聖歌は閉じ込められたのだ。

つ)

目を左右に動かすも影を捉えられない。

しばし翻弄された後、 影はやっと動きを止めた。

守野三桜だった。 屋根の上に立ち、 白い歯を覗かせたのは 背の高い女の

[「]シィ」

前宙をまじえて駅前広場に降り立った。 鋭い吐息が聖歌の鼓膜に届いたと同時に、 三桜は屋根から何度も

されて多くの超人を目にしてきたが、たった今見た動きはその《慣 聖歌は言葉を失うしかない。 をも揺るがすものだった。 彼女も傀儡屋として裏抗争に駆り出

るほどだ。 く何度も高速で継続させた。 一度の屈伸で、およそ五十メー 跳躍開始時はあまりの速さで姿が消え トルは跳躍した。 それを絶え間な

ことに周章狼狽した。 つつも、その超人感を凌駕した者があろうことか守野三桜であった 聖歌は自分の中の超人という言葉が急激に下落してゆ くのを感じ

み、三桜ちゃん……?」

「見ぃつけたぁ」

ジャケットを破り捨てる。 三桜は長いうしろ髪を片手で払うと、 ぐっ しょりと濡れた自分の

もに、 現れたラバー 質のタンクトップは彼女の女性部分を強調するとと 隆起した腹筋まで浮き上がらせていた。

理不尽なまでに広大な 猟域。獲物を推し量る野生の視線。あからさまに剥き出している殺気。

- 眼球は洗い流すものじゃあない。 刳り貫くものだ。 矢神聖歌ぁ
- どういうことなの.....? 三桜ちゃん、どうしたの?」
- 「あまり純血一族を嘗めるなよ弱肉てめえ」
- 「……純血……一族……って」
- 「響は私様が回収する」
- なるほど。 なるほどね。 なるほどそういうことなのね、 三桜ちや
- ん。貴女は
- 「餌に納得は無意味。 われるんだよ。 来世ではよく覚えておくんだな」 弱肉強食はこの世の理。 嘗めた餌は、 即刻喰
- 込まれているかのように長い爪が飛び出した。 ツ と両手両腕を開いた三桜の指先から、 スプリングでも仕
- 弱肉と見下す守野三桜に対し、矢神聖歌は やはり笑う。
- しかしいつものような笑いではない。
- 鋭くも座った冷淡な目と、 普段なら見せはしない三日月形に歪ん
- だ口から歯を覗かせた笑顔。 それは三桜の言う通り。
- 嘗めに嘗めて嘗めきった、嘲笑だった。
- 小すぎるのかしら」 守野家なんて、 初めて知りました。マイナーすぎるのかしら。 弱
- だけだ」表情も行動も発言まで嘗めきってやがるな。てめえが白痴な
- 流し込むとしましょう。 「貴女が純血一族だったとは。そうだ、 これはいい考え。 次の作品には貴女の これがいい考え」
- 聖歌は自分の左手親指を顔の前に立てて、 その爪を噛んだ。
- そのまま手を前に動かすが、 爪は歯に挟まれたまま。
- 爪は剥がれ、 指から離れ、 爪と指の間には ピン、 と一本の細
- いワイヤーが伸びていた。

PUNICA【あったかい雨の降る夜】5

なあに? 並折の話に興味を持ってしまったの、 グレナデン?

デン の呼称は嫌なの?? ああごめんなさい。 柘榴と呼んで欲しかったのよね。

りの時だけよ 私 の 番という名が漢字だから? 仕方ない子ね。二人き

ず消えてしまったのなら言い伝えなんて存在しない。 カオナシの話 よ 折の伝奇にはまだまだ多くの謎が潜んでいる。 も、言うなればカオナシという妖怪自身が残した手記があったこと てきた通り、並折に潜んでいた妖怪はカオナシだけではなかったの で今も尚、 結局はみんな海へと沈んでしまったのだけどね。それでも、並 伝えられている? そうねえ、カオナシの話に百奇夜行という言葉が出 妖怪達が跡をにごさ

この鎖黒もその一つね。もしれない。だけど、ビ 遺産の持ち主の名は語り継がれることになる。 快く思わないかもね。 妖怪も人間であったのだから、化け物として描かれ、 さえあれば何度でも蘇る。 それらが、まだ並折に在るとしたら。 妖怪達の遺産。 だけど、どのような形であれ残った怪遺産も存在する。 もちろんいくつかの品は失われてしまったか 思い出の品々。 正確には《結永刃・鎖黒》 空想にして顕在。模倣であれ虚言であれ 妖怪は、 怪遺産なんて呼ばれるわ とは そういった連想の糧 と呼ばれる怪遺 いえ..... 並折の 語られるのは

鎖黒は並折に在ってはいけない物。 だからこうして並折

の外にある。 そんな怪遺産は鎖黒だけに限らない?

怪遺産。 ある。 例を出すならば、豊房という筆ね。遺産で妖怪が蘇るというのは、あな 一見するとただの筆だからまだ残っているかはわからない? ええそうよ、鎖黒のように武器の形状をしているわけでは あながち空想でもない場合が 《安永筆・豊房》という

…あわよくば、残っていて欲しくない代物?

酷い目に遭って生きていた? な力を持ってしまった人間は村八分にされ化け物だと忌み嫌われ、 妖怪も、一人の人間にすぎない。そして私達は、己の力をよく理解 し、悪用する者はほとんど居なかった。なんというのかしら.....む しろ他の人間と異なる部分、つまり能力を、嫌悪していたの。 ?私が雪女と呼ばれていたことは柘榴も知って いるわよね?

の心を持っていたの。 少なくとも並折に集まった妖怪達

は ?

折 序列四位として今も尚、 の妖怪ではない.....? ?私は自分の力で多くを殺し、 殺人集団の力になっている。 凍らせ、 こうして死使十三魔の だから私は並

たり、 て居たけれど、 ?とにかく、 あたたかい生活を送っていたのよ。 決して悪用しなかった? 並折に居た者達はみな互いに助け合い、 強い力を持った妖怪だっ 祭りをし

う筆な ·安永筆 のよ? 豊房はね、 そんな彼らの特異な能力を蘇らせてしま

だから豊房によって蘇り顕現した能力は、 てしまう? 力 の持ち主の妖怪が自分の意思で封印 豊房の使い手に委ねられ していた、 力だけ をね。

は豊房を善行に用いる者は少なかった? たちの力が役に立てばと思って遺した。 豊房を遺した妖怪は、 並折の妖怪達が姿を消し けれど哀しいかな後の世で た後も、 自分

は豊房 まれて姿を消していた.....? にはもう祀っていた社は廃れて朽ち果て、 昔はちゃ の力に頼っていたというのに。 んと祀られて いたのに。 私が最後に並折を訪れたとき 災害に見舞わ 壊されていた。 れた時、 豊房も盗

する。 まで蔓延っている。 ように行使して衝動のまま殺人を繰り返す純血一族などという集団 れていないのでしょうね。 昔も今もただの人間どもは妖怪を蔑ろに な怪遺産として、こうして語られている? ?だから、どうせ今もどこかにある豊房は、 あまつさえ外道たる方法で人工的に得た能力を、 役立つよう願って遺された豊房も、 碌な使われ方をさ 結局は危険 開き直った

いえ、 は己の意思など無関係に呪詛を宿して生まれてきてしまうのだから。 能力者を産む純血一族が気に入らない 序列を批判するつもりもないの。 しかもそんな 起源だという。 別に人工的に得た能力を嫌っているわけではない の形態ですら、そもそもが超人による支配を目的としたの 少し表情が険しくなってしまったわね。 まさにヒトの腐った心を象徴したような連中? 血に呪詛を宿して能力者を産み続けられるように ただ、 のは事実よ。 目的もなく産む者の勝手で 産まれてくる子 ごめんなさい。 のよ。 他の

並折も昔のような温かい 妖怪達の過ごした場所ではなく

なっているわ。この世界も然り?

さい? ?だから柘榴、 貴女はここに居なさい。 私の傍に、 ずっと居な

あの方はその器を持っている? ?いい子ね。 待ち続ければ、 序列一位の目指す世界に変わる。

?偽りなき世界?

?約束の刻?

行ってあげましょう? ?訪れたその時こそ、 豊房を正しく使って私達がみなを迎えに

(う.....寝てた.....?)

起きたらしい。 分の腕を枕にして湯釜の縁に顔をうつ伏せていた。 湯船に浸かったまま寝てしまったのか。 気が付けば頭の上に置いていたタオルが底に沈んでおり、 息苦しくなって 私は自

(夢というか、昔の記憶を見ちゃった)

「はあ.....」溜息が出た。

は、この国の誰かさんがそういっ んだよね。 生まれつき能力を持ってしまっ た存在 た人達を勝手にそう呼んだだけな かあ。 まあ妖怪って

うなあ。 純血一族だって、言ってしまえば現代に生きる妖怪集団なんだろ

みんな海へと沈んでしまった。 番姉さんは並折に訪れたことがあるのかな。 並折の妖怪達は平穏に暮らしていた。 けれどカオナシ伝承の通り、 あるのよね、 きっと。

きっと番姉さんはその時に並折には居なかったんだ。

みんな居なくなってしまった並折。 残ったのは妖怪達の遺産と、

ただの人間達。

いる。 それでも並折は結界都市として現代も特異な地として利用されて

のか? どうしてだろう..... 結界屋がこの都市に結界を張ったわけでは この地はまだまだ謎が多い。 結界屋が居るなら、どこだって結界都市になる筈だもの。

怪遺産と呼ばれる特別な代物だ。 私は持ち込んだ。 番姉さんが持ち出した鎖黒は、 姉さんの言いつけを破り、 並折にはあってはならない鎖黒を もとはといえば並折で作られ 彼女の元を去った。

あげられるかもしれない。 カオナシを見つけなければ。 カオナシなら番姉さんを救って

きっとこれらは堅く繋がっていると思うのだ。 でもカオナシ本人ではなく、カオナシに纏わる話ばかり。 ユキオンナと、 ユキオンナはカオナシのことをよく話した。 鎖黒と、カオナシ。

ともあれ今は目の前の問題を片付けないとね」

向かう。 浴衣に着替えて女性浴場から出た私は、 その足で隣の男性浴場に

ろう。 男性用更衣室の中は照明が消されている。 響はもう上がったのだ

た着たというのか? い物が見当たらない。 さて彼の衣服はどこだろうかと籠を見て回るも、 そもそも彼に渡したタオルも見当たらないのだ。 まさか響はあのずぶ濡れて汚れた忍装束をま まさかね。 回収するべき洗

ここで私はヒクと頬を引き攣らせた。

ちょっと待って嘘でしょ.....」

へ急ぐ。 裸足のままでドタバタと廊下を駆け、 洗濯機の設置してある場所

ゴウン、ゴウン。

あんぐりと口を半開きにするしかない。洗濯機が、起動していた。

な、ん、て、こと」

純血一族の当主。 凄まじい罪悪感が全身を支配した。 あああ、 あの、 当主だぞ。 式神に.....洗濯をさせてしまった。 絶対とし、 式神として崇め敬まわれ

て生きる人間だ。

名家の当主様に、 くはない。 私は純血一族の人間ではないけれど国をも裏で揺れ動かすような 自分で洗濯物の処理なんてさせられない。 させた

「ぐ.....っ」

反転。 私は抱えていた自分の洗濯物を隣りの洗濯機に放り込み、 すぐに

再び廊下を駆けぬける。

彼は、ロビーに居た。

随分な長湯だな。天宮柘榴」

開けた浴衣の胸元から覗く褐色の肌。 左右の盛り上がった胸筋の

上を、 痛々しい大きな残り傷が走っている。

鋭い。 若かったが、 覆面で隠れていた表情はやはり冷徹さに覆われており、 髪は長く後ろで縛ってまとめられていた。 想像よりももっと若い。 成人.....しているよね? しかし若い。 目つきは 声も

これが織神楽響。

ちらを見上げている。 彼はいつも三桜が定位置としている畳敷きのスペースに座り、 こ

けて座った。 ぱくぱくと口を動かすだけだった私は、 慌てて彼の前に両膝を付

せ、洗濯物....!」

「洗濯物?」

「か、か、かごかごかご.....!

のだが、声がどもっていると自分で表現したくないのだ。 舌がうまく回らない。 「かご」に舌を回す文字は含まれていない

に始める私。 うまく言えないと思いきや身振り手振りで拙い連想ゲー 実に滑稽である。 ムを勝手

一籠? 脱衣所の籠か」

「そう! 籠の中に.....!」

ああ。勝手に洗ってしまった。すまんな」

恐れ多すぎるわ!

置いておいてくれればあたしが洗いましたけど.....」

· そうか。まあ些細な事よ」

重大な事でしょうが!

それよりも天宮柘榴.....これを見ろ」

「へ?」

でいる。 と叩いた。 響は卓袱台の上にあったソレを、呪文布の巻かれた片手でぱしん もう片方の手はやはり使えないのか浴衣の中に突っ込ん

ている間にこれを読んでいたのだろうか。 卓袱台の上には、なにやら分厚い紙の束があった。 私が湯船で寝

をついて忠犬のように彼の隣へと移動した。 彼は乗せた手を横へずらして紙束を移動させたので、 私は畳に膝

これは?」

貴様が遅い ので、 先ほどの壊れた倉庫を少々調べさせてもらった。

三桜嬢の殺気も倉庫の中に充満しておったしな」

むむ.

こともない。 められたからなのか、 表紙にはボー どうやら紙束は倉庫から持ってきたものらしい。 ルペンで『江本正志』と書いてあるだけだ。 紙に折り目がついていたり皺がよっている。 強い力で握り締 聞いた

この紙束だけが入口に落ちていた」

江本正志って書いてあるけど、 なんだろう」

江本正志は、 我々織神楽家が五月に殺害した男の名だ」

え?」

どういうことなのか。

これは羽田立荘の倉庫にあったものでしょう? どうして織神楽

響の事情に関係するものがあるのだ。

内容は

細と事後記録といったところだな」 この紙束の内容は要約すれば、江本正志の個人情報と取引内容の明 「ふん、どうやら別件で江本正志と取引していた者が居たらし

「じゃあ偶然、 関わりのあった人の名前があっただけ?」

ぴしゃりと私の言葉を両断した響の一言。

混乱に目を泳がせる私に対し、 紙束を見下ろす彼の目は変わらず

冷たかった。

事後記録に軽く目を通したが、 某の動向を掴んでいる」 おそらくこの《 р У g m a **ॐ** とい

ぴぐ.....ま」

はて、 なんだっけ私知ってるような気がする。 ピグマ。 ピグマ。

この名に心当たりはあるか?」 ここに矢神聖歌という人名らしき単語が記載されているが、 貴樣

「 矢神聖歌 ? た人よ」 知っているも何も、 あたしと三桜に羽田立荘を提供

..... そうか」

の方をぺらぺらとめくっていく。 彼は浴衣の下で両腕を組んで唸る。 そしておもむろに紙束の最後

わけがわからない。 私はというと、これがもうさっぱり状況が掴めていない。 まるで

ああそうなの」程度にしか思わない。 んの役にも立たない。そんな紙束に聖歌の名前があったとしても「 江本正志が誰なのか知らないしそいつの個人情報も私にとってな

でも織神楽響も関係しているのが問題だ。

江 本: ...佐々奈。だと?」

響はとある一枚を開いた状態で硬直した。

と、たしかに紙の最後には『六月二十日。お誕生日おめでとう、 おそるおそる彼の顔に自分の顔を近づけて紙の内容を覗いてみる 江本正志の親類だろう。 江

あ。 ああ、そういえば私が並折に来たのって六月の二十四日だったな どうでもいいか。

本佐々奈』とある。

江本正志。 その妻、 江本美香子。 娘 江本佐々奈。 この取引

に同居していた江本涼子は殺害した。 内容からすると美香子と佐々奈は死んでいるのか? 正志も殺害した」 馬鹿な。

なにやら低い声で呟いている。

だ。こちらは脱走した涼子の殺害と、その娘 亡記録を曖昧にすべく織神楽が指示を与えていた。 その二人が 目的さえ果たせば十分だったのだ。美香子と佐々奈には、 子の回収、音々子を守ろうとして我々を裏切った正志の殺害。その 生かしておいた筈だぞ。 家族が全員死亡するとなにかと面倒だから 死んでいるだと」 「だが本妻の美香子と娘の佐々奈だけは、 事後処理を簡略化すべく 解毒爪を持つ音々 正志の死

直後その視線が私の方へと向けられる。 と舌を打つ響。

この宿を提供したという矢神聖歌は何処だ」

え、あ、 今は買い物に出ていて.....」

そやつ、 ただの人間ではないぞ」

え?」

某が並折に逃げ込んだ事情を知っている」 「三桜嬢がこの紙束を読んで激昂するのも無理はない。 矢神聖歌は

「え、え?」

だ。その上で三桜嬢と貴様に宿を提供したのなら.....」 という者と関わりがあり、 「仮定にすぎんが、 「 純血一族の人間が並折に入るという事を把握しているということ 聖歌は、三桜が純血一族だと知っているかもしれないってこと?」 極めて確定に近い。 その ^ р у g m 矢神聖歌は《 pygm a は結界寮と密接な関 a ≫

わりを持っている」

た。 差し出された紙束の開かれた部分。 その一部に響の指が当てられ

そこに書かれた手書きの文を私は目でなぞってゆく。

「見本として a 矢神聖歌を 返却 ? サインは..... p g

品のような書き方じゃないの。 なに見本って。 これじゃあまるで聖歌が、 無機物のような 商

味について語り合ったりした。味覚が無ければできないことだ。 女が汗をかく姿も見たし、 聖歌は確かに生きているのよ。 人間でないものと一ヶ月も、 包丁で指を切って血を舐める姿も見た。 私と三桜が共同生活を送るわけがな 一緒に食事したり紅茶飲んだり、

のような扱い方をしやがって。 ふざけているのかこの pygmaとかいう奴は。 聖歌に対して物

提供材料? 結界寮、結界屋、錫杖.....梵」

たしかに結界寮の関係者だ。

材料。 作 品。 母親。 娘 取引していたのは ... まさか死体?

材料というのは人間の死体?

「ちょっと見せて貰います!」

「ん……ああ、構わん」

初から紙をめくった。 読んでいた部分をそこでいったん閉じて自分の方へ引き寄せ、 最

江本正志の個人情報はもうい

私が見たいのは取引の明細が材料の内訳だ。

その表に書かれているのは隠語だ。 S k u m d d В C 1 а (d) :: 某にもわからぬ

こんなのただの頭文字だ。

B Sku(md)°

O S $\widehat{\mathsf{m}}$ O t h e d а u g h t

つまりこれは骨部頭蓋 (母・娘)という意味

B Cla(d)、これは骨部鎖骨(娘)。

B Sca(d)、骨部肩甲骨(娘)。

B Ste(m)、骨部胸骨(母)。

Bは骨という分類。 わかり易く頭頂部から部位を書き出してある。

この書き方をする奴を私は知っている。

ことがあった。 気付いていたかもしれないけど。 これが人体の全てを書き綴った大量の紙束でなければもっと早く でも似たような手紙を受け取った

だが、 いう、 をよく覚えている。 それは人形制作に協力してほしいという一文から始まって 読むにつれて私はだんだんと嫌悪感が膨れ上がっていっ くそ馬鹿げた内容だったので握りつぶ あろうことか番姉さんの身体の一部が欲 してやっ た。 l1 الما たの た **ത**

あの人形偏愛症、生きていやがったのか)

肉体が欲 軽々しく死使十三魔の序列四位にコンタクトを求めてきたうえに、 しいと抜かしやがる大馬鹿者。

当然、 私は番姉さんの直下部隊に指示を出して始末させた筈だっ

た。

人物ならば、 まさか並折で生きていたとはと驚きを禁じ得な

奴は今もこの街で死体を使って人形を作り続けているというのか。

大方の把握はできたな」

そう言いながら響が音もなく立ち上がる。

が自分を嵌めたと気付いたのだろう」 「三桜嬢は倉庫でその紙束を閲覧し、 pygmaもし くは矢神聖歌

三桜の奴.....聖歌を殺すつもりなのか。

殺すつもりだ。 ていた可能性もある。 いやすぐに殺しはしないだろう。 大元であるそいつの居場所を聞き出してから 聖歌は p y g m aの指示で動い

ここで一つの疑問が浮かぶ。

三桜は響を捜さないのか?

疑問も不要だけどさ。 て回収することでしょう? 嵌められて怒ったのはわかる。 いや別に捜しに飛び出したのならこの でも三桜の任務って、 響と合流し

仮に、 しいじゃない 響そっちのけで聖歌のところへ向かったのなら。 それはお

さん」

なんだ」

三桜が、 たんですか?」 いえ、 誰かが並折まで助けに来るという情報は、 知って

貴様に聞いたのが初めてだ。 心 各地の潜伏先で合図を出

訊きたい事はそれだけか。某は行くぞ」

「どこへ?」

「装束を取りに行く。 洗っている場合ではない」

「ちょ、ちょっと、どういう

も一人は危険だ。それにpygmaとやらには某も用がある。 はその矢神聖歌の顔を知らぬ。 り矢神聖歌という者を探せば両者に辿り着けるという事。 「結界寮がうろついているこんな状況の中では、さすがの三桜嬢で 貴様、案内できるな?」 つま

ゕ゚ 羽田立荘で三桜を待つより、こちらから出向くべきだという判断

許されないだろう。私の命は織神楽響の手に握られているのだから。 私としてはここでじっとしていたいのだが、この男を前にそれ 首肯するしかなかった。

そうと決まれば浴衣一枚では動けないので着替えなければならな

私も立ち上がって、自室に戻ろうとした。

しかし、 突然、 羽田立荘の玄関を叩く音がロビーに響く。

ドン、ドン。

私と響は顔を見合わせたまま硬直。

そっとロビーから半分だけ顔を出し、 スモークガラス越しに人影が見えた。 玄関の方を覗く。

クロちゃ ん ! クロちゃー . Н

この声は..... 明朗? 明朗だ!

背後で息を殺し、 私の表情は明るくなり、すぐさま飛び出していきたかった。 殺気に満ちる劇物から解放されたかった。 私の

居ないのー? 入るよーっ?」

がちゃがちゃと、 不慣れに鍵を通そうとする金属の音。 明朗は羽

田立荘の鍵を持っているのか?

げてくる。口に当てた手はいつでも毒を出せる凶器だ。 で全身が震えた。 響は私の口に背後から手を当て、 「声を出すな」という意思を告 必然、 恐怖

そのまま後ずさるようにロビーの奥まで連れられてゆき、 階段を

上がる。

階下を覗き見られる位置に私と響は隠れた。

誰が来たのだ」

彼の小さな吐息が耳を撫で、私も小さく応えた。

知り合い。よくここに来る人」

血を見たくなければ去るまでおとなしくしていろ」

ほどなくして開錠された玄関が開き、 明朗が入ってきた。

クロちゃ どうかな。 ん ! 明かりは灯ったままだ」 帰って来てない のかな」

明朗と、 というかロビーの電灯を消していない。 もう一人分別の声。 来たのは二人なのか? 気配を探られてしまう。

三桜さーん! 三桜さんも居ないんですかー?」

護しに来た」 天宮柘榴、 結界寮の統界執行員だ。 伊佐乃明朗の要請を受けて保

ゴトン。ゴトン。

明朗の足音とは違い、 もう一人の足音は重々しいものだった。

うわぁ、カザラさん! 土足じゃ ないですか駄目ですよ!」

文句を言うな」

相変わらず細かい男だなお前は。

わざわざ付き添ってやったんだ

「だってきのえと駅の近くを巡回していたのカザラさんしか居なか

ったから.....」

「居なかったから.....なんだ? 俺ではなくアリスにでも付き添い

を頼んだ方がよかったか?」

「それこそ土足を注意するどころじゃありませんよ。 それに中まで

付いてこないでください。 いつも言ってるでしょう、 貴方達は人目

「いちいち口喧しいことだな。女々しいぞ」に付かないようにしてもらわないと」

「なんとでも言ってください」

二人の会話を冷や汗交じりに聞いていると、 明朗の足がロビーに

入るのが見えた。

れを付けているらしい。 その後から、大きな黒革のブーツが続く。 両脚の前で布が揺れている。 なんだろう、

二人が畳に近付くと、 おそらく響が倉庫から持ちだした紙束を見られることを危惧して 頭のすぐ後ろで舌打ちする音が聞こえた。

いるのだろう。 紙束の角が顔を覗かせた。 そこは優秀な私が、 響の前で浴衣の胸元を開く。

「でかしたぞ」

するという癖によるものだった。 してあったのだ。 そう。 私はロビーの電灯こそ消し忘れたが、 これは私の、席を立つ際は元居た場所を一度確認 紙束はちゃ

だから二人が紙束の存在を知ることはない。 これで再び頭を撫でてもらえたのだから得した気分である。

……うーん。 ロビーには居ない。自室に居る のかな?」

おい小僧。アリス・エイリアスから連絡だ」

リスさんから連絡って何ですか!」 カザラさんまで僕を小僧と呼ばないでください ! それで! ア

「 そう怒るな。 傀儡屋がひのえとで交戦中だとよ」

「交戦中? 聖歌さんが?」

ていいだろう。 ああ。アリスもすぐに向かうと言っている。 お前はすぐに梵と林檎を呼びに戻れ」 相手は織神楽響とみ

「でもクロちゃんは.....」

織神楽響に連れ去られたのだとしたら天宮柘榴もそこに居るだろ 心配なら俺がこのまま残って建物内を捜索する」

ないので、こっそりと顔を出せば二人の姿が見える。 ロビーから離れて相談しているみたい。 階段の方へ顔を向けてい

明朗はひのえと駅前で会ったからその姿に感想を抱くことはない もう一人の出で立ちにはおもわず息をの んだ。

覆うマフラー。 手袋、 前垂れ、 硬質的なコー そして頭部の下半分を

全部黒一色。

私の季節感覚が混乱してしまうような格好だ。

をし、のっぺりとした顔の中心部に赤いガラスのような球体。 その男は見慣れない装甲で頭部を覆っていた。 から視界を確保しているのか? 妙な呼吸音に加えてやたら声がくぐもって聞こえると思ったら、 錆びた鉄のような色 そこ

たしか統界執行員とか名乗っていた。

明朗の仲間、つまり 結界寮の戦力ということか。

禍々しい姿は正直人間とは思いがたい。ヒトの形をした化け物だ。 成人男性の平均的な身長を有する明朗が見上げて話すような大男。

今のところ明朗と一緒に私を探しに来てくれたみたいだけど.....

果たしてあの男が織神楽響に対抗できるのか。

そんなわけがない。 私はべつに響に協力したくて行動を共にしているわけではな 殺されないよう最善の選択をしたまでだ。

蝕まれることなく救い出される保証はない。 響の隙を突いて助けを求めたとして、 私があの毒手によって

ここは息を潜めているしかない。

(う.....なんだか気分が.....)

視界がぼやけ、明朗と男の姿が揺らいだ。

か? 織神楽響を背後に忍ばせ、 めまいがする。 吐き気も少しする。 密着状態で潜んでいるから息苦し の

よせ。あまりアレを見るな」

た。 共に様子を窺っていた響が後ろから手を伸ばし、 私の視界を遮っ

「アレって、あの大男?」

ひのえとをうろついていた連中と似た格好をしている。 黒の

前垂れと首巻。 どれもまともに相手をしたくない奇妙な違和感があ

会話している。 カザラとかいう男を見ていたからなのか? 響でさえ気味悪く思う統界執行員。 このめまいと吐き気は、 でも明朗は違和感なく あの

結界寮。ますます胡散臭い。

「 小僧、 スに合流したい。 さっさと判断しる。 だが俺はお前に従うよう言われている」 俺もできればきのえと駅を調べるアリ

「わかりましたよ戻りましょう」

「で、ここはどうする」

「荒らされた形跡もないし、 とりあえず書き置きだけ残していきま

す

「了解だ」

を卓袱台の上に置いた。 明朗は上着の中から出したペンでなにやら紙に文字を書いてそれ

ブーツの音と玄関を開く音が聞こえた。 統界執行員は先に建物から出て行ったらしく、 廊下を踏みしめる

を後にする。 後ろめたそうに卓袱台を見下ろしていた明朗も、 男に続いてロビ

クロちゃん.....」

明朗.....ありがとう.....。

本当はすごく助けてほしい。

今この場で明朗の名を叫びたい。

界執行員が響と対峙し 響の腕を払いのけて、 明朗のところへ飛び出して、 仕留める。 それが理想。 でも叶わない。 盾となった統

有り得ない。

らの方。 傍に置いた響と彼らが合流したところで、 二人が私を助けに来たのなら、 私は人質でもある。 不利になるのはむしろ彼 今ここで私を

それに私自身、そんな勇気が出ない。

に従順となる暗示のようなもので縛られてしまったのだ。 に対する恐怖心は尋常ではない。一挙手一投足、些細な動作に反応 しては怯え、表情を窺う情けない動物となってしまった。 一度あの痛みを味わった私は身に染みついてしまった。 彼の言葉 織神楽響

う。 まさしく私と響の関係は、 純血一族の理想たる支配の形なのだろ

明朗も出て行ってしまった。

ら笑った。 気配も遠のいたのを確認すると、 響がくつくつと肩を震わせなが

は万倍にして返してくれよう」 「この織神楽響が身を潜め続ける屈辱。 本家へ帰還したあかつきに

てしまった。 彼の片手は階段の手すりを握り締め、 まるで泥のように削ぎ消し

...... L

との事。三桜嬢に相違あるまいて」 急いで着替えてこい。 奴らの話ではひのえとで戦闘が起きている

どうやら三桜嬢と擦れ違ったようだな。 彼女と合流せねばならん。 急げと言っている!」 統界執行員どもが集まる

最後の強い 口調で私は跳ねるように立ち上がり、 転がるように階

段を駆け下りる。

くって胸に抱く。 その勢いのままロビーに入って卓袱台から明朗の書置きをひった

階上から見下ろす響の視線に怯えながら、 自室へと逃げた。

まるで悪夢のような現実。

どうして私がこんないざこざに巻き込まれなければならないのか。

あんな奴ら、番姉さんにかかれば簡単に凍結させられるのに。 結界寮と純血一族が勝手に争えばいいのに。

私はほんとうに弱っちい。

自室の戸を閉め、そのまま力が抜けてへたりこむ。

いながらこうして身を伏しているしかない。

この世界は力がすべて。力のない私は、

痛くて怖くて辛い目に遭

やっぱり世界は私にとって絶望でしかないよ番姉さん。

胸に押さえつけた明朗の手紙..... 何が書いてあるんだろう。

綺麗な字だなあ。意外。

けれど用事が出来たので戻ります。 뫼 ようにしてね。 クロちゃんが心配なのでお邪魔しました。 きのえと駅にも近寄らないようにね。 帰宅したらそのまま屋外へ出な 待っていようと思った あと **6**

明朗.....。

ので安全な場所に避難して』 9 三分後に、 統界執行員という結界寮の戦力が一 人 突入する

ありがとう.....。

震える手で手紙を読み終え、顔を上げた瞬間

羽田立荘の正面玄関で、大きな破砕音が轟いた。

PUNICA【あったかい雨の降る夜】6

ひのえと駅に停車した路面電車。

向かうのだろう。 口を出た。手さげのかばんは空っぽで、これから商店街へ買い物に そこから降りてきたある女性は手首に巻いた時計を見ながら改札

夕日も落ちかけている。

る 店が閉まってしまわぬうちに済ませなければと、 その足を急がせ

横断しようと踏み出す。 花柄の模様が描かれた傘を開き、雨霧によって薄暗い駅前広場を

感を受けて反射的に足を止めた。 彼女の意識は商店街の入り口に向けられていたのだが、 妙な違和

· あれ?」

目をぱちくりと瞬かせ、 鼻先に当たった雨粒を指でなぞる。

傘がない。

いた。 握っているのは柄の部分だけで、 肝心の雨を避ける部分が消えて

女は気付かなかった。 それは風に飛ばされて駅の構内に舞い戻ってしまったのだが、 彼

チ、ピン。

直後、女性の視界が縦に一回転の気味の良い、弦を弾いた音。

L

高速で回転する世界の中、 彼女は自分の身体を俯瞰した。

肩から上の部分がない。

瑞々しいピンク色の断面。

そんな映像が流れ、また視界が一回転

その靴底だった。自分の顔に迫ってくる、女性物のブーツ。次に、そして最期に彼女が見た光景は。

?

邪魔くせえ!」

駅前広場を縦横無尽に駆ける影。

首のない胴体をハードルのように飛び越えるついでに、 守野三桜

は跳ね上げられた頭部を蹴り飛ばした。

右足で前へ弾き、それからすぐさま左足で横へ。

サッカーボー ルのように、 しかしサッカー 選手ですら到底不可能

な動作で、人間の頭部を二回蹴った。

放射状に脳漿を撒き散らしながら貼りついた。 無論ゴールなどない。 女性の頭部は駅舎の壁にびしゃりと激突し、

視線を回転させながら自分の胴体が微塵に切り刻まれる姿を捉え 転がり落ちた眼球はもう世界を視認することはできないが、 尚も

他の通行人に踏み潰されてしまった。

胴体を刻んだもう一人 頭部を蹴った三桜はそのまま疾走の勢いを殺さず継続。 矢神聖歌は広場の中心に位置取り、

疾

走する影を逃すまいと目で追い続ける。

聖歌の十指はすべて爪がない。

伸びていた。 剥がれた部分からは血が滴り、 そして肉の中から細いワイヤー が

た今、 ワイヤーは長く、 残った胴体をも地に積もる肉塊に変えたのはこれである。 戦闘領域に侵入した通行人の傘を切り跳ね、首と胴体を分断 今やこの広場全体に張り巡らされて いし . る。 たっ

は収まらない巧みさで十指を動かし、 しかもただ張られているだけではない。 聖歌は器用という表現 十本のワイヤーを操っている。

人間どころかその他の動物と比較しても勝っているであろう守野 の脚力。それを以てすればこの戦いの決着はすぐにつく筈だっ

しかし現実は違った。

もの切れ目が走っていた。 徹する守野三桜の方が苦戦している。 三桜のカプリパンツは この状況、獲物である矢神聖歌に近付くことすらできず、 いくつ 回避に

服装ではな 対して聖歌はロングスカートに長袖のシャ いにも関わらず三桜から一度も傷を負わされてい ツという決して動き易 ない。

青様、慣れているな」

張りだこの 傀儡屋は裏稼業の中でも数少ないですからね。 人気者なんですよ。 大半を抗争の中で過ごしていたくら 並折の外では引っ

自慢してい 確かにその辺は疑わないよ。 三桜が走りながら屈んで転がる小石を三つ、 くらいだ」 私様の速さにすぐ適応できたんだ。 片手に握っ

言いながらシュピッ、と腕を振る。

ている。 族と認識すべきなのだろう。 獣に近くなるというより、 者の認識がその語感とはほど遠いものだと思い知らされる。 走り続ける脚もそうだが、三桜が筋肉を使う際は瞬間的に肥大し そこから生まれるパワーはやはり絶大で、獣人という能力 人間と獣よりもグレードの高い新たな種 人間が

飛躍的向上という、シンプルなものだ。 守野家は織神楽家のように毒を出す能はない。 純粋な肉体性能の

その向上した性能の高さが、半端ではないわけだが。

矢神聖歌はそんな守野三桜の性能に対して、 脅威に思わない。

性能の向上?

それこそ、クリエイターの土俵だ。

てたまるかという思いが浮き出てくる。 呪詛ごときの恩恵に、世界有数の人間改造師である傀儡屋が劣っ

私にも、見えるんですよね。この程度」

野三桜を目で追い続ける聖歌は、 追うことも避けることもできない。 銃弾並の速度を与えられた三つの小石。 ただの人間ではなかった。 弾速に近しい速度で動き回る守 ただの人間であれば目で

穏やかな印象を保つよう常に細めていた目を見開く。

絞る時に発せられるものと酷似している。 その双眼から機械的な音が発せられた。 それはカメラのレンズを

ていた。 疾走行動を継続する三桜は聖歌の目とそこから出る音など気にも のだろう。 それはきっ 瞳の中では虹彩と水晶体の大きさと形が、 と有機的な物質で構成された虹彩と水晶体では 確かに変化し

だけで避けてしまった。 った手段で性能が向上しているらしい。 顔面めがけて放たれた三つの小石を、 どうやら彼女の肉体も、 聖歌は最小限に首を動かす 三桜のものとは違

で操作しているのだから容易に想像がつく。 そもそも広範囲に展開する長いワイヤー、その一本一本を指先一

てあげられるのに」 呪詛なんかに頼らなくとも、 私なら強化改造なんていくらでもし

らば三桜ちゃ て人形だったならなんと素敵な世界になったことでしょう。 「御免被りた 人形は素晴らしいですよ。 愛しくてたまらない。 この世界もすべ hį にね 貴女も本当に愛してあげられるのに」 身体切り裂かれて人形になるのは嫌だ 人形な

-

本当に愛してあげられるのに。

人形であったなら。

宙の体勢で聖歌を睨んだ。 三桜は伸びてきたワイヤ ー二本の間を縫うようにくぐり抜け、 側

歌との距離は縮まらない。 無視もできな 可能ならばさっさと片付けてしまいたいのだ。 この程度の攻撃ならまず三桜には当たらない。 いから動き続ける。 聖歌との会話を愉しむ気など微塵もない。 動き続けているが、依然として聖 可能ならば。 当たりはしない

受けるべく各所に張られている。 追ってくるワイヤーは多くて三本。 残りは三桜が掛かるのを待ち

これが苦戦の要因。

夾 そりと削られてしまい、 長さを利用して形状問わず潜んでいる。 の視界の悪さとワイヤー 厄介極まりない。 自体の細さで認識し辛い。 これでは機動力をごっ それが七

そしてこの雨天。

これも苦戦の要因。

雨水は臭いを洗い流してしまう。 雨霧は視界を悪くする。 雨音は

雑音として邪魔をする。

況なら尚更。 達した三桜には鬱陶しくて仕方のないもの。 たかが雨のもたらす影響だと思われるかもしれないが、 それが集中している状 五感の発

できるわけもない。 戦場の環境が悪ければ悪いほど、矢神聖歌には有利なのだ。 もちろんそれを克服した彼女ではある。 やはり余計に集中力を削がれる。 克服はしたが感覚除去は

けなかったがな」 裏稼業、 傀儡屋か。 貴様がそこまで人形に固執する気配なぞ見掛

日のように工房へ通っていましたけど」 羽田立荘には持ち込んでいませんでしたからね。 その代わり、 毎

またも飛んできた小石を見送りながら口を動かす。

たです」 まるでおままごとをしている感覚で、 羽田立荘の生活も楽しかっ

こいつ、 笑顔を貼りつけて語る聖歌とでは感性の不一致が見られる。 人形と人間に対する感情があべこべになっているの

三桜はそんなことを思った。

いというのに。 どちらも異常の域に入る感性の持ち主であるので一致する方が珍

樣 中身が別物だな。 戦闘に用いる筋力は発達していないからとタカをくくっ 大方、 体重計をぶっ壊す重量してんじゃ ない ていたが、

「まさか貴様が人外だとは思いもしなかった」「否定はしませんけど不愉快な言い方ですね」

貴女に言われたくはありません」

「難儀なもんだね」

、ええ。難儀なものです」

キュパア!

の疾走方向に飛び出す。 地に流れる水を弾き上げ、 弾力をもって張られたワイヤー

「ぐう!」

読みした線刃が待ち受けていた。 仰け反って滑りながら下をくぐっ たが、 更に二本、 進行方向を先

これでは勢いを殺すしかない。

々に三桜の周囲で聖歌の線刃結界が形成される。 回避方向の再考をする間もなく、 もう一本、 更にもう一本と、 次

ついに三桜は捕われてしまい、 腕組みをして溜息を吐いた。

ごしていたというのに。この世界に身を置く以上、こういった関係 る傀儡屋。 になるのも避けられません。 「ほんとうに難儀ですよね。 最初から互いに知っていれば.....」 貴女は純血一族。 つい半日前まで、 私は結界寮に所属す 貴女と私は仲良く過

だな」 知っていて私様に羽田立荘を提供したと思っていたが、 違うよう

なに心を痛めませんもの」 知りません でしたよ。 貴女も、 クロちゃんも。 知っていたらこん

「それにしては随分と嬉しそうに笑っているじゃない か

尋常ではありませんもの。 のですから、 わかります? 笑うしかありません」 純血一族を材料にした人形を作るこの期待 一度は諦めたのにすぐ機会が巡って

やっぱり貴様 р у g m a は 最初から織神楽音々子を欲して

織神楽音々子。

その名前を聞いた聖歌の顔から、 笑顔が剥がれた。

なにやら事情を把握してしまわれているようです

羽田立荘の倉庫なんかに記録を残してりゃあ当然だ」

「ま、いいでしょう。こういうこともあります」

近寄ってくる。 おぞましく線の垂れた指の関節を鳴らし、 聖歌は捕われの獣人に

た肉体にばかり惹かれているようだ。 その視線が三桜の視線と交わることはなく、 ひたすら引き締まっ

商品名。 いうことです」 「ちなみにpygm つまるところ pygm aというのは私の商売名です。 aも傀儡屋も矢神聖歌も、 矢神聖歌は私の 全部私と

は :: : 「おまけに結界寮に所属か。 ならば織神楽響を並折に呼び込んだの

「 え え。 折角なので純血一族当主の人形を作ろうとしたのです」 の制作計画は、 お察しの通り私の立案ですよ。 江本正志の一方的な拒否によって破綻しましたし。 解毒爪を持つた便利な人形

「江本正志の一方的な拒否?」

てほしいといった表情と態度だ。 聖歌は隠すこともなく肩をすくめて話を続ける。 濡れた髪の下で三桜の眉がぴくりと動いた。 むしろ愚痴を聞

んな彼がある日、 そうです。 もともと江本正志と私は商売上の知り合い 『自分ではどうにもならない事態に巻き込まれた』 でした。 そ

世界に名を轟かせる純血一族の脱走者だったらしく、 を引き渡すよう脅されていると」 と言って私に助けを求めてきた。 浮気していた愛人とその娘が、 織神楽家に娘

母娘だったからなのですが。 同時に母娘を回収しようとしたところ、彼は猛烈に拒否したのです。 として庇ってやると言ったのですよ。 すれば彼は織神楽家の標的から外れる。 『話が違う』と言って」 私はその母親と娘をこちらで引き取ってやると言い しかしいざ見本として彼の元へ向かい、 まあ、 わざわざこの傀儡屋が標的 それくらい価値のある ました。 そう

からだろう」 それは貴様が引き取るという名目で、親子を材料にしようとした

私だけではなく、 きました。その時点で涼子と音々子は諦めたんです」 動いていましたから。 先に辿り着かれてしまうことは容易に想像で し当てるのは少々時間が掛かります。 それに二人を欲していたのは あらら、意識の擦れ違いというやつですか。 白々しいな。 彼は私の手の届かぬ場所に親子を隠してしまいま そんな表情じゃあ悪意があったのが丸わかりだ」 私よりも広域の情報網と人手を持った織神楽家も 難し しし で す じた。

「けれど手ぶらで帰る気にはなれなかったと」

正志が織神楽親子と江本親子をすり替えたという旨の記述がされて いたぞ」 その通り。 それでは貴様自身で書いた記録と食い違うじゃないか。 だから代わりに彼の妻と娘を頂くことにしたのです」 あれには

は夢日記程度の感覚で筆を躍らせるだけでい と私の自由です。 そうでしたっけ? 正志が殺害されるのは明白でしたし。 ま、 私が残す記録ですからどう書こう んですよ。 あんなもの 形式です

舌まで躍らせる傀儡屋は一 方的で、 聞く側である三桜のリアクシ

ョンなど気にもしていない。

こようが、 話す間に三桜が汚物を見る目で睨んでこようが、 聖歌は変わらぬ表情で衣服に付いた唾を拭いて話を続け 唾を吐きかけ て

業が必然面倒になってしまうのですよ。 材料自体は生きていても問 備は万端でしたが、 というのも良いものです」 題ないですし。その場合は搬送が面倒ですが、 本親子まで織神楽の手に掛かってしまいますからね。 素早く意識を切り替えることは大切ですね。 そん なわけで江本正志の奥様と娘を回収することにした どんな毒で殺されるかわからない以上、 もたもたしていたら汀 たまには新鮮な材料 心 のです。 解毒準 解毒作

「その時点では生きていたのか」

はい。 イミングで江本親子が死んでしまうとは思いませんでした」 ところが.....ところがです! いやはや、まさかそんな 夕

「貴様の妄想日記には死因が交通事故死、とあったが?」

す ね。 たところ、 ましてね。 にしながら、それでも死体に違和感があったからなのか?」 しょう? 交通事故死ですよ。 私が御宅を訪問したら血相を変えて飛び出 交通事故死と記載したのは、目の前で親子がはねられる光景を目 私が来たら逃げろ、と連絡されていたようです。 どうやら事前に私 そのまま車道で親子揃ってトラックにドーン。 余計な事をするから材料に損傷ができてしまったのです」 傀儡屋の事が伝わっていたようで 迷惑な話で 後で調べ

けど、 ていただけなんです。 した際に飛び出したのは母親の方だけでして。 違和感とい そう考えたわけです。一応死体の解体作業中に確認を試みま 貴様が訪れる直前。 結局よくわからなかったというのが本音です。 いますか.....その時のことを詳しく言うと、実は訪 ぐったりしていましたので、 母親が、 心中しようとしていた。 娘は母親に抱えられ おそらく 私にとってそ ح た 問

は重要ではあ

りませんから。

事実、

親子を材料に

した人形は

問題

なく出来上がったのです」

「それが

「作品、江本佐々奈」

ピシャン!

ま甘美な余韻に浸っていた。 雷光に照らされた矢神聖歌の顔は、 江本佐々奈の名を口にしたま

だ。 別居していた妻と娘も、 つまるところ江本正志は同居していた織神楽涼子・音々子親子も、 材料として提供するつもりなどなかったの

に入れた。 それを聖歌は半ば強引な解釈と、 身勝手な行動で、江本母娘を手

貴様はべらぼうに屑だなあ」

「よく言われます」

抱く。 にこやかに返す聖歌。 あまりにも自然なその笑顔には嫌悪感すら

で、貴様自身も作品ってか」

の師匠が作った人形ですから」 私は私の作品ではないですけどね。 私は先代の傀儡屋、 つまり私

奴だな」 「体内に切断用ワイヤーを仕込んだり、 その師匠は随分と悪趣味な

ているんですよ」 悪趣味..... 確かに、 そうかもしれませんね。 でも、 今では感謝し

ピン。 と指先から切断されたワイヤー が抜け落ちた。

彼女はおもむろに自分の袖をめくった。

けたバイオレットモノフィラメントだろう。 腕に走った縫い目が露出する。 縫い糸の色からして、 三桜が見つ

上げはじめた。 さらに少し屈んでロングスカートの端を掴み、 ゆっ くりとたくし

あまり見る機会のなかった彼女の細い脚があらわれる。

膝も見え、太もも全体が露わになっていく。

分の右太ももを撫でた。 スカートを右腕で胸の前に抱えた聖歌は、 ついに下着が見える位置まで 下半身すべてを、三桜に見せた。 もう片方の、 左手で自

そのまま艶めかしい指遣いで少し横へずらした。 雨に濡れた手は上へ上へと滑り、指が下着に引っ 掛けられる。

17

ご覧の通り、さすがに子供は作れません」

三桜の反応をよそに聖歌は衣服の中を次々に見せる。 見せられた聖歌の股関節から太腿の部分に、 三桜は言葉を失った。

シャツの中。腰部や胸部、腹部まで。

矢神聖歌の全身を走るバイオレッ トの縫い目は数えきれない。

そして肌の色が、それぞれ違う。

味溢れるでしょう?」 一 応 作られた当初は透明の縫合糸でしたけど。この方が、

聖歌は自分の身体を見せて悲惨さを伝えたいのではない。

自慢しているのだ。

とても嬉しそうに。

人形としての自分を自慢している。

もはや呆れるしかない三桜は顔をしかめて首を横へ振った。

った母と妹と私、 によって殺されました。 並折へ家族旅行に訪れたあの日 三人分の死体で、 父親は使用不能だと言われて廃棄され、 矢神聖歌が作られたのです」 私の家族は、 先代の傀儡屋

・部屋にあったあの写真は.....」

真です。 しませんよ、三桜ちゃん。 いたでしょう?」 ああ、 撮影したのは私ですね。 あんなものまで見ていたのですか。 あの写真は、 妹とは双子でしたから、 私たち家族の生前最期の写 そういった詮索は感心 よく似て

随分長生きだな」

匠は変わらぬお姿で百年近く生きておられるのではないでしょうか」 そうでしょうか? まだ四十数年ほどしか生きていませんよ。

いか。 これはこれは。 いやいやこんな無機的な物と比べるなんて怖気が走る。 獣人である私様と比較しても遜色ない

三桜は心中嘲笑った。

矢神聖歌、貴様にはがっかりだ」

度にしか思ってい 右することなどない。実際彼女は「ああ、 べつに人形に対する狂気を帯びた思考と行動が、三桜の心情を左 聖歌との会話は三桜にとってあまり心地の良いものでは ない。 いるよねそういう奴」 ない。

う存在のある点に対してひどく不快に思い失望するのは当然だろう。 だが彼女が獣人であり弱肉強食を信条とする以上、 矢神聖歌と

人形は 食べられないのだ。

恣意的な思考をする者の多い守野の 人間にとって、 そればかりは

例外的に、 りを持つ。 一貫して合理的に、 通う血液によって機械的に、 こだわ

人肉食、いわゆるカニバリズム。

これは守野家に見られる風習で、宗教的な慣習ではない。

支配』。その証明として獣化能力を身に付けた守野家が行ったのが、 人間の捕食である。 純血一族総勢十三家系に共通した思想『人間を超えた人間による

味合いが強い。 つまり人間に対して弱肉強食の現実を示す為の見せしめという意

るのだろうか。 以外には積極性を持たない。 無論、その食欲は他の動物にも向けられるだろうが、 やはり血に宿している呪詛の残滓に因 彼らは人間

らいであろう。 どんな呪詛を宿したのか。 彼女自身もそればかりは他言しないようにしている。 それを知るのは当主である守野三桜

ってひどく不愉快な存在。 ゆえに人間の形をしながら人間ではない矢神聖歌は、 守野家にと

そんなもんを喰わせようとは、無礼にも程があるだろう。 識したけどね。 はや弱肉ですらない。 は死肉だろう? 超常の力を持っていたとしても、人間の肉であれば人間として認 貴様の肉はどうだろうね。 それも一人じゃない。三人分の死肉。 そうだな 腐った残飯だ」 貴様の身体を構成するの この私様に 貴様はも

ふふ 線刃結界の中で嘲笑を続ける三桜に合わせてなのか、 と笑い声を出した。 聖歌も「 ふ

目は全く笑っていなかったわけだが。

知った事ではないです」

冷めた目つきで口だけをにたり歪ませる。

は気に入らなかった。 状況は圧倒的に聖歌が有利。 それでも口の減らない三桜が、

気に収縮し、貴女を圧し切ってしまうというのに」 怯えないのですか? 私がほんの少し操作すればこ の線刃結界が

は馬でも鹿でも犬でも猫でもないぞ」 なんだ怯えてほしいのか。 どんな声がお望みだい? ただし私様

「正解は雌豚でございましたブヒブヒー.

た。 鼻先に指を当てて鳴き真似をする女に、 聖歌は軽蔑の表情を見せ

ワイヤーの一本が鋭く突き出て三桜の頬に切り傷を付ける。

゙このあばずれの.....腐れ売女」

の死肉の方だろう」 残念でしたこう見えて私様は処女だ。 それに腐っているのは貴様

「腐ってなどいない」

ıλ ſΪ 使っ せながら未練がましく漂い続ける死霊だよ」 死んだ者の肉体は腐り朽ち果てる。 それは生ける者なら誰もが受け入れなければならない現実であ て腐蝕を防ごうが、 己の魂を収めていた器に対する敬意でもある。 魂を失った肉体は、 それが理なんだよ。 腐蝕の道を辿るしかな 貴様は器を腐ら 防腐剤を

黙れ! 貴女はそんなこと言わない! 言わない筈なの

「..... は?」

私の身体を はそんなこと言わない! 妹を侮辱する人間が居るものですか 言わない 人間!」 三桜ちゃ

おそらく、 聖歌はまだ半日前の三桜と目の前の三桜を同一視でき

ていない節があるのだろう。

ただ並折の結界を求めて訪れただけの逃亡者。

世界屈指の殺人集団の一員。 まれても尚、毛ほども動じない超常者。 そう思っていた女が、 実のところ異常に異常を上乗せしたような キシキシと線刃の擦れる不協和音に包

ういった関係になるのも避けられません』と言ったにも関わらず、 それに適応できていない自分が居る。 れが突如として豹変した今。自分で『この世界に身を置く以上、 半日前までの日常を過ごす姿は、人間として想定内であった。

偏愛症の塊である聖歌には振り幅が大きすぎ、急すぎたのだ。ハーションテンタス 人を人形のように見なし、人形を人のように見なす傀儡屋。

は比べるのも阿呆らしいよ」 な女だからなあ。 れ売女なんじゃないか? その点、私様は同性しか愛さないピュア あれ ? 自分の身体を商売道具にしていた貴様こそ、まさしく腐 もうあれだ、 貴様の腐敗臭と私様の純潔な香りで

...... L

「だからさすがの私様でも貴様は愛せないね。 文字通りの愛玩人形にされていそうだもん。 見本として送った先 愛玩人形、 わかる

頬をひくつかせる傀儡屋の

と思っ 少し生かしておけば人形らしく線刃に怯える様を見せてくれるか たのに。

妹をこれ以上侮辱されるのは、許せない」

ワイヤーを指先に繋げ、結界収縮の構えに入る。

- 貴女にはうんざりします」

「こっちの科白だっつうの」

そして彼女は 三桜の背筋と上腕の筋肉がメキリと音をたてた。 広場の石畳に拳を突き刺した。

-な -

そおら喰らえええええええええ

ビシビシビシビシビシ。

地面に亀裂が走り、割れた。

石の畳返し。

地にワイヤー を突き刺す線刃結界は聖歌のコントロー ルから離れ、

石塊が枷となり使用不能な状態に。

まるで天地がひっくりかえったような錯覚。

聖歌の頭上には、三桜が弾き上げた巨大な石塊。

その影に覆われながら悲鳴をあげるも、 彼女の脚力では回避など

不可能。

そんな!

は水に薄められ流されてゆく。 あっさりと千切れた片腕が外へ転がり、 地響きと共に、 聖歌は石塊の下敷きになった。 断面から吐きだされた血

桜でさえ生きているものと思い込ませた。しかし中身はどうだ。 鋼線は千切れることなくずるりと埋まった聖歌の方へ伸びていた。 血も出るとは精巧な」腕を拾い上げた女はその断面を覗いて唸る。 骨の中には鉛の筒が通い、 外観は人間そのもの。その上、血まで流す。 人間がおよそ体内に仕込んでいる筈のないモノが詰まっていた。 筒の中を幾本もの鋼線が走っている。 代謝も行う身体は三

リギミックの一部だろう。 あとはゴム管に包まれた銅線。 これは指先のワイヤー 射出・巻き取

よくもまあ、 あの細身の中にこんなものを仕込んだものだ。

傀儡屋の技術に素直に感心してしまう。

に腐っていない肉体だ。 面積の少ない脂肪層。 細胞も健在。 聖歌の言う通り、 それは確か

などなかった。 しかし三桜は腐った死肉であるという言い分を取り下げるつもり

たりの位置 ペティナイフほどの長さまで伸びた爪を、 肘から千切れた腕を持ったまま、彼女は自分の人差し指を立てる。 その柔らかな皮膚に差し込んだ。 腕のちょうど真ん中あ

爪が骨に届い た感触。

切れ込みに爪を四本差し込み、 そのまま聖歌の腕を回し、 一周する切れ込みを入れた。 骨だけ残して肉を削ぎ取る。

血だまりのできた地面ヘビチャリと落とす。 爪にこびりついた脂肪や粘液、 血液を払い、 削がれた肉片と共に

骨の剥き出された部分は雨で血を洗い流され、 三桜は黄白色をじ

くり眺めた。

骨には、 紋様が彫られていた。

様が死肉に生きていると錯覚させていた、 見たが.....こいつぁ、 「古代の異端術法。それも異端中の異端 クレイジーだ」 禁術ってやつか。 い わゆる動力源。 初めて この紋

顕現 したと錯覚させる現実に近い幻想。

腐っていた。 骨から離れ、 地面に落ちた肉片は瞬く間に変色し、 異臭を放って

あるべき姿に、 戻ったのだ。

₹ : :

骨の空洞から垂れた鋼線がピクリと動いた。

鋼線の続く先 聖歌が埋まっている砕けた石塊。 そこが微弱に

揺れている。

「 精巧な上に頑丈ってか。 しぶとい人形だ」

「か..... かはっ......」

積もった石が次々に転がる。

まだ動いていた。 そう。 巨大な石塊の直撃を喰らい、 押し潰されても、 矢神聖歌は

早く死ね。 ああ、 もう死んでるのか。 どう言えばいいんだ」

「うぐ.....うううう.....」

伸びてきた。 砕けた石塊の隙間から一本の腕が伸び、 そのさらに奥から視線が

なんて.....ちからなの......

純血一族を嘗めすぎだろ貴様。 あんなモンで動きを封じられると

思っていたのかよ」

な、 あ?」 なみおりの.....け、 けっかいは..... じゅ、 呪詛を....

. 呪詛を.....弱効化.....するはずなのに.....

獣化ができなかったから、 族の諜報員がことごとく殺されたのは、 あるからなのか。 おお確かに」ぽん、 いいこと聞いちゃった」 と手の平に拳を当てる。 妙だと思っていた。 呪詛弱効化という結界効果 なるほどね、 「そういえば完全な 純血一

状況は逆転。

三桜は石の上に座り、 勝敗は決した。そういうことなのだろう。 肩を揉みながら首を回している。

かんぜんな..... 獣化ですって.....? あなた..... まだ余力を

...

出さにゃならんのだ」 当然だろうが。 どうして私様がたかだか人形遊戯ごときに本気を

るんだよ」 私様もいい歳なんでね。 お人形さんと遊ぶ時期はとうに過ぎてい

「てし、ろ

「ああ?」

き返す。 まともな発声すらできていない聖歌に、三桜は耳に手を添えて聞

石と石の隙間から覗き込み、 「聞こえんなあ」と大声で伝える。

「回しろ

ちゃんと喋りやがれ残飯人形!」

撤回しろと言っているんだああああああああああり」

なっ!」

ピピピピピピン!

切断を免れたものの、 反射的に両腕で顔を覆った三桜は後方へ飛び退いた。 彼女の腕や脚には深い切り傷ができている。 かろうじて

五本のワイヤーは唐突に石を貫いて突き出てきた。

まるで生きているようなうねり。

まるで感覚器官を身に付けているような挙動

五本の蛇のように、すべてのワイヤーが三桜を切り裂いたのだ。

許さない許さない許さない」

ビュン!

ビュルン!

石の下から突き出たワイヤーは狂乱する。

人形遊戯 お人形遊び..... 私の業が、 戯れだと.....

パシン!

パンパンパンパン!

鞭のようにしなる五本が石を叩きまくるその光景は、 頭を打ち付

ける狂人の姿を連想させる。

殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる」

距離を置く三桜の目の前で石が切り刻まれてゆく。

言葉を発する間もない。

ものの数秒。 歪だった石塊は、 小さな小さな綺麗な綺麗な、 断面

の整った欠片になってしまった。

その下からようやく傀儡屋の女は上半身を起こし、 姿を現す。

もはや人間とはほど遠い。

矢神聖歌とはほど遠い。

皮膚の大半が剥がれ、 各所から鋼線の飛び出した異形。

た。 悲惨で哀れな、 の亀裂から荒い呼吸音を出す聖歌。 人間に成りすました人形の、 彼女は完全に発狂状態だっ なれの果て。

対して三桜の方は、

呆れ冷めた眼差しで壊れかけの人形を眺めていた。

興味なんて失せていた。

放っておいてもこいつは勝手に壊れる。

喰えもしない人形の相手など、もう興醒めてしまった。

様の遊びに付き合わされた私様の身にもなれよ」 たお人形さん。 遊びだよ遊び。 もはや壊れかけの貴様に、 貴様そのものが玩具。 おもちゃの国からやっ なんの価値がある?

患部をペロペロと舌で舐めながら言った。 顔に付いた血を乱暴に腕でぬぐい、手の甲に付けられた切り傷の

かす彼女から離れるように、 きるわけもない矢神聖歌の哀れな姿。 脚が潰れて、へし折れて、 三桜はゆっくりと後退する。 無数の鋼線が絡み合って、 広場の中心で荒々しく肩を動

待ちなさい.....待てよ守野三桜ぉ!」

聖歌は叫び、 残った唯一の片腕を力いっぱい振る。

ぶち。 ぼとん。

縫合糸がすべて切れ、 その腕も空しく地に落ちてしまった。

撤回しろ。撤回しろお.....」

に貴様のお遊戯に大勢を巻き込んできた報いも受けろ」 やだね。 純血一族に手を出し、 嘗めた真似をした報いだ。 ついで

いだから、 撤 回しなさい.....。 妹 が … : 私の妹まで. 私の

妹への愛情まで.....否定しないで.....」

る地面に打ち付けた。 絡まった下半身によってバランスを崩し、 聖歌は全身を水の溜ま

それでも顔を上げ、背を向けて歩き出した女を呼んだ。 受け身すら取れないしたたかな衝撃。 痛覚機能の停止した聖歌は

振り向きもしない。

地に激突した。 ついには首の接合部が鈍い音と共に折れ、 顔面が水飛沫を上げて

聖歌の全身はもう言う事をきかない。

溜まる水に顔が沈んでゆく。

ろしている。 顔の無い子供の像と女性の像が、 地にへばりつくがらくたを見下

に 通行人が広場に少しでも足を踏み入れれば命を落としたというの 中心に位置する像には傷一つなかった。

呼ぶ声。 絡まる鋼線に巻き込まれた無線機。 応答者はなし。 ノイズ混じりに傀儡屋の名を

と並折の空に腰を据えている。 雷の鳴轟と爆光を腹に抱えた雲が、 今後も容赦なく涙雨を流さん

(どうして.....)

することはないだろう。 ひたすら雨粒を全身に受け続ける矢神聖歌が、 二度と晴天を目に

(私は、なにも、悪くなんて.....)

眼窩や鼻腔から垂れ流れるのは、 後頭部の亀裂から入り込んだ雨

(私はただ、 姉として姉姉姉と姉と聖歌お姉ちゃ姉ちゃんががが...

回線はショー 頭蓋骨の中でなにかが弾け、

(あの子の..... すすす好き..... にん..... ぎょ......う)

脳髄も機能を停止。

偽りの表情を模していた瞼も頬肉も動くことはない。 動かす思考

回路もない。

しかし最後に意思なき彼女の唇だけが水中で微動した。

と、もも.....かか......智....歌.....」

誰にも聞こえることのない溺れた呟き。

固定された眼球。 その視線の先には、 千切れた片腕。

爪のない指の一本には

_

指輪の跡が残っていた。

PUNICA【あったかい雨の降る夜】7

羽田立荘の濡れた庭。

瑞々しく水滴を湛えた芝生の上に座り込む。

いつになったら止んでくれるのか。 前髪からぽつぽつ滴るしずく

に問い掛けてみる。

問うまでもなく答えは全身に返ってきていた。

今日はよくずぶ濡れになる日だ。 水を吸った浴衣がぺったりと身

体を締め付けてくる。

少し前までの、あの凄まじい音が嘘であっ たみたいに、 庭は静か

なものだった.....。

周囲にたちこめる異臭が鼻をつく。

未だ雨に流されることなき臭い。

でも嫌悪なんてしない。

顔をしかめたりなんてしない。

人形は、なかなか死ねないから困る.....」

頭だけになってしまった大男が、 私の右腕の中に抱かれたまま、

呟いた。

私を助けに来てくれて、 式神などという化け物を相手に単身挑ん

だ化け物。

弱い私は、 敬意を表して、 彼らのことを化け物と呼びたい。

統界執行員カザラ。

私が彼に抱いた第一印象はあまりよくなかった。

何故ならば、 その姿を受け入れたくなかっ たからだ。

日常を送るにふさわしくない頭部装甲と、 どれだけの血を染みこ

ませたのかわからないコートと前垂れ。

響を含むそういった異常を体現した姿に怯えてしまうから、 折に於いては場違いな思考でもあるが、それでも私は、 同化しても違和感のない居姿をしている。 純血一族の守野三桜や、 結界寮の梵や林檎や明朗だって、 これは私のエゴであり並 忍装束姿の 嫌いだ 日常と

光景を見て、ひどく悲しかっ 響よりも禍々しい格好をしたカザラが、 たのだ。 普段着の明朗と共に立つ

彼がすぐに助けてくれた。 明朗の書置きを見た直後、 裏の勝手口から飛び出した私を保護し、

それなのにそう思ってしまったのは、 本当に申し訳ないと思って

カザラ.....さん」

私が呟き掛けると彼は「おや俺の名前を憶えてくれたのか」

嬉しそうに赤い光源を点滅させた。

臭と共に腐敗している。 庭じゅうに散らばった彼の身体達は、 注ぎ込まれた毒の影響で異

るな」 傀儡屋の作品として、 罪を償い続けてきたが、 ようやく解放され

' 傀儡屋って、聖歌のこと?」

問いには点滅で返し、肯定の意を示してきた。

事情は知っている。 この宿で共に過ごしていたそうだな、 天宮柘

榴

ると信じ込んだ、 していたからだろう。 頷いて応える私が、 な そう言っ 傀儡屋としての聖歌に対して悲愴な面持ちを カザラは「矢神聖歌は人形だ。 自分も人であ

聖歌はやっぱり人形だった。

信じるかどうかは私の自由だ。 正直信じられ ない。 聖歌が人形である証拠を目にしていないから、

が結界寮の人間だったとしても然したる影響はないもの。 かされても、 聖歌は私にとって姉のように思って過ごしてきた。 それが変わることはない。三桜とは違って、 傀儡屋だと聞 私は彼女

てこない。そんな気がした。 けれどいくら私がそう思っていても、 たとえ人形だとしても……私は聖歌と同じように接すると思う。 きっと聖歌はもう

私。三桜。聖歌。

言ったところで意味なんてない。 三桜は二度と聖歌と相容れないだ 羽田立荘は三人で使っていた場所だ。 私だけが、 気にしないよと

っていると予想していたし、傀儡屋が純血一族の能力者を材料とし て欲していたのも事実なのだから、 聖歌が三桜を純血一族だと知っていたのかはわからない。 知っていたのかもしれない。 響は 知

.....間違っているのは私だ。

普通の生活に重きを置いている。 この時点で間違っているのだ。 んな考えを三桜が聞けば青筋を立てて怒りを示すだろう。 あの三桜でさえ警戒して過ごすこの並折で、 私は

割り切れない。

甘ったれ。

私だけが場違いの馬鹿女。

傀儡屋が交戦中』 たしかカザラがそう言っていた。

胸が締め付けられる思いだ。

聖歌と三桜は戦っているのだ。

結界寮と純血一族として。 私なんかと違っ て割り切っているのだ。

間違っていても、こんなの.....いやだ。

生きたい。情も保ちたい。

げずに、 なんとか頑張って、三桜に迷惑にならないように、 ならば並折になんか来るな。三桜にそう言われちゃ この場所で生きたい。できなきゃ死ぬ。当然だよね。 この意志を曲 いそうだ。

私は右腕に抱く頭を見つめた。

こんな大男が、 こんな姿になってしまう場所なのだから。

「聖歌がカザラを作ったのね.....」

「二百八十五体目の作品だ」

そんなにたくさん.....全部、 死体や生きた人間を材料に使っ たの

よね.....」

くなってしまった可哀想な人形でもある」 「彼女は、そうだな.....悪い人だ。そして悪いことを悪いと思えな

「貴方は

処刑された死体なのさ」 ねじ曲がってしまう。 だから俺は覚えていないが 「俺も悪人さ。 傀儡として蘇生させられると、 生前の記憶が混沌と 悪行を働いて

「統界執行員は、みんなそうなの?」

この問いに、点滅は返ってこなかった。 そうなの? というのは、 みんなが悪人なのかという意味だ。

彼は今わの際であっても、 聖歌のことを話し続けた。

彼女 いせ、 矢神聖歌は、 彼女達と呼んだ方がい いな

もはや独り言なのだろう。 赤い光源はその光を弱めている。

私を認識できていない。

た 姉 た 姉。 聖子と智歌。 人形と一つになってしまっ 二人で.....聖歌。 人形が好きだった妹。 た 妹。 妹と一つになってしまっ 妹が好きだ

親の身体も少し混じっている」 そして 機械音に近い声になってきた。 己の家族を皆殺しにした傀儡屋に、 私にはあまり聞き取れない発声だ。 憎悪の念を抱く母

カザラの頭部にも毒が染みこんでいた。

頭部装甲の内側から、 中身が腐る異臭が昇ってきている。

・ 全部混ぜ込んで 矢神 聖歌

光源の赤が消えた。

声を掛けても、カザラは応えない。

彼は彼なりに罪を償うという目的を持って人形であり続けた。 そ

れはきっと彼自身で見出したことだ。

ならば聖歌は......傀儡屋は......人形を何の為に作っていたのか。

蘇生させられた人形の、その後を考えていたのか。復活させられ

てしまった人格は、 記憶が混濁して生前のような生き方すらできな

いんだぞ。

悪いことを悪いと思えなくなってしまった可哀想な人形

聖 歌。 カザラは辛かった筈だ。 他の人形だって。

.....これじゃあ本当に悪人だよ。 最低よ.....貴女。

カザラが動かなくなったその直後。

私の左腕で抱えていた、 もう一人の身体が揺れた。

真っ白な忍装束。

赤に濡れた忍装束。

織神楽響が目を覚ましたのだ。

む.....ぐ.....

動かない方がいいです。助かりたいのなら」

カザラと響。 この二人は、 私が危惧していた通り、 戦力差があり

すぎた。

片手しか使えない響に、 しかし カザラは手も足も出なかったのだ。

「自爆とは、やってくれる」

思ってもみなかった筈だ。 響は驚いただろう。まさか自分がこんなに手痛い傷を負うなんて カザラは捨て身の攻撃で、 響に重いダメージを与えたのだ。

戦う間、響はカザラを罵倒し続けた。

跳躍力に劣り、反射速度に劣り、成すすべもなく全身に毒爪を刺

されまくったカザラを、ひたすら虚仮にした。

毒の回りが遅いカザラが人形だと気付き、さらに罵倒した。

私の知る響らしからぬ形相で、 声を荒げながら。

"貴様は雑魚だ!』

『勝算はない!』

『未来などない!』

『絶望して死ぬしかない!』

。最期は独りだ!』

『惨めに独りだ!』

『助けに期待するな!』

『期待するから惨めなのだ!』

期待は期待した分だけ絶望に打ちひしがれるのだ!』

' 裏切られて絶望するのだ!』

'絶望を覚悟してなお期待したところで!』

要らぬ駒として貴様は捨てられる!』

 \Box

自虐しているような、 そんな光景だった。 まるでカザラを罵倒しているのではなく。

四肢を腐らせながらカザラは『たしかに勝算はない』 でも私もカザラも、彼の心の内を知るわけがな と認め、

かし『敗算ならある』と言った。

空中で密着していた二人が爆発。

自爆という、敗算。

実力で式神にのしあがった響が相手だったからこそできた、 その

反射神経と機動力を使わせない、 最適の算段。

そんな滅茶苦茶な結末。

カザラは残骸と化し、 織神楽響も致命的な傷を負って、 どちらも

の腕の中に居た。

致命的な傷

致命傷。

そう.....響が爆発によって受けた傷は、 深かった。

肝臓に届いている。 爆発の衝撃で内臓が破裂している可能性だって無視できない。 れているみたいだし、これが同じく刺さっていることも考えられる。 カザラの破片が刺さっている。 肋骨の隙間から内臓 もし傷つけていたら死に至る。 肋骨も何本か折 おそらく

とにかく近距離であんな爆発を受けたのだ。 致命傷になりうる要

素が身体の各所に発生している筈。

私は彼にそう教えてあげた。

すぐに治療すれば間に合います」

...._

並折の医療機関が駄目なら、 この地を離れないと」

-

「すぐにでも三桜に合流して

たわけ」

私の膝に頭を乗せている彼は、 赤く染まった覆面が小さく動き、 それから私を見た。 右腕側に抱かれたままのカザラを さえずるような一言。

· たわけ者だ。貴様は」

の響を両腕に抱いた私の姿に対するものだと気付く。 細い溜息を吐き、 彼は疲れ切った、 たわけと言われて困惑するが、それが結界寮のカザラと純血一 撫でるような口調。 ひどく眠たそうな目で、 「もう助からぬよ」と、 威厳ある彼のものとは思えなかった。 私の膝を叩いた。 空を仰いだ。

「どちらにせよ。な」

「どちらにせよ?」

まいて」 かかる。 られると出血量が多いからな。 貴様の検分通り、 本家から同族の血液を調達するには、 おそらく肝臓に傷が付いておる。ここを傷付け 純血一族は、 皮肉にも輸血に手間が いささか時間が足り

もしれませんよ」 もしかしたら三桜が並折の外に織神楽家の者を待機させてい るか

しまった。 ぼんやりと上を向いたまま下から私の顔を見つめ、 また笑われて

諦めてしまっているのか。

どちらにせよ助からぬと、 言っておろうに」

どうして。

どうしてそこまで悲観的なんだ。

私は響の人質という身であるにも関わらず、こうして助かる手段

を提案しているんだぞ。

それをたわけ者と言われたって、私は構わない。

そりゃあ、この人は怖いし解放されたくて仕方なかっ

結界寮という集団から逃げ延びようと。 でもそれは 、この人なりに並折で生き抜こうと。

生きようとしたからでしょう?

られながらも単身逃げ延びてきた貴方の執念は、そんなもんじゃな どうして、ここで諦めるんだ。関東からここまで、 追っ手を付け

い筈でしょう?

のかわからんようだ」 困惑しているようだな。 なぜ、某が、 こうもあっさりと観念した

わかりません」

たしかに三桜嬢ならば、 並折の外に純血一族の医療班と輸血の準

備まで手配するかもしれぬ」 「だったら.....!」

《三桜嬢が、 某を並折から生きて出そうとしていたなら》 な

はい?」

言っていることの意味が解らなかった。

三桜は、 響を回収する為にやって来たのではないのか?

違いない」 貴様の言う通り、 三桜嬢は某を回収しに来た。 おそらくそれは間

ほら。 あいつは響が中部圏に入った頃。 響だってちゃんとわかっているじゃないの。 つまり六月から並折に来ていた。

明朗と話した時に思ったように、響の逃走情報は純血一族だっ んでいただろうし、式神という重鎮を放っておくわけがない。 て掴

三桜が式神の響を助けに来たと考えるのは当然じゃないか。

そう述べてみても、彼は「少し違う」と言う。

としていたなら》 そう認めたのに、 なにが違う! という言葉が出てくるのはおかしい! どこが違う! そこから《三桜嬢が、某を並折から生きて出そう 《三桜嬢は某を回収しに来た》。

わかったとでも言うかのように頷いて、 ... そうか。 貴様は.」彼はようやく私の困惑する原因が

組織というものの複雑さに、 血を纏った舌遣いで言った。 あまり触れたことがないのだな

うむ、 と響は何に納得したのか数拍置き、 続ける。 ようするに

_

ようするに?

回収はするが、 助ける気はない。 そういう事だ」

響を回収はする。

でも、響を助ける気はない。

あまりにも彼が平坦な口調で話すから.....。

これがとても辛い内容だと、私は気付けないでいた。

の口から、 それを言わせてしまう事。 それはきっと今後も私の

心を締め付けるとは露知らず。

呆けた顔で彼の口の動きを、 ただ見つめるだけだった。

守野三桜は織神楽響を、 殺しに来たという事だ」

味がない。 だから、 たとえ急げば助かるやもしれない傷であろうと、 急ぐ意

三桜に合流する。 並折の外には、 医療班も治療の準備も、 それは 首を差し出すのと同義。 用意されてい

彼は独りで逃げ続けるしかなかったのだ。

心積もりだったのか? から。その時点で諦めていたのか? いや……三桜が来ていると知ったのは、私と会った時だったのだ 観念して三桜に首を差し出す

響さんは式神なのに.....純血一族はどうして助けようとしないの

う。 た。 桜嬢の間に、 「べつに三桜嬢を派遣したのは純血一族十三家系の総意ではなかろ 名目は《救出》。しかし本意は《殺害》。命令を下す御上と三 おそらく織神楽家の何者かが某を煙たがり、今回の絵図を描い 織神楽が入ればこうなることも納得だ」

.....なによ、それ。

織神楽響を殺そうと企てたのが、 同じ織神楽家の人間ってこと?

折で響が死んだという結果は、 って宜しくないってことくらい。 で、 でも。 いくらなんでも織神楽家だってわかっている筈よ。 織神楽家ひいては純血一族全体にと

引いてしまう そんな結果が出回ってしまえば..... 純血一族が並折に対して一歩 つまり士気と積極性が下がってしまう。

まう。 それに並折が他勢力に対して牽制する恰好の宣伝材料になっ てし

がにできるわけが 身内の謀略の為に、 組織全体が後々不利になるようなこと、 さす

あ。

..... ああ。

..... そうか。

ゕ゚ だから、三桜が響を回収して直接手を下す必要があったってわけ

そういうことなのか.....。 死体が並折で見つかりさえしなければ、 どうとでもなる。

ひどい.....」 こんなの、ひどい。 あんまりだ。

て 系もある。 者とて大勢居る。 たところで小奇麗な関係とは限らんよ。 「組織は往々にしてそういうものだ。 あれだけの大所帯ならばむしろ円満な方が不自然だろう そんな織神楽内のいざこざを外から見て楽しむ家 純血一族も、 某の、 当主の座を欲しがる 血が繋がってい

ţ もう喋らない方が.

「任務に失敗し、 た種だ。 悔やんだところでどうにもならん」 負傷したのは事実。 実力主義のこの世界、 己が撒

これ以上は死期が早まる..

響さ

見くびるなよ天宮柘榴」

織神楽響は 私の膝から頭を離した。

この状態で動けるのか.....なんて耐久力なのだろう。

られている。 立ち上がったその足はふらついているが、 纏う空気はパリッと張

呆然と見上げるだけの私に、 彼は背を向けた。

歩き出す。

どこへ.....行くの。

もう、 貴方が行く場所なんて.....。

もう、 貴方が帰る場所なんて.....。

組織内に確執が生ずるのは避けられぬ事。そうは言ったが、それ 某を見くびるなよ。 守野三桜には捕まってなどやらんよ。

を実行に移すは反逆。 わかるな?」

そいつは実行に移し、こうして響を死へと向かわせた。 織神楽家の中で、当主を謀殺しようとする輩がいた。

る命を下したのは御上であろう。だが御上が、 のある者であっても、彼女を動かすことはできん。彼女を並折へ送 いう式神を消す理由がない。 つまり 三桜嬢はあれでも立場のある人間。他家系の三下や、 御上を守護する某と たとえ権威

上からの命令が、 三桜へ伝わる間に、 変えられた?」

て、 あろうな。 三桜嬢は海外に居た。 伝令役の中に織神楽の息が

掛かっ た者でも居たのだろう」

上からの命令は、 本当に響の救出だったかもしれない。

だが、 響を邪魔に思う奴の 海外の三桜へ伝わる途中でその内容は改竄された。 謀略によっ

ならば三桜は巻き込まれただけだ。

利用されただけだ。

「三桜は

界寮の思惑通りになって、純血一族は困るのでは」 このまま逃げ切り、人知れず死したならば、彼女の罪は軽くなる」 某を手に掛けてしまった場合、彼女はただでは済まん。 御上によって処分を受ける。 「結界寮に死体を回収されるかもしれないですよ? 気付いておらんだろうな。 彼女が本当に謀略に嵌まり、その手で ゆえに、 どちらにせよ三桜嬢はこの後、 そうなれば結 しかし某が

「……某に、言わせるのか?」

「……あ」

響は .. 純血一族の益よりも..... 三桜を助けようと?

が立つ。 リオに含まれている筈だ」 貴様の思う通り三桜嬢も利用された身。 彼女には言うな。 それにまんまと謀略の通りに 彼女の破滅もシナ なるのは腹

「一体誰が……そんな真似を」

゙さてなあ」

に消えて行こうとする。 そのまま羽田立荘の庭から出てゆき、 彼にしては珍しく、 ぶっきらぼうで投げやりな口調だった。 ふらついた足取りのまま林

の中で死が訪れるのをひっそりと待つつもりだというの

あ、あたしも

来るな!」

立ち上がろうとした私を恫喝が押さえつけた。

貴様が付いてくると、 迷惑だ」

そんな」

が知れぬままだと、結界寮は貴様の捜索を続けるだろう。 こに置いていった方が、 「統界執行員がここに居たのだぞ。 時間が稼げる」 仲間が戻ってくる。 貴様の行方 貴様をこ

人質.....ですもんね.....」

本望。 これは彼が私を解放したということなのだから、 本望なの

なのに。

どうしてだろう。

嬉しくもなんともない。

天宮柘榴

はい

に切り替えられるように常に構えておけ」 と思っているなら、 この街は危ない。 情を捨てるべきだ。捨てられぬならせめてすぐ 某はここで消えるが、 今後もこの街で生きよう

はい

界寮の輩に首を跳ね飛ばされそうになるぞ」 ひのえと駅前でそうだったように、 あまり呆けていると、 また結

はい?」

ひのえと駅前?

結界寮の誰かに狙われた覚えはない。 たしかに考え事をしてたし、ぼーっとしていたかもしれないけど。

疑問符を浮かべる私を無視して彼は足を進める。

「風呂と枕を貸してもらったこと、感謝する」

枕って。 そう言って、 うまく聞き取れなかっ 私の膝か。 私の前から消えてしまった。 たけど、 たしかに彼はそう言った。

そういえば。

癪だけど頼ろうとか言っていたし。 なかった。それでも説得しようとして合流しようと思ったのか? 私に会った時点で、彼は三桜と合流しなければならないとは思わ 響は三桜が自分を殺すつもりだと、 すぐに悟っていたんだよね。

つまり私は、どうして生かして貰えていたの? でも合流してもしなくてもよかったのは事実。 謎ね。 h

まあ けった 結果的にこうして私はまだ生きているわけだし。

·

こんな雨の中で。 林の中で何を思うのだろう。 響はどこへ行ったのだろう。

う言ってた。 のだと言い捨てていた。 番姉さんは彼ら純血一 族のことを、 人間として見るな。 外道でヒトの腐った心そのも 心があると思うな。 そ

の言葉が決して的を射ているとは思えなくなった。 織神楽響と出会ってそれに納得しながらも、 その反面、 番姉さん

た話だから、 でも衝動のまま殺戮を行っているとは正直思えなかった。 うん.....純血一族全部が、彼みたいな者ばかりではない たしかに彼らは殺人集団だ。 純血一族全部がそうだとは言わないけど。 それに関しては全く以て納得する。 響に限っ んだろう

彼の最期の時を一緒に過ごそうなどと思ってしまった私は、 甘い

んだろうなあ。

なあ。

番姉さんの言葉を否定できるほど彼らを知らない。

身の程知らずで、 出しゃばりで、浅はかなんだろうなあ。

ああ ... なるほど」

ひのえと駅前で、

他にも通行人が居たのに私の前に現れたのは。

たのに気付かなかったからか。 明朗と話した後も私が呆けていて、 結界寮の人間にマークされて

結界寮の住人だって危険な人が居るんだ』

明朗はちゃ んと忠告してくれていたのにね。

また結界寮の輩に首を跳ね飛ばされそうになるぞ』

響は私を助けてくれたんだね。

ほんと... 身の程知らず」

ひのえと駅前。

た。 は駅舎の屋根の下まで歩き、そこでようやく「ふうっ」と息を吐い これだけ濡れてしまえば雨宿りなんて意味ないのだが、 守野三桜

とのできた矢神聖歌の亡骸を遠目に眺める。 水を滴らせる長い後ろ髪を胸の前でしぼり、 本当の意味で死ぬこ

哀れな女。

作り続けた。 傀儡屋に殺されて傀儡にされ、そして自分も傀儡屋として傀儡を 彼女そのものが皮肉を体現した作品

まったがために肉片と化した、不運な死体にも。 もしない。並折の結界効果だ。 駅舎から傘を開いて帰路につく人々は、傷だらけの三桜に見向き 無論、戦闘領域に足を踏み入れてし

続ける。 れるまで、気付かれることなく薄暗い空の下、 聖歌の残骸も例に漏れずあのままだろう。結界寮の住人に発見さ 雨ざらしで放置され

ıΣ 水を吸ってしなびた手さげの買い物鞄がゴミのように転がってお なんだか儚げだ。

まう。 聖歌は夕飯に何を作るつもりだったのか。 そんなことを考えてし

感傷に浸ろうとする自分の心を、 三桜は鼻で笑った。

私だって一緒に暮らさなかったよ」 勘弁してもらいたいね。 お前が結界寮の傀儡屋だと知ってい れば、

様付けせずに呟く。

ていただろうね」互いに普通の人間として出会ったなら、 楽しく仲良く過ごせ

もっと小さくそう呟いた。

じゃないぞ」 ただの手向けだ。 私がこんな事を言っただなんて、 誰にも言うん

内の柱に身を隠した。 ピッ、と。 人差し指を聖歌に向けて弾き、 「おっと」三桜は駅構

聖歌の残骸に、誰かが近付いたからだ。

結界寮の人間だろう。思ったより早い到着だ。

を聞き取ろうとした。 三桜がぐっと集中して聴覚を研ぎ澄まし、 やってきた二人の会話

 \neg 情けない。 こっちの到着より先に殺されやがって」

へは聖歌の頭をつま先で蹴りながら言う。 背が低い小柄の人間

だ。

うだけどさぁ」 気の小さい奴だねぇ。 まー、 確かに足止めもできなかったよ

しているようだ。 そう言うもう一人の人間は、背が高い。マフラーと前垂れを装着

エットからするにどちらも細身だ。 二人は傘をさしている上に雨霧のせいで顔までは見えない。 シル

おい、カザラから連絡来たのか? アリス」

「 反応が消えたよー。 自爆でもしやがったね」

なんだと。 助けに行かなくて良かったのか?」

もうこっちに到着する頃だったから無理だってぇ

「明朗が同行していたそうだな」

明朗は無事だよー。 さっき確認したー。 明朗が言うには、 カザラ

と戦っていた方が織神楽響じゃ ないか、 だってさ」

- 「...... じゃあこれって」
- 「別の奴ってことかねぇ」
- 結界屋の連絡だと、傀儡屋の相手の方が純血一族の筈だろ」
- だからぁ、 こっちもぉ、 純血一族の仕業ってことでしょ
- 「チィ」
- 舌も打ちたく ならぁね。 ウチの戦力しか殺されてないじゃ
- 悪じゃーん」
- ' 奴ら探すぞ」
- なっちゃったんだってさー」 それがねえ、 結界屋の感知していた呪詛反応はどちらも読めなく
- 「なんだと! 役に立たん奴だな!」
- なせときゃ なからず垂れ流していた。 いるってことだよぉ。 「いやいや仕方ないよ。それに織神楽響の方は傷の影響で呪詛を少 いいのだー」 だからもう追う必要はないのだー。 それが弱まったってことは、 死にかけて 勝手に死
- 「おいおい.....」
- だってぇ。そもそも織神楽響の死体を欲しがってたのってぇ

アリスという女は、 聖歌の頭を踏み付け、 ねじり、

だよねぇ」 んだという結果が欲しいだけなわけでぇ、 こいつだけでしょ ? 結界寮的にはあ、 死体はどーっでもい 織神楽響が並折で死

確かに」

けど もお開きにしちゃ 立案者本人が死んじゃったんだからぁ。 いたいよねえ。 梵と林檎が許してくれないだろう ぶっちゃけた話、 こ

ほ とりあえず結界寮に帰るぞ。 ほー 傀儡屋の死亡を、 梵と林檎に伝えないと」 かっくにー hį アハハハハ

なんという連中だ。

らかし、 矢神聖歌の亡骸を回収せず、 そのままにして帰ってしまいやがった。 あろうことか好き放題に蹴り嬲り散

あれが結界寮の組織色。

思考。 役に立たなきゃその場で切り離すということを前提とした連結形成 互いが互いを、 己すらも駒と認識する。 義理もへっ たくれもない。

再び柱に身を隠した三桜は目を細めた。

傀儡屋なんて貴重な人材だろうに.....惜しくないとみえる) ああいうのは大概、 (あんな集団がどうして集団としての体を維持できているんだ? 私利私欲を求める個人の寄せ集めにすぎない。

自分達と同じか? と、顔を曇らせる。

格をしていようと力で無理矢理まとめているという意味だ。 純血一族と同じ。 それはつまり、それぞれがどんなに歪曲

織としてまとめあげられたのは からだった。 家系のそれぞれが支配欲を優先していた純血一族。 つの家系が頂点に君臨した時 それを一個組

これは有り得ない現象の筈だった。

守野家をはじめ、 織神楽家、 昏黒坂家、 九条家、 その他含めて総

勢十三家系。

発展していないほど昔にその起源をもつ。 これらすべては、 過去に超常の力を手に入れた者達。 情報伝達が

彼ら十三家系に共通しているのは《血液に呪詛を流し込み、 能力

を得た事》

ある事》 で捻じ伏せようとしたからこそ、人を超えし人と成るに到った。 己が家系こそ頂点に君臨すべきだという思考を持ち、圧倒的な力 注目すべきは三つ目の共通点。それぞれが支配欲の塊という点だ。

しかし 各家系はそれぞれの地元を中心として支配に成功していた。 情報化が進むにつれ、彼らは知ることとなったのだ。

自分達の他にも超常の力を持つ連中が居る』

それも十三もの家系が。

相容れぬ彼らは争った。

過去の日本国内裏抗争《十三家血斗》。

その終結は、 家系の多くが絶対に望まぬものだった。

だ。 を渋っていた一つの家系が介入したことで流れは大きく変わっ われていた。ところが、十三家系のうち他の十二家系とは違い参戦 争いは当然ながら泥沼化し、一つの家系に絞られるまで続くと思 たの

統一家系とも呼ばれるが、 と呼ばれる。 その介入した家系こそ、 敬意と支配を象徴すべく大抵は《御上》 先述した現在の純血一族の頂点家系だ。

つ つ たという説 ていないために曖昧だが、 は御上の手で終結に向かった。 が有力である。 力によって十二家系を捻じ伏せてしま 十三家血斗の終盤は記録が残

倒 的な力で支配してしまったということだ。 力による圧倒的支配を目指し実行していた十二家系を、 更なる圧

許されなかったのだから。 傘下十二家系にとっては屈辱極まりない結末である。 滅ぶことも

これが、 純血一族という組織が生まれるに至るまでの歴史。

守野家の当主たる三桜は、 ギリッ、と奥歯を噛み締めた。 今も続く屈辱を思い出したからなのか

しまった家系まである。 今でも組織は維持している。 しかも、 中には御上に心底心酔して

た。 三桜は、 未だ守野家を頂点に君臨させたいという野心を持ってい

(つまり..... 結界寮も、 私様達のように力で支配しているのか..

その可能性は大きい。

命令ですんなり動く性分ではない。実力も並ではない。 まで含んでいる。 儡屋や結界屋などという、目的と性格が異常なまでに傾倒した個人 結界寮は純血一族よりも統制の取りづらい個人の寄せ集めだ。 傀儡屋は戦ってみてわかった通り、誰かの指示や

と結界屋が互いに仲良くやっていけるわけもない。 傀儡屋よりも有名な結界屋は尚更だ。言うまでもないが、 傀儡屋

は事実。 しかし少なくともこれら二つの裏稼業が同勢力に所属しているの あまり信じたくないが、 事実なのだ。

(結界寮の頂点は、あの管理人共か)

錫杖梵。

藍澤林檎。

ロスの猟犬に居たことも知らないし、 三桜には聞いたこともない名前だ。 それでも傀儡屋矢神聖歌や、 広大な結界を張る結界屋、 異名と一致させることもない。 無論、 彼女は二人がティンダ 不気味な

統界執行員達をまとめているのはこの二人。

要注意。兼、要調査対象。

報告しなければならない。

煙草を吸おうとしている通行人の手から、 箱とライター をふんだ

くる。

「ちぃ」

れば落ち着かないのだろう。 肺に影響を及ぼすので基本的に三桜は喫煙を避けるが、 吸わなけ

紫煙を吐きながら、きのえと駅行きの路面電車を待つことにした。

も ね。 手をしていた統界執行員が自爆したってことは響も無事じゃないか 「あいつらの話からすると、柘榴と響が一緒なのか? それならそれで丁度いいや」 ふうん。

を覚悟していたが、楽に仕事が終わりそうだ。 手負いに手負いを重ねた響。式神同士だから多少は苦戦すること

そんな呑気な考えをする三桜。

り、また海外へ出向き、 仕事が終われば、こんな街からはおさらばだ。 別の仕事に取り掛かれる。 さっさと本家へ帰

彼女は自分の今後をそう予想していた。

たしかに彼女はこの後、 だが、そうはならない。 しかし彼女はそこで《任務失敗》を告げられることになる。 並折を離れて本家へ帰るだろう。

彼女はこの時にはもう、守野三桜。

並折という魔都に絡みつかれてしまっていた。

翌日

0

杖梵》から結界寮の討伐活動の終了が指示された。 統界執行員アリス・エイリアスの報告により、結界寮管理人《錫

これを以て、並折に侵入した純血一族当主《織神楽響》 の討伐は、

旦の終結を迎える。

 \Box 織神楽響討伐の件。

以下を最終報告とする。

傀儡屋、 矢神聖歌 死 亡。

統界執行員、 カザラ・イグニール 死 亡。

矢神聖歌と交戦した者に関しては今後も調査を続ける模様。 今回の件で結界寮の住人が二名、死亡した。

本件の中心人物 織神楽響。

その死体は翌日の早朝午前六時に《つちのえと》 の墓地で発見さ

れた。

草刈鎌を突き立てた状態だった。 墓地の整備に用いられる道具を収容する小さな納屋の中で、 凶器の草刈鎌は納屋にあった物で 胸に

あったと、墓地の管理者の証言で確定した。

と思われる。 響を殺害した後、 響の死体には、 剪定バサミも納屋にあった物だ。 寄り添うように少女の死体が横たわっていた。 後頭部に剪定バサミを突き刺して自害したもの

が判明。 二人の死体を回収後、 結界寮の検証により少女が人形であること

々奈》だった。 傀儡屋矢神聖歌の最終作となり、 行方不明になっていた《江本佐

結界寮による検証・独自解剖では奇妙な点も見られた。

江本佐々奈の推定死亡時刻は、午前五時頃。織神楽響の推定死亡時刻は、深夜午前二時頃。

が付着していた。 覆面を外した頬には、 幾つもの乾ききっていない水滴

のものだった。 これは雨の成分ではなく、 矢神聖歌が人形に用いる疑似体液と同

だ。 れず、 しかし江本佐々奈の後頭部裂傷でその体液が漏れることは考えら 後頭部の傷は単に人形の基盤を破壊する目的で付けられた物

では疑似体液はどこから流れ出たのか。

解剖の結果、江本佐々奈の眼球から漏れ出たということが判明。

眼球の一部に、 特殊な染料で着色された箇所が見られた。 傀儡屋

の用いる禁術紋章とは異なる紋章である。

も のだという見解を示した。 錫杖梵は、 矢神聖歌が行った《安永筆・ 豊房》 の実験に関連した

矢神聖歌が紋章で顕現させた妖怪は 雨女。

いうことだろう。 江本佐々奈の《哀》 工房の設計図と記録から、 の感情に合わせ、 並折の長い雨天の原因がこれだと判明 並折に雨を降らせていたと

最後は能力の過剰行使によって紋章ごと眼球が破損。 長く続いた雨は 江本佐々奈の冷たい涙。

とになった。 皮肉にも、 死の間際で体温の混じった疑似体液を響の顔に垂らす

人形が流す筈のない、 あたたかい涙。 といったところか。

想する。 進めるが、羽田立荘の倉庫に保管されている資料を見るに、十分た の混濁が生じるが、 る動機があると見ていい。 江本佐々奈が織神楽響を殺害した動機に関してはこれから調べを 生前の記憶が一部残り、 傀儡屋の製作した人形は総じて生前記憶 復讐心が芽生えたと予

果てていたとしか考えられない。 なんの抵抗もしなかったのが謎である。 ただ、 戦闘機能を備えていない江本佐々奈に対して、 カザラの自爆で体力も尽き 織神楽響が

された。 織神楽響の遺体は、 純血一族へ引き渡すという判断が管理人より

完全に機能しなかったために響が入ってしまったと の不備を責められる場合も考慮しての判断である。 を殺害した響を引き渡すことは有り得ない。しかし結界屋の結界が 結界寮の管轄である並折に侵入した挙句、 いう、 統界執行員一名 こちら側

どうか結界寮住人の皆々様には御納得いただきたく。

りである。 あちらが引き取りを拒めばこちらが並折で丁重に葬るつも

以上で報告を終了する。

LUNICA【あったかい雨の降る夜】8

んーこ」

しまう。 洗濯物を干しながら、 あまりの気持ちよさについつい伸びをして

八月ももう終わりかあ。

空は快晴。雲一つない。 これが並折の本来の姿だ。

この暑さも、もう少し続くかな?

気が流れている。 少し前までの雨天が嘘のように、 青々と鮮やかな色の葉。 たくさんの葉を纏い、 並折全体にはからっと乾いた空 一斉に揺らす木々。

雨天.....。

あれから、もう二週間が経ったのか。

わざわざ出向いて修復してくれた。 破壊された羽田立荘の正面玄関と裏の倉庫は、 結界寮の住人達が

響とカザラによって荒らされた庭も今では整備されて元通り。

建物は確かに元に戻った。

でも……矢神聖歌は、二度と戻ってこなかった。

彼女は死んだと、明朗に聞かされた。

あの時……彼女を尾行してきのえと駅で見たのが、 私にとって彼

女の最後の姿だった。

ŧ く使わせてもらっている。 羽田立荘はこのまま使ってもいいと明朗が言ってくれたので有難 というか、 結界寮の住人でもあったそうな。 明朗が宿主として面倒を見てくれることになった。 聖歌はピグマとして個人で活動しながら だから羽田立荘は結界寮が

「よいしょっと!」

ちょっと重い布団も干して、陽の光を浴びせる。

こうやって私達の世話をしてくれた聖歌ももう居ない。 これから

は私が頑張らないと。

風が少し強いので、干したタオルはそれぞれ洗濯バサミで固定し

てある。 これなら飛ばされることもないだろう。

それを眺めながら、 バタバタと音をたててなびく私の衣類や、三桜の衣類。 織神楽響のことを思いだした。

(洗濯、してあげられなかったなあ.....)

彼は私と別れた翌日、 死体として結界寮に発見された。

江本佐々奈という名の人形と一緒に、 墓地の納屋で倒れていたら

l l

ごしたのだ。 何の縁だろうか。 江本佐々奈は、 父親の仇と一緒に最期の時を過

「佐々奈と....響....

「響がなんだって?」

ぼんやり呟いた私は、背中から声を掛けられて振り返る。

縁側に守野三桜が座っていた。

いても汗が浮かんでいる。 相変わらず暑さには弱いようで、 爽やかな笑みを顔に張り付けて

「ん、別に」

なんだよ連れないな。 そういえば柘榴、 貴様は響と一緒に行動し

ていたんだよな」

「そうよ。人質みたいなもんだったけどね」

いた織神楽響とじゃあ随分印象が違うんだよ」 よく殺されなかったよな。 私様の知る織神楽響と、 貴様の言って

「あんたの知る響はどういう人なのよ」

奴だったよ。 ていた」 い奴は見境なくぶち殺してやりたいって言いたそうな感情が滲み出 傲慢な奴さ。 常に冷たい目をしててさ、 私様よりも、もっと質の悪い形で他人を見下す嫌な その奥には何かこう

ふん、と鼻で飛ばす三桜。

ように思えたよ。 いたような」 いけど、あたしをなるべく見下さないように困惑しながら応対して しが会った響は、 「たしかにあんたの言う通り冷たい目つきをしていたけど.....あた うしん、 なんだかあたしを仲間のように扱おうとしている 仲間というか、あたしの驕りかもしれな

でもなさそうだな」 へえ、あいつが。 江本佐々奈なんて奴にトドメ刺されてんだから、 何か心境の変化でもあったのかねえ。 あながち嘘 まあ

っていた。 させられた人形だとか。 江本佐々奈。 明朗の話では、 あの長い雨天は、 聖歌によって妖怪雨女の能力を付与 佐々奈が流した涙だと言

涙か。

後に私は新聞の気象情報欄を抜き出して、 ある事に気が付い た。

それは雨天の期間。

致が見られたのだ。 織神楽響が並折に侵入した日と、 彼が死んだ日。 それに完全な一

江本佐々奈はどうして泣いていたのだろう。 響の死んだ日というのは佐々奈の死んだ日でもある。

響が許せなかった? そうなのかもしれない。

それだけではないのかも.....しれない。

父親は織神楽家に殺され、母親と自分は傀儡屋に殺されたも同然。

それが 無理矢理復活させられて。 しかも傀儡屋の作品として。

泣きたいに決まってるよね。

聖歌は工房に作品を置く傾向にあった。

佐々奈はそこで、結界寮の情報を聞いてしまったのかもしれない。

『織神楽響が来た』なんて情報を。

涙は豪雨となって並折を包んだ。

佐々奈はとめどなく涙を流し続けた。

名に反応したのか。 ないけど。それでも佐々奈は響の胸に刃を振り下ろした。 カザラの言っていたように、響なんて覚えていなかったかもしれ 織神楽の

なんだか..... みんな救われないね.....」

自滅するぞ」 から先も何が起こるかわからないのに。 事だろう。並折ってのは救われない街だと考えておかないと。 やけにセンチだなあおい。 貴様が気にしたってどうしようもない いつか感情に押し潰されて これ

「......うん」

手で顔を仰ぐ三桜。

見てきた。 彼女はあぐらをかいて座りなおし、 両肩を上げて私の方をじっと

「柘榴、ちょっといいか」

「なによ改まって」

「私様も、この羽田立荘を離れることになった」

え?」

動揺はした。したけど、予想はしていた。

う。 三桜は響の件でひとまず任務終了なのだ。 一旦戻るのは当然だろ

そっか。三桜も居なくなるのね」

話になると思う.....」 サヨナラってわけじゃないよ。多分、 おいおい、そんな顔をされると嬉しくも寂しくもなるだろ。 少し間を空けてまたここに世 別に

響の言っていたことを話してやった。 私は響が去り、三桜が羽田立荘にびしょ濡れで帰ってきたあの時、

だった。 三桜は織神楽に利用され、間違った任務内容を遂行し 彼女は怒らなかった。 感情を完全に消して「そうか」と呟くだけ ていたと。

後に彼女に手紙が一通届いた。

私は内容を知らない。だが想像はつく。

そして今日、ついに三桜に帰還命令が出たのだろう。

任務を失敗した三桜。

響を助けられなかった三桜。

大丈夫なの?」

私は素直にそう訊いた。

彼女は不敵な笑みを見せ、 肩をすくめて応える。

せずに、 心配ないさ。 自分のことを気にしてりゃいいんだよ」 ちょっと気が重いけどね。 貴様は私様の心配なんか

すぎるんだから」 わかったわよ。 じゃ あ早く戻ってきなさいよ。 ここは一人じゃ広

`へいへい。さーて、帰り支度でもするか」

ぱん、 私は抱えていた洗濯籠を置いて、 と自分の太ももを叩いて立ち上がる。 縁側に駆け寄った。

ねえ三桜。えっと……聖歌のことなんだけど」

言われた。 三桜が聖歌を殺したのは知っている。 結界寮には内緒にしとけと

「聖歌がどうした?」

.....ううん、 頭を振る私の肩を、三桜は軽く叩いて笑顔を向けた。 やっぱりなんでもない」

う言ってたよ」 聖歌も楽しかったってさ。 柘榴も私様も、 家族みたいだった。 そ

「そっか....」

ぞ、実力主義の純血一族には戦力として不要だ」 私様も生きていられないんだよ。響だってそうさ。上から指示があ れば殺さなきゃいけない。 柘榴から見れば私様の考え方は気に入らんだろうが、そうしないと の任務に失敗して傷だらけになって追っ手まで付けられてる奴なん 「そんでも殺さなきゃいけない。そういう世界に私様達は生きてる。 私様はそれを疑いもしなかった。 関東で

「でも……」

「そう。 と言ってしまえばそれまでなんだが」 今回は私様の方が間違っていたんだよね。 これも仕方ない

してきた。 苦々しく笑う三桜はその感情を払拭するようにこちらへ手を伸ば

たと触りまくった。 の肩だけでなく、 腕 腰 脚 つまり全身をぺたぺ

いいじゃないか減るもんでもない」ちょっと.....」

満足げな顔をして自室に行ってしまっ 触るというか、 オッサンかお前は。 ほとんど揉んでいた。 た。 やはり変態だ。

_

..... 聖歌も居ないし、 また一人、 しばらくは私一人か。 か。 これで三桜も居なくなる。

· でも!」

なにより此処は、 孤独じゃあない。 しく買ったホットパンツのお尻をポンと叩いて背筋を伸ばす。 こんなにも明るい陽光が差し込む場所だもの。 明朗だって来てくれるし。

って望めるかもしれない。 的に鎖黒を探すわよ」 結界寮がどんなものか把握できたし、 独りで感傷に浸ってる暇はないわ。 もしかしたら多少の協力だ 本格

せてくれた。 彼との出会いと共に行動した経験は、 式神と呼ばれた屈指の強者。 あの響でも命を落としたこの並折。 私に並折での生き方を理解さ

だと。 強者は強者。 弱者は弱者。 それぞれ立ち回り方を弁えるべきなの

どに平等なのだ。 強い奴だけ生き残れる場所じゃない。 この結界都市は無慈悲なほ

んど無力となる。 ればならない。 呪詛能力や磨いた技術で他者を退けて生き延びる感性を捨てなけ 外界では通用するだろうが、 この結界都市ではほと

三桜が聖歌から知らされた結界による呪詛弱効化。

並折全体が手に取るようにわかる結界屋の感知結界。

ても過言ではない。 つまるところ響はこれらの効果によって命を落とすに到ったと言

を誤ったか』と言ったことから、 れず自爆を受けてしまった。 のかもしれない。 呪詛の弱効化によって毒の操作がままならず、カザラを仕留めき 彼が私に神経毒を注入した時に『調節 彼は弱効化に気付いていなかった

ない。 どこへ行こうと感知する結界寮の手が回り、 碌に休むこともでき

折の呪縛に捕らわれてしまったのだ。 なまじ外界で圧倒的な強者として君臨していたがゆえに、 彼は並

だから、重要なのは力の強さじゃない。

上手に立ち回ることこそ、並折で生き残る最良の術

当たり前のことだけど、実力に重きを置き、 押し通るを良しとす

る世界に生きていると案外これが難しい。

街、 独特の閉鎖、 並折。 独特の管理、 独特の現象。 これらが成り立っている

まず何がどう独特なのか理解しなければ始まらない。

閉鎖 結界という壁に覆われた空間。

結界とは何か?

誰が、何を目的として形成したのか

結界屋。 本当に結界屋が並折全ての事象に関わっているのか?

単純な対人目的の結界効果はこの裏稼業の仕業であるとは思う。

結界寮が一勢力として成り立つべく外界から超常者の侵入に制限を

かけるのも理由としては十分に値する。

ではその基準は

私は入れた。 三桜も入れた。

並折の存在を知る者なら誰でも入れるのか?

ಶ್ಠ しその後、 物理的には一般人でも土地に足を踏み入れることは可能だ。 この土地の真の姿を認識できる者とできない者に分かれ しか

はないかという予想もできる。 の手違いがあったのだと考えると、 であるのに認識できる者として分けられてしまっていた。 私がここへ訪れる際に電車内で出会ったサラリーマンは、 この閉鎖は不安定なものなので なんらか

結界寮による監視と執行。

結界寮の詳細は?

世界危険勢力『ティンダロスの猟犬』 が裏で影をちらつかせてい

るのは、 明朗の話でわかっている。

その規模、 所在地、 管理目的は不明。

構成員は把握

構成員だという明朗からの情報で、 結界寮をまとめる管理人。 める管理人。梵と林檎。この二人が元テンしているだけでも特徴にばらつきがある。 結界寮の裏に危険勢力の意思が この二人が元ティ ンダロス

ぼやけて見えるようになった。

者も居れば、 住人とも呼ばれる者達。 統界執行員という不気味な戦闘要員も居る。 種類は様々で、 明朗のような能力のない 傀儡屋、

結界屋という裏稼業も属している。

も結界寮へ協力している点から、 序を保つべく結界屋が結界を張り巡らしたりと、 !の力を蓄えている可能性がある。 統界執行員のカザラという男が傀儡屋の作品だったり、 結界寮は一つの勢力としてなかな 個性的な裏稼業で 並折の秩

だろうか。 さしも危険 な純血一族や死使十三魔すら手を焼 という土地 の中では世界危険勢力と同等な いている事実を鑑 のではない

これは結界効果に因るものと、 土地に因るものに分けら

れる。

果だ。 呪詛弱効化。 純血一族や死使十三魔にとって致命的となる結界効

らし合わせて危険度を推し量っていると私はみている。 え小さなナイフであろうと感知する結界効果。 呪詛及び危険物の感知。 武器になりかねないもの 感知された場所と照 それがたと

儡屋・結界屋。 少なくとも二人) が所属している。 すれば十分処理が可能だ。 者が腕の良い裏稼業であっても、 だろう。 これら結界効果は結界屋 脅威となる呪詛能力者の対策に抜かりがない。 つまり結界寮による防衛機能の 結界寮には世界屈指の裏稼業(傀 感知結界と併合 たとえ侵入

土地に因る現象は不明瞭な部分が多い。

原因だった。 よって顕現した妖怪もこの土地所縁の雨女。 長い雨天現象はこれが 鎖黒や豊房のような怪遺産もこの土地の産物であり、 また豊房に

三桜の話からするに、結界寮に回収されたかもしれない。 自然に影響を与えるような力が数多く顕現しかねないということだ。 豊房を矢神聖歌が持っていたことに驚いたが、 私が恐れているのは、百奇夜行という言い伝えのように、 今は再び所在不明

はならない。 一度滅びた妖怪達の脅威が未だ残っているのも怖い。 が、 忘れて

並折には、 滅びていない妖怪が一人、 まだ潜んでいることを。

『懐かしいな、番』

お前が居なくなってどれくらい経っただろうか。

『今年の八月は懐かしいものが見られたよ』

『雨女だよ。覚えているか?』

『お前が居て教えてくれないから、 折角の雨も聞こえないし、 見え

ないし、においもわからない』

『今年はこの街も、あの時のように騒がしくなっている』

『きっとたくさんの異形が死ぬ』

『そうしてまた、取り残されるのさ』

『妖怪一人、並折に残り.....』

'繰り返される百奇夜行』

「口がないから、また伝えられず』

『流れに流され滅びゆく者達をまた見送るだけ』

いつまで経っても俺には顔が無い』

『なぜ俺を置いて並折を去った』

'なぜ俺にこんな仕打ちをした』

俺の愛した雪女よ....』

 \Box

守野三桜、 貴女が人外だとは、 私は知りませんでした。

矢神聖歌、 貴様が人外だとは、 私様は知らなかったぞ。

織神楽響、 貴方が仇怨だとは、 私は知らなかったです。

江本佐々奈、 貴様が人形だとは、 某は知りもしなかった。

がだとは、は

五戒と誤解に後悔する者はなし。

今はもう、遠き遠き空のむこう。

『また.....生温かい血の雨が降る.....』

0

PUNICA【あったかい雨の降る夜】了

溶け、部屋の広さもわからない。 ルの上だけほんのりと一つの光源に映し出されている。 壁に掛けられている筈の燭台に火は灯されることはなく、テーブ 揺らめきもしない蝋燭の灯火は触れれば凍ってしまいそうだった。 壁は暗闇に

机と、椅子に座る女が一人。たっ たそれだけの空間。

無心で灯火を見つめていた女は、 青く長い前髪の下でピクリと瞼

灯火が揺れた。

を上げた。

部屋の中と外の温度に差があり、 空気が動いた。

扉が開き、誰かが入ってくる。

うこそ』と言うわけがない事は当然であり、来客者も承知している ようだった。 来客に対して彼女が立ち上がって純白のドレスの裾を摘まみ ゙゙゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚

いた。 しかしながら彼女 にも関わらず、 今回の番は開けられた扉へ鋭い眼差しを向けて 番は来客を区別なく拒むような性格ではなッカイ

相変わらずこの部屋は深海のように冷たいな」

しか見えない。 外の明るさと中の暗さによって番からは来客者の黒いシルエット 開口一番。 番に向けられた言葉はそれだった。

蝕されたことで、来客者が誰なのかは把握できていた。 それでも聞き覚えのある声色と、 なにより不快な視線に部屋を侵

肩をすくめる。 何をしに来たと言わんばかりの凍った視線に当てられ、 そのまま扉を閉め、 番の正面 テーブル越しにあ 来客者は

る椅子に座った。

縫い糸で両目の瞼を縫いつけられた男の顔が灯火に照らされる。

おはよう番。 久しぶり」

..... まだ生きていたとは驚きね」

良くやってくれれば幸いだ。できれば私とも」 夕凪姉妹にはもう会ったようだね。 新しい序列十位と十一位。 仲

「貴方とは無理ね」

随分献身的な侍女が傍に居たようだ」 「ふむふむ、身体に異常はなし、目立った汚れや劣化もなし、 ځ

い糸を弾く。 男は黒いルージュの引かれた口元を歪ませ、 その爪も長く、 黒く塗られている。 親指の爪で右目の縫

で呟く。 何度も右目の弦を弾きつつ、時折鼻で笑いつつ、ぶつぶつと小声

おや?」

番、心配事や悩みでもあるのか? 男は親指の動きを止め、首を少し傾けた。 それとも肉体凍結の後遺症か 口が一層大きく歪む。

四位 常人とあまり変わらんだろう? ? してはきちんと話し合った方がいい。 そうか、新しい侍女になったからか。 魔氷の番は《お通じが悪い》など笑い話も甚だしい」 部下達に笑われてしまうぞ。 雪女とはいえ、肉体の機能は 食事の栄養バランスに関 序列

睨む。 顔を背け、 目線を逸らしていた番は青白い頬を若干赤くして男を

て笑い、 凍結の代名詞のような女のその反応に男は驚いた 縫い糸が干切れてしまいそうな瞼を指で押さえた。 のか肩を震わせ

だから貴方は嫌いなの」

そう言うな。 私は死使十三魔の身体検査役だからな

壊死させるわよ」 いるこの不愉快な物をさっさと消しなさい。 自称、 でしょう。 この変態。 さっきから私の服の中を這いずって さもなくばその瞼ごと

とは事実だ」 「失礼した。 やり方は反省する。 しかし私が君の身を案じているこ

私の身を案じている? 本当にそれだけかしら」

「どういう意味だ」

うでしょうアニマ? に精神を蝕まれてしまったのよ」 方は、こうして各序列を隅々まで調べないと気が済まないのよ。 「貴方は恐怖している。 私が怖いでしょう? 序列八位、 魔眼の《アニマ》 貴方は貴方自身の能力 臆病者の貴

た。 高揚した頬は既に冷めきり、 番は嘲笑を浮かべて頬杖を付い てい

済まない。だから貴方は死使十三魔の中に隠れた。世界屈指の猛者 達を防壁とし、 物に思えてしまう。 る。便利すぎて便利すぎて、貴方は貴方という本体をより脆く尊い 「千里眼は便利。 己の力を防壁の強化に用いることでね」 遠い安全な場所から一方的に様子を窺う事がで 世界中の誰よりも安全な場所に居なければ気が ㅎ

その通り」 言われたアニマは、 あっさりと認め、「私の力がなければ少数精鋭もここ それでも笑みを崩さず聞いて いた。

までのし上がることはなかったろう」余裕たっぷりに背もたれに体

重を預けた。

間 事実は事実。 寝床を守るのにも一役買ってくれた人物だ。 番もアニマの功績は認めている。 彼女が眠ってい る

でも
」番は冷気を吐き出す。

誇らしかったその魔眼も今では衰えたわ。 未来視、 過去視は

もう使えないのでしょう?」

そろそろ、 序列八位も席を空ける頃ではなくて?」

冷たい言葉はさすがにアニマを凍りつかせた。

立っている。 真似はしない組織である。 死使十三魔は純血一族とは違う。 引退を勧めるにしても、番の言葉は棘が 役立たずは不要と捨てるような

に対する引退勧告にしてはあまりに不適切。 たから序列を去れという、 死使十三魔に貢献し、 実績も積み重ね、 純血一族に似た思考だ。 序列八位に名を連ねる男 全盛期より能力が衰え

言うようになったな番」

無論、 程度の能力では死使十三魔がこれから進む道を後押しできないの。 査役だって、 前線からは離れる。 別に貴方を捨てると言っているわけではないのよ。 アニマ、貴方の実力は認めているし感謝もしている。 今後も続けてもらえたら幸い そういうことか」 ょ ただ、 身体検

女は頷く。

得策である。 われやすい。 であると同時に、 アニマにとって悪い話ではない。 自身の安全を望むアニマは肩書きを外 死使十三魔最高戦力という重鎮の表れ。 序列という肩書きは強さの象徴 してい たほうが つまり狙

しかし彼には、即座に頷けない理由があった。

疑わしい。

かに能力の衰えは死使十三魔の戦力に影響する。 代えられる

業だろうが。 アニマほど熟練した者に匹敵する能力者を探し出すことすら至難の ものなら、 より優れた魔眼使いを招き入れた方が良い。 もっ

なる点はそこである。 このタイミングで引退を持ち掛けてきた? アニマが気に

の事情も可能な限り把握しておきたがる。 の序列の動きが活発であることを怪訝に思っていた。 彼は自身も認める臆病気質であるゆえ、 その結果、 死使十三魔という組織内 彼はここ最近

衝突して起きた戦争だ。 のはおよそ十年前。死使十三魔の序列五位と純血一族の昏黒坂家が 起きている姿を見ることの方が珍しい雪女。 前回この女が覚醒した まず、 そもそもこの女 番だ。 序列四位。 魔氷の異名を持ち、

凍結させて回った。 番はその際に序列一位の命令によって覚醒させられ、 各局地戦を

でもあるのだ。 魔氷の番とは永遠を歩む者であるが、 戦争が終結の兆しを見せ始める頃には再び氷結睡眠に入ってい 長く覚醒していられない者 た。

の女が覚醒するとはつまり何かが起こる予兆でもある。 そんな女が、 今 目の前で頬杖なぞ付いてこちらを見ている。

次に序列十位と十一位の件。

比類なきものと一目置いていた。 と呼ばれていた死使十三魔の攻撃象徴。 十位が再起不能に陥った件だ。十位は《魔槍》 関東に於いて純血一族織神楽家の当主によって十一位が殺害され、 アニマもあの二人の強さは 十一位は《魔斧》

だ納得もしよう。 が相手だろうと負けるのは有り得ない。 それが、 当主とはいえ毒爪使い一人に負けるか? だが序列入り二人掛かりなら式神と呼ばれる当主 対

しかも二人の後釜が.....少女。双子の少女だ。

夕凪みそら。夕凪しずね。

前代未聞だ。 呪詛も憑いていない。 序列全員が呪詛使いの死使十三魔に於いて

位自らが受け入れたという。 アニマでも未だその能力を知らない上に、 なんと彼女達を序列一

極めつけが、死使十三魔最悪最狂の問題児。

序列五位。

あれが日本国に入国し、 行方が分からなくなっているのは大問題

た。

行動を監視していないといけない。 序列の多くは居場所の掴めない者が多い。 だが、奴だけは、 常に

本国関東地方の一件の直前に一度だけ序列十位と十一位に面会して いた。その隙を突いて五位は姿をくらましたのだ。 十三魔の監視役は、主に序列三位がやっている。 しかし三位は日

地方の結界都市に入っているという噂だ。 その五位は、あろうことか各勢力が目を光らせている日本国中部

結界都市 並折。

という情報が各危険勢力中に出回ったばかり.....。 つい最近、 純血一族織神楽家当主、 織神楽響がそこで殺害された

アニマはそう感じていた。死使十三魔が引っ掻き回されている。純血一族絡みの案件が多すぎる。

 \neg \neg 千里眼を以てしても姿を見たことがない二番手。 黙して動かず、 世界を静観する頂点。 序列一位的 序列二位

- 『日本国で駆け回る狂い焔。序列三位』
- 『覚醒させられた氷結の麗女。序列四位』
- 縛鎖を解かれた十三魔最強の殺戮狂人。 序列五位。
- '一位の側近である守護者。序列六位と七位』
- ここにきて引退を勧められた魔眼。序列八位』
- 九位。 『衰えた千里眼ではもはや行方などわからない奔放なる凶器 序列
- 『失われし槍と斧。序列十位と十一位』
- 『他勢力へ潜伏中の伏せ札。序列十二位』
- 『切り札。序列十三位』

前線からは、まだ離れられん」

アニマは静かにそう答えた。

織の流れが乱れ始めれば一人では足りないだろう。 が思うように行動している。三位が世界中を駆け回っても、 死使十三魔は不安定な状態になりつつある。 そして各序列は各々 一度組

にその力は必要になる筈。 衰えはすれど、アニマは指折りの魔眼使い。 各序列をまとめる際

も強かった。 安全ではありたい。 しかしアニマはこの組織を大切に思う気持ち

この女の言葉に従うのは得策ではない。 内心アニマは番の腹の底に何かどす黒いものがあるように思えた。 彼の返答を受けた番は優しく目を細めて「そう」と呟く。

臆病だけれど、 やはり死使十三魔の序列八位ね。 魔眼のアニマ」

上げて薄目を開けた。 番の言葉は流し、 アニマは縫い糸で閉ざされた瞼を少しだけ持ち ゆらめく蝋燭。 彼の目には映らない明るさ。

ない 私は君に挨拶をしに来たわけでも引退勧告を受けに来たわけでも

- あら。 では私の身体を愉しみに来たのかしら?」
- 「......結界都市、並折の件だ」
- 並折? 貴方もあの街に興味があるの? 珍しいわね」
- める少し前から動いている」 私は以前よりあの街を探るよう命じられていたのでな。 君が目覚

のだろう。 詮索を好むアニマのことだ。番と並折の関係も多少は知っている

だからこうして彼女のところへ足を運んだというわけだ。

界をジャックしていた。住人の目を通して並折を探ろうとした」 まあ、 それは意外。 まずは聞け。 でも私はあまり役に立つ情報を持っていな 私は魔眼の能力であの街へ居を移す人間の視 いわよ」

「無理ね。一般人では並折の真の姿を目撃する事は出来ない」

もしくは意識できないようになっているらしい」 目にしなかった。 でもなにも変わらなかった。並折という二文字単語でさえ、 君の言う通りだ。私がジャックした日本人女性は並折へ移り住ん あそこを支配する結界寮の住人もだ。 見えない、 一度も

「無駄足もとい無駄目だったのね」

「いや、そうでもない」

?

「その女性が、死んだ」

「あら、そう」

「織神楽響の死亡した前日にな」

方へ向けた。

男は続ける。

て広場へ出た。 い出しに《ひのえと》という駅で降りた。傘を差し、 その日の夕刻も相変わらず長い雨天の最中だった。 その直後 彼女は首を跳ね飛ばされた」 その駅から出 女は夕飯の買

.....巻き込まれたの?」

けの目になったのだ」 女性は死に、意識は無くなった。 凄まじい力だ。脳漿は飛び散り、 「ああ。 跳ねた首は更に何らかの衝撃を受けて駅舎の壁に激突した。 そこでようやく、 私と繋がった眼球も転がり飛んだ。 彼女の目は私だ

「なるほど。貴方の目なら並折の姿を見られる」

雨の中、女が二人。指先からワイヤーを垂らした女と、もう一人 「すぐに眼球は踏み潰されてしまったがな。 とんでもない大物の姿を」 だが確かに私は見た。

「大物?」

番は顔を蝋燭に近付け、アニマも同じくした。

| 純血一族、守野家の当主だ」

え....」

「ミオウ・モリノ」

雪女は言葉を失った。

守野三桜。

織神楽響だけではなく、守野三桜まで。

知る者ぞ知る獣人の親玉だ。

純粋な身体能力では純血一族の獣人、 その親玉、 守野三桜は白兵戦闘部門最強。 守野家が群を抜いて優れて

序列三位もこれには頬をひくつかせた。

な とっくに壊滅して焼け野原だ。 化け物相手に金をケチっ た結果だ

たというもう一人の愚か者は?」 「まあいいわ。 それで、 その化け物を相手にして白兵戦をやっ てい

う。 「さあな。だが完全にミオウの猟域内だった。 無知ってのは恐ろしい」 遊ばれて終わりだろ

ではない。 うこの世に居ないだろう。 アニマの言う通り三桜の力を量り損ねていたのならば、 それは良い。 それでも良い。 問題はそれ 相手はも

これは十分有り得る。 神楽の本家は関西。 負傷した響が並折に侵入することは別に不自然ではなかった。 関東から関西へ帰る途中、 この程度のいざこざはどこにだってある話だ。 中部の並折を通る。

ついに仕掛けるつもりね.....純血一族.....

絶対に零度を越えない 吐息は強く吐き出された。

アニマも大きく頷く。

ついに仕掛ける。

事なのだ。 海外から白兵戦最強戦力を呼び戻し、 投入したのなら、 そういう

並折という重要拠点。魔の結界都市。

の勢力が欲し、 ここ数年内偵を送って様子を窺い続けた危険

特 区。

番だけでなく多くの序列が予想していた 《純血一族の先手介入》

当然だ。自国の土地なのだから。

ſΪ 必倒するのが得策。 入するのは愚策。 一族が正面きって対決を開始するならば、 先に純血一族が手札を見せてくれるなら、 ゆえに死使十三魔も敢えて様子見を継続していた。 現在の並折を支配しているのは結界寮という集団。 これは頃合いを見計らって双方を横合いから一撃 慌てて死使十三魔まで介 それに越したことは そこと純血

我慢の限界か。

番とアニマは、血気旺盛な殺人集団を嘲笑う。

はね。 勢力がマークしているに決まっているではない 君の言う通り、 無能極まりないわね。兵が優秀でも、 もりでいるのかしら。 きくなったら海外戦力を自国に呼び戻す。それでも先手を打ったつ 「当主を動かせる立場は、まさしく将だろうな。それも大将だろう。 愚かな連中。 海外の勢力拡大に集中し、いざ自国に巣食っていた腫瘍が大 たかが知れる。純血一族当主の動向など、 自国の土地だからと綽々然としていた結果がこれと 奴らの参謀 将がこれでは.....ふふ」 たしか九条家だったかしら。 か あらゆる

「うちの魔眼も嘗められたものね」

「ならばそれ相応の痛みを見舞ってやるだけだ」

あら、その様子だとなにかもう手は打ってあるの?」

人にいくつか《目》を付けてある。 私自身は君も知っている通り戦闘にふさわしくない。 つまり あそこの住

ちらが握っている。 奴らの踊り狂う様を傍観できる上に.....絶好のタイミングは、 ということね」 こ

こざが各所に見られる」 その通り。 ・モリノまで投入しているこの状況で、 踊り狂う。 ずばり的確だよ番。 家系間 奴らは滅茶苦茶だ。 家系内のいざ Ξ

い糸の奥から覗かせた。 正面の男は片目を、 番はアニマを前にして初めて愉しげに声を躍らせた。 瞼が千切れんばかりに開き、 空虚な眼球を縫

野家、当主不在の間はミオウの側近が長い間取り仕切っていてな。 まったんだよ」 その間に、守野家の中で当主派と側近派という内部派閥ができてし とヒビキ・オリカグラの二人。つまり守野家と織神楽家だ。 あるのだがな。 くふふ。 現在、並折に関わっているのはまだミオウ・モリノ まあ私の目で見ずとも容易に想像できることでも その守

「側近というと.....ヤタギ・モリノ?」

理みたいなことをやらされている老兵さ」 つまり先代守野家当主だな。 「そう守野八汰祁。 君が前回覚醒した時 あの時であの歳だ。今は本家で事務処 十年前、 当主だった男

ったのね」昔はあんなに幼かったのに。そう..... あの子もそんな歳に な

老いを知らない雪女は目を細めた。

間もなく海外最前線に駆り出されてしまったのだからな 三桜自身は、己の家系に派閥が出来てしまっていることすら知らな して、 た実力でのし上がった女。 いときた。 たが、 八汰祁は野心家だ。 己を慕う者を当主に担ぎ上げようとしているらしい。そして 老獪というやつは厄介でな。 まあ仕方ない、 以前からその狡猾さは多少なり私も耳にし そして勢力拡大の要として当主になって 彼女も一族の例に漏れずその常軌を逸し 三桜を当主から引き摺り下ろ 7

腑に落ちな いわね。 組織としてそれは避け て当然でしょうに

実力主義と異常なまでの支配衝動の組み合わせが招いた結果だ。

像できて支店長にそんな真似はさせんよ。 う。支店は完全に副支店長の天下だ。 すると社員はどうなる? 支店長の顔すら知らない者も居るだろ 普通ならこのくらい容易に想

だから守野の家系内部で派閥形勢が起きようと、 あ で終了だ」 も新しい当主が決まるなら、 介さない。 例はもうい んだよ。 だが純血一族のトップは、 八汰祁が何かを企んで三桜が引き摺り下ろされたとして 守野家自体が存続させられればそれでい いか。 守野家の当主がどうなろうと知っ させる。 なべて事も無し。 平気でさせる。 実力主義という言葉 統一家系は意にも いという思考だ。 たことではな 支店長

把握 折に投入されたミオウ 統一家系が守野家の内部事情を把握していたら しているくらいだからきっと知っているでしょ ・モリノは捨て 駒扱 ۱۱ ? うね。 え、 ならば並 貴方が

リノを死ぬまでぶつけて結界寮の戦力を徹底的に削がせようと」 も残らぬまで、朽ち果てるまで、あの貴重な娘を贅沢に使うだろう」 れこれ理由を付けて三桜を好き放題動かすだろう。 彼女一人でも強烈だが。 かもな。 でいきなり並折に投入したのかもしれ もう一度言うが、 もう一つ」 老獪って のは厄介だ。 ないわね。 それこそ骨と皮 容赦がない。 ミオウ・

ているのだろう。 アニマは指を一 本立てる。 三桜投入という純血ー 族の一策を表し

そこに、もう一本指を立てた。

間と接触 八汰祁が、 した。 と言っても、 三桜を並折に向かわせている間に、 接触 したのは八汰祁の方からではな ある家系

ようだがね」

「ある.....家系?」

「昏黒坂だ」

1) 氷像のようでもある。 番は顔だけでなく全身を凍りつかせた。 そんな雪女の姿は文字通

「吐き気を催すくらい面白いじゃないの」

凍っ た無表情で言うのだから、 ますます感情が解らない。

ぎ取りたいくらいよ」 屋中が汚らわしい空気で満ちてしまったわ。 純血 昏黒坂家? もう言葉から血生臭さが滲み出るわ。 その名前を記憶から削

「おいおい、番....」

ちまけた吐瀉物を舌でなぞり舐め啜りそうな言葉」 ただけでもぞっとするわ。昏黒坂、 アニマ貴方この部屋で私に吐瀉物をぶちまけさせたい ああ、昏黒坂、 最低な響き。 の ? 考え ぶ

「君の言いたい事はよくわかる。 前回の戦争では

ぶのよ」 下が目の前で火かき棒を握り締めて何かわけのわからない言葉を叫 そうよ多くの部下を奴らに殺されたわ。生き残った子でさえ狂っ 人になってしまった。貴方、見たことないでしょう? 私の部

.

も定まっていない。 が私の鼻を衝くの。 熱せられて先端が赤くなった棒を素手で握り締めて肉の焦げる臭 大きな声で.....」 片目は一度自分で指を突き入れて失明していた。 あの光景。 忘れられるはずもない。 目の焦点

の中から黒い蟲がたくさんたくさんたくさん。 目玉が黒く

らな! ね 濁って私 むしになっちゃったのぉ。 やりじゃりじゃりじゃりじゃり! うわああああああ私の! ああああ て恥ずかしい姿は全部黒い蟲、 ほら、 いてんのかよてめえ! 歯が ぶっ殺すって言ってんだよああああああああああああああ の恥 むし。 ずか む し。 蟲 しい目玉。 ! むし! 言ってるでしょ! 噛むとじゃりじゃりじゃりじゃりじゃりじ 私の目が! わたし。 昼も夜も恥ずかしくて私は壊れてし あああああっ? 蟲 やだぁ むしなのぉ。 蟲 ! 鼻 が ! ! あーあ。 ああ! きちきちきちって、 口 が ! ぶっ殺してやるか ねえ! ああああ のうみそが 嫌あああ

入れて奥へ奥へ突き入れて どぼどぼ滴って.....可哀想な.....私の..... もはや悲鳴よ。 直後、 狂ってしまったあの子は棒を鼻の中に挿し 棒を引き抜いた鼻からは..... 大事な

魔氷は、 それを私はこの凍った表情で見届けた。 君はあの頃より感情を露わにできるようになっているよ 大切な部下の死を前にしても溶けなかった」 感情の昂りもなかっ た。

アニマ の口調には同情の感情など乗ってい な ίĮ

お前 の事情など知ったことかというのが本心だろう。

が接触. ごめ した んなさい。 のよね 大丈夫続けて。 その、 昏黒坂とヤタギ・ モリ

どうでも が良い 接触され 昏黒坂家は純血一族内でも嫌われる家系だ。 のだから私もぞっとした」 理由は簡単さ。 わけではないが、 た守野八汰祁も迷惑に思っているだろうが、 ίį 昏黒坂家が接触 奴らと関わると碌な事がない。 昏黒坂は一際他家系から白い目で見られ した理由があ の結界都市絡みだとい 無論、 そんな家系に そんなことは 家系同士 7

る? 守野、 織神楽に続き、 さらに昏黒坂が並折に介入しようとしてい

滅多にない。 ている動きだ。 「守野と織神楽は上層部の指揮下で動いていた。 つまり だが昏黒坂は違う。 独自に介入しようとしているという事だ」 統一家系の指示に従うことなど 統一家系の把握し

を始めた。 響と合流すべく、 織神楽響が関東の一件で負傷し、 守野三桜が並折に入った。 撤退中に並折に入った。 同時に並折の本格介

ここまでは統一家系も把握している。

御上の指示にも従わない連中だ。 だが昏黒坂家。 奴らがどうして首を突っ込んでくる? 身勝手な自家中心的な連中だ。

ならば深く考える必要はない。

寮でもない。 はつまり、奴らの興味を惹く何かが並折に在ることを知ったからだ。 その何かは、 わかりやすいではないか。 土着伝奇のカオナシではない。 奴らがこのタイミングで動くという事 周知の結界でも結界

今。

今なのだ。

昏黒坂家が自ら興味を抱き、 以前からの存在には興味を惹かれなかった。 調べ、 並折に介入した守野家の八汰

何かが、今、並折に在る。祁に接触するほどの、何か。

何かとは何だ?

それは
奴らの宿敵だ。

死使十三魔、序列五位」

対するアニマの首肯。番の呟き。

て終戦を迎えてもこの両者に決着は無かったのだから。 当然だ。戦争の起源は昏黒坂と五位の接触だったのだから。 昏黒坂家は前回の戦争からずっと序列五位を目の仇にしている。 そし

を、 嫌われ者の家系が暴いてしまった」 んとも迷惑な家系ね。 純血 一族を横合いから叩くための伏せ札

我々の意から外れて勝手に伏せた札だ」 暴かれやすい伏せ札だからな、 五位は。それに五位もまた

び揉めたら結界都市どころではなくなる。 位を連れ戻してもらわなければ」 しかし死使十三魔も動き辛くなるわ。 いいえ、 すぐに三位へ連絡して五 五位と昏黒坂が再

「まあ待て」

今にも椅子から立ち上がりそうな雪女を、アニマが制する。

が、五位は並折に入ってから目立った動きを見せていない。 それが何かはわからんが、 位が騒ぎも起こさず落ち着いているということは、 だろう。 たしかに五位と昏黒坂の接触は火薬に火を近づけるようなものだ。 それに とりあえず火は点いていないと考えてい 何か理由がある。 あの五

の前に突きつける。 じとりと湿った舌で黒の口紅を舐め、 長く黒い爪を五本、 雪女の

五位が並折へ行くきっかけを作ったのは君だろう?」

「私には御見通しさ」「どうしてそれを」

をした。 顔を掴むように、 催眠をかけるように、 アニマの指は奇怪な動き

盗み見る事こそこの男の得意分野。

序列四位と序列五位が会する場面を見逃す筈もない。

がら隠すとは。 たのだろう? カオナシだったかな? 三位が聞いたら何と言うだろうか」 君は悪い女だな。五位の居場所も目的も知っていな 五位はそれに興味を持って並折に向かっ

自行動、五位の潜伏。そこまで把握して、一体何が目的?」 「なるほど、脅しのつもり? 純血一族の本格介入、 昏黒坂家の独

だから、並折さ。あの結界都市を死使十三魔のモノにする為に、

「どうするつもり?」

肌脱いでやろうと言っているんだ」

カオナシを探してやる」

-

番の胸は大きく鼓動した。アニマの口から出た一言。

を」 君は知っているのではないのか? 食う妖怪であるなら結界都市の秘密に繋がっている可能性は高い。 か顔の無い人間に何をそう夢中になるのかはわからんが、並折に巣 だそうじゃないか。 「どうにもその妖怪が気になるのでな。 君だけではない。 カオナシと、 五位も、夕凪姉妹も、 君も随分とそいつに御執心 結界都市の、 たかだ 関係

......知らないわ」

そう答えるのも予想していたよ。 隠し事が好きな女だな。 まあい

しし うだろうよ」 姉妹も満足する。 よくなるだろうし、 が手に入るわけだ。 れる事ができたなら、また一つ連中より有利な位置に立てる伏せ札 在も知らんようなのでな、 都市の秘密も知っていると私は思っている。 位に回収させて君の目の前に連れてきてやる。 カオナシの所在が気になるだろう。 どちらにせよ君も並折から離れて大分経っていることだ 死使十三魔の乱れかけた足並みは多少なりとも揃 三位も五位を回収できて胃薬を服用しなくても 君も昔の知人と語りたい事もあるだろう。 もし我々が先んじて結界都市の核心に触 私がその居場所を突き止め 純血一族はそいつ 土着の妖怪だ、 夕凪 ぞ 五

だもの。 純血一族の件も些細な事でしょう。 事ができるようになれば死使十三魔があの魔都を手に入れたも同然 いるだけ 貴方、カオナシが並折の重要人物だという確信を持って たしかに、仮にカオナシがあの特殊な結界の鍵となっているなら でも、もし違っていたら? の存在で、 結界とは無縁だったら?」 カオナシを回収し、 カオナシがただそこに住ん 結界を操る いる ?

を受けるような隠居間近の男が、 それならそれで、 我々が不利になるわけでもない。 勝手に妖怪を招待した。 君に引退勧 それだけ

い た。 アニマが知っている筈もない。 番とカオナシの間に特別な感情があることを知ってなのか、 それでも彼は皮肉め 11 た貌で笑って しし せ

ಠ್ಠ 基本的に人間は多かれ少なかれ腹の内に何かを秘めているものであ 疑い出 だからアニマが何を考えていようと、 以上は黙って したらキリがない るしかない。 のは番も重々承知 番にそれ してい を止める理由が ることであ ij

下手に口を出 の男はただ死使十三魔の為に動こうとし して腹の内を探られるのも好まし ているだけ

題はなさそうだ。 たいだけだったのだ。 君の様子では並折から連れ出したところで問 れたというのに、 いやいや、実のところカオナシという妖怪が危険か否かを確かめ わかったわ。 貴方のしたいようにするといい。 有益な情報をあげられなくてごめんなさい」 十分有益な情報だよ」 私に会いに来てく

の為なのね」 わざわざ 深海のように冷たいこの部屋へ来たのも、 それだけ

深海のように。

番は、 アニマが訪れた際に使った表現を流用した。

ふふ んなのだろうね」 この部屋は本当に冷たい。この空間が深海ならば、 君はな

の部屋が深海と言うべきかしら」 く冷やして深海たらしめているのは私自身。 「私は.....そうね、 深海魚と言いたいところだけど、この部屋を暗 だから正確には私とこ

、なるほど。ならば私が深海魚かね」

ええ、そうなるわね。貴方にとって居心地は悪くない筈。

即ち暗黒の世界。 視界も遮られ、 信ずるは己のみの世界」

視界。

目の下に人差し指を添える番の様は、 明らかに目を塞がれたアニ

マへの皮肉を表していた。 男はそれを気にすることもなく、 鼻で笑い飛ばし席を立つ。

「では少々、遊んでくるとするか」

扉が開き、 冷えた空気が移動し、 またも蝋燭の灯が大きく揺れた。

ていた。 アニマの去った後も、 彼が訪れる前と変わらず番は蝋燭と向き合

Q それもすぐに終わり、彼女の中では結論が出たのだろう。 違うのは、無心だったのが今は思考を働かせている点だ。 頬肉が耐え切れずに震えた。 白い顔

今のところは、 カオナシの思惑通りか。 いつも通りね」

結界都市は餌。

餌に釣られて集まる超常の者達。

そして

「全部喰らうカオナシ」

呪詛憑き、純血、十三魔、 裏稼業、 エトセトラエトセトラ。

何度も何度も同じことの繰り返し」

冷えた部屋なのにアニマとは違い彼女の吐く息は白くない。

天宮柘榴が鎖黒を持って並折に入ったのなら、もう貴方に安息は無 「でも今回はわからない。今回こそ貴方に引導を渡す事ができる。

あの子が結界都市の形式に気付き、魔都を解放したその時。 そ

れがカオナシの最期。 んなわけない。 奴こそ古の妖怪達を皆殺しにした張本人なのだから」 カオナシが不憫で孤独な妖怪? ふふ.....そ

『お帰りなさいませアニマ様』

わかりました霧人様』その名前で呼ばなくても良い。 今は周りに誰も居ない」

....ぷふっ」

そこは朝も昼も晩も、

春も夏も秋も冬も、

今も、昔も、

そしてこれからも、

昏き森。

氷はどんな様子でした?』 三魔と純血一族の二足の草鞋ってのは大変そうですなぁ! 7 「ぎゃはははははは! あはははは! んはははははは! あー 毎度毎度、 仰る通りです御頭! 固苦しいったらねぇぜ!」 死使十 魔

ぎゃははははは!」 さか目の前にその当主様が座ってるとも知らねえで、馬鹿な女だぜ。 「最高だぜ、昏黒坂の名前を聞いた途端に憤りを見せやがった。

坂霧人》。 『死使十三魔の序列八位が、 まさか純血一族が組織内に潜伏しているとは思わね— で 実は純血一族の昏黒坂家当主、 《昏黒

縦横無尽の有刺鉄線、 檻がごとき木々の並び。 陽の光を知らぬ土。 茨道。

自然の結界は近寄る者を拒む。

そんな暗黒の森に、 昏黒坂家の大きな屋敷はあっ

能力で序列八位に立てるんなら、 の駒にすぎねえよ 奴ら疑 ίÌ もしねえ。 魔眼のアニマぁ? 死使十三魔なんか所詮は使い捨て きひ Ų これっぽっ ちの

ま、それも僕達にゃ必要ないですがね』 『いやいや未来視と過去視はさすがに御頭にしかできないですよ。

だろ」 番の奴、 まあな、 『能力が衰えた』とかぬかしやがる。 結構疲れるしよ。 だから怠くなって使うのサボってたら 頭パー にも程がある

『あははははは! 傑作じゃないですか』

度よ。 ? そっちはどうなんだよ霧馬? 「クソ長ぇ間、冷凍庫に引き籠ってるアイスウーマンなんざその程 序列五位をぶち殺す算段はできてんだろうな?」 脳味噌まで凍ってやがる。相手にするだけ無駄だった。 八汰祁のジジイは乗ってきたんだろ んで、

御上の処分待ちって状態ですわ』 んー、まあまあです。とりあえず現状は、 守野三桜が帰還して

もらってんのは奴だけだ」 は奴と一緒じゃなけりゃ入れねえからな。 構うこたぁねえ、昏黒坂病院まであのアマ引っ張ってこい。 御上から入り方を教えて

す算段は ようかと思ってます』 『ジジイが渋っているようですが、大丈夫でしょう。 まあ、 まずは例の 《突攻兵器》 でも並折にぶつけてみ 五位をぶち殺

「ああ? なんだそりゃ」

ほら、 居たじゃないですか。 うちの家系で使い物にならない あ **ത**

適役だわな。 突攻兵器としてすら使い物にならなかったら承知し てめえが実験台に使うとか言って生かしとい てめえの事だ、 どうせ散々いじくりまわしてんだろ? た奴か。 ねえぞ」 まあ

腹ん中に爆弾でも仕込んでおきますかね

こう側へ戻す。 に溶けた庭へ視線を向け、それから再びほんのり明るい障子戸の向 閉ざされた障子戸の前で片膝をつく昏黒坂霧馬は、 一度だけ暗闇

ブを脱いでいた。 灯火の前に立つ当主 中を窺うことはできないが、その部屋は広く畳の敷かれた空間。 昏黒坂霧人らしき人間のシルエットがロー

それから霧馬の耳に何本もの糸を千切るような音が聞こえた。

次に畳まれた衣服を振って広げる音。

帯紐を強く結ぶ音が聞こえ終わると、

あーあ」室内の影はずどんと腰を床に下ろした。

さてと、どうしたもんかねえ」

中からの声は霧馬に向けられたものではないらしい。

馬あ!」 てのは俺達にゃ不向きなんだよなぁ。 くさに紛れて五位が死んじまったらたまったもんじゃねえ。 「本格介入大いに結構。 だが、どうにも特定の標的だけを射殺すっ 多数混戦に発展した時にどさ

『 は い

ねえかもしんねえ」 五位と純血一族の接点をもうちょい探れ。 昏黒坂との因縁だけじ

な となりますと、 十年前から更に遡った情報ということになります

系から洗ってもいい。 の辺が頻繁に海外で活動していた連中だ」 「おう。 切り口はどこからでもいい。 特に九条家、 守野家、 五位からじゃ 日向家、 螺旋金家。

'......承知しました』

九条、守野、日向、螺旋金。

霧人は頼んだ。 家系間の連絡係として昏黒坂では珍しく顔の広い霧馬だからこそ、 本人はそれもわかっている。

そしてなにより当主の霧人を敬う。そんな男だった。 霧人に劣らぬ頭の切れを持つ。当主補佐として長く昏黒坂家を支え、 霧馬は優秀な人間だ。昏黒坂らしく狂気を帯び猟奇的でありつつ、

ことだな。そいつを餌に五位を一族本家の目から引き離しておく算 (ようするに僕達の他に因縁を持つ奴。 僕達や安心して喰えるってわけだ) 個人を探しゃ あいい、 って

『霧人様はこれからどうなさるので?』

てもらえば三桜も《見舞い》に来るだろうよ」 俺は若い衆に守野八汰祁を攫わせてくる。 ばらく 《入院》

なのだ。 相変わらず大胆なやり方をする当主に、 なにせ昏黒坂病院には最近、 いや、このくらいではまだ大胆とは呼べないか。とも彼は思う。 新しい入院患者が入って来たばかり 霧馬は頬を染めた。

患者の名前は《織神楽轟》。

な患者だ。 兄が死亡し、 新たな当主となった翌日に入院したという、 《不運

いや、されていた。《診断結果》では《余命三日》とされている。

(お悔やみ申し上げます。ってか)

患者の真っ黒な臓物を思い出した霧馬は静かに嗤った。

PUNICA【カオナシとは】1

PUNICA【カオナシとは】

?《妖怪》などと呼ばれたこともあった。

外を歩けば石を投げられ。

顔を伏せれば道を塞がれ。

顔を上げれば逃げられた。

たくさんたくさん傷つきながら、 男は自分の畑で作物を育て、 村

の外れでひっそりと暮らしていたのだ。

【カオナシとは】

?

?

うわけか非常に人気のある場所だ。 羽田立荘のロビー、 そこにある畳敷きの小さなスペースはどうい

を脱ぎ、 訪れる人はそこに座るべきだと本能的に察しているかのように靴 卓袱台の前に腰を据える。 もちろん広いロビーには座椅子

は大抵唯一の住人である私だけだった。

もあるし木造のテーブルだって置いてある。

だがそれを利用するの

卓袱台に肩肘を置いてくつろいでいた。 今日の来客も例によって畳の上に座り、 私の出した湯呑を片手に

お主の知りたがっている例の .. ええと、 なんだっけ、 あれだ」

「カオナシ」

うむ、そう、 の図書館に文献が残っているかもしれないとのことでござる」 それそれ。 カオナシに関する言い伝えは 《ひのえと

と啜った。 御渡瑠架子は、 まるで起伏のない平坦な口調で言い、 茶をずずず

識を向けていないと誰に話し掛けているのかすらわからず結果的に 無視してしまう場合も多々ある。 彼女の言葉から感情を読み取るのは至難の業であり、 こちらが意

てまるで頭に入っていない。 今だって私は座椅子に座って新聞を開きつつも、 記事の内容な Ň

だけだ。 りの言葉を私が必死になって耳に入れようとする光景が出来上がる わけでもなく。 ただ独り言のように口から流される奇怪な語尾交じ う話になるのだが、彼女の前に座ったとて彼女の口調に変化がある じゃあ瑠架子の前に座って会話に集中すればいいじゃな なんか嫌じゃないのそれって。 いかと

にしておこう。 だから私は新聞を読む傍ら、ゴザル女の話を片耳で聞いてい という体裁にした方が気楽なのだ。 気楽なのだ。 そういうこと ます

も数万件ほど引っ掛かったのだが」 それがいいでござるよ。 ひのえとの図書館か。 明日にでも行ってみようかな」 拙者が得意とするインターネッツ検索で

数万件つ?」

残念無念」 「これほとんどがアニメィション映画のキャラクターでござった。

御渡瑠架子。 自称侍がパソコンにかぶれた有様がこれ。 彼女は結界寮の住人で、先月知り合った女性だ。

女の放つ言葉はどれも変な語尾が付いていて、 若いのに趣味も渋い

けた人である。 のだろうかと思いきや好物はマンゴー&チョコクレープというふざ みする為だそうな。 トアで、月曜日と木曜日は必ず立ち寄るらしい。 《ショップ店員と考えたコーディネェト》らしい。愛読書は女性フ ッション誌。 たまに女性週刊誌。 好きな場所はコンビニエンスス 着ているのも着物とか浴衣とか半纏とかではなく、 少年漫画を立ち読

5 さすがに敬愛する人物は歴史上の偉人だろうと思って訊いてみた

『セフィロスでござる』

誰だよ。もうわけがわからなかった。

そんなゴザル口調の女性、御渡瑠架子。

見かけたらマンゴー &チョコクレープを奢ってあげよう。

いのは嫌でござる』 7 今日の拙者はマンゴー&チョコクレープアイスがいい。 温か

と、いちゃもんを付けられるだろうから。

ちなみに今日彼女に出した湯呑の中身は、 砂糖ありありの紅茶。

え今日行かぬでござるか」 少女柘榴殿、図書館へ行くのは明日にすると申されたか。 なに

「べつにいいでしょ」

ござる」 なさるな明朗少年はこの後フリィでござる。 おうという魂胆でござるな? 「特に理由はない、と。 ははぁん、 お主もなかなかやりおるのう。 さては明朗少年に同行してもら そして拙者もフリィで

「貴女関係ないでしょ」

人、二人より三人。 「あたた、これは辛辣な言葉を浴びせられたでござる。 三人寄ればかしまし娘でござる」 一人より二

文殊の知恵、 ね あと明朗は男だから三人揃ってかしまし娘じゃ

たしか図書館へ行く途中に」 たでござる。 ないわよ。三人寄れば文殊の知恵。 あたたたた、 その文殊の知恵を働かせるには糖分が必要でござるな。 この人真っ向から捻じ伏せにきたでござる潰しにき 文殊の知恵。 文殊の知恵!」

- 「クレープ屋があったから貴女だけそこに居なさい」
- 「おや拙者、がま口を忘れてきてしまった。これは失念
- 素直に《クレープ奢ってください》って言えばいいじゃない
- ・ クレープを奢って頂きたいでござる」
- 「いいーやぁー」
- 鬼じゃ、この女子は鬼じゃ」

視野に入れようか。 そうか、 明朗の予定が空いているなら今から行くという選択肢も

どうってことない。それに瑠架子には先月 あった際に助けて貰っている。そう無下にはできないというものだ。 ら足を運んでくれている(と思いたい)から、 瑠架子も私が羽田立荘に一人では寂しいだろうと思って結界寮 奢ってやるくらいは 九月に一つ厄介事が

わかったわよ.....奢るから。 明朗を呼んできて」

「心配無用。彼もじきに来るでござるよ」

`あら。手回しが早いのね.

· 侍でござるからな」

理由になっているのかは知らない。

それにしても.....。

(なんだか、ずいぶん並折に馴染んでしまったなあ)

かしたらもう私の中で諦めの気持ちが生まれ始めているのかもしれ ここへ来た当初はカオナシの手掛かりがあったらすぐに飛びつく の心持ちだったのに。 鎖黒だって見つからないままで、 もし

ない。

とは、 意外にも落ち着いた日常を送る事ができる街。 こうし 実はこれなんじゃないか。そう思えてくる。 て羽田立荘の掃除をしたり、 並折の住人と世間話をしたり。 私が欲していたもの

果は? ばそれなりに張りつめた空気にはなる。 聖歌には申し訳ない ってことがわかった。 たのは事実だ。 ている現状、 そりゃあ身に危険が迫ることだってあるけどさ。 犠牲となったのは結界寮の住人二人だけだ。 私の抱いていた並折の印象よりもずっと危険が少ない が、 織神楽響なんて大物の呪詛能力者が侵入すれ 式神でさえこの程度の被害しか作れなかっ 犠牲者だって出る。 結界寮が管理 カザラさんと でも結

並折と結界寮。

果世界安住の地。 魔都と呼ばれた此処は、 その実、 世界危険勢力でも手を出せない

どうしてカオナシを探す? 番姉さんをどう殺すのか? 番姉さんを救うとは何か? 何が番姉さんを苦しめる? 私は何をしに此処へ来た? 永遠という名の束縛だ。 私にはわからない。 彼女を殺してあげる事。 番姉さんを救うためだ。 カオナシを探すためだ。

ていると思った。 でも彼女を知る旧き知人 妖怪カオナシなら、 その方法を知っ

折の事をよく話した。 折は酷い街だ、と内容が傾倒していた。 雪女とカオナシは旧知の仲である。 でも決して行きたがろうとは 番姉さんはカオナ しなかっ シの棲む並 亚

女にとって縁深き土地なのだろう。 方法を求めるのは無謀ではない。 永遠を歩む彼女にそれだけの印象を植え付け だったら るのだから、 そこに彼女を殺す

だから私は此処へ来た。

うか。 今の私は、 それをもうどうでもいいと思っているのだろ

んじゃないかな。 番姉さんは永遠を歩めばいい。 私は安息を生きる。 それで 11

瑠架子はさ、どうして並折に来たの? どうして結界寮に居るの

眼差しと表情だったが、 へ向けてきた。 頭の中は甘いものでいっぱいだったのだろう。 瑠架子はいつもより若干素早く顔をこちら 相変わらず呆けた

感覚が変になっていくのでござる。 これは拙者特有のものなのかも あくまで仕事としての人斬り。ところがこの仕事を続けていると、 も無いでござる。 しれんが、見かける人が人に思えなくなってくるのでござるよ」 拙者は人斬り。 つまるところ斬殺愛好家ではないのでござるよ。 しかし好んで斬ることも無いし、好まず斬ること

感覚が麻痺してくるということだろうか。

するのでござる」 拙者はそれよりも仕事を前提にしてしまうのでござるよ。 感覚が麻 に考えてしまう。 痺した場合、一人の人間を見た時にその人間をどう斬り殺すか最初 ちょっと違うでござる。たしかにその感覚も無いとは言い難いが、 拙者の場合は、 まずその人間に対して価値を模索

「価値?」

ば 口にするのは抵抗あるが 《その人間を斬殺する事で拙者にとって益となるか否か》でご まず有り得ないでござるが、 《殺す価値》 もしその人間を依頼で斬ること でござる。 もっと言え

かり、 になっ のでござるよ」 どのような人生を斬り捨てることとなるのか。 た場合、 どれほどの依頼金を用意され、 どれほどの手間が掛 考えてしまう

「麻痺するより質が悪いわね」

「で、ござる」

きたいのはわかる。 ことはまず無いでござるよ」 であることも重々承知している。 無意味であることを承知している。 ってるわけじゃあないけど、そこまで神経質になるものなの?」 に裏稼業 「というか、瑠架子はそこまで依頼金とかに貪欲なわけ? 否。拙者とて、見かける人間それぞれの人生に興味を持つことは 殺し屋《艶斬り瑠架子》としてそこはしっかりしてお あたしも裏稼業についてとやかく言えるほど知 他の裏稼業とてこんな感覚になる 依頼金云々も、 いわゆる皮算用 たしか

だったら何故。

拙者は、 人間をやめようとしていたのでござる」

「へ?」

たのでござるよ」 人斬りとして仕事をするうちに、 己を人間とは思わなくなってい

「じゃあ貴女はなんなのよ」

「《刃》でござる」

ろう。 ていた》。 彼女は人斬りもとい、 自分の弱さを認めて、 彼女は、この並折に《逃げてきた》のだ。 なるほど。そりゃあ瑠架子もあまり口に出したくないだろう。 その一言を、 この世界で生きるには、 彼女は私から視線を逸らして放った。 折れてしまったのだ。 裏稼業にはもともと向いて 《あまりにも人道的な面を持ち過ぎ l1 なかった のだ

まりないことが気になりだした。 象の人生とか。 無意識が感覚として表に出てきた。 だから自分がただ肉を断つ刃なのだと無意識に思い込み、 《人道的な殺し屋》 依頼金とか、 くらいしか気にもしない些細極 手間とか、 殺害対 そして

たのだ。 なるあれこれは刃を振る誰かが気にする事。 しかなかったのだろう。だから自分はただの刃で、 それでも彼女は(彼女の人生は知らないが)人斬りとして生きる Ļ 無理矢理割り切っ 感覚として気に

に来た。 刃を振る誰かとは誰なのか。 そこを埋めるために、 瑠架子は並折

瑠架子という刃を振ってくれる、 結界寮を求めて。

の食べて暮らせているんだから。 折れた刃の負け犬風情が唯一生きていられる場所でござるよ」 あらら、ネガティブになっちゃった。 わかった。 瑠架子にとって、 やっぱりここは安息の地なのね」 瑠架子にとっては正解ってことで まあいいじゃない、甘いも

「うむ、そうでござるな」

刃は振らなければ、ただの鋼だ。いずれ捨てられる時が来る。瑠架子もまた、結界寮の駒の一つなのだ。自分の意志を捨ててしまった女性。

カザラさんや聖歌のようにいずれ居なくなってしまうのかな。 この女性も結界寮に命を握られた人間の一人。

立場が一番良い く関わってはいけない。 結界寮は並折を管理し、 のだ。 今の私のように、 守ってくれる。 他人事みたく話を聞ける だけど瑠架子のように深

では今しばらく明朗少年を待つとするでござるか。 なあにすぐに

来るでござるよ。 はいはい」 柘榴殿、 お茶のお代わりを。 砂糖ありありで」

その後二時間が経過し、 (瑠架子は卓袱台。 私はテーブルで食べた) 瑠架子は紅茶を何杯も飲み、 昼食まで食

ば それでも明朗が来る気配はなく、先程から何か変化があるとすれ うちの砂糖入れが空になったことくらいだ。

愛煙家だった。 食後の一服と言って瑠架子は煙草とマッチ箱を取り出す。 彼女は

男性だけでなく女性が持っても違和感がない。 S》なんて書かれている。 マッチ箱はどこかの飲み屋の物だろう。 真っ黒のデザインで、 ® B A R ∙ なかなかお洒落だ。 Н 0 S e

を据えることはせず再び座椅子に戻った。 を卓袱台まで持っていってやった。 もちろん、 私は座椅子から立ち上がると、木造テーブルに置いてあった灰皿 そのまま畳の上に腰

た。 し始めたのだろう。 紫煙をくゆらせながら瑠架子は畳に手を着き、 のんびり屋の彼女もさすがに明朗がなかなか来ないことを気に 身体をのけぞらせ

そんな時だった。

· のお!」

瑠架子が奇声を上げて身体を跳ねさせる。

拙者の印籠がバイブレィションでござる」

発音が良い。 線を彼女に向けるしかない。 何を言っているのかさっぱりわからないので、 そしてこの女、 やたらカタカナ言葉の 私はただ奇異な視

てそれのことかよ。 瑠架子がポケッ トから取り出したのは 携帯電話だった。

申す申す」

ござったな失敬した。 いやいや、そこら辺のジャンクフゥドでござ 外で済ませてしまったでござる。 これはこれは林檎殿。 ってあ痛っ!」 あ うむ、事前に連絡しておくべきで いや、すまぬでござる。 昼食は

手料理をジャンクフード呼ばわりする奴は例外ね。 いってリモコンを投擲に使うものではないのもわかっている。 もう十月なので三桜が手配した冷房も使う機会がない。 だからと 手元にあった冷房のリモコンを投げつけてやった。

僧くんは今どこに居るのか御存知でござるか?(うむ……え?) そういうことでござったか。あいわかりもうした、では」 やしかし午後から.....あれ?(ああ、しまった拙者としたことが。 いや。なんでもないでござる。ところで林檎殿、 明朗 小

る そして煙草の灰を灰皿に落とすと、私の方に顔を向けた。 明朗少年は予定が入ってござった。 通話を終えた瑠架子は、携帯電話を折り畳んでポケットに戻す。 拙者が勘違いしていたでござ

そしておそらく、 まったく。 大体会話の内容で把握できていた。 無駄な時間を過ごしちゃったじゃ 明日も忙しいでござる」 ないの。

「そうなの? まあ仕方ないわね」

ಶ್ಠ 瑠架子は胸元から閉じた扇子を取り出し、少し開いて口元に当て ずっと思っていたが、 では早速行こうではないか、 侍というよりも艶のある仕草が多い人だ。 柘榴殿」

「行くって、図書館?」

でござる。 クレープ屋は次の機会にして、 閉館する前に向かうで

ござるよ」

「やたら急かすわね。別に構わないけど」

「善は急げ。思い立ったが吉日」

· そうね」

「時は金なり。金は諸悪の根源」

「何が言いたいのよ」

「何か言いたかったのでござる」

る のか。 じゃ 彼女はいつも普通の扇子と、 きん、と扇子を開く瑠架子。 この鉄扇の二種類を携帯してい 取り出したのは鉄扇の方だった

煙草をくわえた口の前でそれをまたバチンと閉じる。

閉じた扇子を灰皿の上にかざし、今度はゆっくりと開く。

綺麗に輪切りされた吸い殻が皿に落ちた。

瑠架子曰く、 口紅のついた吸い殻を人前に晒すのは嫌なのだとさ。

にした。 ともかく。 私はこの日、 一人の人斬りを連れて図書館へ行くこと

実だ。 カオナシの情報。 まあ、 私にとっては有益な情報となったのは事

兎にも角にも私はカオナシという妖怪の恐ろしさを知ることにな

るූ

PUNICA【カオナシとは】2

「お姉ちゃん!」

瑠架子は足を止めた。 ひのえと駅を降りてすぐ。 駅構内で誰かを呼ぶ大声を聞いた私と

こから発せられたのか視線を向けていた。 私達の他にもぞろぞろと電車から降りた乗客は誰もがその声がど

ん!」とまだ大声を出しながら大きく手を振っているのが見えた。 明らかに、私と瑠架子の方を見ている。 小学生だろうか。 小さな男の子が、 人目もはばからず「お姉ちゃ

私達は顔を見合わせ、互いに知り合いではない事を確認し合った

その子は手を振りながらこちらへ歩いて来るところだった。 人違いではないかと再び男の子の方を見る。

お姉ちゃんとは私か瑠架子の事か?

男の子は私達の前で止まると 瑠架子ではなく、 私を見上げた。

お姉ちゃん、 あの時はありがとうございましたっ」

と、言われても.....。

のだが、 人だと認識しているようで。 どう思考を巡らしてもただの人違いだという結論に到ってしまう 私はこの子を知らないし、 男の子の方は至近距離に居ながらまるで疑いもせず私を知 もちろん何かをしてあげた記憶も無い。

怪訝な顔をする私の方がおかしい感じになっている。

柘榴殿、本当に見知らぬ子なのでござるか?」

隣から小声で言ってくる瑠架子も、 私が忘れているのではないか

という疑いを持ってしまっている。 純真無垢な少年の笑顔は、 それくらい素敵なものだった。

いやはやお主、さすがにまずいでござるよ....

「何がよ」

いくらこちらの世界といっても、 少年に手を出すのはちょっと..

:

「まずその発想がおかしい!」

私に少年趣味はもちろん無い。 明らかにこの子は一般の子供。 私と関わる機会なんて微塵もない。

まうほど私も記憶力に問題があるわけじゃない。 くらいしか経っていない。その間に関わりのあった人間を忘れてし あの時がどの時かも知らないし、私が並折に来てからまだ四ヶ月

らんだリュックサックを背負っており、 かへ向かうのだろうと予想する。 い笑顔というものにはまず警戒してしまう。 見たところなにやら膨 にこにこと向けられる笑顔。 矢神聖歌の件もあって人当たりの良 これから電車に乗ってどこ

私は膝を曲げて少年に顔を近づけ、「ええと.....」

「こんにちは」

とりあえず挨拶をするしかない。

۱۱ ? すると私が挨拶しただけでも満足したのか、 自信たっぷりで顔を見つめてくるこの子に対して『 とはさすがに言い辛く、どうしたものかと困り果てる。 少年も頭を下げた。 人違いじゃな

僕のこと覚えていない んじゃないかって思ったけど、 良かっ

覚えていない。 けど、 君の笑顔がそれを言わせてはくれない のよ

少年よ。

掛けてみたのだろう。その勇気に乾杯。 ていないことも有り得る。 なにか些細なことで私の顔を覚えられたのか。 この子もそれを承知して、 それなら私が覚え 一か八か声を

倖でござるなぁ」とか言っているが無視。 お姉ちゃんのおかげ。 隣で瑠架子が唇に人差し指を当てながら「いいでござるなぁ。 やはり全く身に覚えがないけど、お礼を言って受け取った。 と言って渡されたのは飴玉。 これ、 実に子供らしいじゃないか。 あげる!」

うん。 その体躯にしては大荷物だけど。これからどこか行くの? そう訊くと、 あのね、 少年はなぜか寂しそうな顔をした。 おじいちゃんの家に行くんだ」

「遠いの?」

九州

九州? 周りを見渡してもどうやらこの子、 ああ、 ずっと南じゃないか。 一人だ。 そりゃ また長旅だ。

「そっか、なら安心ね。気を付けてね」「うーんとね、違うよ」

ろう。 隙間からなにか白い布が見えた。 車の時間を確認したらしい。 少年は大きく頷き、 彼の腕の太さに合わない腕時計を眺める。 彼がリュックサックを背負い直した際 それで中の荷物を包んでいるのだ

て中を漁りだす。 彼は「そうだ!」 Ļ 思い出したように荷物を胸の前に持っ てき

かれたハンカチ。 取り出したのは この歳の少年らしい、 戦隊物のヒー

瑠架子に中身を見せてくれた。 なにかを包んでいるようで、 大事そうに丁寧にそれを開いて私と

あのね、 ここに来る途中で見つけたの」

あら綺麗ね。 良い香り」

ほほう、 強い芳香でござるな」

六枚の白い花弁。 つやのある花だった。

お母さんもね、 お姉ちゃ んに『ありがとう』 って言ってたよ」

そうなの」

この花。 お姉ちゃんも好きって言ってたもんね」

え? ٦̈ـ ええ....」

な白い花は香りが強かった。 私は花に詳しくはない。 瑠架子の言う通りそのジャ スミンのよう

だった。 街を出るのだそうで、 この街を離れる人。 彼はきのえと駅まで路面電車で移動し、そこから乗り換えてこ そろそろ時間だと言って私達は少年と別れた。 それを見送るのは、 なんだか不思議な気持ち

出ることがどれだけ特別なことなのかは知らないだろう。 ていいことだ。 べつに彼は並折の住人ではなく表側の住人なのだから、 知らなく この街を

なかなかの苦さでござる」 あの花から取れる山梔子はよく漢方薬に用いられるでござるな。

瑠架子、 今の花を知ってるの?」

乙女たる者、 花の種類くらい知っていて当然でござるよ」

侍なのか乙女なのかはっきりしなさいよ」

「乙女侍。で、ござる」

何その新ジャンル。

も出来なかった。 ともあれ結局人違いの感が否めなかったし、 それを少年に言う事

のかもしれない。 いという気持ちを晴らすことができたのだから、 正直に言うべきだったのかもしれないが、 あの子がお礼を言いた あれで正解だった

駅を出た。 改札口を抜ける少年の後ろ姿をもう一度見送って、 私と瑠架子は

築の家屋やマンションのある住宅地まで作られた。 少し前の地図だ と載っていないだろう。 は違い、デパートやファーストフード店の立ち並ぶ近代的な街と化 している。 ひのえと駅を出て商店街を抜けた先。 山を切り開いて作られた土地で、少し離れた場所には新 そこは昔からある商店街と

館》として多くの人々に利用される立派な公共の施設である。 その中に大きな図書館もあった。 もちろん《並折図書館》 なんて名前ではなく、 作り直されたからまだ新し 《表側の 図書 建

る前》 私と瑠架子が行こうとしているのはそこではなく、 の図書館に用があった。 《作り直され

いる。 とは知らないだろう。この在る筈のない図書館こそ、 と呼べる。 もちろん表向きにはとっくに取り壊されて今は無き建物とされ だからこの地に住まう一般人は、この街に図書館が二つある 変な言い方をすれば裏図書館。 《並折図書館 7

が立ち入ったところで損をするのが関の山。 こちら側の ケが出るとか噂される場所でもある。 の処置が施されているもしくは、霊的媒体の作用によるものだ。 例えば、 並折に限らずこういった場所は世界中あらゆる土地に存在する。 世間的には廃墟としかみなされていない場所。 人間でないと意味のない場所なので、 それは魔術的 興味本位で一般人 ・呪術的に人払 よくオバ

に建っている。 その古い図書館も、 商店街と開拓街のちょうど境界にあたる場所

境界は実に都合の良い立地条件だ。

べき場所なのだ。そのくらい重要なのね。 いる。 境界線上こそ我々の世界では意識すべき観点であり、 いうものが必在し、多在するのがこの世の理だからね。 二つに隔てる線というのは特殊な力を帯びる。 あちらと、こちら。それを区切る線は意識から逸らすのに適して 万物には区切りと 陰陽然り。 注視す

思っているその並折図書館もそういった認識から隔離された場所で あるということだ。 ともあれ誰もが『古い方の図書館はもう壊されて存在しない』と

に足を運ばなければならなかったようでござる」 まあこの図書館も、 一般的に利用されていた頃はコソコソと地下

結界寮としてもひのえとの土地開発には益があるのね

「いや、まあ.....うむむ」

どうしたの」

でござる」 実は先月、 結界寮の事情で. 病院を一つ大破させてしまっ たの

「ぶっ!」

暴れすぎだろうそれは。

大きな病院が高台にあるって聞 そういえば病院も開発に合わせて新 にった。 しくなっ たんだっけ。 すごく

うとは 心置きなく利用できるようになった筈。 図書館と同じように、 古い方の病院もこちら側の医療施設として それを.... 大破させてしま

「いや、大破させたのは新しい方でござる」

「おい!」

「仕方なかったのでござるよ」

地を裏で仕切っている以上、もうちょっと結界寮も表側に気を遣っ た方がいいと思う!」 「あたしが言える立場じゃないけど、 こうやって結界都市として土

でもただのポニーテール。 テールがびくんと揺れた。 商店街を歩きながら私は声を荒げ、それに反応した小柄のポニー その髪型は彼女曰く、 サムライヘアー。

かった。 聖歌が居なくなってから新聞を読む機会が少なくなったので知らな ちょうど一軒の小さな本屋があったのでそこで新聞を購入する。

っていないか。 書かれているのを見つけた。 うむ。 スが大きいや。 もう記事は小さくなっているが、病院の修理状況について つちのえとで起きた工場の事故の方が記事欄のスペ 先月の事件だからさすがに写真まで載

都市は勢力として内部ばかり気にしているわけにもいかぬでござる からな」 結界寮もそれなりに重く受け止めているでござるよ。 しかし

「そっちもなにかと大変そうね」

「うむ。苦労が絶えぬでござるよ」

ちなみに両手に一つずつ、 両手に クレ - プを握った女が吐いていい科白じゃ ではない。 両手に二つずつ。 ないと思う。 四つのク

たくない。 レー プを持っ ている。 しかも全部同じ味なのだからもはや何も言い

瑠架子だが、 情変化)で、そこいらの若者と変わらないダラダラ歩きをしていた 普段より幸せそうな顔(目を凝らして観察しない いきなりその歩き方が変化した。 とわからない表

これは容易にわかる変化だ。

踵と爪先をしっかりと接地させ、股関節から背筋を駆使して素早く 歩き始めた。 膝から下を遊ばせるように振る気の抜けた歩き方から一変。 私も合わせて歩行速度を上げる。 靴の

いる。 一定の間隔で口を付けていたクレープも瑠架子の意識から外れて

IJ 一体何事かと彼女を見て 彼女は小声で言った。 いた私の視線に瑠架子の視線が重なるな

は何でござるか?」 問おう柘榴殿。 お主が知りたがっているカオナシというもの

「 妖怪」

でそのまま言った。 何だ? と訊かれても、 並折に棲む妖怪としか答えようがない の

پخ ようで、 どうやら瑠架子が足を速めたのは気持ちの高ぶりに起因して 若干強張った面持ちになっている。 これも微妙な変化だけ いる

よろしいか。 だから私達は図書館に向かっているんじゃ 柘榴殿はカオナシという妖怪を求めて並折へ来た、 そして並折の図書館にその文献が残っている ないの。 という解釈で 今更なによ」

る変化だ。 瑠架子の表情は、 青褪めたものになった。 これははっきりとわか

ない。 妖怪カオナシというのは、 現代でも、この街のどこかに居る筈の妖怪よ」 滅びた妖怪では

「ありえないでござる!」

感情をこめない瑠架子が、声を張り上げるなんて初めてだ。 急に大きな声で言われたので、 さすがに驚いた。 いつもは言葉に

私が何も言えずに隣の顔を見つめていると、 彼女は構わず続けた。

5 でござる! 「この結界都市に妖怪は存在せぬ! 結界寮は もし、仮にその妖怪が現代も尚生き続けているとした この街は 地獄絵図と化している筈!」 そんなことはあってはならん

·.....どういうこと?」

「いいでござるか柘榴殿」

瑠架子は人格が変わってしまったように肩を上下させて呼吸し、

眉間に皺を寄せた。

うより、 どうやら私は彼女の怒りに触れたらしい。 恐怖。 彼女の恐怖心を煽ったということか。 いや、 これは怒りとい

ざるな」 携えていたがゆえ、 いうやつでござる。 「並折の妖怪については知っているでござるな。 八月の一件ではその妖怪の能力を垣間見たでご 人々から忌み嫌われた者達。 いわゆる能力者と 生まれつき能力を

現させ、 妖怪雨女か。 江本佐々奈に与えた。 あの時はたしか聖歌が安永筆・豊房で能力だけを顕

佐々奈の感情に反応し、 長い間雨の日が続いたっけ。

あんなもの、 能力の一部にすぎぬでござる。 能力だけ蘇らせたと

怪。 強大な者達だったのでござる。ある者は指先一つで地を揺らし、 だが、 怪とは、 Ţ かねない能力者だったのでござる。 たある者は一呼吸で生命を枯らした。 を変えてしまうほどの力。 此処に集った者達は、人々だけでなく それを使いこなせる能力者がおらぬのでは発揮できぬでござる 垣間見せた能力の一部だけでも並折という街に限定して気候 現代に跋扈する呪詛能力者などとは比べ物にならないほど 柘榴殿、 ただの妖怪ではなく、 勘違いしてはならぬ。並折の妖 一人一人がこの世界を滅ぼし 並折の妖

「同じ能力者 妖怪からも忌み嫌われた?」

もしれ ことでござる」 つもこいつも一人一人が大量殺戮兵器のような連中だった》 う説もある。 ただ確実に言えるのは《並折に集った能力者達はどい んでござる。 そもそも妖怪それ自体は本当に作り話を起源とし そこに実在する能力者が混じってしまったとい てい る の か

た者達くらい 不思議には思っていた。 しか存在しないと思っていた。 能力者という存在は、 今では呪詛を宿し

ともなかった。 生まれつき何らかの能力を持っている者が居るなんて、 聞 ίì

何かのおかげで能力を得る彼らとは全く異なる存在なのだ。 純血一族や死使十三魔のように呪詛を宿しているわけでは

ない。 はわけが違う。 た雨女は、 雨女の能力だってそうだ。 もっと凄まじい降雨被害をもたらす者だったのかもしれ あれが能力の一片なのだとしたら、並折で生きてい 雨を降らす? 身体から毒を出すの

死の証も遺され はカオナシを除い でも カオナシ伝承によれば、 たいる。 て全員死んだとされている。 その大量殺戮兵器のような連 実際に怪遺産という 中

て カオナシと、 るわけだ。 もう一人の生き残り 雪女は、 まだ現代に存在し

地獄絵図を作り出せることも解っ ないの?」 たしかに並折の妖怪が強大だっ たわ。 たとしたら、 でも何故、 カオナシも然りよね。 並折に存在でき

が封印の結界を張ったのでござる」 「結界でござるよ。 並折には、強大な妖怪が跋扈できぬよう何者か

印も結界屋が張ったの?」 は、結界寮の結界屋が結界を張っているからなんでしょ? ちょっと待ってよ。この街が結界都市って呼ばれている その封

げ状態でござる」 界屋でも解除方法はおろか、 界は古式術法の地形活用型に解除条件付きという代物。 呪詛弱効化結界を付け足したにすぎんのでござるよ。 「否。封印結界が施されたのは遥か昔。結界屋はそこに感知結界と その術式や仕組みもわからないお手上 しかも封印結 さすがの結

とか。 詛弱効化結界を上乗せしたと。 オナシが跋扈できないように結界で封印していた街だったというこ 瑠架子の話からすると、この並折はもともと、 そこに結界屋が目を付け、 封印結界をベースに感知結界と呪 強大な妖怪 力

界都市ということなのか。 つまり、この結界都市は、 古代と現代の結界師二人による多重結

妖怪封印結界

これに、

- 感知結界
- 呪詛弱効化結界

が加わった三重の結界。

これが魔都並折を驚異の土地たらしめてい るもの。

いやちょっと待て。

が存在することだって有り得るじゃないの」 瑠架子。 古式結界は妖怪を封印するだけでしょ? ならカオナシ

機で押し潰して『はい封印』って言っているようなもんでござる。 める土地ではいられぬでござるよ」 ナシは世界を終わらせる力の持ち主でござる。 これでもまだ存在し続けているのだとしたら。 しても存在していられるわけがないでござるよ。 「否。否、否。 こんな凄絶極まりない結界、 たとえ封印であっ それこそ、そのカオ この並折とて人の住 豆腐を鋳造プレス たと

それが事実ならカオナシはもう.....。 結界の力が強すぎて、 封印どころか滅びてしまったのか。

「う.....」

ち、ちがう

なんだ?

私の記憶ではない光景がフラッシュバックしてくる。

瑠架子の顔が消え、商店街の光景が消えた。

カオナシの存在有無について、私は何故か確信を持っている。

強大な妖怪は存在していると尚も断言できる。

私がそう言える理由が不明瞭なのに、 私は何かを知っている。

眩暈がする。ちかちかちかちか。

私はひのえとに居る筈なのに、 私の目は違う光景を映す。

嫌だ。この部屋はもう見たくない。

暗くて、独りで、静かで、寒い。

その中で私は誰かを見つめている。

青い髪。白い肌。

骨の芯まで凍えて身体が軋む。

素早く画面を切り替えるように、 人の女性を見る角度が変わる。

ちかちかちかちか。

私は、私は、私は、私は。

雪のような女性の奥に。

そこに。

ああ、やっぱり。

私が居た。

だって、だって、 がっ、ぎ、 あの人は、ずっと、ずっと、 お、終わらない。 あの人は、 永遠に、私ばかりを 終わらない。だって、

私

私の顔が潰されると、 いつも彼女は私に背中を向けて、 私を見

た。

私の顔を潰したのは、あいつ。そうよ、いつだって。

あいつ。 あいつだ。 あいつ! あいつが私の顔を!)

知っている。私はあいつを知っている。

『またお前か。グレナデン』

たしかにこの目で顔の無い奴を捉えていた。

俺が求めているのは番だと言っているだろう』

もしない。 封 印 ? 封印だって? あいつはそんな生易しい処置じゃ 揺らぎ

気に入らねえな、その態度。 その目つきと鼻につく耳障りな

山振り』

寄るな。寄るな。寄るな!

『潰れろ』

?

ははははは、何?何だって?』

0

-

!

くははははははははは!』

7

だぞ。 台無しじゃないか。 っぺりさっぱり何もない顔に、 ないだろう聞こえないだろう嗅げないだろう。 お前にはソレがお似合いだ。 苦しいか、息ができないか、何も見え 9 ほら刃物を貸してやる。 くっははははは! 引っ掻いても引っ掻いても爪に肉が詰まるだけ 小賢しいんだよ娘。 息がしたけりゃそれで自分の綺麗の 穴を開けるんだな』 おやおや綺麗な肌が 小生意気なんだよ娘

はっ。本当にやりやがった。醜い様だ』

自分の血で溺れてやがる。 どうしようもねえな、 馬鹿女』

つ

「畜生……畜生あの野郎! ちくしょう!」

「ど、どうしたでござるか柘榴殿っ?」

れる血で胃も肺も埋め尽くされた苦しみも、 どうして覚えているんだ! 握ったナイフの感触も、 自分で切り裂いて作った口の痛みも、 確かに覚えている! 溢

顔の無い、あの野郎の姿まで!

を、よくも!」 「意味わかんない意味わかんない意味わかんない、 あたしの顔、 顔

ざるか?」 落ち着くでござる、これ、 柘榴殿。 拙者でござるよ。 わかるでご

「わかってるわよ五月蠅いわね!」

おおう..... ヒステリィというやつでござるか...

正直、わかっていなかった。

の隅にうずくまって悲鳴が呻き声に変わってきたあたりから。 私に声を掛けて いるのが瑠架子なのだとわかってきたのは、 路地

う。 識を飛ばしてしまっており、 驚いた瑠架子が何度も呼び掛けてくれたそうだが、私はどこかへ意 どうやら私は歩いている途中で突然頭を抱えて叫びだしたらし ひたすら『顔』 と叫んでいたのだとい

その時の私は完全に自我を失っていた。

したのかもわからない。 どうしてこのタイミングで在る筈のない記憶がフラッシュバック

架子が自販機でペットボトルの水を買って戻ってきた。 落ち着きを取り戻し、 次に襲ってきた頭痛に苦しんでいると、 瑠

「こういった事、よくあるのでござるか?」

「.....無いわよ」

ツ プを締める。 五百ミリリッ ルの水を半分ほど一気に飲み干し、 力任せにキャ

阿呆か私は。

なにが『安息を生きる』 だ。 なにが『このままでいい』 だ。

いいわけないだろう。

私は番姉さんを殺し、カオナシも殺す。

動機の記憶がすっぽり抜けているが、私は此処に辿り着いた。 本

能でやって来たのだ。

で知り合ったのか、 どうりで不明瞭なわけだ。 私はいつから番姉さんの傍に居たのか。 私が何者なのか、 私は番姉さんとどこ

ふふ。 あはははは

全部、忘れている。

時に訊けばよ 思い難いが、たとえそうであったとしても、 く擦り込まれた憎悪は拭い去れない。 雪女とカオナシ。 これが何故なのかは知らない。 それが今ではちゃんと顔もあり、生きている。 だが私は確かにカオナシに会った。 いだけだ。 この妖怪二匹が私に何をしたのか。 この明瞭な感覚が偽りの物だとは これだけでも十分な動機だ。 奴に顔を潰され、 私の腹の底 死んだ。 それは殺す 心に深

かちん。 Ļ 私の中で枷のようなものが外れた。

「瑠架子、カオナシは居る」

·

がる」 絶対に居る。 今もこの並折で、 生意気にも口描いて呼吸していや

「しかし.....」

ょ けがない。あいつが大人しく息を潜めているのは何か理由があるの 「地獄絵図? あいつの地獄絵図がたったこれだけの血で描けるわ

「お主、 思い出したでござるか」 どうしたでござるか。カオナシについて知っていることを

はっきりとは思い出せない。

だが、それに気付いたというのはとても大きい。

いう証明だからだ。 それは私の記憶が第三者の手によって何か手を加えられていると

わけがない。 そんなことができるのは 番姉さんを置いて他に居ない。 居る

悪く言って私から遠ざけようとしたことや、 私の記憶からカオナシを取り除いた。 由としてはこれが最も有力だ。 私はカオナシに会った事があって、 私を縛って傍に置いていたのは彼女なのだ。 顔を潰された。そして雪女は 確証はないが、雪女が並折を 今見た記憶の断片の理 彼女だけなのだ。

瑠架子。あたしに会った事ある?」

に私を見てきた。 瑠架子は口を半開きにし、 左目の瞼だけを持ち上げて怪しむよう

一今、会っているではないか」

そりゃそうだ。

《グレナデン》って名前、聞いたことある?」

した。 私はこの街へ来て初めて、 私が持っていたコードネームを口に出

にはわからない。 だから私が死使十三魔の元序列四位直下部隊構成員だとは瑠架子 でも私の物とは言わない。 それにもう捨てたコードネームだ。

「グレナデン? シロップでござるか?」

「コードネームよ」

「ああ、コードネーム

しまった!』と、思った時には 、相も変わらず後悔した時には既に遅く...この御渡瑠架子を、嘗めすぎていた。私は浅はかだった。

御渡瑠架子を、敵にしてしまっていた。鉄扇の刃が私の頬を斬りつけていた。

無論、知っているでござる」

瞬間 至近距離で見る瑠架子の目は殺気を帯びていて、そこに先程まで 私は首を鷲掴みされ、 商店街の脇道へと押し込まれた。

の彼女は居なかった。

敵として召喚してしまったのだ。 光は遮断され、 建物と建物の間に走る脇道 甘いもの大好き御渡瑠架子ではなく、殺し屋《艶斬り瑠架子》 影が重なり、 人の女が殺されようと誰もすぐに 路地裏は、 まるで世界が違った。 を、

は気付くまい。

ドネームは口にするまいと誓っ 私は馬鹿か。 何があろうとこの街で たのに。 l1 どこであってもコ

誓いを破った結果がこれだ。

瑠架子はもう私を敵と認識している。

けてくる。 じゃきん、 と開かれた鉄扇を三本の指で持ち、 私の喉元に突きつ

位の直下部隊。「グレナデン。 るでござる。 それ即ち、 《柘榴のシロップ》 浅はか極まりないでござるなお主は。 グレナデン その中に、グレナデンというコードネームは存在す そりゃあ知っているでござる。 死使十三魔、 序列四

自分で付けた名前だった。 もともと天宮柘榴という名前は、コードネームを由来として私が

すなんて。 自分の記憶を取り戻そうとしたがゆえに、 やっぱり私もこの世界で生きていくのは向いていない。 こんな単純なミスを犯

用はカオナシとか申しておったな。 求めて何かを企てているでござるか」 死使十三魔の手下が、並折に何の用でござるか? ならば死使十三魔はカオナシを 11 せ お主の

喉に鉄扇の刃先が食い込む。

痛みが走った。 切れ味が良く、 ちょっと押し込まれただけで私の首の皮は切られ、

「違う.....あたしは、 もう...

者に絞っておった結界寮の不覚。 してしまうとは」 不覚であった。 純血一族の件が続いていた為に、 死使十三魔の下位部隊の侵入を許 警戒を呪詛能力

絶体絶命

の中で様々な思考が凄まじい速さで巡っていく。

される。 掘り葉掘り吐かされるだろう。 まで知られているのなら、 これから私はどうなるのか。 死使十三魔について尋問を受ける。 謎に包まれている序列四位についても根 瑠架子は結界寮に報告し、 カクテルズという素性 私は捕

ばカオナシの文献を、その支配力によって並折中から掻き集めるだ ナシの実在する可能性について結界寮に再考を進言する。 そしてカオナシ。おそらく瑠架子は私の話を聞いているのでカオ そうなれ

もう番姉さんを殺すどころではなくなる。

かれてピリピリしているこの状況で。 死使十三魔まで介入してきたと結界寮は認識する。 純血一族に突

別に箱分けして全部死使十三魔へ送り返す。 それがこの世界でよく 取られる手法だ。 見せしめとも言う。 ら、当然私の手なり足なり目なり歯なりを奪って、私という本体と さすがの結界寮も危険勢力二つを相手にはしたくないだろう。

だって私は勝手に抜けて勝手に結界寮に捕まった脱走者なのだから。 送り返された死使十三魔の方は、結界寮に対して特に何もし 脱走者に《それなりの》罰を与えて、 終わりだ。 な

つまり、 ここで結界寮に捕まったら、 どちらにせよ私は 0

「いやだ……」

ならこの手と と申しても拙者はお主を結界寮へ連れてゆくでござる。 抵抗する

右腕が扇子で叩かれた。

「この足を切断するだけでござる」

助けて瑠架子、 右足も扇子で叩かれ、 あたしは死使十三魔を抜けたの! ついでに扇子の柄で頬を殴られた。 信じて!

成員とおぼしき侵入者を捕獲し、 裁定に任せるでござる」 それは拙者が判断する事ではござらん。 連れ帰る。 拙者はただ危険勢力の構 あとの判断は結界寮の

そんな.....」

お主とはもう話す口を持たぬでござる」

完全に結界寮の駒と化している。 駄目だ、 やはり瑠架子はただの刃。 こういうタイプに説得なんて無駄 現場判断も至極単純なもの。

どうする。 足掻いてみるか。

それこそ彼女の言う通り、 殺し屋に? 人斬りに? 私が手足を失って終わりだ。 喉元に刃を突きつけられたこの状況で?

どうする。どうする。

どうしよう。 どうしよう。 どうしよう。

もはや私に成すすべは ない。

わかった..... 降参する」

結界寮だろうとどこだろうと連行するといいわ」

瑠架子?」

返事がない。 なぜか喉元に当てられた鉄扇がカタカタと震えてい

තූ

「っ!」強い力で、 私の腕が掴まれた。

反射的に身を強張らせた私だったが、 その掴んできた腕も震えて

ることに気付く。

おそるおそる瑠架子の方に視線を向け

私は見たものは

つ、

 \neg

呼吸ができずに混乱する、 口と鼻のない御渡瑠架子の苦悶の表情

「瑠架子!」

「 、 つ、 つ-

ガラン、と鉄扇が地面に落ちた。

私を掴んでいた腕も離れた。

瑠架子は身をよじって暴れ、 ばりばりと自分の口があるべき場所

を引っ掻いている。

しっかりして瑠架子! なにこれ.....」

私は地面で転がりまわる瑠架子の上に覆いかぶさるように座り、

彼女の顔を調べる。

鼻と呼べる突起が無い.....。 唇と呼べる形も無い。 口と呼べる穴

も無い。

力で、 く引っ掻いた傷がいくつも付いている。 のっぺりと、ただ肌があるだけ。 そこがベコンベコンと激しく起伏を繰り返している。 強く空気を吸いたがる横隔膜の 爪で強

ツ、ツ・ツ!

ばんつ、ばたんつ、ばんばんばんばん!

ざりっ、ざりっ、ざりざりざりざり!

ばたばたばたばたばたばたばたばたばたばた!

苦しむ瑠架子の履物が地面を叩き擦る音が私の胃を押し潰そうと

してくる。

いくらなんでもひど過ぎる。 むご過ぎる。

髪を振り乱し、 涙を浮かべて暴れる彼女は、 私の腹を、 腕を、 肩

を、無意識に殴りまくる。

どうにかしてあげたい。 してあげたいけど。 どうすれば.

『ほら刃物を貸してやる』

私の表情は凍りつく。

視線だけがじとりと横へスライドする。『息がしたけりゃそれで』

瑠架子の鉄扇が開かれたまま、 自分の綺麗のっぺりさっぱり何もない顔に』 転がっている。

これで、穴を、開ける?のないで、穴を開けるんだな。

カッターナイフのような刃が何枚も連なった、 手に取った鉄扇。 ずしりと重い。 瑠架子特製の殺人

鉄扇。

この刃で、瑠架子の顔に、 そんな残酷な真似、 で 穴を開ければ、 できるわけが.....。 息ができる?

『どの口が言う。 お前のその手は綺麗だとでも?』

綺麗だなんて言わない! だけど、 私はこんなこと、したくない!

事がなかったとしても、 こちら側の人間だよ』 『出た出た。 直接手を下した事がない者の詭弁。 指示をするだけだったとしても、 お前は直接殺めた 残酷な、

うるさいうるさいうるさい-

るぞ。 『さあ、 お前と一緒に茶を飲み、 ほら、 苦しんでいるぞ。 食を摂り、 息がしたい息がしたいと泣い 談話をした、 御渡瑠架子 てい

奴だぞ? 架子はお前から四肢を切り取ってでも結界寮へ連れて行こうとした 『いいじゃないか。 むしろ感謝される行為だろう?』 それで彼女の望みが叶うのだから。 そもそも瑠

流して気管に入ったようだな。 『おや。 苦しみのあまり嘔吐したようだぞ。 時間の問題から それが全部そのまま逆

『安心しろ。 舌も消しておいてやったから噛み切りはしな

なんて、奴.....!

なっては後頭部を何度も地面に打ち付けている。 瑠架子は狂乱し、馬乗りになる私を跳ね飛ばす勢いで海老ぞりに

鉄扇を握る手が震える.....。

私にはできない。 そんなことをしたって、 瑠架子は助からない。

ッ !

「あう!」

鉄扇を落としてしまった。 瑠架子の振り回した腕が側頭部に当たり、 バランスを崩した私は

架子は、 地面と鉄扇が接触した金属音が響き、 反射的にそれを掴み取ってしまっ 意識が遠のき始めてい た。

「だ、駄目、瑠架子!」

私の声なんて届いていない。

体に染み付いた扱 ただ息のできない苦しみに苛まれ、 い方を、 そのまま行使させようとした。 握った鉄扇の感触は彼女の身

瑠架子は迷いもなく鉄扇を閉じ、 自分の顔に 突き刺した。

ざくり。

ッフ、 ッグ.....

つ い ...

ッブ、

ッブギュ!」

ざくり、ざくり、 ざく、ざく、 ざく、

瑠架 嫌あああああああああり!」

ぐしゅ、 ぐしゅ、 ぐしゅ、ぐちゅ、 ぐちゅ、 ぐちゅ

うわあああ! うわああああああああま!」

私は顔を背けた。 両手で耳を塞いだ。大声で悲鳴を上げた。

とても見ていられなかった。聞いていられなかった。

瑠架子が自分の顔に刃物を突き刺し、 顔面から血飛沫が噴き上が

り、それでも彼女は手を止めなかった。

何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も-

抜いては突き刺すを繰り返した。

やがて 痙攣を最後に彼女の身体は動かなくなった。

うう、ううう..... 瑠架子.....」

頭部は上顎から千切れる寸前まで破壊しつくされていた。 色のぐちゃぐちゃになっていた。 赤い肉がびろんと広がり、歯が散らばり、 瑠架子が口のあった部分ばかり鉄扇で切り刻んだことで、 首から上はもう 彼女の 赤

でいた。 にも染みが広がっていた。 仰向けの瑠架子のミニスカートは股間の部分を中心に湿り、 瑠架子は尿を垂れ流しながら悶え苦しん 地面

っくりと瑠架子の身体から降りる。 肉片に包まれ、 血塗れの手に握られた鉄扇から目を背け、 私はゆ

離れると、路地裏の壁際に転がっている小さなバッグに手を伸ばす。 瑠架子の物だ。 そこらじゅうに撒き散らした血と尿の中で倒れる彼女の死体から

を、 そこから彼女の携帯電話を取り出し、 機械的に押した。 私の唯一知る十一桁の番号

三度目のコー ルで相手は出た。

はし もしもし。 瑠架子さん?」

あれ?

もしもし?」

明朗.....

ん、え? その声はクロちゃん? どうしたの!」

瑠架子が..... 瑠架子が.

ちゃんっ?」 ちょ、ちょっと、 クロちゃん泣いてる? 何があっ たの? クロ

瑠架子が

死んだ。

死なせた。

殺した。

殺させた。

私は見ているだけだった。

明朗にどう伝えていいのかわからなくて。 頭の中がごちゃごちゃ

何も言えなかった。

ただ

だから私は、怖くて何も言えなかった。これが、妖怪カオナシの仕業だということだけは確かで。

PUNICA【カオナシとは】3

瞔 い集め、 ニット帽を深々と被った頭が私の顔を覗く。 私からの電話を受けて明朗がひのえと商店街の路地裏に到着した 私は御渡瑠架子の死体近くで彼女の散らばった歯を一つ一つ拾 片手の平に乗せているところだった。

ク、クロちゃん.....なに、これ」

痛かったでしょうに。 可哀想な瑠架子。 苦しかったでしょうに。 怖かったでしょうに。

この場に居なくとも人間を殺すなんて容易いんだ。 彼女を葬った奴は一度も姿を見せなかった。 それがまた恐ろしい。

「これ.....瑠架子さん?」

ていただけだった。 あの時、瑠架子は結界寮の住人としてその仕事を遂行しようとし でもどうして瑠架子が殺されたのだ。

どうして私は生きていて、瑠架子だけが。

『お主とはもう話す口を持たぬでござる』

そう言ったからなの? だから顔を消されたの?

その一言を言ったから、 瑠架子はカオナシの殺害対象と認識され

てしまったの?

じゃあ、瑠架子が死んだのは私が原因だ。

体何があったのクロちゃん しっかりしてくれ!」

瑠架子が死んでくれたおかげで、 私はまだ目的に手を伸ばす事が

できる。

「はは、ははは.....」すごく笑える。

あのままだったら、 私は結界寮に捕まっていたんだもの。 私が死

め答だった。

びる弱い女なのよ。 私は元々そういう女だったじゃないか。 わかっていたことじゃないか。 此処はそういう場所なんだって。 他人の犠牲を糧に生き延

変させた。容赦なく私を殺そうとした。 瑠架子だって、私が死使十三魔の関係者だと知った途端に態度を

私が原因で瑠架子が死んだ。

だからなんなのよ。

混乱して恐怖して苦しんで、落ち着きを失ったのは瑠架子だ。 何度も顔を破壊しなくたって、助かったかもしれないじゃないの。 いれば命に関わる出来事に遭遇する事なんて誰でも有り得る。 瑠架子が勝手に禁句を口にしただけじゃない 遭遇し、そこでうまく対処できなかった瑠架子が悪いんだ。 ගු あんなに激し

私はきっかけにすぎない。

界寮へ連れていけば良かったものを。 そんな判断もできない馬鹿 らと過剰に警戒したからだ。 私が強くないことくらい知っているくせに、 さっさと腕なり足なり斬り落として結 危険勢力関係者だか な

たよ、 ねた意思のない駒なんて、長く生きていられるわけがないじゃない。 やっぱり貴方をきっかけとして気付いたものは間違ってい そうよ。 響 瑠架子はどうせ早々に死んでいた。 結界寮にすべてを委 なかっ

私は生きている。 立ち回り方。 瑠架子はそれが間違っていたから死んだの。 そして

私は.....生きている。

生き.....て。

はわかる、 なければいけないんだ!」 こともわかるよ! 泣いてるだけじゃ わかんないよクロちゃ 瑠架子さんの有様からして、残酷な光景を見てしまった でもそれをやった奴が近くにいるなら早く追わ Ь ! 怖い目に遭っ た

違う.....。

私の目に焼き付いているのは、 頭から離れ ない のは、

瑠架子が自分の顔を破壊する様じゃない。

私がショックだったのは、瑠架子の目。

殺し屋稼業に身を置き、 艶切りの異名で知れたあの女性が、 ひど

く怯えた目で私を見つめていたことが辛い。

を貫くのが特徴だったくせに、あんなに恐怖を曝け出して。 くないって、私に目で訴えてきた。 私を殺そうとしていたくせに助けを求めて涙を浮かべて。 死にた 無表情

なんだあれは。

並折の住人なら最期くらい《らしく》死になさいよ。

そういう場所で生きているし、それが当然だと覚悟して生きてい

たんでしょう?

ンビッチなんでしょう? 一般的思考の私と違っ ζ 瑠架子は変態雑食厚顔無恥 のファ ツ +

クレイジーな思考で日常生活に死が溶け込んでいるくせに、 61 ざ

自分が死にそうになったら恐怖するの?

都合の いいことだ。 それじゃ あまるで 《 人間》 みたい じゃ な

か。

認めな 私は認めない。 他人の死に碌な感想も抱かない奴が。 いからな それが瑠架子のデュアルフェイスだなんて絶対に 死に際に見せた本性がそれ

僕がわ な かる? 手が血塗れじゃ ほら目線合わせてみて。 ないか、 握っているのは 駄目か、 瞳孔が定まって 歯 ? 瑠架子

認めない。認めない。認めない。

そんな貌を見せられた私は決して認めない。

てしまった。 私まで怯えた顔になっていた。 てできるわけがないじゃないの。 私は だってそうでしょう? あんな目で見つめられて、 瑠架子を助けたいと思っ 恍惚の顔なん

そんなのありえない。

それではこの記憶が揺さぶられてしまうではないか。

私の物ではない私の記憶が瓦解してしまうではないか。

だって.....だって.....私も、瑠架子と同じ貌で死んだ筈だも

それを見たあいつは、 私が最期に見たあいつは 嗤っていたも

0

カオナシは、それを愉しむように嗤っていた! どんなに助けを求めたって、苦しんだって怯えたって、 あいつは、

の並折の住人共のように。 でもその私は非情で冷酷で殺戮に魅せられた女だった。 そう、

じ貌で死ぬ筈なんだ。 だから瑠架子もその時の私と同じ貌で死ななければならない。 同

の武器 況 ? うですか。ええと、犯人は見当たらずです。 ましたよね。 落ちていますので、御渡瑠架子に間違いないかと。 顔を瑠架子さん も 林檎さん、 しもし林檎さん? その.....頭部が原形を失っています。近くに彼女の持ち物が 鉄扇で切り刻んだみたいです。 はい.....えっ? さっきたしか瑠架子さんに電話を掛けたって言ってい 瑠架子さんが.....死にました。 外食? 他には何か、 死体に刺さっています。 ぁੑ え、 はい、 そ

ていましたから、 現場には ίį 現場はひのえと商店街から横道に逸れた路地です。 誰も居ません。 手が空いたので様子を見に行こうと思ったんで 僕は彼女から図書館に用があると聞 目印

と駅から商店街にかけての警備要員を数人ほど寄越してください」 死亡して間もない 向かう途中で襲われたものかと。 は薬局と靴屋の間 ので、 の 念のため回収班には護衛を。 はいその路地です。 回収の手配をお願いします。 そうですね、 あとはひのえ 図書館に

明朗が居る。誰かと電話で喋っている。

彼の足元で瑠架子が倒れている。 閉じられた鉄扇をぐっちゃぐち

の肉で包んで、両腕を広げて。

るよ。 明朗、 そこ瑠架子のおしっこが広がってるよ。 踏んじゃって

食事? た遺体を調べてみないと。 かに瑠架子さん自身の鉄扇でやられていますけど。 とにかく回収し はあ、 自殺の可能性? 誰の? これから作り直す? 梵さん? こんな方法では有り得ないですよ! 林檎さんも早く現場検分に はあ、 忙しくて? はあ、 遅い時間に はぁ? たし

捜査に行きます! だらすぐに来てください! もうい 失礼します! いですわかりましたよ! 現場をそのままにして離れますよ、 僕は犯人が近くに居ると仮定して周辺 じゃ あ梵さんの食事が済ん 11

明朗、怒ってる。

たく、 瑠架子さん、 やっ ぱりあの人達はどこかおかしい。 あんなに良い人だったの 頭の螺子が外れて

私もおかしいんだよ。ここでは明朗がおかしいんだよ。おかしくないよ。

るよ。 うんオッケイ。 くか。 さあクロちゃん立って。 のパフェ店のもの。 おっと領収書が二枚。 バッグから取り出したんだよね? いさっきか? さてと。 あとは一、周囲にクロちゃんの持ち物は落ちていない、 えーと、僕宛の発信履歴.....あった。 クロちゃんそれ瑠架子さんの携帯だよね、 うーん、 鉄扇も血塗れだしどうやら指紋の心配は要らないね。 四つとはさすがです瑠架子さん。 一つは洋服店のもの。二日前か。 外食云々言ってたからなあ。 回収班が来る前にこの場を離れよう」 戻しておくか。 削除、 کے 財布の中は一、 全部捨ててお 十五時.....つ ちょっと借り あと、 これでよ ځ 駅前

目の前に手を差し伸べられた。

明朗、笑ってる。

明朗の手。握ってみたい。

でも私の両手は瑠架子の血で濡れているから、 こんな手では握れ

し

力が出ない。

瑠架子から離れたくない。

あんな貌で死んだのか訊けると思った。 待っていれば彼女が起きてくる気がした。 そうしたら、どうして

いっと強い力で身体が前に持ち上げられる。 すると明朗は私の両脇の下に手を挿し入れた。 腕が背中に回り、

私の胸と、明朗の胸が重なった。

、よいしょっと」

彼は私 私はこれを知っている。 そのまま臀部に手が回り、 彼は背を折 の胸 は背中に当てられ、 の両腕を彼の肩へと移動させ、 り曲げる。 私の体重は完全に彼の身体に預けられた。 背後から彼を抱き締める形になった。 私の身体が浮いた。 自分の身体を反転

おんぶ。赤子を背で抱く形だ。

初めてだったが、不思議と安心する。

うと肌で知った。 明朗の呼吸が胸から伝わってくる。 人それぞれ呼吸のリズムが違

私の顎が肩に乗るように調節してくれる。

「どうして.....」

間でトラブルでもあったのかなって思ってさ。 もしそうならますま す面倒だよ。 扇で付けられたものだよね。 もしかしてクロちゃんと瑠架子さんの 近くに居たなら、 てかなり面倒だよ。 クロちゃん? あと、犯人の顔、 結界寮の聴取を受けることになるからね。 そりゃあ、 あとクロちゃんも首筋に傷がある。 瑠架子さんが奇怪な死に方をしてその 覚えてる? 何があったか話せる? その形は鉄 それっ

..... 話せるわけがない。

じ結界寮の住人だ。事実を知れば、また惨劇が繰り返される。 路地の奥。さらに暗闇へ。 無言で肯定も否定もしない私に明朗は何も言わず歩き出した。 私が死使十三魔の元構成員だなんて言えない。 明朗は瑠架子と同

ここからでも図書館には着くと、 彼は独り言のように呟いてい た。

なんで図書館に?」

ら聞いたよ、カオナシという妖怪について知りたい クロちゃんは図書館に用があったんじゃないの? んだって?」 瑠架子さんか

「.....ん、えっ?」

残っているかもって」 だって僕が瑠架子さんに教えてあげたんだよ。 あそこなら文献が

1) して霧中のように朦朧としていた思考が晴れてきた。

知らないんだから」 駄目だよクロちゃ hį 結界寮の人達でもカオナシについてはよく

でも明朗は知ってるのよね。 あんた本当に何者?」

あはは、と彼は私を背負い直して笑う。

る?」 「僕が何者か。 そうだなあ、 僕が話したらクロちゃ んも教えてくれ

「え....」

もっとクロちゃんのこと、 「クロちゃんが何者なのか。 知りたいな」 どんな理由で並折にやって来たのか。

- う.....」

係は崩れてしまうから。 正直.....断りたかった。 私が正直に素性を話せば、 私と明朗の関

なければならなくなる。 くることになる。 彼は結界寮の住人として私を捕えなければならず、 瑠架子の時のように彼が私に敵意を向けて 私は彼を退け

そうなるのは、嫌だ。

「あたしのことは

話したくない? そうだよね、ごめん。 並折に来る人にそれを訊

くのはNGか」

「どうなんだろう.....」

「じゃあクロちゃんがもし話してもいいと思ってくれたら。 その時

に、話してよ」

「うん.....ごめん」

であったとしても. 謝らなくていいよ、 当然だもんね。 でも僕は、 クロちゃ んが何者

「*ん*?」

「あはは、なんでもないよー」

そう言って明朗はまた笑う。

顔に浮かべる表情はまず疑うというのに、 表情が見えないから彼がどんな感情を持っ それを見たがる私はや ているのかわからない。

っぱり変だ。

でも何故だろう。

ていた。 彼と話す時。 彼と会う時。 彼の顔を見ていたいと思うようになっ

明朗はいつも気遣ってくれる。 この街で独りの私が頼れる存在。

が地元民だからさ」 もない僕がどうして結界寮に居るのかだよね。 「えーっと、何から話そうかな。 やっぱ、 能力者でもなく裏稼業で 簡単だよ。 それは僕

「地元民?」

ある人間を欲したんだ。それで、僕が雇われたってわけ」 や結界屋がこの街に来た時に、この街の歴史を知っていて土地勘の 「そう、言葉のまんま。 結界寮が並折にできた時 つまり管理人

「じゃあ明朗は、 正確には..... 結界寮が来る前にも封印結界があったわけだから、 ここが結界都市になる前から住んでいたのね

結界屋さんによって本格結界都市化する前から。 だね」

「ああ、そっか」

れてしまったということになる。 じゃあ明朗は結界寮ができたと同時に、 こちら側の世界に入れら

矢理引き込まれたのだと予想する。 ろうか。 それまでは表側で、一般人として生活を送っていたのだ。 何故こちら側に入ったのだろう。 いや、私が持っている結界寮の印象からして、 彼が自分の意志で選択したのだ 明朗は無理

表側 への配慮など、 己が組織の為ならばいくらでも欠くことの出

来る連中だ。

ない。 瑠架子のように雇った裏稼業ですら意のままに操る駒に しか考え

並折の案内人という人材を確保しようとしたに違いない。 を躊躇せず引き込むくらいはするだろう。 だから結界寮管理人 それどころか脅してでも

明朗は、 表側よりも《こっち》 の方が良かった?」

.....

でも彼は迷いのない口調で答えた。 少し口篭もっ たのは、 考えたかったからだと思う。

結果としては良かったよ」

にいきなり飛び込んで、すぐに適応できるわけがない。 が飛び交い、世界危険勢力なんて存在があって、常軌を逸した人殺 しが日常茶飯事で、 そりゃそうだ。 過程ではたくさん悩んだかもしれない。 純血一族だの暗殺組織だの裏稼業だのという言葉 超常異常が現実に起こる世界だぞ。 苦しんだかもしれ そんな世界 ない。

結果としては良かった。

吐息に相槌を打ってくれた。 その言葉を聞いた私が哀しげに吐息を漏らすと、 明朗は لح

詳しい地元の人間が必要になったんだ。この街に既に張られ 界寮が独自の感知・呪詛弱効果結界を張ろうと動き出す際、 妖怪封印結界をベースにしようとしたからね。 雇われることになっ 結界寮ができた当初、僕も少しの間は表側に居たよ。 た。 そこで僕が結界寮に それから結 土地に ていた

たよ。 自分の頭がおかしくなったのかと思った。 だって普段

は気付かなかった、 歩いている道に、 を統轄しなければならない』と。 林檎さんは言った。 なっちゃったんだ。 ごく自然に死体が転がっているんだよ? その時に管理人として僕を引き入れた梵さんと 気付けなかったものが全部見聞きできるように 『これが街の真の姿』 『結界寮はこの荒れた街 今まで

間を殺す。表側の人々は警戒もできなければ死んだことすら無にさ れてしまう。認識できないのだから。 だから僕も協力する事にした。 裏側の文字通り無法者が表側の それを防ぎたいと心底思った」

だ。 結界寮はやはり並折に必要な組織。 明朗もそう思って協力したん

の連なりが終わっている。 明朗の話の途中で、 視界が明るくなってきた。 隙間を走るこの路地裏も終わりだ。 前方を見ると建物

は立ち止まってしまった。 しかし、路地裏の終点であり大通りに繋がる手前で。 何故か明 朗

不思議に思って私が首を傾げていると、 という明朗の呟きが聞こえた。 ほんとうに小さな「

梵さんと林檎さんは、 嘘を吐いていた」

嘘 ?

結界寮それ自体が原因だったのさ》 んだ。《この街が裏稼業や無法者、 僕を引き込むための方便だった。 能力者で溢れかえっていたのは、 しばらく結界寮に居て気付い た

「どういうこと……

られる梵さん。 《ティンダロスの猟犬》 クロちゃんには一度話したことがあるけど。 瞬撃という異名で知られる林檎さん。 に於ける最高戦力と呼ばれるチームに居た」 無音という異名で知 あの二人は、

確かに聞いた。 七人一組の逸話だ。

二人が来るまでは此処は荒れていなかった」 ム解散後、 二人はこの街へやって来た。 僕の調べでは、 あの

ての裏稼業や賞金稼ぎが集まってきたと」 つまり 《無音》と《瞬撃》という異名に惹かれて、 賞金目当

もそもあの二人だったんだ。 結界寮が街を荒らし、 「名を売ろうとする能力者もね。だからこの街が荒れた原因は、 一組織として膨れ上がったってことさ」 結界を張って治 そ

た。 もう自分で歩けるから大丈夫だと言って、 私は明朗の背から降り

いうことか。 今の話が事実なら、 つまりこの並折を魔都にしたのはあの二人と

ダロス戦闘員であるあの管理人達。 ここを裏世界の人間で溢れかえらせたそもそもの原因が、元ティン 並折はただカオナシという妖怪が封印されていただけの土地で、

た。 にしてしまった。更には感知結界によって実質的な支配体制を整え そして結界を張り、純血一族及び死使十三魔の干渉を避けるよう

過程にすぎなかったのだ。 結界寮の目的は、 並折の統治なんかじゃない。 それは真の目的 **ത**

梵と林檎。

あの二人はまだティンダロスの猟犬と繋がっているの か?

る 本制覇を前提とした拠点。 繋がっているのなら、結界寮の目的は 無論それは純血一族の駆逐も意味 ティンダロスによる日 してい

明白。 は容赦なく排除する方針をとっている。 することも考えられる。 れも日本に拠点を置く以上、純血一族との対立を想定しているのは だが二人の独断だとしたら、目的は 今後の動き方によっては死使十三魔やティンダロスとも対立 事実結界寮は危険勢力相手だろうと侵入者 勢力としての独立。

い何かがあるのか? もっと違う目的が存在するのか? 私の思考では到底辿り着けな

どちらにせよ並折は近い未来、 それは明朗が最も避けたい未来である筈でしょう? 激戦の地になるぞ。

ならどうして明朗は未だ結界寮に所属し、 協力し続けているの?」

この問 いに彼は

と、片目を閉じて白い歯を覗かせた。

もし瑠架子が私の隣に居たら、 と言ったかもしれない。そんな雰囲気を醸し出していた。 今の明朗の仕草を見て『ミステリ

僕の話はここまで。さあ行こう」

私の方を向いていた明朗はくるっと反転し、 表通りを先に歩いて

ゆく。

ろうか。 今頃は結界寮の回収班が瑠架子の亡骸を見て言葉を失っているだ

たがっているからなのだろうか。 に感じられる。あれは現実ではないのだと、 路地裏から出ると、 つい今しがた起きた惨劇が悪い夢だったよう 私が無意識にそう思い

瑠架子.....

も明朗が傍にいるだけで随分気持ちが落ち着いたようだ。 彼女の死に様を目撃したショッ クは決して薄れていない。 それで

て天を仰いでいる。 先行する背中を眺めていると、 ふいにその軸が揺れた。 顔を上げ

工事かなにかだろう。 んで向こう側にある電柱のほう。 しかし彼が見ていたのはそんな遠きいや果てではなく、 高所作業車が停まっている。 車道を挟 電気

電線が切れたんだ」

張断線か知らないが、戸惑っている様子。商店街で断線だなんて。 電柱が少しばかり傾いているのもなんだか気になった。 彼の言う通り作業員が断線した部分を調べていた。 疲労断線か引

感なく建っていた。 商店街を逸れた道を進んだ先。 民家の並ぶ中に、 旧図書館は違和

築三十~四十年くらいと思われる。 小さな建物だ。

とさえできない。 手入れされていないガラスは罅割れて汚れも目立ち、 中を覗くこ

が外へ飛び出してきた。 明朗が力いっぱい固い戸を横に引くと、 重い音と共にもわっと埃

廃墟かよ。

私がそう呟くと明朗は小さく笑い、 中へ入っていった。

は蜘蛛の巣の張った空の本棚だけが並んでいる。 案の定保管されていた本は全て新しい図書館へ移されており、 本当に廃墟だった。

本が一冊も無い図書館とは、 滑稽ね

あはは。 そんなこと言うと司書さんに怒られるよ」

なんと司書が居るらしい。

私は見たことがないが、 そういう存在はおとなしく呪術師に処理されるべきだ。 動を行っていると聞いた。 身体が透けていたり足がなかったりする司書だったらごめんだ。 最近は西洋でネクロマンサーが活発的に活 そういえば

類なのだろうか。 く傀儡には禁術を用いていたそうだから魔術師に違いないけど。 しないだろう。 死体技術師だの死体美術家だの言いそうだ。 聖歌は死霊より死体を扱った魔術という点ではネクロマンサー 傀儡屋を名乗っ ていた以上、 死霊魔術師とは自称

「で、そのオバケ司書はどこよ」

「僕なんだけど.....」

明朗オバケだったの?」

゙ オバケだなんて一言も言ってないんだけど!」

の管理も彼が押し付けられたらしい。 羽田立荘と同じように、 一般的に使われなくなったこの旧図書館

ないか。 管理も何も、 掃除なんかしていないし鍵だって掛けていないじゃ

場所に調べものに来る人なんて居ないし.....」 此処の事を知っているのって結界寮の住人くらいだし..... こんな

って、そういえば明朗はカオナシを知ってるの?」 なんだってい いわ。とにかくカオナシの文献とやらを出して

「うん、機会があってね」

機会?」

その中に、 檎さんが読みもしないのに手当たり次第掻き集めたこの街の情報。 寮の倉庫にあった書物も此処へまとめてしまったんだ。 そう。 実はこの図書館を任されることになった時、 一通の手紙があった」 ついでに結界 梵さんと林

- 手紙?」

白い内容だっ 遺書だよ。 たけど僕は興味なかっ 外界からやって来た研究者のものだった。 たからそのまま図書館に置いた なかなか面

.....もしかしてそれが?」

に存在するカオナシ関連の文献はそれだけじゃないかな」 カオナシに関する文献。 他にそれっぽい物も無い

んでしまい、こちらから彼の姿が見えなくなった。 明朗は埃だらけの受付台を乗り越えて奥に入る。 確かに並折中の情報を掻き集めたのなら、そういうことになるか。 そのまましゃが

「えーと、どこだっけか」とか呟きつつ棚を漁り、 あった」と、

これまた古いノートを一冊、台の上に置いた。

表紙には《貸し出し台帳》と書かれている。

クロちゃん、そこに名前書いておいて」 それだけ言うと明朗は再び頭をひっこめて埃の園へ入ってしまっ

応彼も此処では司書という立場だから言った通りにしよう。 果たしてこんな場所で貸し出し台帳が意味を成すのか疑問だが、

「.....へえ」

色々な名前が上から順に並んでいる。 意外にも利用者はそこそこ

居るようだ。

笑える。 訪れる人がみんな埃まみれになっていることを思うと、 なんだか

《資料》と書かれている。 左から年月、名前、借りた本の名前。 それでいいのか明朗司書殿 本の名前はアバウトに全部

ま、いいか。私もそう書こう。

ページをめくって一番新しい名前を探す。

あった。

年月は 《二〇〇四年、 七月》。 二年前か。 それから誰も利用

していないなら、そりゃあ埃も溜まる。

ている。 名前の欄には数字が書かれているだけだ。 なんのこっちゃ。 《三九五番》 と書かれ

で、借りた本はやっぱり《資料》

その下に私も同じように二〇〇六年、 十月と書く。 名前欄には天

宮柘榴。 借りた本は資料、と。

よし。

埃対策か。 彼はいつの間にか被っていたニット帽を脱ぎ、 台帳を閉じて明朗を呼ぶと、 準備の良い奴だ。 埃のついた頭が台の下から現れる。 マスクを着けていた。

あった?」

あったよ。 ほら」

込め、 明朗は書いた内容も確認せず貸し出し台帳を閉じて台の下に引っ 入れ替わりに色褪せた茶封筒を置いた。

読んだ明朗は遺書だと言っていた。 封筒には何も書かれていないし雑に開けられた痕跡がある。 先に

やっと辿り着いた。

カオナシの手掛かり。

胸が高鳴る。

よ、読んでもいい?」

興奮を口に出すと、 明朗に笑われた。

読むために来たんでしょ?」

それもそうか。

ただ、 此処はちょっと埃が多いから、 外へ出よう

に目立った人の気配もない。 ル付きのベンチまである。 明朗の案内で、 団地の片隅にある公園へ移動した。 子連れの母親が散歩をしている以外は特 屋根とテーブ

私と明朗は封筒から出した数枚の便箋をテーブル上に並べた。

それを読む前に、 ちょっといいかな」

けだ。 いうのはわかった。 カオナシの存在について、 内容から察するに、そのカオナシってのがすごく危険な奴と だから、 君に訊いておきたい」 結界寮の人間で知る者はおそらく僕だ

「どこでカオナシを知ったのか? したいのか?」 それともカオナシを調べてどう

ない。 ただね.....」 「僕が知りたいのは後者だ。 君が外界でどんな生活をしていたのかも知らない。 クロちゃん、 君につい て僕は何も知ら ただ...

彼は両手を組み、一呼吸置く。

君がこの街を破滅へ導くつもりなら、 僕は君を敵としなければな

らない」

「明朗....」

君は、この街の僕の敵かい?」

「あたしは

ことも訊かない。 ないから」 いや勿論知的好奇心ゆえの調べものだったら問題ない でも此処は並折。 生半可な覚悟で来る場所じゃあ Ų こんな

゙あたしには 外の世界に殺したい人が居る」

殺したい人.....

しようなんて意志は無い その為にカオナシの力が要るの。 わ それだけよ。 この街をどうこう

出せば、 ただ この街などひとたまりもないだろうけど。 瑠架子の言っていたようにカオナシほどの妖怪が本気を

なるかもしれないが)並折どころかこの国も破滅するんじゃ まあ番姉さんを殺せなかったら、 いずれ (といっ ても何百年後に ないか

な。あの人は人間が大嫌いだから。

その為にはカオナシに会って殺す方法を知らなければ始まらない。 ようするに番姉さんを殺すことを一番に考えるしかないわけ。

それに伴う事象は全部保留だ。

明朗も私の返事を受けて頷く。 だから私にこの街を破滅へ導く意志はない。 間違ってはいない。

悲しげな顔で何か呟いたようだが、

......君達は.....何度もそうやって......んでいくのか......」

私にはよく聞こえなかった。

とにかく今の私は手に取ったこの便箋にすべての興味を奪われて

いた

んな姿に変えた存在への悪足掻きくらいだ。 そして両耳を失った今。 私にできるのは人生の振り返りと、私をこ こうしてなんとか筆を握ることはできているものの、 カシアス・スレイヴはもはや生き延びる意志すら失せた。 片目と鼻、

してしまわねばならない存在である。 《滅世録の使徒》と呼ぶ。どちらも同じ意味であり、この世から消 ある者達はそれを《破滅の物語》と呼び、 またある者達はそれ

殊な 生まれながらにして超常の力を持ち得た者。 その中でも極めて特 君達がどう呼んでいるのかは知り得ないので、 世界を終わらせ、創る可能性を秘めた者のことだ。 簡単に言おう。

思う。 私はその研究に関与していなかったものの、 だからこそ私は誰よりもあれを危険に思い、 噂は耳にしてい 同時に魅力的だとも

魅力的と文字にしてみて自分で笑えてきた。

世に残っていたとして。 さて。 ここに書き綴る恐ろしい存在に関する私の記録が、 もし

いと思ったのだろう。 これをどこかで見つけ、 読んでいる君は あれについて知りた

念を晴らして欲しい。 ああ、 是非知っておいてくれ。 そして叶うなら私と私の助手の

そうだな。まずは、やはり昔話から始めよう。

これは今からずっと前の話。

日本の、とある土地。

な集落があり、一つの村として体を成していた。 商いで栄えた町から山をひと越えふた超え。 そこには小さな小さ

の男がそこに住んでいた。 そんな村の外れに、不恰好で今にも崩れそうな家屋が一件。一人

家は村の中でも一際古くて小さくて、近くにこれまた小さな畑が

あったとさ。 村の子供たちが悪戯でもしたのか屋根には動物の糞や肥やしが乗

男は頻繁に屋根に登っては掃除をし、 草葺屋根の手入れをした。

っていた。

壊れた鍬や家具が乗っている日なんかもあった。

ないと思って再利用した。 鉄製の壊れた農具が投げ込まれ肝を冷やしたこともあった。

出てくると兎のように逃げ出した。 ってくるとすれば悪戯目的の子供くらい。その悪童達も、 男は村の嫌われ者。皆は彼の家に近寄ろうともしなかっ たし、 彼が表に

男は生まれつき顔が無かった。目も鼻も耳も口もだ。 土地の住人達は、 男の顔を見るたびにこう言ったものさ。

『化け物』

つるっつるの、 聞け そりゃあそうだ。 何のための顔だ? ない話せない食べられない。 何もない肌が貼りついているだけ。 そこにあるべき目と鼻と耳と口が無いんだ。 息すらできない。 見えない嗅げな

でも、男は生きていた。

彼は彼なりの方法でそれらを可能にする術を持っていたのだ。

それは、架空の顔を《描く》こと。

呪文を書くように、 彼は何もない己の顔に目と鼻と耳と口を描く

事ができた。

男は魔の化粧の年を持っていたのだ。

しかしその術、完璧ではない。

顔の部品は六つまでしか描けなかったのだ。

彼に術を与えたのは西洋の魔術師だったのではないかと言われて

いる。

魔術師は、こう言った。

『それで十分』

男は手に入れた術で、 なんとか生きていくことができた。

それでも土地の人々からは忌み嫌われた。

《妖怪》などと呼ばれたこともあった。

外を歩けば石を投げられ。

顔を伏せれば道を塞がれ。

顔を上げれば逃げられた。

たくさんたくさん傷つきながら、男は自分の畑で作物を育て、 村

の外れでひっそりと暮らしていたのだ。

ある日のことだ。

旅の者が村を訪れた。

男は自分には関係のない出来事だといつも通り食事の支度をして

いた。

村の住人が、男の家へ旅人を連れてきた。

この旅の人は、お前に用があるそうだ』

男は喜んだ。

来客なんて初めてだった。

男は二人分の食事を用意し、 聞けば旅の人は、日本各地で絵を描きながら旅をしているらしい。 旅の人を快く迎えた。

旅人は男の顔を見るなり、笑顔で言った。

。 なるほど噂通りの妖怪だ』

旅 人は男のように妖怪などと呼ばれる人間を探して絵を描き旅を

していたのだ。

男は悲しかった。

それからまた時が経ち、 村を今までにない寒さが包んだ。

吹雪で出歩くこともできず、 男は火を焚いて冬が過ぎるのを静か

に待っていた。

そんな日に、戸を叩く音。

訪問者に対してあまり良い印象がない男は、 胃に重さを感じなが

ら戸を開けた。

こんにちは。 こんな..... 妖怪ですが、どうか一晩宿をお貸し

ください』

さらりと述べた訪問者。 髪の青い、 女性だった。

男が驚いたのは髪の色ではなく、 女の吐いた言葉。

妖 怪。

と渡り歩いているのだという。 みを持っている彼女を迎え入れた。 彼女もまた、化け物と忌み嫌われ、 男は同じ境遇、 定住することなく各地を転々 同じ苦しみ、 同じ悩

彼女は雪女と呼ばれていた。

そして男は女から、 同じ境遇の者達が集まる土地があることを知

に助け合って生きようと集まったそうな。 れて暮らすことを決めた者達。同じ悩みで苦しんだからこそ、 その者達は妖怪と呼ばれ忌み嫌われることを受け入れ、 人とは離 互い

雪女も賛成し、そして、言った。 互いに助け合って生きる。男の夢見た生活がそこにあるからだ。 その話を聞いた男は雪女と共に、その土地へ行こうと決めた。

では、 貴方の苦しみを少しでも減らしてから向かいましょう』

そう言った。 男を長年苦しめ続けた連中に、 相応の罰を与えてやろう。 彼女は

けるだろうと。 連中が生き続けていれば男の心にずっと苦痛が根付き、 苦しめ続

罰を与える。

苦しめる。

..... 仕返しをする。

たしかに男はその方法を知っていたし、 持っていた。 でも何があ

ろうとそうはしなかった。

忌避されることは仕方のないことだと思っていたから。 悪いのは、皆と違って生まれてきた自分なのだと思っ ていたから。

それを雪女は否定した。

貴方も、 もともと貴方の力。その使い方を教えてもらっただけ。 貴方のそれは特別な力。 つまるところ、 人を超える特別な存在。 それを排他するのは愚行に他なら 異なる存在を見下すしかできない連中なのよ』 魔粧の術とて、 与えて貰ったのでは 私も、

同じ苦しみを味わってきた者の言葉。

今までずっと己を苦しめてきた連中に、 どうして情など掛けてや

る必要があるだろうか。

男の力は強くて大きくて、誰も持っていない特別な力。

そう。奴らは《持たざる者達》なのだ。

持てる者を妬む愚かな人間達だ。

翌日 男と雪女は、村から姿を消した。

その後、 村からの作物が途絶えたことを不思議に思った隣町の商

人が、吹雪が止んですぐに村を訪れた。

ひっそりと静まり返った村の中、声を上げれど誰も返事をし

これはどうしたことかと、 一軒の家屋を覗いた。

商人は中の様子を見るやいなや腰を抜かし、 言葉を失い、 地を這

うように大慌てで他の家屋も覗いて回った。

村人は全員、死んでいた。

誰が誰なのかわからない有様だったそうな。

目も鼻も耳も口も潰されて。

村人みんな、顔が無かったのだとさ。

私と助手がその《妖怪が集まる土地》 へ訪れた時、 こんな昔話を

聞かされた。

よくある作り話だと私達は話してくれた老人を嗤った。

なんでも《カオナシ》なる妖怪の話だそうだ。

妖怪? 空想の化け物の話を聞かされたところで何の面白味もな

۱,

女も、 私は組織で実在する化け物をたくさん見てきた。 私はもっと雪女らしい化け物を見知っている。 話に出てきた雪

この日本という小さな島国。 その中の 《ナミオリ》 という土地に

遥々やってきたのは、組織の任務だった。

組織

今となってはどうでもいいものだ。

私の仕事は、 世界各地を飛び回って超常現象を調べ超常道具を回

収すること。

ナミオリへ来たのは前者 つまり超常現象の調査だ。

我々は《グラウンドゼロ》 と呼んでいたが、それは置いておこう。

ともあれその調査過程で、 気になるものを見つけた。

距離を置いた四つの場所に、見たことも無い魔方陣が描かれてい

たのだ。

専門の助手は、 それが結界を成すためのものだと分析

魔方陣は、誰かが消そうと試みたのか幾つも傷がつけられていた

どうやら結界には微塵も影響はなかったらしい。

非常に強力なものだと助手は言った。

現地人として同行してもらった 例の妖怪の話をした 老人

は 「絶対にその紋様を調べるな」 「関わってはいけない」

きりに我々に忠告した。

老人曰く、その魔方陣はカオナシを封じ込めているものらしい。

封じているとはどういうことか。

私が問い掛けると、老人は何かを言おうとして 死んだ。

我々の前で老人の目が潰れ、鼻が削げ、 口が裂け、 耳が落ち、 最

後には頭部が果実のように弾け飛んだ。

絶句。

異常事態だ。

正体不明の攻撃と判断し、 私は組織へ戦闘員の派遣を要請した。

しかし無線は繋がらなかった。

ナミオリを出ようと一歩外へ出た助手も、 顔が潰れて死んだ。

手遅れだったのさ。

私達は老人の話を思い出した。

カオナシ。顔の無い人間の、強大な力。

とっくに私はそれの手中に嵌まっていたということだな。

実在したんだよ、その妖怪は!

私は急いで新たな現地人を雇った。若者だ。

カオナシと関わりたくないと言う者ばかりで苦労したが、 やっと

見つけた協力者だった。

その頃には十人近く居た私の助手も全員死んでしまっていた。

私と若者の二人だけだが、 なんとかカオナシの呪縛から逃れる方

法を探そうとしたよ。

若者は教えてくれた。

『カオナシは神様みたいなものだ。 封印されていても手当たり次第

殺したいと思えば、こうやって封印から逃れて殺す。 殺し過ぎた時

は、また増えるまでじっと待つ。この街はカオナシのものなんだ』

人間を差し出すという。 だからできるだけ怒りに触れないように暮らし、 いわゆる生贄だ。 何年かに一度は

私は彼の話を聞いて気分が悪くなった。

カオナシが神だと? これは能力者の所業だ。 とてつもなく

力を持った能力者の。

神などではない。 ただ殺人を好む人間の所業なのだ。

私は若者にカオナシを殺す手はないか尋ねた。

私がこの街を出るには、 もはや奴を殺すほかに手はない。

若者は言った。『ある』と。

四ヶ所に描かれた封印の魔方陣。 これは日本で言う《九字切り》

の法を用いているらしい。

そしてこの魔方陣は、 それ自体がカオナシの存在と直結 してい

という。

つまり四つ の魔方陣を消せば、 カオナシは消滅するということだ。

の傷は、 つ これまで多くの者が試み、 一つ一つが過去の住人によって付けられたものなのだと知 そして死んだという。 私の見た魔方陣

か。 魔方陣を消そうとすればカオナシに殺される。 どうすれば良いの

若者は、憐れむように私に言ったよ。

この模様を消すには、 カオナシの封印に用いた道具が要る』

それは何かと尋ねる。

刃物。《鎖黒》という名の、小さな刃物』

トザクロ。

その刃物こそ、カオナシを滅ぼす鍵だった。

それを使えばカオナシは手を出す事ができず、 魔方陣を消す事が

できる。

何処にあるのかと尋ねると、若者は悔しそうに言った。

..... 並折の外。 とある妖怪が、持ち出したんだ。

絶望だ。

外部と連絡が取れず閉じ込められた私は、 つまり彼は、 私には手に入れる事ができないと言ったのだ。 もう、どう足掻いても

この並折から出られないのだ。

魔方陣の場所については、そうだな、伏せておこう。

トザクロを持たずして近付くのは危険だ。

断言しよう。 雪女に連れられて街にやってきた顔の無い男。 奴は、 これからもずっとナミオリで生き続ける。

とを切に願うばかりだ。 奴が解き放たれず、 この街だけで殺戮を繰り返すだけに留まるこ

とも願う。 そしてあわよくば、 トザクロを持つ者が、 奴を滅ぼしてくれるこ

まうだろう。どうやら私はここまでらしい。 そろそろ、 この目も両方潰れてしまう頃だろうか。 口も消えてし

というのに。あまりに疑いなく人を信じてしまった結果か。 こんな世界で私もまた多くの人間に死を与えてきた非情なる男だ

ってしまうのだからな。 れたらという願いが叶うわけもない。 こんなものを書いたところで、この手紙だけでもナミオリを出 恐ろしい土地さ。 運命まで縛

ることだろう。その影響も計り知れない。 私のことも、 助手達のことも、きっと外の世界では抹消されてい

実に残念極まりなく思う。

させ、 私の偉業、せめてこれを読んでいる君には覚えておいてほしい。 知ってほしいと言うべきか。

して欲しい。 私を既に知る者なら、 これを読んで私との見えない繋がりを修復

繰り返したものの実用段階まで進み、 能力者の助力を基に人間複製の研究を行っていた。 カシアス・スレイヴは組織《死使十三魔》 複製人間による一個小隊を構 何十回と失敗を に於いて、

氷製人間部隊は我が人生の集大成にして、成するに到った。 最大の罪

にこの程度の死に方をさせるわけがない。 た神をも恐れぬ所業だ。 どこぞで攫ってきた人間を元に呪詛能力で複製・生命維持を図っ いや、神など居ない か。 居たとすれば、

々な処置をも試みた。 兵隊として有能なモノにすべく腕力強化、 脚力強化、 洞察力、 樣

たのだ。 私は呪詛を身体に宿さずとも人を超える人を創造する術を見出し

を歩んでいるのはおそらく傀儡屋あたりだ。 私の他にも呪詛を宿さずして超常を目指す研究者は多い。 最先端

しかし。

私はそれをも超えた。

私の氷製人間は、 死体人形などとは比べ物にならない優秀なシス

テムを有し、誇っているのだ。

プラン・ドゥ・シー。 基本中の基本、 マネジメントサイクルとも

呼ばれる。

計画し、実行し、 反省する。 これの繰り返しである。

人間の発展には欠かせないサイクル。 P、D、S!

する者がそれだけに留まるなど愚かしかろう? あり誰もがそうしているだろうが、 我々研究者がこの《PDSサイクル》を意識し続けるのは当然で 偽物とはいえ仮にも人間を創造

ると信じている。 っているのでカクテルズ自体は で今後も研究が必要な代物ではある。 ともあれ如何せん《氷魂》という未知の概念で成り立つものな いずれ が、 これも既に実用段階に入 最強の部隊に成り得

わけだ。 を覆す日がやってくる。 彼らはもはや私が居なくとも完璧への道を歩み始めてい 今は呪詛能力こそが強さの象徴・筆頭とされている。 私のカクテルズが超人の頂点に君臨する日 るという それ

かった。 する者は極めて少なく危険なため、 実験過程で氷製人間に呪詛を宿すこともした。 あまり被験体を無駄にしたくな しかし適応

中でも希望者は居たわけだが。 まあ、 呪詛で得られる能力は魅力あるものなので、 氷製-人間達の

結局適応者はただ一人。 残りは廃棄した。

たと記憶している。 肌が白く、 髪の青い、 男の子。それこそ、 まるで雪のような子だ

能力者として力を手に入れ、 適応できたことに関係していると思われる。 外見は彼女 協力してくれた呪詛能力者の特徴に酷似していた。 カクテルズから離れた。 彼は氷製人間且つ呪詛

そう、序列十一位の座と、 《魔斧》 の称号を得たのだ。

素晴らしい。 挑戦心を褒め称えたい。

れば、 彼と、 そしてカクテルズ。 私の業もまた存在し続ける。 これらが、 これらだけが存在し続けて

ああ。 残してきた我が子のことを考えている。 駄目な男だ

な 私は。

き継ぐことになるだろう。そうさせられるだろう。 あの組織はまだまだ大きくなるだろう。我が子は、 あの子は賢い。 私の研究を引

私の愛するイーヴァン。

お母さんのように、 素敵な女性になるんだよ。

オルタ、 私もすぐそちらへ行く。 それまで、もう少し私達の娘を

守ってやってくれ。

そしてあの子が

`

素晴らしき殺人鬼を、 より多く生み出すことを共に祈ろう。

九八六年 カシアス・スレイヴ》

手渡す。 便箋の内容をすべて読み終えた私は、 それを封筒に戻して明朗に

たって平静を振る舞う。 彼は私がどんな反応を見せるのか様子を窺っているようだが、 61

· はい、ありがと」

「う、うん。なにか参考になった?」

まあまあ。 本当にカオナシはこの街に居るようね」

そうみたいなんだけど、魔方陣だっけ? そんなもの僕は見たこ

ともないなあ」

「そっか.....いい参考になったわ」

「それは良かった!」

「あたし、そろそろ帰るね」

うん。 僕は瑠架子さんの件で現場に戻らないといけないから、 こ

こで別れよう。クロちゃんはなるべく商店街を避けて帰ってね」

れてありがとう」 わかった。付き合ってくれてありがとう明朗。 あと 助けてく

ひらひらと手を振って、 明朗は公園から出て行った。

残された私はというと、 木製のテーブルに目を落としてその模様

なんかを眺めている。

カシアス? 聞いたことも無い。

あの手紙の書き手がカクテルズを生み出した? 私の生みの親?

私が氷製人間?

ふーん、そうなんだ。

どうせ碌な出生ではないと思っていたから大して驚かないわ。 私

は私。記憶がない方が問題よ。

もいい。 もない。 まあカオナシについてもこの街に来てから知ったくらいだから無理 彼は番姉さんと並折の雪女を同一人物だと思わなかったようだ。 カシアスとやらが組織したカクテルズ云々は、 協力した呪詛能力者というのもどうせ番姉さんの事だろう。 ぶっちゃけどうで

に深く関わり合っていることになる。 きたのが雪女つまり番姉さんなら、その二人は私が思っている以上 カシアスの話は割と信頼性のある内容だった。 カオナシを連れ 7

更に鎖黒。

かった。 あの刃物をどうして番姉さんが大切にしていたのか、 あれこそがカオナシの封印を解く鍵だったのね。

良いぞ。パズルが嵌まっていく。

カオナシの封印を解けば、私はカオナシに出会う事ができる。 鎖黒はこの街にある。なにせこの私が持ち込んだのだからね。 しかも! 封印の魔方陣が消えるとカオナシも消滅する!

最高じゃないか。一石二鳥だ。

聞きたい事を聞き出して四つ目を潰せばよいのだ。 四つある魔方陣の内三つくらい潰せば会話くらいできるだろう。

方陣と封印された妖怪をシンクロさせるとは、 あみやがれ。 奴はこの街で、 カオナシはどう足掻いても並折から出られないわけか。 瑠架子のように殺すことしかできないのだ。 えげつな い結界だ。 封印 ざま

さて、 これでカオナシを追う必要はなくなった。

奴は私を観察 さんを連れて来るとかなんとか言えば殺されずに済む。 のは何か理由があるからだ。 封印を解除する過程であちらから接触を図ってくるだろう。 しているだろうし、 それでも殺せないもしくは殺さな どうせ今も

の目的は、 鎖黒の捜索。 それと、 魔方陣の捜索。

いこう。

そう。焦っては駄目。

焦ることだけは避けなければ。

慎重に、落ち着いて、冷静に。

私は絶対に焦らない。

(反省したじゃない)

「反省したじゃない」

(前回のあたしは)

「前回のあたしは」

(焦りすぎたのよ)

「焦りすぎたのよ」

(だから死んだ)

「だから死んだ」

(前々回の俺と前々々回の私は)

前々回の俺と前々々回の私は」

(なんで死んだんだっけ)

「なんで死んだんだっけ」

ズキズキと頭が痛み、

私の胸は冷たく震えていた。

思い浮かんだ事がそのまま口に出てしまうのは、

次回への反省にしよう。

「次回への反省にしよう」

唯一無二の名前なのだから。反省してちゃんと付けた、天宮柘榴なのだから。今回の私は、

PUNICA【カオナシとは】了

PDF小説ネット (現、タテ書き**PDF小説ネット発足にあたって**

ビ対応 行し、 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きインター 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 ています。 そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ 誰もが簡単にPDF形式 ト関連= ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タイ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n8410q/

嗤う魔性のデュアルフェイス

2011年11月27日01時55分発行